

日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書

道 端 遺 跡

2 0 0 5

新 潟 県 教 育 委 員 会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書

みち ばた
道 端 遺 跡

2005

新潟県教育委員会
財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

日本海東北自動車道は、新潟市を起点とし、村上市、山形県酒田市、秋田県秋田市等を経由して、秋田県小坂ジャンクションに至る約322kmの高速自動車道です。新潟県内では平成14年度に北蒲原郡中祭町の中祭インターチェンジまでが開通しました。

高速自動車道建設を取り巻く状況は厳しいものがありますが、平成15年末の国土開発幹線自動車道建設会議において、日本海東北自動車道の中祭 - 朝日間は、日本道路公団が有料道路として建設を進めることになりました。しかし、公団の民営化に伴い、整備の優先順位付けに「採算性」がより重視され、同区間の完成がさらに遅れる事態となることも懸念されています。同区間は、この地域内外の経済的な交流・連携を促すだけでなく、救急患者の搬送・災害時の緊急輸送などの「命の高速道」としての役割も期待されており、早期の開通が望まれます。

本書は、この高速自動車道建設に先立って発掘調査を実施した「道端遺跡」の調査報告書です。調査の結果、当遺跡は古墳時代前期の竪穴建物、掘立柱建物、円形周溝状遺構、土坑群、杭列等から構成されている拠点集落跡であることが確認されました。そして、それらに伴うかたちで土器をはじめとした多くの遺物も出土しました。阿賀野川以北では、この時代の拠点集落跡の発掘例は少なく、そこから発見された遺構や遺物は、当地の古墳時代を解明するための貴重な資料です。

今回の調査結果が、考古学研究者はもとより、地域の歴史を知り、学ぼうとする多くの方々に活用されることを願っております。

最後に、この調査に参加された地元住民の方々や地元区長並びに荒川町教育委員会には多大なる御協力と御援助を頂きました。また、日本道路公団北陸支社及び村上工事事務所、荒川沿岸土地改良区には、調査に際して格別のご配慮を頂きました。ここに厚く御礼を申し上げます。

平成17年3月

新潟県教育委員会

教育長 板屋越麟一

例 言

- 1 本報告書は、新潟県岩船郡荒川町大字南新保字道端97ほかに所在する道端遺跡の発掘調査の記録である。
- 2 発掘調査は、日本海東北自動車道の建設に伴い、新潟県教育委員会が日本道路公団北陸支社から受託して実施した。
- 3 発掘調査は新潟県教育委員会が調査主体となり、財団法人新潟埋蔵文化財調査事業団に調査を依頼し、さらに委託を受けた国際航業株式会社が、平成16年4月から11月にかけて実施した。発掘調査面積は延べ22,900㎡(上層11,450㎡、下層11,450㎡)である。
- 4 整理および報告にかかわる作業は、平成16年6月1日～平成17年3月3日の間に現地および国際航業株式会社整理棟で国際航業株式会社文化財事業部作業員が行った。
- 5 出土遺物および記録類は、新潟県教育委員会が新潟埋蔵文化財センターにおいて保管・管理している。遺物の注記記号は「ミチ」とした。また出土地点および層位を併記した。
- 6 引用・参考文献は、著者及び発行年(西暦)を文中に示し、巻末に掲載した。第3章自然科学分析のみは、引用文献を巻末の末に掲載した。
- 7 本書に掲載した遺物番号はすべて通し番号とし、本文・図面図版・写真図版の番号はすべて一致している。
- 8 本書の方位は、すべて真北である。ただし、ここでいう「真北」は、日本平面国家座標のX軸方向を示す。
- 9 遺物写真撮影は有限会社モノクローム新潟に、航空写真撮影は株式会社イビソクに委託した。
- 10 第3章の河川内堆積物の層序・花粉分析・樹種同定は古代の森林考古学に分析・原稿を依頼し、放射性炭素年代測定・土壌理化学分析・蛍光X線分析・X線回折分析・テフラ分析は株式会社バリノサーヴェイに分析・原稿を依頼した。
- 11 本書の執筆分担は以下の通りである。

第1章 1部

寺崎裕助(財団法人新潟埋蔵文化財調査事業団調査課日東道担当課長代理)

第2章 2部・第3章 第1・2・4～6部

前川雅夫(国際航業株式会社文化財事業部主任研究員)

第3章 3部

田村典雄(国際航業株式会社文化財事業部研究員)

第4章 第1章

阪本博康(国際航業株式会社文化財事業部研究員)

第4章

前川雅夫・田村典雄・阪本博康

辻本 彰(国際航業株式会社文化財事業部研究員)

片山博道(国際航業株式会社文化財事業部研究員)

- 12 本書の編集は、遺構図版は田村典雄、写真図版は阪本博康、遺物図版は辻本 彰・片山博道が行い、寺崎裕助の指導の下、前川雅夫が全体を統括した。

- 13 本書の発掘・報告書の作成にあたって、建築材他については東京都立大学助教授山田昌久氏に、周溝状遺構及び龜甲形の竪立柱建物・杭列を含む河川跡への舌状張り出し部の祭殿・祭壇説については東北工科大学教授宮本長二郎氏及び東京都教育委員会福田健司氏に、樹種同定については東北大学教授鈴木三男氏にご教授いただき、また、以下の方々・機関からもご教示とご協力をいただいた。記してここに厚く御礼を申し上げます。(五十音順、敬称略)

安孫子昭二 阿部喜一郎 伊東 崇 卜部 厚志 及川 良彦 金子 拓男 小林 昌二

関 雅之 高瀬 信行 竹内 裕 田辺 早苗 谷口 肇 田村 浩司 手塚 直樹

橋本 博文 早川 泉 増田 一実 松田 劭 水澤 幸一 宮島 宏 吉井 雅秀

渡邊 昭次 渡邊 朋和 荒川沿岸土地改良区

目 次

第 章 序 説	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査と整理	2
A 調査	2
1) 試掘確認調査	2
2) 本調査	2
B 整理	4
C 調査・整理体制	4
第 章 遺跡の位置と環境	7
1 地理的・歴史的環境	7
2 阿賀野川以北の地域の古墳時代の遺跡	7
3 『越後国磐舟郡新保村地引絵図』に見られる <small>あごまがわ</small> 驕川と近代の農業	10
第 章 調査の概要と経過	14
1 グリッドの設定	14
2 層序	15
3 調査方法	16
4 検出された遺構と出土遺物	16
第 章 上層の調査	19
1 遺 構	19
A 遺構の概要	19
1) 竪穴建物の認定	19
2) 掘立柱建物	19
3) 杭列	19
4) 平面形態	19
5) 断面形態	19
6) 主軸方位	20
B 遺構各説	20

1) 竪穴建物	20
2) 円形周溝状遺構	23
3) 土坑	31
4) ビット、溝、その他の遺構	37
5) 竪立柱建物	40
6) 杭列・整地層	44
7) 河川跡	46
2 遺物	48
A 遺物の概要	48
1) 器種分類	48
B 古墳時代前期の遺物	51
1) 土器・土鍾・石製品	51
a 竪穴建物	51
b 円形周溝状遺構	54
c 土坑・溝	58
d 性格不明遺構・杭列・整地層	59
e 河川跡・包含層・耕作土	59
2) 建築材他	60
C その他の時代の遺物	63
第 章 下層の調査	65
1 調査の概要	65
2 調査の経過	65
第 章 自然科学分析	67
1 道端遺跡の河川内堆積物から産出した植物化石群	67
2 道端遺跡より出土した加工材の樹種	76
3 道端遺跡の放射性炭素年代測定・土壤理化学分析・蛍光 X線分析・X線回折分析・テフラ分析	79
第 章 考 察	89
1 出土土器の時期設定と主な遺構出土土器の器種構成	89
2 本遺跡の集落の景観について	91
3 壺M類の土師器	99
4 本遺跡の円形周溝状遺構の性格について	101

5	SB12と出入口施設を伴った杭列の性格について	104
6	終わりに	105
	要 約	107
	引用・参考文献	108
	遺物観察表	111

挿 図 目 次

第1図	調査対象範囲トレンチ位置図	3	第15図	MCR地点柱状図と分析試料の堆積物の特徴	67
第2図	調査区位置図	3	第16図	河川内堆積物の縦断セクション及び分析試料採取階準	68
第3図	遺跡の位置	8	第17図	河川内堆積物の主要花粉分析分布	69
第4図	絵図 - 1	12	第18図	掘立柱建物と杭列の樹種	77
第5図	絵図 - 2	13	第19図	SK34 層出土の不明遺物の蛍光X線スペクトル	85
第6図	グリッド設定図	14	第20図	SK34 層出土の不明遺物のX線回折図	85
第7図	基本層序模式図	15	第21図	遺構群配置図	93
第8図	基本層序柱状図	17	第22図	時期別遺構配置図 期	95
第9図	古墳時代の遺物出土状況図	18	第23図	時期別遺構配置図 期	97
第10図	遺構の平面形態と断面形態の分類図	20	第24図	壺M類	100
第11図	古墳時代の土師器の器種分類図	50	第25図	周溝を有する建物跡	102
第12図	柱材・杭材	62			
第13図	下層調査全体図	66			
第14図	道端遺跡の主要な遺構と分析試料採取位置	67			

表 目 次

第1表	周辺の主要な遺跡	9	第6表	道端遺跡の古墳時代前期の遺構より出土した加工材の樹種	76
第2表	大型植物化石分析 Sおよび花粉分析 P試料の堆積物の特徴	69	第7表	蛍光X線定性測定条件	82
第3表	河川内堆積物より産出した花粉化石の組成表	70	第8表	X線回折分析測定条件	83
第4表	河川内堆積物より産出した栽培植物、利用された痕跡のある植物および有用植物の大型植物化石	71	第9表	放射性炭素年代測定結果	83
第5表	河川内堆積物より産出した有用植物を除く大型植物化石	72	第10表	暦年校正結果	83
			第11表	土壌理化学分析結果	84
			第12表	SK34 層出土の不明遺物の化学組成	84
			第13表	周溝を有する建物跡の面積	102

図版目次

図面図版	図版40 遺構個別図(31)
図版1 遺跡の位置と周辺の地形	図版41 遺構個別図(32)
図版2 遺構全体図(1)	図版42 遺構個別図(33)
図版3 遺構全体図(2)	図版43 杭列遺構関係図
図版4 遺構全体図(3)	図版44 遺構個別図(34)
図版5 竪穴建物遺構関係図	図版45 遺構個別図(35)
図版6 遺構個別図(1)	図版46 遺構個別図(36)
図版7 遺構個別図(2)	図版47 古墳時代前期の遺物(1)
図版8 遺構個別図(3)	図版48 古墳時代前期の遺物(2)
図版9 遺構個別図(4)	図版49 古墳時代前期の遺物(3)
図版10 遺構個別図(5)	図版50 古墳時代前期の遺物(4)
図版11 遺構個別図(6)	図版51 古墳時代前期の遺物(5)
図版12 遺構個別図(7)	図版52 古墳時代前期の遺物(6)
図版13 遺構個別図(8)	図版53 古墳時代前期の遺物(7)
図版14 遺構個別図(9)	図版54 古墳時代前期の遺物(8)
図版15 遺構個別図(10)	図版55 古墳時代前期の遺物(9)
図版16 遺構個別図(11)	図版56 古墳時代前期の遺物(10)
図版17 遺構個別図(12)	図版57 古墳時代前期の遺物(11)
図版18 遺構個別図(13)	図版58 古墳時代前期の遺物(12)
図版19 遺構個別図(14)	図版59 古墳時代前期の遺物(13)
図版20 遺構個別図(15)	図版60 木製品(1)
図版21 遺構個別図(16)	図版61 木製品(2)
図版22 SK、SD、SX、P遺構関係図(1)	図版62 木製品(3)
図版23 SK、SD、SX、P遺構関係図(2)	図版63 その他の時代の遺物
図版24 遺構個別図(17)	写真図版
図版25 遺構個別図(18)	図版64 調査区近景
図版26 遺構個別図(19)	図版65 調査区北側・中央
図版27 遺構個別図(20)	図版66 円形周溝状遺構
図版28 遺構個別図(21)	図版67 遺物集合写真
図版29 遺構個別図(22)	図版68 杭列
図版30 遺構個別図(23)	図版69 SK 034・038
図版31 遺構個別図(24)	図版70 円形周溝状遺構
図版32 遺構個別図(25)	図版71 遺跡全景
図版33 遺構個別図(26)	図版72 調査風景・基本土層
図版34 掘立柱建物遺構関係図(1)	図版73 遺構個別写真(1)
図版35 掘立柱建物遺構関係図(2)	図版74 遺構個別写真(2)
図版36 遺構個別図(27)	図版75 遺構個別写真(3)
図版37 遺構個別図(28)	図版76 遺構個別写真(4)
図版38 遺構個別図(29)	図版77 遺構個別写真(5)
図版39 遺構個別図(30)	図版78 遺構個別写真(6)

- 図版 79 遺構個別写真 (7)
図版 80 遺構個別写真 (8)
図版 81 遺構個別写真 (9)
図版 82 遺構個別写真 (10)
図版 83 遺構個別写真 (11)
図版 84 遺構個別写真 (12)
図版 85 遺構個別写真 (13)
図版 86 遺構個別写真 (14)
図版 87 遺構個別写真 (15)
図版 88 遺構個別写真 (16)
図版 89 遺構個別写真 (17)
図版 90 遺構個別写真 (18)
図版 91 遺構個別写真 (19)
図版 92 遺構個別写真 (20)
図版 93 遺構個別写真 (21)
図版 94 遺構個別写真 (22)
図版 95 遺構個別写真 (23)
図版 96 遺構個別写真 (24)
図版 97 遺構個別写真 (25)
図版 98 遺構個別写真 (26)
図版 99 遺構個別写真 (27)
図版 100 遺構個別写真 (28)
図版 101 遺構個別写真 (29)
図版 102 遺構個別写真 (30)
図版 103 遺構個別写真 (31)
図版 104 遺構個別写真 (32)
図版 105 遺構個別写真 (33)
図版 106 遺構個別写真 (34)
図版 107 遺構個別写真 (35)
図版 108 遺構個別写真 (36)
図版 109 遺構個別写真 (37)
図版 110 遺構個別写真 (38)
図版 111 遺構個別写真 (39)
図版 112 遺構個別写真 (40)
図版 113 遺構個別写真 (41)
図版 114 遺構個別写真 (42)
図版 115 遺構個別写真 (43)
図版 116 遺構個別写真 (44)
図版 117 遺構個別写真 (45)
図版 118 遺構個別写真 (46)
図版 119 遺構個別写真 (47)
図版 120 古墳時代前期の遺物写真 (1)
図版 121 古墳時代前期の遺物写真 (2)
図版 122 古墳時代前期の遺物写真 (3)
図版 123 古墳時代前期の遺物写真 (4)
図版 124 古墳時代前期の遺物写真 (5)
図版 125 古墳時代前期の遺物写真 (6)
図版 126 古墳時代前期の遺物写真 (7)
図版 127 建築材他写真 (1)
図版 128 建築材他写真 (2)
図版 129 その他の時代の遺物写真

第 章 序 説

1 調査に至る経緯

日本海東北自動車道（以下、日東道とする）は、新潟市の新潟空港インターチェンジ（以下、インターとする）から秋田小坂ジャンクションに至る総延長約 322km の高速自動車道である。新潟県内においては中条インターまでが平成 14 年に完成している。中条インター以北は、平成元年および平成 3 年に基本計画が決定され、本遺跡が所在する中条インター～荒川インター間の第 13 次施工区間は平成 10 年 4 月に施工命令が出された。これを受けて、日本道路公団北陸支社（以下、道路公団とする）と新潟県教育委員会（以下、県教委とする）との間で、法線内の埋蔵文化財の取り扱いに関する協議が本格化した。

分布調査は、県教委から委託を受けた財団法人新潟県埋蔵文化財調査団（以下、埋文事業団とする）が平成 1 年度に中条インター～朝日インター間で行なった。そして、遺跡確認地点 7 か所、要確認地点 2 か所において試掘確認調査が必要であるという調査結果を県教委に報告した。試掘確認調査は、同じく埋文事業団が平成 1 年度～1 5 年度にかけて中条インター北側近接地～村上インター手前間で行なった。その結果、本遺跡を含む周知 4 遺跡と新発見 16 遺跡の合計 20 遺跡について本調査が必要であることが明らかとなり、その旨を県教委に報告した。本遺跡の試掘確認調査は、平成 1 2 年度～平成 14 年度の 3 か年にわたって 58 280㎡ で実施した。その結果、本遺跡は古墳時代前期と後期の良好な集落遺跡であることが確認され、35 400㎡ について本調査が必要なが判明した。また、遺構確認面は基本的には上層の古墳時代と下層の縄文時代の 2 面が存在することから、本調査が必要な述べ面積は上層 35 400㎡・下層 32 300㎡ のつごう 67 700㎡ という広範囲になった。ただし、平成 1 3 年度に 8 000㎡（4 000㎡ 2 面）、平成 14 年度に 11 000㎡（上層 7 000㎡、下層 4 000㎡）がすでに本調査に着手していることから、今後の延べ調査面積は上層 24 400㎡・下層 24 300㎡ のつごう 48 700㎡ である。この区間の本調査は、前述した本遺跡分を除けば、平成 1 5 年度に中条町反貫目遺跡と同町西川内北遺跡で実施されている。その調査は、調査員 2 名を民間の調査機関から派遣してもらうという新しい体制で実施された。

今回の本調査は、平成 1 5 年 10 月 1 日の道路公団・文化行政課および埋文事業団との三者協議で調査要望が道路公団から示された。しかし、道路公団の民営化や事業の見直しなどにより先行き不透明な感はない状況であった。10 月 8 日、文化行政課と埋文事業団で来年度の受託事業について協議を行い、先行きが不透明な状況であることから、本遺跡は本調査実施遺跡の候補から外れた。そして、もし日東道建設が決定した場合の調査体制は専門職員の増員を求めるが、それを望めない時は、日東道の調査は民間調査機関に全面委託して実施することで合意に達した。翌年の 1 月 8 日、国土開発幹線自動車道建設会議が終了し、日東道は日本道路公団で建設することが可能になった旨が道路公団から文化行政課に伝えられ、本遺跡は来年度本調査要望遺跡の中で 2 番目の優先順位が与えられた。2 月 2 日に最終的な三者協議が開催され、本遺跡の 19 500㎡ について来年度に本調査を行うことで合意を見た。また、その席上で本調査は、日東道に限り、埋文事業団の指導・監督のもとに民間の調査機関に全面委託することになった。

2 調査と整理

A 調 査

1) 試掘確認調査

前述したように道端遺跡についての試掘確認調査は、興教委から委託を受けた埋文事業団が、平成12年度から平成14年度の3年にわたって調査対象面積延べ58,280㎡で実施した。調査対象面積の内訳は、平成12年度が20,340㎡、13年度が29,000㎡、14年度が8,940㎡である。調査方法は、任意に確認トレンチを設定し、バックホー、人力により徐々に掘り下げ、土層の堆積状況、遺構・遺物の有無の確認・精査を行ったものである。以下その詳細について述べる。

平成12年度の調査では、古墳時代後期の多量の土師器、若干の須恵器、古墳時代の土坑・柱穴・溝などの遺構を検出し、当該時代の集落の存在を確認した。また、ほとんど同一の層位から弥生時代中期の遺物、そこから30mから50mの間層をはさみ、縄文時代後期の土器・石器も出土した。両時代の遺物包含層の密度は稀薄なもの、縄文時代の遺物については、調査区域の南北両端で検出されていることから、調査未了の対象範囲全体に広がっている可能性もあった。その結果、古墳時代（上層）と縄文時代後期（下層）については、対象面積20,340㎡全域に本調査の必要があると判断した。

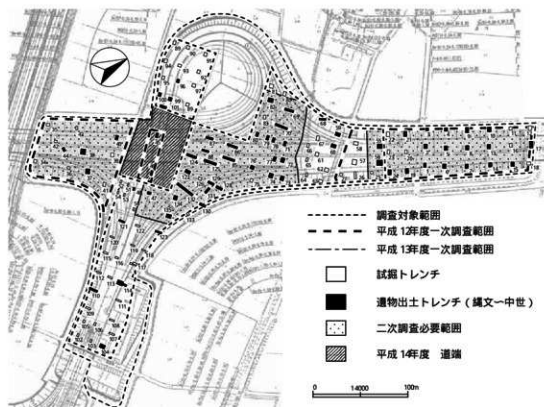
平成13年度は、上層の調査において古墳時代後期ではなく、古墳時代前期の遺物が、多く出土した。縄文時代の遺物は少量、耕作土中からは、近世・中世陶磁器・漆器・砥石などが混在して出土した。古墳時代の遺構は、76トレンチでピット Ⅱ、79トレンチで土坑 Ⅲとピット Ⅱを確認した。また遺跡の東側には、埋没河川も検出され、その覆土中からは、古墳時代の遺物が、多く出土した。縄文時代の遺物は、確認されなかった。今回の調査結果と前回㎡（平成12年度）の調査結果とあわせると、本遺跡は、古墳時代前期・後期の良好な集落であることが判明し、29,400㎡（上層・下層あわせて延べ58,800㎡）について本調査が必要であると判断した。

平成14年度の調査では、148・154・164・166トレンチで古墳時代の遺物が、156トレンチで縄文時代後期の遺物が出土した。また東側の136・140・141～143・145トレンチでも、古墳時代の遺物が、耕作土中より出土している。その結果上層35,400㎡下層32,300㎡について本調査が必要であると判断した。

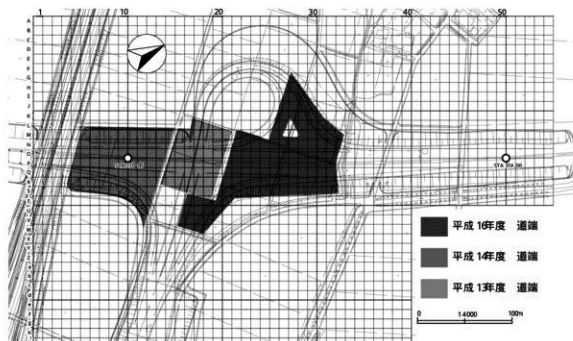
2) 本 調 査

平成16年度の本調査は、試掘確認調査結果に基づいて延べ22,900㎡、上層（古墳時代前期）11,450㎡・下層（縄文後・晩期）11,450㎡を対象として行った。調査区内は、地下水が湧出する地点が、北西部と南側中央部にあわせて二か所あることからわかるように、低湿な場所にあるため、周囲に暗渠を施設し、電動ポンプで24時間の強制排水を行った。土層観察用のセクションベルトは、グリッドラインにあわせ、東西南北20m毎、井桁状に計16本設置した。表土除去、間層掘削は、バックホーを使用し、調査員の指示により徐々に掘り下げていった。また、表土（層）・ガツボ層（層）を除去すると、同時にセクションベルトに沿って、幅50mから60mで排水と下層の土層観察を兼ねた溝を、層上面まで掘り下げ、東西南北の大グリッド毎に土層を観察し写真・図面に記録した。今回の調査において特に留意したのは、調査範囲が広く、複数の調査員が、各ブロックに分かれ、分散して発掘調査を行うため、各調査員が数箇所の

セクションベルトを対象に協議し、基本土層の共通認識を持って調査を行ったことである。上層の古墳前期包含層（**層**）掘削は、非常に粘性の強い土であるため、スコップの先端を切断し、電動サンダーなどで刃をつけたものを使用し、薄く削り、作業の効率化をはかった。その後三角ホーを用い、**層**上面を精査し、遺構確認を行った。また、遺構の図化は、遺物微細図・断面図は手作業による実測、平面図は、トータル・ステーションを用い、デジタル図化をおこなった。



第1図 調査対象範囲トレンチ位置図



第2図 調査区位置図

2 調査と整理

調査は、4月1日から事務所などの設置、作業員を募集、土層を観察しつつ暗渠工事をを行い、同時に表土掘削に着手した。暗渠は、総延長で500mを越え、工事終了まで約1ヶ月を要した。作業の安全を確保しつつようやく包含層掘削に入ったのは、4月2日のことである。9月の連休明けから、本格的に遺構精査発掘に着手した。遺構は、調査区北側から東側にかけて検出された河川跡に沿って、竪穴建物、掘立柱建物、円形周溝状遺構、杭列、土坑、溝、性格不明遺構、ピット、整地層などである。遺構の確認、検出は、主に、遺物と炭化物の集中か所を精査することと同義であった。かなりの遺構は、そうすることによってb層上面で確認し得たが、遺物のあまり出土しなかった掘立柱建物の柱穴の中には、20cm以上削りこみ、層上面において、はじめて検出できるものもあった。沖積低地の遺構確認に難渋しつつも、9月2日に現地説明会を開催し、その後引き続き上層の調査を行いつつ、10月1日より下層の調査を平行して行った。下層の調査は当初、古墳時代前期の遺構集中か所を全面下層上面まで下げ調査を行い、残りの面積のトレンチ調査は3割をメドに行う予定だったが、大グリッドに約幅50mのトレンチを開け、深堀りを行ったところ、縄文後・晩期の包含層及び遺物の出土もみられないので、事業団と協議の結果、河川部分のトレンチ調査も含め、全体で3割のトレンチ調査を行うことになった。上層の遺構面での等高線は、遺物包含層や遺構確認面が激しく削平されていたため、古墳時代前期の地表面は、残っていないと判断し、作成しなかった。下層トレンチは、東西の大グリッド2分 20m毎に6m幅で南北方向に設定し、調査員が付いて、徐々に掘り下げ、b層（縄文時代後晩期遺物包含層）とc層（縄文時代後晩期遺構確認面）において、遺物の採取と遺構確認を行ったが、当該期の遺物・遺構は、出土・検出されなかった。そのため、縄文時代後期においても、等高線は、作成していない。ようやく調査も終了に近づいたかと思われたが、10月14日に、鴨杭列が、調査区北東部の張り出し部付け根に、河川跡の岸をつなぐようにして検出され、10月29日の上層遺構面の空撮をはさみ、1月18日には、2号杭列が、河川跡西岸に沿って検出され、一息つく間もなく調査は、最終局面を迎えることとなった。1月前半まで比較的天候に恵まれ、1月後半となると雨も多くなったが、悪天候の隙間をつき、ようやく1月24日に下層トレンチ調査の航空写真撮影を終えた。そして翌2日より撤収準備作業に入り、1月30日に、約半年以上調査を継続した本遺跡の現場撤収を終えることとなった。

B 整理

整理は、遺跡の規模と調査期間を考慮し、調査中から現場作業所を設け、6月以降遺物の水洗・注記を行った。8月以降、新津市内の整理事務所で遺物の接合・復元に入り、10月以降に遺物実測・拓本を行った。本格的な整理の始まった1月以降は、残りの遺物実測、遺物写真撮影、遺構・遺物実測図のトレス、図版作成、原稿執筆を行った。

C 調査・整理体制

試掘確認調査と本調査および整理作業は、以下のような期日と体制で行った。

【試掘確認調査】

調査期間 平成1年10月23日～1月10日、平成1年3月29日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 板屋越 麟一）

調査 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（事務局長 須田 益輝）

管 理 須田 益輝（専務理事・事務局長）

長谷川司郎（総務課長）

戸根与八郎（調査課長）

庶 務 椎谷 久雄（総務課主任）

調査指導 寺崎 裕助（調査課公団担当課長代理）

調査担当 小田由美子（調査課主任調査員）

調査職員 後藤 孝（調査課主任調査員）

小林 芳宏（調査課主任調査員）

尾崎 高宏（調査課文化財調査員）

調査期間 平成 13年 8月 29・30日、9月 25日～11月 6日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 板屋越 麟一）

調 査 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（事務局長 須田 益輝）

管 理 須田 益輝（専務理事・事務局長）

長谷川司郎（総務課長）

岡本 郁栄（調査課長）

庶 務 椎谷 久雄（総務課主任）

調査指導 寺崎 裕助（調査課公団担当課長代理）

調査担当 澤田 敦（文化行政課主任調査員）

石川 智紀（調査課主任調査員）

調査職員 後藤 孝（調査課主任調査員）

渡辺 弘（調査課主任調査員）

田中 一穂（調査課嘱託員）

調査期間 平成 14年 4月 8日～26日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 板屋越 麟一）

調 査 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（事務局長 黒井 幸一）

管 理 黒井 幸一（専務理事・事務局長）

長谷川司郎（総務課長）

岡本 郁栄（調査課長）

庶 務 高野 正司（総務課主任）

調査指導 寺崎 裕助（調査課公団担当課長代理）

調査担当 石川 智紀（調査課主任調査員）

調査職員 片岡 千恵（調査課嘱託員）

【本調査（平成 16年度分）・整理作業】

調査期間 平成 16年 4月 12日～11月 30日

整理期間 平成 16年 12月 1日～平成 17年 3月 31日

2 調査と整理

- 調査主体 新潟県教育委員会（教育長 板屋越 麟一）
- 調査 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（専務理事・事務局長 黒井 幸一）
- 管理 黒井 幸一（事務局長）
長谷川二三夫（総務課長）
藤巻 正信（調査課長）
- 庶務 高野 正司（総務課主任）
- 調査指導 寺崎 裕助（調査課日東道担当課長代理）
山田 秀樹（調査課日東道担当主任調査員）
- 現場代理人 大西 孝幸（国際航業株式会社文化財事業部 主任技師）
- 調査担当 前川 雅夫（国際航業株式会社 文化財事業部 主任研究員）
- 調査職員 田村 典雄（国際航業株式会社 文化財事業部 研究員）
脇本 博康（国際航業株式会社 文化財事業部 研究員）
辻本 彩（国際航業株式会社 文化財事業部 研究員）
片山 博道（国際航業株式会社 文化財事業部 研究員）
- 世話人 花井 勝人（国際航業株式会社 文化財事業部）
塚野 太一（国際航業株式会社 文化財事業部）

第 章 遺跡の位置と環境

1 地理的・歴史的環境

道端遺跡は、新潟県岩船郡荒川町大字南新保字道端 9 番地ほかに所在し、越後平野の北東部を流れる荒川の支流乙大日川の自然堤防縁辺の後背湿地に位置している。標高は約 28～31m を測る。道端遺跡の立地する越後平野は、新潟県北東部に位置する堆積平野である。北側を海岸に平行して、海岸砂丘が発達している。北東部には西朝日岳（1814m）などが連なる朝日連峰が山形県との境をなしている。南東部には北股岳（2025m）飯豊山（2105m）三国岳（1644m）などの山々が連なる飯豊連峰がそびえている。新潟平野北東部にはこれらの山々から多くの河川が流入している。越後平野北東部を形成する最大の河川は奥三面に源流をもつ荒川である。荒川は鷹ノ巣山（917m）の東麓をぬけて、沼川・大石川などの飯豊連峰の北麓から流れ出す河川と合流しながら日本海にそそいでいる。第二の河川は、飯豊連峰に源流をもつ胎内川である。胎内川は古くは「たいな川」「鯛の川」と呼ばれており、1888（明治 21）年に日本海に向けて開削されるまで海岸砂丘の南側に平行して北上し、荒川町海老江で荒川と合流していた。このため、洪水を繰り返し、1967（昭和 42）年の羽越水害に代表されるような大きな水害は、記録に残っているものとしては最古の平安時代後期の 1090（寛治 4）年以來、19 回余りに及んでいる。特に、江戸時代中頃の 1757（宝暦 7）年 9 月 2 日の大洪水などでは復旧に 50 数年を要したといわれている [建設省 1975]。このような度重なる洪水によって、遺跡の周辺を含めた流域各地に湖沼・湿地が形成され、ガツボと呼ばれる腐植土層や、分厚いシルト層が堆積したと考えられる。また、荒川・胎内川の下流域には扇状地が広がっており、砂礫が堆積し伏流水が被圧地下水として、時々自噴している。上流から下流に向かって、地底を噴水状に流れ勢いよく噴出するので、昔から「どっこん水」と呼ばれている。遺跡内においても 2カ所の地下水の自噴が見られた。

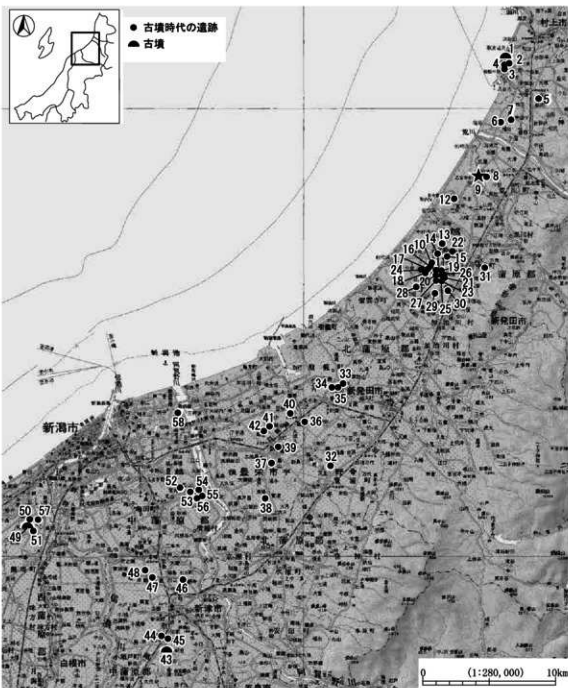
遺跡の所在する南新保集落は、乙大日川の東側自然堤防上の東側縁辺に所在している。古くは新保集落と呼ばれていたが、度々の水害で南側のみが残存している。北側は驕川（おごろがわ）を挟んで新光寺集落と隣接し、南側のさかい川を挟んで中条町乙集落と隣接している。驕川は、昔は梨ノ木川といい、蒲原郡と岩船郡の群境をなしていた。これらの小河川は、『越後国蒲波郡絵図』1597（慶長 2）年に描かれており、古くから存在していたことが知られている。

歴史的環境については『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 11 集 道端遺跡』[石川・内藤ほか 2002]『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 12 集 道端遺跡』[渡邊・内藤ほか 2003] に詳しいので、参照されたい。

2 阿賀野川以北の地域の古墳時代の遺跡

道端遺跡が含まれる阿賀野川以北の地域には、近年の大規模なほ場整備や日東道建設などに伴って、多くの古墳時代の遺跡が発見された。北から概観してみたい。

村上市内の磐舟浦田山古墳群は、1957（昭和 32）年に調査され「石磨堡」という名称で磐舟欄間連の施設として認識されていたが、1996（平成 8）年の新潟大学の調査によって古墳時代後期の古墳群であるこ



第3図 遺跡の位置(国土地理院1:200,000「村上」「新潟」を縮小)

とが再確認された〔甘粕³³1996〕。周辺には、古墳時代後期の遺跡が存在する。神林村周辺はほ場整備に伴い、調査された遺跡が多数存在する。古墳時代後期の遺跡が中心であるが、衣田遺跡からは、古墳時代前期前半と中期の遺物が発見されており〔田辺³⁴2001〕、荒川以北では唯一の出土である。

道端遺跡の所在する荒川町では、古谷地B遺跡からは、古墳時代前期の一括資料が出土した〔吉井1994〕。中条町では、日東道建設やアクセス道路の建設に伴う調査の結果、多くの遺跡が発見された。

多くの遺跡の中でも、重要なのは城ノ山古墳の存在である。城ノ山古墳は東西46m、南北34mの古墳時

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
	村上市			新発田市	
1	磐舟浦田山古墳群	古墳 後	32	曾根遺跡	古墳 前・奈良・平安
2	清水沢遺跡	古墳 後		聖籠町	
3	宮の上遺跡	古墳 後	33	山大夫遺跡	弥生・古墳
4	三角点下遺跡	古墳 後	34	二本松東山遺跡	縄文・弥生・古墳前・奈良平安
	神林村		35	山三賀遺跡	古墳 前・奈良平安
5	高田遺跡	古墳 中・後		豊栄市	
6	長松遺跡	弥生・古墳 後 中世	36	上東山遺跡	古墳 前
7	衣田遺跡	古墳 前・中・後	37	上土地鳥遺跡	古墳 中・奈良平安
	荒川町		38	城ノ湖遺跡	古墳 前・奈良・平安
8	古谷地貝塚跡	古墳 前	39	曹塚遺跡	古墳 前・奈良・平安
9	道端遺跡	縄文後・晩期、古墳 前・後	40	松影A遺跡	縄文・弥生・古墳 前・平安
	中祭町		41	正尺A遺跡	古墳 前・江戸
10	反震目遺跡	古墳 前・中	42	正尺C遺跡	古墳 前
11	中曾根遺跡	古墳		新津市	
12	富岡遺跡	古墳	43	古津八幡山古墳	古墳 前
13	一杉田遺跡	古墳 前	44	舟戸遺跡	弥生・古墳 前・奈良・平安
14	六斗跡遺跡	古墳 前	45	高矢C遺跡	古墳 前末
15	草野遺跡	古墳 後 奈良	46	沖ノ羽遺跡	古墳 前
16	西川内北遺跡	古墳 後 奈良	47	上浦島遺跡	古墳 中
17	西川内南遺跡	古墳 前 古代	48	結遺跡	古墳 後
18	福田遺跡	古墳		新潟市	
19	野付遺跡	古墳 前・後	49	緒立八幡神社古墳	古墳 前
20	東川内中興野遺跡	古墳	50	緒立C遺跡	弥生・古墳 前
21	屋敷遺跡	古墳 前・後	51	緒立B遺跡	弥生・古墳 前
22	下名倉遺跡	古墳 後	52	東園遺跡	縄文・弥生・古墳 前
23	大塚遺跡	古墳	53	小丸山遺跡	縄文・古墳・平安・中世
24	土屋下遺跡	古墳 前	54	中山遺跡	縄文・古墳・平安・鎌倉・奈良・平安
25	城ノ山古墳	古墳 前	55	城山遺跡	縄文・古墳・平安・鎌倉
26	籠ほろき山	古墳 前	56	菅山前遺跡	古墳中―後初頭
27	天野遺跡	古墳 前・中	57	塚遺跡	古墳 前・奈良・平安
28	四ツ持遺跡	古墳 前	58	石動遺跡	弥生・古墳 前・中世
29	船戸川崎遺跡	古墳 前			
30	船戸桜田遺跡	古墳 後			
31	極楽寺遺跡	古墳			

第 1 表 周辺の主要な遺跡

代前期の円墳であると指摘されており〔坂井 1995〕。塩津湖に古墳文化が達した記念碑的築造物であるともいわれている〔水澤・吉村 2004〕。また、近隣の籠ほろき山は城ノ山古墳の陪塚であるとする考えもある〔吉村 2002〕。

聖籠町・豊栄市周辺には、おおくの古墳時代前期の遺跡がある。山三賀 遺跡は、古墳時代前期から中期にかけての集落で、1棟の住居が検出されている〔坂井ほか 1989〕。二本松東山遺跡では、古墳時代前期の方形・円形周溝墓が検出されている〔伊藤ほか 1993〕。新発田市豊浦町の曾根遺跡からは、山三賀 遺跡と同じ時期の遺物が出土しており、その関係が目される。〔家田 1981・1982 川上 1997〕。葛塚遺跡では、阿賀野川以北の地域で唯一の朱塗り線刻人物画土器が出土し、注目を集めた〔関 1999〕。正尺C遺跡からは、道端遺跡と同じ時期の土師器が多数見ついている。また、方形周溝墓・円形周溝状遺構については、ややプランが異なるものの、関連性が注目される。〔加藤学ほか 2000〕

新潟市周辺部においては、旧黒崎町の緒立遺跡が古くから著名である。緒立A遺跡には、径30mの古墳時代前期の円墳が所在し、緒立八幡神社古墳として知られている〔渡辺 1993〕。古墳周辺には、古墳時代前期の包含層が広がっている。緒立B遺跡は、早くから遺物の濃密な散布が知られており、発掘調査によって古墳時代前期の住居が軒検出された〔金古ほか 1983〕。緒立C遺跡からは、古墳時代初頭の竪穴住居が4軒、円形周溝状遺構、溝状遺構、土坑などが検出されている〔渡辺 1994〕。緒立遺跡の北側の的場遺跡は遺構は少なかったが、古墳時代前期の遺物が多量に出土し、緒立遺跡群とほぼ同時期に存在した遺跡として考えられる。〔小池ほか 1993〕。東園遺跡からは、竪穴住居・井戸・土坑・掘立柱建物などの古墳時代前

期の遺構が検出されており、多くの遺物が出土している〔朝岡^{ほか} 2003〕。

新津丘陵周辺は、古くから古墳文化が波及したところである。八幡山遺跡には前方後方周溝墓があり、引き続き古津八幡山神社古墳が築造された。古津八幡山神社古墳は墳丘長約60mの古墳時代前期の造出し付円墳であり、新潟県内最大の古墳である〔甘粕^{ほか} 1992〕。周辺の舟戸遺跡・高矢C遺跡は、古墳時代前期末の土師器が出土し、古墳との関係が注目される〔川上^{ほか} 1989〕。

3 『越後国磐舟郡新保村地引絵図』に見られる^{おごろ}驕川と近代の農業

驕川は、現在は一級河川荒川水系に属し、乙大日川（旧胎内川）の支流である。越後平野の北東部高坪山に源を発し、荒川町新光寺で乙大日川に合流する全長約9.9kmの河川である。現在は、平成の大ほ場整備によって水路として分断され、旧状をとどめるのは下流の3m程度であるが、慶長の頃は、梨ノ木川と呼ばれていた〔荒川町 1991〕。胎内川は、現在は直接日本海に流れ込んでいるが、1888（明治21）年の切り落とし以前は、荒川町海老江で荒川に合流していた。驕川を境にして北側が新光寺集落、南側が道端遺跡の所在する南新保集落である。南新保集落は、江戸時代には新保村と呼ばれていたが、1879（明治12）年に南新保に改称された。驕川という名称は、現在の南新保集落の人々の通称である。驕川は大雨の度に洪水を引き起こした暴れ川であった。記憶に新しいものとしては、1967（昭和42）年の羽越水害の際には、荒川から流れてきた赤い濁流と、胎内川から流れてきた白い流れが、驕川で合流したという話も土地の古者に伝わっている。そして、驕川以北には大量のシルトが、田面に厚さ10cm程度にわたって堆積した〔建設省 1975〕。1597（慶長2）年に作成された『越後国瀬波郡絵図』には、集落の名称から、位置関係を推測すれば、からす川という名称で描かれている川が、驕川であろうと推測できる〔荒川町 1991〕。「此のあかすち八蒲原郡瀬波郡ノ境目也」という注記があり、蒲原郡と瀬波郡の郡境であったことがわかる。1816（文化13）年に作成された『越後輿地全図』においても、新保・新光寺の集落が描かれ、郡境として示されている。1876（明治9）年に作成され、旧金屋村の税務署に保管されていた『越後国磐舟郡新保村地引絵図』（第4・5図）によれば、くねくねと蛇のように曲がりながら流れていることがわかる。このため、河川改修が頻発におこなわれ、現在見られるような姿となったと思われる。絵図には、河川改修の予定場所については点線で記されている。（第4図）驕川周辺は、戦後のほ場整備が行われる前には水はけが悪く、肩まで浸かってしまうような深田が中心であった。このため、明治初年においても、排水路が縦横に掘られていることがわかる。1893（明治27）年に作成された旧帝國陸軍参謀本部作成の2万分の縮図にも、沼や湿地が周辺に広がっていることが示されている。

驕川と近代の農業 こうした深田での農作業は、苦難の連続であった。特に1727（享保12）年の紫雲寺湯の干拓が始まって以来、今まで紫雲寺に流れ込んでいた胎内川の支流が本流に流れ込み、川が増水したために、洪水の発生回数が増加した。新光寺村では1869（明治2）年に、凶作のため年貢の免除を願い出た文書がこのこっている〔荒川町 1988〕。こうした中で、1888（明治21）年胎内川の切り落としが行われ、以後は洪水は大幅に減少した。また、洋式農業の導入が行われて、農業の改革が図られた。洋式農業の導入は新潟県においては、1875（明治8）年、新潟市下所島に新潟樹芸場（後の農事試験場）が開設されたのが、先駆けである。しかし、すぐには根付かず、その後行き詰まりを見せた。これに対して、1880（明治

13) 年から町村単位で農談会が、国・県の指導で設立されたことによって、農業は革新を遂げることとなった。農談会は江戸時代以来の旧習を打破して、農業改良を奨励するための民間組織である。やがて、1899(明治32)年の農会法が公布されると、農会は政府からの補助金を受けていたため、補助金を受けられない民間組織であった農談会は農会に吸収される形となった。岩船部では農会法が公布されると同時に村上に岩船部農会が設立され、周辺の農家の指導に乗り出した。この郡農会は、各市町村農会の技術的な指導機関で、農産物品評会や農事講習会など、農業知識の普及に努めた〔神林村1985〕。その中でも重要なものは馬耕の奨励である。馬耕については、大正時代の第一次大戦景気で米の暴騰がおこったことから、米の生産意欲が増大してさかんになったもので、山形県の庄内地方が先進地域であった。岩船部では、神林村西神納地区で1916(大正6)年、庄内地方から指導員を招き、馬耕が開始された。また、北蒲原部乙村(現中赤町乙)で1914(大正3)年には耕作用11頭、運搬用1頭、肥踏用18頭、雑用33頭の馬が飼育されていたという記録がある〔新潟県北蒲原郡役所1916〕。荒川町の記録はないが、相当数の馬が農作業に使用されていたと考えられる。馬耕を効率よく行うためには、深い湿田を乾かし、馬が動きやすくなるために耕地整理を行う必要があった。南新保周辺の耕地整理は次のような順番で行われた。1900(明治33)年に第1期の耕地整理が金屋・荒屋・海老江地区で始まり、1909(明治42)年に完成した。1900(明治33)年に第2期の耕地整理が金屋・名割・中倉・新光寺地区で始まり、1921(大正10)年に完成した。驥川以南の低湿地は、1953(昭和28)年に南新保・乙・中野地区で始まり、1957(昭和32)年に完成した〔荒川町1974〕。したがって、戦前には南新保地区の馬耕の本格的導入は見送られ、最後まで牛が農耕の中心であったと思われる。また、戦争の激化に伴って、馬が軍用馬として徴用され、代わりに朝鮮牛が導入されたこともあったという〔荒川町1974〕。農耕の際の牛と馬の違いは、南新保集落の渡辺昭次氏のご教示によれば、牛はかなりの深田でも入って農作業が出来るのに対して、馬は力は強いが、深田に入り込むのを嫌がったという。したがって、深田・湿田の多かった南新保地区では、灌漑排水が行われ、比較的水はけのよい田には馬を中心として用い、水はけの悪い深田には牛を用い、さらに深いところには人力のみで対応していたということである。道端遺跡調査中に、こうした状況を反映して、かなり深い部分まで牛などの足跡が見受けられた。また、馬と牛の足跡と思われるものが混在している状況についても痕跡が確認された(図版72)。いつの時代のものかは判別し難いが、水田の畦畔と思われる痕跡についても29Pグリッド周辺で確認された(図版72)。水田の畦畔と考えられる理由は、遺構の精査において均等に掘り下げを行った際に、一面に牛・馬の足跡が確認されているのに対して、畦畔状の高まりを見せる部分については、牛・馬の足跡がなく、高まりを見せていたという点からである〔荒井・船本^{ほか}2004〕。

農具の改善は、馬えぶりについては、1905(明治38)年荒川町海老江の小川清次郎がハワイで出稼ぎ中に、サトウキビ畑の整地に用いられていた農機具に暗示を得て、1911(明治44)年、帰国後直ちに村の大工に作らせて使用したのが始めである。これまでの手えぶり作業の数倍の能力を発揮した。(えぶりとは地面を整地する道具である)このため、海老江の篤農家小川全一の宣伝によって新潟県内外に普及したという〔荒川町1974〕。また、明治末年ごろから、米糠を肥料として使用するようになり、一反歩あたり一石五斗位から二石五斗位に増収を可能とした。一石五斗は約225kg(379俵)、二石五斗は約375kg(625俵)であるから、約1.6倍に収穫が増えたこととなる(現在ではおおむね7-8倍位で豊作といわれている)。米糠は、のちに化学肥料が発明されるまで、肥料の王座を占めていたという〔神林村1985〕。



第4図 絵図 - 1

驕川の南側には、道路が川沿いに東から西に向かって走っている。この道路を農作物の出荷や農作業の際には牛や馬が往来した。新光寺集落の阿部喜一郎氏のご教示によれば、昭和30年頃には川幅も現在よりもかなり広く、海老江舟という地方独特の平底の舟が往来し、農作物の積み出しに活躍したという。

道端遺跡の調査区北側に接する部分の驕川は大きく湾曲していたらしい。水深はこの川で最も深い場所であったという。この部分の痕跡が、32Qグリッド付近であると思われる。したがって、2号杭列セクション（図版114）に現れている攪乱は川岸にあった農道の痕跡である可能性もある。32Qグリッド東壁には厚さ20～30m幅1m程度の橙色粘土が見られ、川岸に向かって落ち込んでいる状況が確認された。しかし、表土から2mを遥かに越えて掘削をおこなったが、川底を確認することが出来なかった。

河川周辺の状況は、乙大日川に合流する部分から東側の数えて2か所目の大きな湾曲部が、集落の名称の由来となった新光寺の跡である。（第5図）新光寺の跡は、現在畑となっているが、昔は農作業の際に礎石と思われるような石が多数出土したという。新光寺は乙宝寺開創の際に行基がこの寺に在って、大日如来を彫り、新光寺にも一像を刻んだという伝説があるが、いつの時代からか衰退し、門前の集落に名前を残すのみとなっている。その他の川の屈曲部には、村の共有地として萱場や竹林が設けられていた。



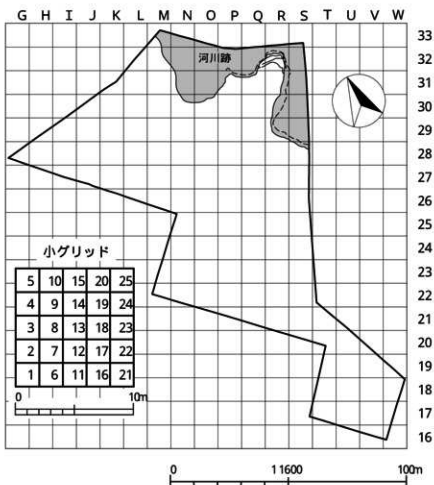
第 5 図 絵図 - 2

第 章 調査の概要と経過

1 グリッドの設定

平成 14年度調査 [渡邊ほか 2003] で設定したグリッドを今回の調査においても使用し、日本海東北自動車道のセンター杭である STA 370 00 (日本測地系 X 235159 995, Y 309 888) と STA 374 00 (同 X 23519 131 Y 80845 549) を結んだラインを南北方向の主軸とした。グリッド南北方向の主軸は、真北から約 26 東偏している。主軸と直交する東西の軸は、平成 14年度調査の STA 370 00杭 (11P) を基点として、順次北へグリッドラインを設定していった。

グリッドは、大グリッドと小グリッドからなり、大グリッドは、10m四方を単位とし、小グリッドは、大グリッドを 2m四方に 25等分したものである。大グリッドの名称は、南西隅を基点とし、南北方向を算



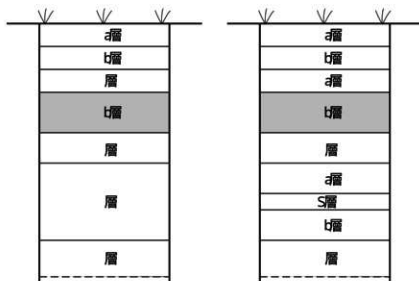
第 6 図 グリッド設定図

用数字、東西方向をアルファベットとして [27P] のように呼称した。小グリッドは、1～25の算用数字で表し、南西隅を 1 北東隅を 25とした。表記は、大グリッドの後につけて [27P 18] のように呼称した。平成 16年度調査区は、南北方向は、16から 33 東西方向は、GからWまでの範囲となる。

2 層 序

基本層序は、以下のとおりである。

- 層 黒褐色粘質土。耕作土。現水田耕作土 (a 層) と旧水田耕作土 (b 層) に分離可能である。後者では、牛または馬の足跡による攪乱が、著しい。
- 層 暗褐色粘質土 腐植土層。いわゆるガツボ層で、後に述べる古墳前期包含層がない箇所に認められる。周囲より標高の低い場所に認められ、湿地を形成していたと思われる。当該調査区では、西側と南側の遺構の検出されない場所に堆積し、本土層の有無が、遺構の有無に対応する。
- a 層 灰褐色粘質土。古墳時代前期遺物包含層。古墳時代前期の土師器の小破片と炭化物を含む。大半が、後世の攪乱、ほ場整備による削平を受けており、平均的に 5cm から 15cm と薄い堆積層である。
- b 層 灰白色粘質土。非常に安定した堆積で、この層の上面で古墳時代の前期の遺構が確認できる。
- 層 青灰色粘質土。層の漸移層。
- a 層 明青灰色シルト。植物痕を含む。
- S 層 炭化物集中層。局部的にしか観察されない。
- b 相当層 青灰色シルト。本遺跡では、局部的にしか観察されない。縄文時代後晩期遺物包含層相当層



第 7 図 基本層序模式図

層 暗緑灰色砂質土層。砂とシルトの互層。

基本層序は、平成13・14年度調査を踏襲したが、層を a 層と b 層に分離したことが、大きく違う点である。a 層は、遺物・遺構集中箇所である 24-32N-S グリッドにしか存在しない層である。それ以外の遺構の検出されない箇所には、a 層が存在しない代わりに、層のガツボ層が観察される。このように、層の有無は、遺構の有無に密接な関係を持っており、遺構のあるなしの判断の大きなよりどころとなりえる土層と言える。また、縄文時代後・晩期の包含層に相当する b 層は、局地的な土層で 29-O・P・R にしか観察されず、縄文土器片は出土していない。本遺跡では、b 相当層と呼称している。第 4 図は、調査区内に設けた土層観察用ベルトをもとに大グリッドごとに柱状図を作成し、東西・南北別に順次に並べたものである。これによると、南北方向の主な遺構集中箇所である 26-3 列においては、多少の起伏を持ちながらほぼ平坦であり、東西方向の遺構集中箇所である N-S 列において、多少の起伏を持ちながら、ほぼ平坦な地表面を形成するが、東西方向では、Q・R 列を境目に東西両側にむかって傾斜していることがうかがえる。また、西側は、層（ガツボ層）が多く観察された区域で、M 列より西側に広がっており、全体図に層分布域として表示した。

3 調査方法

調査された遺構は、原則的に連番で番号の先頭に、以下の略号を付した。竪穴建物は SI 掘立柱建物は SB、土坑は SK、溝は SD、性格不明遺構は SX とし、そのうち、竪穴建物、掘立柱建物は、遺構種別から番号を付した。円形周溝状遺構、杭列は、号をつけて [円形周溝状遺構] [円杭列] のように呼称した。また確認・検出された遺構は、原則的に長軸・短軸方向に適宜、セクションラインを設定し、壁や底面の不明確なものについては、遺構外まで掘りぬき確認したのち、遺構と認定した。

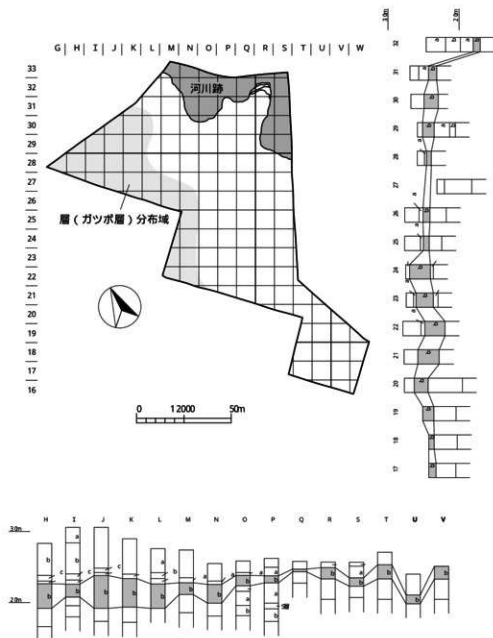
セクションは、完掘直前までなるべく残したまま、調査員間、あるいは外部の見学者の客観的な判断と検証に耐えるようにつとめた。また、遺構の土層は、土質により、粘土、粘質シルト、シルト、砂質シルト、砂の段階に区分して土層注記を行った。土層の分類に関して平成13・14年度調査との違いは、粘土、シルト、砂に粘質シルトと砂質シルトを加えたことである。粘質シルトは、道端の基本土層の粘質土に相当し、砂質シルトは、砂とシルトの間の1層として新たに規定したものである。また、粘性は、土質によって必然的に規定されると考え、表記しなかった。しまりも、含水率に左右されるため、表記しなかった。

遺物の取り上げ方は、遺構出土のものについては、実測に耐えるもの、大きい破片は、を付して図面に記録し、それ意外のものは、層位別の一括とした。遺構外のものについては、実測に耐えるもの、大きい破片は、を付して図面に記録し、それ以外のものは、基本土層の層位と小グリッド表記を付して取り上げた。

4 検出された遺構と出土遺物

前述したごとく、遺構集中箇所は 24-32N-S グリッドにあり、調査区の北東部の河川跡寄りに北西から南東方向に幅 30m、長さ 90m の帯状の広がりである。発掘調査された全遺構は、遺構全体図(図版 2・3・4)・遺構関係図(図版 5・22・23・34・35・43)に掲載した。そのうちの報告書掲載遺構は、以下のとお

りである。円形周溝状遺構は、基で、28~30P~Rグリッドと24~26Sグリッドに位置する。竪穴建物(軒は、29~30N~Pグリッドに集中しているSIからSⅤの軒である。そのうちのSⅣは、1・2の軒が、上下に重複する。掘立柱建物は、SBからSB13の1棟であり、河川跡への張り出し部を除く遺構集中箇所のほぼ全域に分散する。杭列は、2列検出された。29~31P~Rグリッドにかけての南西から北東方向へ走る縦延長約30mの角杭列と32Rグリッドにかけての河川跡の川岸に沿って7mほどの長さで検出された2号杭列の2列である。SKは、4基検出され、そのうちの半分以上が、河川跡に向かう張り出し部に集中する。単独の炉が1基、SXは、5基検出された。なお、ピットは、柱痕のあるものは、すべて掘立柱建物を構成する柱



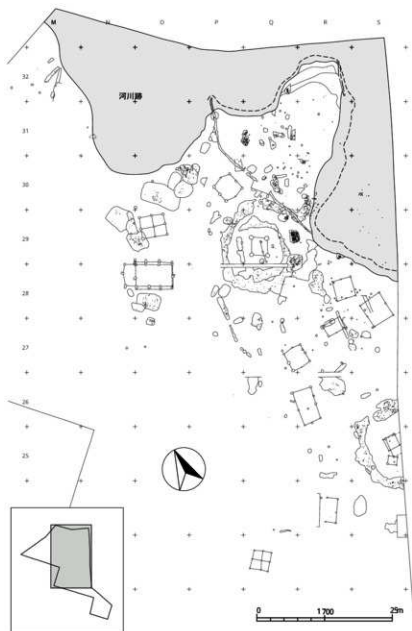
第 8 図 基本層序柱状図

4 検出された遺構と出土遺物

穴になり、単独のもので掲載に値するものはなかった。

出土遺物の様相を示すドットは、第9図のとおりであるが、そのほとんどが、基本土層に 層が存在しない場所から出土した。遺構内出土の遺物は、主に円形周溝状遺構を構成する土坑や溝及び竪穴建物から出土した。河川跡から出土した遺物は、攪乱され、原位置を動いていると思われるので、大部分は、グリッド・層位別の遺物としてとり上げるにとどめた。

下層の調査においては、縄文時代後・晩期包含層相当層である 層において、縄文土器片は、一片も出土していない。また、遺構確認面の 層上面においても遺構は、確認されていない。



第9図 古墳時代の遺物出土状況図

第 章 上層の調査

1 遺 構

A 遺構の概要

遺構種別と数、位置については、第 4 章で述べたが、ここでは、竪穴建物の認定基準、掘立柱建物の構造的呼称及び遺構の平面・断面形態・主軸方位の測定方法について述べる。なお遺構の平面・断面形態は、和泉 A 遺跡 [荒川・加藤 1999] に基づいて行った。

1) 竪穴建物の認定

竪穴建物という呼称は、利用目的が住居以外の可能性があることからこれを使用した。又掘る際は、原則的に断面を床面より深く掘り下げ、床面（貼り床もしくは、硬化面）と掘り方を確認した。この床面の有無が、住居と認定する上で最も重視した基準である。次に、付属施設として、柱穴、周溝、土坑、炭化物集中範囲を有するもの、最後に床面直上と考えられるところにおいて一定量の遺物が出土したことなどを認定の根拠とした。

2) 掘立柱建物

掘立柱建物は、原則的に長軸方向を桁行、短軸方向を梁行と規定し、長軸が東西にあるものを東西棟、南北にあるものを南北棟、東柱を持つものを総柱の掘立柱建物、持たないものを側柱の掘立柱建物と呼称した。

3) 杭 列

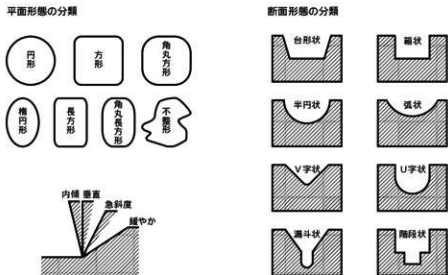
杭列は、当初木柱列としたが、上屋構造を持たないことから杭列と呼称することにした。

4) 平面形態

円形：長径が短径の 1.2 倍未満のもの
楕円形：長径が短径の 1.2 倍以上のもの
方形：長軸が短軸の 1.2 倍未満のもの
長方形：長軸が短軸の 1.2 倍以上のもの
不整形：凹凸で一定の平面形を持たないもの

5) 断面形態

台形状：底部に平坦面を持ち、緩やか〜急角度に立ち上がるもの
箱状：底部に平坦面を持ち、ほぼ垂直に立ち上がるもの
弧状：底部に平坦面を持たない皿状で、緩やかに立ち上がるもの
半円状：底部に平坦面を持たない椀状で、急角度に立ち上がるもの



第10図 遺構の平面形態と断面形態の分類図

U字状：確認面の長径よりも深さの値が大きく、ほぼ垂直に立ち上がるもの

V字状：点的な底部を持ち、急角度に立ち上がるもの

漏斗状：下部がU字状、上部がV字状の二段構造からなるもの

6) 主軸方位

遺構の主軸方位は、長軸を基準に真北からの角度を測定し、[N - 23 - W] [N - 16 - E] のように表記した。

B 遺構各説

1) 竪穴建物

a 概要

今回の調査では、SI1-6の合計6軒が検出されている。また、6軒以外にも竪穴建物かどうか不明確なものもある。それらについては性格不明遺構(SX)とした。SX 261・SX 301・SX 505をあげることができる。これらは床面のようなものも確認できるが、竪穴建物と断定するには難しいものである。ここで取り上げた性格不明遺構 基と竪穴建物 6軒はすべて円形周溝状遺構の周囲にみられ、円形周溝状遺構の周囲にはSI1-6・SX 301、2角円形周溝状遺構の周囲にはSX 261・SX 505が位置する。円形周溝状遺構の周囲の竪穴群は3か所にまとめることができ、SI1-3 SI4・5 SI5となる。これらはそれぞれの切り合い関係により新旧関係を確認することができる。SI3 SI2 SI1 SI5-2 SI5-1 SI4の順に新しくなる。

最後に、ここでは6軒の竪穴建物を平面形・施設・床面積により次のように分類した。平面形では楕円形(SI2)、隅丸方形(SI3・5・6)、不整形(SI1・4)の3種類。内部施設では、ビット・土坑(SI2)、ビット・土坑・周溝(SI3・5-1)、ビット・周溝(SI4・5-2)、なし(SI1・SI6)の4種類。床面積では5㎡以下(SI4)、5~10㎡(SI1・2)、10~20㎡(SI5・6)、20㎡以上(SI3)の4種類に分けることができる。平面形態は切り合い関係から、隅丸方形・楕円形・不整形と変化する傾向を見出すことができる。床面積では20㎡以上・10~20㎡・5~10㎡・5㎡以下と減少傾向を見出すことができる。

b 各 説

S11(図版5・6・47・73・120) 300・Pグリッドに位置する。長軸415m、短軸290m、面積84㎡で平面形は楕円形を呈するが、輪郭は大きく歪んでいる。床面までは深さ20mを測り、緩やかに立ち上がっている。主軸方位はN・10°・Wを指す。北側の一部はSK089によって床面まで壊されている。床面はほぼ平坦で、中央から南側が若干深くなっている。床面全体には灰白色粘質シルト(3層)が2~4mの層厚で貼床状に敷き詰められ、その上面中央には炭化物の集中する範囲が長径80mの不整形に検出された。炭化物は直径1cm程の粒状で、平面的に広がって堆積していたが、直下のP5から焼土の出土は確認できなかった。柱穴は明確にならなかったが、P2・P3・P4はプランとして明確な覆土が充填されていた。P2・P3・P4は長径10~15m前後の円形と楕円形を呈し、深さは10~25mを測る。またその他ピットが8基検出されたが、いずれも浅く柱痕は検出されなかった。覆土は4層に分層でき、1層は黄灰色系粘質シルト、2層は灰色系粘質シルトで炭化物を含む。3層は灰白色系粘質シルトで上面に炭化物の集中する範囲が検出され3層上面を床面と判断した。4層は灰色系粘質シルトで、掘り方と考えられる。S11は竪穴建物と礎石を持って断定できないが、床面の状況等からここでは竪穴建物として扱った。出土遺物は土師器(1~10)で、高坏、器台、鉢、壺、甕が北側を中心に出土している。S11は東側でSK068、北側でSK089と重複している。土層堆積の状況は調査段階で微妙な土質の変化を捉える事に難渋したが、SK089がS11を切り、S11がSK068を切っていると判断した。

S12(図版5・8・74) 300・Pグリッドに位置する。規模は長軸359m、短軸305m、面積1083㎡を測る。平面形は楕円形を呈する。主軸方位はN・82°・Eである。施設は柱穴・土坑を検出したが、周溝は確認できなかった。柱穴は3基検出した。平面形態は円形を呈する。径20~30m、深さは床面より8~22cmを測る。柱痕はP1・P2において確認できた。これらから約10cmの柱材を使用していたと推測できる。覆土はb相当層を主体として、灰色砂質シルトを粒状に少量含む土である。土坑はS3・5から検出した土坑と同様のものである。長軸17m、短軸08mで、南北方向に長い楕円形を呈する。深さは床面より8~10mを測る。断面の観察により、3つの層を確認できる。1層目はb層に類似した土層で、炭化物を少量含む。2層目は炭化物を多量に含むが、焼土などはみられない。3層目は炭化物を極少量含む程度で1層目と類似する。2層目に炭化物が集中して、炭化物の帯となることから、2層目と3層目の境が生活面と推測できる。この構造はS3でも同様である。しかし、3層目に焼土がみられないなど炉跡と断定することはできないが、それに近いものであると推察する。出土遺物は器種を確認できない破片のみである。この建物はS12を切り、SK362により切られる。

S13(図版5・7・8・47・75・76・120) 300グリッドに位置する。長軸735m、短軸39mで、平面形は東西方向に長い隅丸長方形を呈する。面積は2867㎡を測る。主軸方位はN・47°・Wである。施設は周溝・柱穴・土坑状の凹みを検出した。床面は検出面より深さ0~4mを測る。明確な貼床をもたないが、遺物が面でひろがりをもつことと、柱穴・土坑がすべてこの面において検出できることから床面であると判断できる。周溝は北側中央と南西側において開く。断面形はU字形を呈する。幅は20~40m、深さは床面より12~14mを測る。覆土はb層に類似した土層を主体として、灰色砂質シルトの粒状または塊状を多量に含む土である。柱穴は1基検出した。平面形はすべて円形を呈する。径20~40m、深さは床面より10~20mを測る。P12・4・6・9・10の7基は断面において柱痕を確認でき、その痕跡から約径12~20cmの木材を柱として使用していたと推測できる。覆土は掘方にはb相当層を主体として、灰色砂質シルトの粒状を少量含んだ土である。柱穴は不規則に並んでいる。土坑状の凹みは、平面形態が楕円形を呈しており、

長軸 2.2m、短軸 1.8m、深さは床面より 10～13mを測る。覆土は 2層に分けることができ、層目は b相当層を主体として、灰色砂質シルトの粒状または塊状を少量含んだ土の中に炭化物と遺物を多量に含んでいる。2層目は層目と同様の土であるが、灰色砂質シルトを多量に含む土で、炭化物と遺物を含まない。1層目のレベルは床面と同様であることから、土坑状に掘り下げた後、何らかの事情から埋め戻し、生活面として利用していたと推測できる。この建物は北東角において SK36と SJ2により切られる。SK36の下層からは SJ3の周溝は検出できず、完全に削られていたが、SJ2の下層からは深さ約 5m残存していることを確認できた。また、北西角には P36を検出しているが、この遺構に関連するものかどうかは不明である。出土遺物は土師器と石製品がある。土師器は器台 (11・12)、壺 (13・14・16)、甕 (15・17・18・19) などで、石製品は砥石 (20) である。

S4 (図版 5・11・48・77・120) 29N・Oグリッドに位置する。平面形は方形を呈する。規模は長軸 2.59m、短軸 1.89m、面積 4.72㎡を測る。主軸方位は N-10°-E である。内部施設は周溝と柱穴である。周溝の平面形は C 字形で、西側部分は開く。断面形は部分的に異なり、V 字形・U 字形・台形を呈する。深さは床面より 10～12mを測る。柱穴は 4基検出した。平面形は円形を呈し、径 20～35m、深さは床面より 10mを測る。床面は貼床である。厚さは 4～6cmを測り、灰黄色粘質土である。遺物はその直上に面をもって並び、また、北西部分には炭化物が集中する部分を検出したことから床であると考えられる。この炭化物集中部分は炉跡と断定する根拠はないので、ここでは炭化物集中部分としておく。覆土は炭化物を多量に含み、遺物を包含する。遺物は床面直上と覆土から出土し、掘方からは出土しない。出土遺物は土師器と石製品で、ほとんどのものが破片であるが、形がわかるものとして、壺 (29) と砥石 (30) がある。断面の観察から、SX30と SJ5を切る。竪穴建物の中では新しい方に位置づけられ、SB などの掘立柱建物が出現する前後であると想定する。

S5 (図版 5・9・10・48・77・79・80・120) 29N・Oグリッドに位置する。ここでは 2時期の竪穴建物を確認している。

S5-2 平面形が不正形な隅丸方形を呈する。長軸 2.9m、短軸 2.8m、面積 8.12㎡を測る。主軸方位は真北である。内部施設は周溝と柱穴と土坑である。床面は検出面より深さ 10～16cmを測り、厚さ 2～4cmの貼床を確認できる。白色粘質土である。柱穴は 7基検出した。平面形は円形を呈し、径 20～30m、深さは床面より 5～22mを測る。P7では柱痕と柱材の腐植した土を検出した。柱痕から柱材の太さは約 18cmであると推定できる。覆土は b相当層を主体として、少量の炭化物と灰色砂質シルトを含む土である。周溝は東側と北側において開く。幅は 20～30m、深さは床面より 12～20mを測る。断面形は U 字形を呈する。中央部では土坑状の凹みを検出している。覆土は炭化物を多く含んでおり、遺物を多量に包含する。覆土を取り除くと床面と同様の白色粘質土を確認できる。焼土は確認できないが、多量の炭化物・遺物などから炉のような施設を想定することができる。同様の施設は SJ3においても検出している。遺物は床面直上またはその包含層に含まれる。出土遺物は鉢 (25・26)・壺 (27)・甕 (28) などである。

S5-1 SJ5-2を拡張して建てられている。平面形は不正形な隅丸方形を呈する。長軸 3.50m、短軸 3.05m、面積 10.68㎡を測る。主軸方位は真北である。内部施設は周溝と柱穴で、土坑はみられない。床面は検出面より深さ 2～5mを測り、厚さ 2～4cmの貼床を確認できる。白色粘質土である。柱穴は 4基検出した。平面形は円形を呈し、径 20～40m、深さは床面より 5～30mを測る。周溝は東側において開く。幅は 20～50m、深さは床面より 14～16mを測る。断面形態は U 字形を呈する。遺物は床面直上またはその包含層に含まれる。出土遺物は蓋 (21)・器台 (22)・甕 (23・24) などである。

これらの遺構はS14により切られている。S15-1・S15-2は連続して建てられていることから、時期差はほとんどない可能性がある。また、SB303のP303に切られており、掘立柱建物より新しいことが分かる。竪穴建物と掘立柱建物の新旧関係を確認できる唯一の例である。

S16 (図版 5・11・48・78・120・121) 280グリッドに位置する。長軸 440m、短軸 295mで、平面形は東西方向にやや長い隅丸長方形を呈する。面積は 1298㎡を測る。主軸方位は N - 53° - W である。施設は検出することができなかった。しかし、遺物が面をもってひろがっていることから、この面を床面であると判断した。床面上層は b 相当層を主体とし、その中には炭化物をやや多く含み、床面直上には特に多く炭化物が広がる。床面は検出面より深さ 2~8m を測る。掘方は床面より 8~16m を測る。覆土は b 相当層を主体とし、その中に炭化物を少量含んでいる。出土遺物は土師器のみで、壺 (31)、椀 (32) などである。この竪穴建物は南西角において SK361により切られる。内部に施設を検出できなかったが、これと類似する遺構として、SX30をあげることができる。SX30は床面と推定するラインに遺物などが面をもってひろがらないことから、S16とは区別をし竪穴建物としなかった。

2) 円形周溝状遺構

a 概 要

円形周溝状遺構は複数の土坑や溝が連なり円形を呈する周溝とその周溝内区画部から検出される柱穴等から構成される建物跡である。今年度の調査で円形周溝状遺構と判断した遺溝は 2基ある。1号円形周溝状遺構は調査区北東側から検出され、同じく調査区北東側に流れる河川跡西岸に位置している。2号円形周溝状遺構は調査区東側から検出され、東側半分は調査区外に広がっている。1号円形周溝状遺構、2号円形周溝状遺構はいずれも自然堤防上に位置し、b層を検出面としている。また周溝を構成する土坑や溝からは多量の土師器が出土し、周溝内区画部の柱穴からは根太、根がらみといった他の掘立柱建物や竪穴建物の柱穴にみられない材が出土した。1号円形周溝状遺構の周溝は内側と外側 2重に検出され、2号円形周溝状遺構からは 1重の周溝が検出された。

b 各 説

1号円形周溝状遺構

28~30P-Rグリッドに位置する。二重に廻る周溝と土坑、周溝内区画部の柱穴・土坑から構成される。本遺構の立地状況は遺構の検出面である b層が、後世に削平されているため明らかではないが、図版 12のセクションに見られる下層の土層堆積状況から周溝内区画部(基本土層の c層)が、微高地状に高まっていることが判明した。また、周溝内区画部からは貼り床・硬化面・周堤は検出されなかった。

外側の周溝

SK001・SD003・SD027・SD056・SK034・SK038によって構成され、南東側の外周をさらに SX002・SX094が廻っている。南東角は一部攪乱による削平を受け、東側の先端部 SX094は河川によって侵食されている。また西側の SD027と南側の SD056は確認トレンチによって南北に分断されているが、堆積層等の状況から一連の遺構であると考えられる。外側の周溝の平面形は不整形円形を呈し、規模は長径 18m、短径 17m、溝幅 0.8~3.4m、深さ最大 35m、面積 247㎡を測る。周溝の東側は大きく開口していて、開口部中央には SK034が位置している。また周溝の北側 SD003と SD027の間には周溝の途切れた部分があり、幅 50cm を測る。

これより外側の周溝を構成する各遺構について詳細を述べる。

SD003(図版12・18・49・50・81・121) 周溝の北東側に位置する。平面形は楕円形の土坑や溝が連続した形を呈し、中央は細くなっている。周溝線上を形成する主体部は南側を囲むようにわずかに弧を描いている。東側は開口部の北側先端を形成し、主体部から北東側に向けて屈曲して袖状に溝を延長している。断面形は弧状を呈する。規模は全長11.2m、幅1.85m、深さ1.5mを測り、緩やかに立ち上がる。覆土は4層に分層でき、1～3層は灰黄色系粘質シルト、4層は灰白色系粘質シルトである。東側の1層は灰黄色系シルトで、砂質の強い覆土から多量の土器片が出土した。また西側中央からはレンズ状に堆積した黄白色粘土が出土した。出土遺物は土師器(41～50)である。高坏、器台、壺、甕などが出土している。図示し得たもの以外の破片では甕が多く出土して、次いで器台、壺の破片も出土している。その壺の破片の中には、SK00出土の裝飾壺(75)と接合しているものがある。また東側開口部張り出しからは多量の小破片が出土している。中央部分を 穹 杭列に切られている。

SD027(図版12・13・18・50・51・81・83・121・122) 周溝の西側から北側にかけて位置する。平面形は円形の土坑や溝が連続した形を呈し、東側を囲むように2か所が屈曲している。中央から南側にかけては細長く、北側先端部は円形に大きく広がっている。断面形は南側と北端部では弧状を呈し、中央部では階段状を呈する。規模は全長13.9m、幅2.75m、深さ2.8mを測り、緩やかに立ち上がる。覆土は9層に分層でき、1層は北側の一部に観られた灰黄褐色系粘質シルト、2層は上層全体を占める灰黄色系粘質シルト、3層以下は下層を形成する灰色系粘質シルトである。また北側の上層からはレンズ状に堆積した黄白色粘土が数か所から出土した。出土遺物は、北端部の基底部から樹皮と考えられる薄い植物質が平面的に出土した。樹皮の出土範囲は長軸1.23m、短軸0.52m、厚みは極めて薄く1mm前後である。樹皮は幅3m程度の細長い帯状のものが狭い間隔で数本並ぶ形に配置されていて、北側から主軸方向の違う同様の樹皮が下に重なって出土した。方向は前者がN-45-E、後者がN-48-Wを指す。この樹皮の出土状況からはその用途等は明らかにできず、使用後に廃棄されたものが、自然に周溝内に落ち込んだものかは明らかにできなかった。樹皮以外の出土遺物は、土師器(51～62)で、高坏、器台、鉢、壺、甕などが出土している。図示し得たもの以外の破片では、甕、高坏の破片が多く出土していて、次いで壺、器台の破片が出土している。58・59の壺はその破片がSD027全域から上層下層をとわず広範囲に亘って出土した。

SD056(図版12・18・51・52・82・122) 周溝の南側に位置し、東側は一部攪乱によって壊されている。平面形は円形、楕円形の土坑や溝が連続した形を呈し、北側を囲むように2か所が屈曲している。断面形は弧状を呈する。規模は全長14.1m、幅3.4m、深さ2.0mを測り、緩やかに立ち上がる。覆土は1層に分層でき、1・6・10～1層は上層を形成する灰黄色系粘質シルトである。2～5・7～9層は下層を形成する黄灰色系粘質シルトである。出土遺物は土師器(63～70)で、高坏、鉢、壺、甕などが出土している。図示し得たもの以外では器台、甕の破片が出土していて、その他高坏の破片が少量出土している。また9層から出土した二重口縁の壺口縁部の破片がSK00出土の破片と接合している。SD056は北側で内側の周溝SD052と重複していて、土層堆積の状況からSD056がSD052を切っていることを確認した。また北東側でSX002とSK001に切られている。

SK001(図版12・18・52・53・55・82・122・123) 開口部の南側先端に位置する。平面形は長方形で、断面形は弧状を呈する。規模は長軸3.3m、短軸2.83m、深さ3.5mを測り、緩やかに立ち上がる。平坦な底面にはSD056の続きと考えられる溝状の窪みが、途切れた形で検出された。主軸方位はN-30-Eを指す。覆土は1～9層に分層でき、1層は灰黄褐色系シルト、2層は灰黄色系粘質シルトで炭化物を多量に含み、

多量の土器片が出土した。3層は灰白色系粘質シルトで明度が高く混入粒子の少ない覆土で、上面に炭化物が極薄く堆積していた。4層は灰色系粘質シルトで上面の全体に炭化物が極薄く堆積していた。5層は灰黄色系粘質シルトでSD056からの続きの可能性が高い溝状の窪みの覆土である。断面図では5層上面の層境線を太く表したが土層番号はSK001の続き番号のままとした。出土遺物は土師器（77-83・113）と筋砥石（84）である。土師器は高坏、器台、壺、甕が出土している。図示し得たもの以外では甕、壺の破片が多く出土していて、次いで器台、鉢の破片が出土している。113の装飾壺は口縁部から頸部の全周が遺存していて、半分は最下層から出土し、残りの半分はSK034土層から出土した破片と接合したものである。また75の装飾壺はSD003出土の破片と接合している。その他二重口縁の壺口縁部の破片がSD056の5層出土の破片と接合している。南東側をSX002に切れ、南側でSD056を切っている。または西側で内側の周溝SD03と重複していて、土層堆積の状況からSD03を切っていることを確認した。

SX002(図版12・18・82) 開口部の南側、SK001の外側(東側)に位置する。平面形は角丸方形の土坑や溝が連続した形を呈し、西側を囲むように北側先端が内傾している。断面形は弧状を呈する。規模は長軸(615m) 短軸33m、深さ8mを測り、緩やかに立ち上がる。主軸方位はN-50°-Eを指す。覆土は3層に分層でき、1層は灰黄褐色系シルト、2層は灰黄色系粘質シルトである。SX002は流水による攪乱を受けたような様相を呈していて覆土は砂質の強い4層と類似していた。出土遺物は土師器である。各層から多量の小破片が出土した。北側でSX094を西側でSK001を切っている。

SX094(図版12・18・82) 開口部の南側先端に位置し、東側を河川に侵食されている。平面形は不整形で、断面形は弧状を呈する。規模は長軸215m、短軸2m、深さ15mを測り、緩やかに立ち上がる。覆土は3層に分層でき、1層は灰色系シルト、2層は黄灰色系粘質シルト、3層は灰オリーブ色系粘質シルトで、砂質シルトブロックを多量に含む。SX094はSX002と同じく流水による攪乱を受けた様相を呈していた。出土遺物はSX002と対照的で、ほとんどみられなかった。南側でSX002に切られている。

SK034(図版12・14・18・55・69・83・88・124) 29Q 23・24 29R 3グリッド、円形周溝状遺構の東側開口部中央に位置する。平面形は長方形を呈するが、北東角の張り出しが弱く台形に近い。断面形は箱状を呈し、南側は階段状に一段浅くなっている。規模は長軸23m、短軸18m、深さ58mを測り、急斜度で立ち上がる。主軸方位はN-20°-Eを指す。覆土は10層に分層でき、1-3層は炭化物を多量に含む灰黄色系粘質シルト、4層は混入物の少ない灰黄色系粘質シルト、5層は灰黄色系粘質シルト、6層は黄灰色系粘質シルト、7層は灰白色系粘質シルトで、土色が明るく混入物の少ない層である。また他の粘質シルトに比べ砂質が弱く、粘土に近い土層である。8層は褐灰色系粘質シルト、9層は灰色系シルトで灰黄色系粘質シルトとの互層になっている。10層は灰褐色系粘質シルトである。7層(灰白色系粘質シルト)の検出範囲は土坑全体に及び、南側は壁の高い位置からの堆積が確認できた。7層検出範囲の平面形は南北に長い楕円形、土層断面は中央に向けてゆるやかに落ち窪み、南側は壁際の高い位置から堆積が確認できた。7層検出範囲の長軸は195m、短軸は123m、層厚は中央部で9mを測る。7層は意図的に配置された可能性が考えられるが、検出状況からはその目的等を明らかにできなかった。出土遺物は土師器(110-119)である。器台、壺、甕などが出土している。装飾壺(113)は口縁部から頸部の全周が遺存している。半分は3層から出土し、残りの半分はSK001の最下層から出土した破片と接合したものである。また8層下部から樹皮と考えられるものが出土した。樹皮の出土位置は土坑底部が一段低くなった北側で、遺物の出土は北側と西側では壁際から始まっている。樹皮出土範囲の平面形は長方形、土層断面は中央に向けてゆるやかに落ち窪んでいる。樹皮の出土範囲は長軸17m、短軸11m、厚みは極めて薄く1mm前後である。樹

皮は、SD027・SK038から出土した同様の樹皮に比べて風化が著しく、繊維の方向や樹皮を加工した痕跡等は確認できなかった。また樹皮の上面からは受け部底から外反して広く開く脚部をもつ器台 3点、坏部底と口縁部の境に段をもつ高坏 1点が出土した。北側の高坏は坏部を伏せて出土し、南側の器台は脚部のみが正立して出土した。図示し得たもの以外では、器台、襖の破片が上層から多く出土し、次いで鉢、壺、それに高坏が少量出土している。その他樹皮の上面からは材の小片が出土したが、加工痕等は観察できず用途等は明らかにできなかった。

SK038(図版 12・15・18・56・69・83・88・89・124・125) 29Q 19・20・25グリッド、鴨円形周溝状遺構の外側の周溝を形成するSD003の内側に位置する。土坑中央やや南寄りには暗渠が北西から南東方向に走っていて土坑は底部まで壊されている。平面形は楕円形、断面形は箱状を呈し、北側と西側は階段状に一段浅くなっている。規模は長軸(2m)、短軸1.4m、深さ35cmを測り、急斜度に立ち上がる。主軸方位はN-70°-Wを指す。覆土は3層に分層でき、1層は灰黄色系粘質シルト、2層は灰白色系粘質シルト、3層は灰色系粘質シルト、4層は灰色系シルト、5層は灰色系粘質シルトである。東側の2層上面からは、黄白色粘土が南側を暗渠に切られて出土した。黄白色粘土の平面形は不整形を呈し、土層断面は北東側から土坑中央に向けてゆるやかに落ち窪んでいる。黄白色粘土の出土範囲は長軸0.65m、短軸(0.52m)層厚は10cmを測る。この黄白色粘土は同質と考えられる粘土塊が鴨円形周溝状遺構の数か所から点在して出土し、それ以外の遺構からの出土も確認されている。しかしそれぞれの出土状況からはその目的等を明らかにできなかった。遺物は3層下部から樹皮と考えられる植物質が出土した。樹皮の出土位置は土坑底部が一段低くなった南東側で、東側は壁際から出土範囲が始まっている。樹皮の平面形は楕円形と考えられ、土層断面は中央に向けてゆるやかに落ち窪んでいる。樹皮の出土範囲は長軸1.6m、短軸1m、厚みは極めて薄く1mm前後を測った。樹皮には繊維の方向が確認でき、数枚の樹皮が重なっていることが観察できた。数枚の樹皮の方向はN-45°-78°-Wを指す。この樹皮の上面北側からは土師器が出土し、短脚の高杯(120)、東側から壺(121)が出土した。その他2層からは襖(122)が出土している。図示し得たもの以外には、類別可能な破片はほとんど出土しなかった。また樹皮上面からは極薄い炭化物が樹皮に伴って出土したが、目的等は明らかにできなかった。

内側の周溝

SD049・SK028・SK055・SD053・SD03から構成される。東側のSD03と南側のSD053は確認トレンチによって南北に分断されているが、堆積層等の状況から一連の遺構であると考えられる。平面形は角丸長方形で、規模は長軸11.8m、短軸9.1m、溝幅0.4~2.5m、深さ最大20cm、面積85.0㎡を測る。主軸方位はN-10°-Eを指す。周溝は北西・南西・北東側でそれぞれ途切れていて、南側は外側の周溝と重複している。土層堆積の状況から外側のSD056が内側のSD053を切っていることを確認した。

これより内側の周溝を構成する各遺構について詳細を述べる。

SD049(図版 12・17・18・49・121) 周溝の北側に位置する。平面形は角丸方形の土坑や溝が連続した形を呈し、南側を囲むように2か所が屈曲している。断面形は弧状を呈する。規模は全長8.2m、幅2.2m、深さ10cmを測り、緩やかに立ち上がる。覆土は2層に分層でき、共に灰黄色系粘質シルトである。出土遺物は土師器(36・37)である。図示し得たもの以外では、高坏、襖の破片が少量出土している。

SK028(図版 12・17・18) 周溝の西側に位置する。平面形は長方形で、断面形は台形状を呈する。規模は長軸2.45m、短軸0.85m、深さ20cmを測り、緩やかに立ち上がる。主軸方位はN-15°-Eを指し、南側のSK055と長軸をほぼ同じくして先端部を接している。覆土は2層に分層でき共に灰黄色系粘質シルト

トである。出土遺物は土師器である。極少量の甕の破片が出土した。東側中央をSK 054に切られている。

SK055(図版12・17・18・82) 周溝の西側に位置する。平面形は楕円形を呈する。断面形は台形状を呈し、北端部の東西に段をもつ。規模は長軸2.4m、短軸0.8m、深さ15cmを測り、緩やかに立ち上がる。主軸方位はN-12°-Eを指し、北側のSK 055と長軸をほぼ同じくして先端部を接している。覆土は3層に分層でき共に灰黄色系粘質シルトである。出土遺物は土師器の破片が極少量である。類別可能な破片はほとんど出土しなかった。

SD053(図版12・17・18・49・82・121) 周溝の南側に位置し、北西側と北東側がトレンチによって壊されている。平面形は方形、円形の土坑や溝が連続した形を呈し、北側を囲むように2か所が屈曲している。断面形は弧状を呈する。規模は全長(8.4m)、幅2.6m、深さ15cmを測り、緩やかに立ち上がる。覆土は15層に分層でき、3つのタイプに分けることができる。炭化物が全体に混ざり込み暗色を呈する黄灰色系粘質シルト(1・3・5・8・10・12・14層)ほとんど混入物を含まない灰黄色系粘質シルト(2・6・7・1層)最下層の灰黄色系粘質シルト(4・9・13・15層)である。覆土上部には炭化物を含む層と混入物をほとんど含まない層が2-5cmの層厚で交互に堆積し、それぞれの層が2層に堆積する様相が広範囲に亘って確認できた。また混入物をほとんど含まない層は検出面である1層に極めて類似し検出作業に大変手間取ることになった。この混入物をほとんど含まない層には出土遺物がほとんど無く、意図的に埋められた土層という印象を受けた。出土遺物は土師器(38-40)である。器台、甕などが出土している。図示し得たもの以外の破片では、甕、鉢、高杯の破片が少量出土している。南側でSD 056と重複し、土層堆積の状況からSD 056に切られていることを確認した。

SD031(図版12・17・18・49・82・121) 周溝の東側に位置する。平面形は溝が連続した形を呈し、西側を囲むように中央が屈曲している。断面形は弧状を呈する。規模は全長(6.1m)、幅1.3m、深さ20cmを測り、緩やかに立ち上がる。覆土は3層に分層でき、1層はほとんど混入物を含まない灰黄色系粘質シルト、2層は炭化物が全体に溶け込み暗色を呈する黄灰色系粘質シルト、3層は灰黄色粘質シルトである。覆土の様相は南側においてSD 053に類似して、SD 031とSD 053は連続した遺構であることが判明した。出土遺物は土師器(33-35)である。甕、器台などが出土している。図示し得たもの以外の破片では、甕、壺の破片が少量出土し、器台、鉢の破片も極少量出土している。南東側でSK 00に切られている。

周溝内区画部の施設

P029・P048・P072・P073・P050・P080・P091・SK032・SK074・SK054・P051・P090・P170・P171・P172・P173によって構成される。P029・P048・P072・P073は方形に配置され、P050・P080・P091は南北に連なっている。

これより周溝内区画部を構成する各遺構について詳細を述べる。

4基の柱穴P029・P048・P072・P073(図版12・16・18・60・83・84・127) 周溝内区画部の北西側に位置する。間隔の掘立柱建物と考えられ、若干平行四辺形に歪んだ方形に配置されている。主軸方位はN-27°-Eを指し、面積は9.4㎡である。柱間寸法は長軸方向東側3.25m、西側3.25m、短軸方向北側3m、南側3mを測る。P029・P048・P072・P073それぞれの平面形は円形、断面形は台形状を呈する。P029・P048・P072・P073の規模は長径70-85cm、深さ28-40cmを測り、急斜度で立ち上がる。P029・P048・P072・P073の長径は本遺跡の柱穴のなかでは最大級であるが、深さは長径の半分である。覆土は大きく二つに分層でき、P029の1-5層、P048の1-5層、P072の1-2層、P073の1-3層は灰色系粘質シルトで柱痕と考えられる。P029の4-5層、P048の6-7層、P072の3-5層、P073の4-5層は灰色系砂質シルト

トで掘り方と考えられる。遺物は、P029・P048・P073の底面から根太が出土した。遺存度の最も良いP029からは棒状に分割したと考えられる材が6本、底面に押し込まれた形で横並びに配置されていた。材のうち最大のものは長さ55m、幅8m、厚さ3mを測り、方向はN-55-Eを指す。P048では棒状の材が2本、底面に押し込まれた形で横並びに配置されていた。材のうち最大のものは長さ47m、幅6m、厚さ5mを測り、方向はN-20-Eを指す。P073では棒状の材が3本、底面に押し込まれた形で横並びに配置されていた。材のうち最大のものは長さ20m、幅6m、厚さ3mを測り、方向はN-60-Eを指す。根太は三基の柱穴それぞれで一定の方向に並べられるが、柱穴間の共通した配置は確認できなかった。また根太の遺存度は低く、加工痕の認められるものはなかった。

3基の柱穴P050・P080・P091(図版12・17・18・84) 周溝内区画部の中央に位置し、直線に配置されている。規模は長軸418mを測る。主軸方位はN-10-Eを指し、内側の周溝と軸を同じくしている。柱間寸法は、北から20m、199mを測る。P050・P080・P091の平面形は円形、断面形はU字状を呈し、P091は底部に窪みをもつ。P050・P080・P091の規模は長径25~30m、深さ20~26mを測り、急斜度に立ち上がる。P050・P080・P091の覆土はそれぞれ大きく二つに分層でき、P050の1・層、P080の1・層、P091の1・層は灰黄色系粘質シルトで柱痕と考えられる。P050の2層、P080の2層、P091の2層は灰色系シルトで掘り方と考えられる。P050・P080・P091は内側の周溝に伴う柱穴と考えられる。

SK032(図版12・16・18・84) 内側の周溝内区画部の東側に位置し、SK032a SK032b SK032cの3基の小穴から構成される。

SK032a SK032b それぞれ炭化物層を焼成面とした炉の可能性が高いが、覆土から焼土の検出はなかった。平面形は円形、断面形は弧状を呈する。SK032aの規模は長径32m、深さ4mを測り、緩やかに立ち上がる。SK032bの規模は長径27m、深さ7mを測り、緩やかに立ち上がる。SK032a SK032bにはそれぞれ掘り方があり、SK032dは長径50m、深さ9mを測り、緩やかに立ち上がる。SK032c掘り方は長径47cm、深さ11mを測り、緩やかに立ち上がる。SK032a SK032bの覆土は炭化物の集中した黒色系粘質シルトと炭化物の少ない灰色系粘質シルトに分層できた。炭化物の集中した層は3~7mの厚層を測り、それぞれレンズ状に堆積していた。SK032dはSK032cを切っている。

SK032c 平面形は円形、断面形はU字状を呈する。規模は長径40m、深さ23mを測り、急斜度に立ち上がる。覆土は炭化物の集中した暗灰色系粘質シルトと炭化物の少ない灰色系粘質シルトに分層できた。炭化物の集中した層は5mを測り、壁際まで充填されていた。出土遺物は土師器の破片が極少量である。類別可能な破片はほとんど出土しなかった。SK032a SK032bに切られている。

SK074(図版12・18・84) 内側の周溝内部の南側に位置する。平面形は円形、断面形はU字状を呈し、底部に窪みをもつ。規模は長径90m、深さ85mを測り、急斜度に立ち上がる。覆土は3層に分層でき、層は灰黄色系粘質シルトで、2層は灰色系粘質シルトである。2層には灰色系シルトブロックが多量に含まれていて柱穴の掘り方覆土に類似するが、覆土は水平堆積で柱痕は確認できなかった。出土遺物は土師器の破片が極少量である。類別可能な破片は出土しなかった。

SK054(図版12・18・53・123) 内側の周溝内区画部の西側に位置する。平面形は楕円形で、断面形は台形状を呈する。規模は長軸0.45m、短軸0.3m、深さ10mを測り、緩やかに立ち上がる。主軸方位はN-20-Eを指す。覆土は単層で灰黄色系粘質シルトである。出土遺物は土師器(85)である。高坏の坏部が出土している。西側でSK028を切っている。

P051(図版12・18・84) 内側の周溝内区画部の中央に位置する。P050の南側に接しているが新旧間

係は不明である。平面形は長径 22m の円形、断面形は U 字状を呈する。覆土には柱根が確認できた。

P090・P170・P171・P172・P173(図版 12・18) 円形周溝内の中央から開口部にかけて位置する小穴で、P090以外は調査終盤に確認面を 20cm 程度下げる事によって検出した。P171には柱根が確認でき、P17からは柱根が出土した。

円形周溝状遺構の出土遺物は、外側の周溝を構成する各遺構からの出土遺物がその大半を占める。また各遺溝の詳細で述べたとおり、外側の周溝を構成する遺構間で、装飾蓋や有段口縁の壺型土器の接合関係が明らかになった。外側の周溝(SK 034・038を除く)で、類別可能な遺物の総点数は 337点を数え、各器種の割合は甕 52%、壺 19%、器台 18%、高坏 6%、鉢 5%である。内側の周溝で、類別可能な土器の総点数は 58点を数え、各器種の割合は甕 62%、壺 16%、器台 7%、高坏 5%、鉢 10%をである。遺物の多く出土した SK 034で、類別可能な遺物の総点数は 111点を数え、各器種の割合は甕 39%、壺 17%、器台 29%、高坏 2%、鉢 13%をである。また甕の口縁端部の形状であるが、丸く収めるものの割合が、SD 056・SD 049・SK 034では比較的多く出土して、それぞれの甕の出土点数の半数近くを数えている。出土遺物の年代幅は、外側の周溝が内側の周溝に較べやや広い傾向にある。SD 02出土の器台(54)、甕(61)、SD 05出土の高坏(63)には4段階(川村 200Q 漆町 群併行)以降の様相があり、切りあいなどの関係から外側の周溝は内側の周溝廃絶後に存続していた可能性が高い。ただし SD 049(内側の周溝)出土の甕(36)にも4段階(川村 200Q 漆町 群併行)以降の様相があり一概に括ることは難しい。以上のことを踏まえ、円形周溝状遺構の外側の周溝と内側の周溝の二つの構造を想定してみた。内側の周溝は旧く構築され、内部中央に軸を同じくする3基の柱穴 P050・P080・P09が直線に配置されている。外側の周溝は内側の周溝を埋戻して拡張、構築されたと考えられ、4基の柱穴 P029・P048・P072・P073による掘立柱建物が、開口部から離れて中央やや西側寄りに位置していたと考えられる。また SK 032c は4基の柱穴 P029・P048・P072・P073による掘立柱建物の出入口に位置し、東京都立大学山田昌久助教授からは柱状の階段を設置した柱穴である可能性を指摘された。

2号円形周溝状遺構

24-26S グリッドに位置する。北西で途切れる形で連続する半円状の一条の溝と、その内部の柱穴で構成される。立地条件は円形周溝状遺構と同様、検出面である1層が後世の削平を受けてはいるものの、図版 19のセクションに見られる下層の土層堆積状況から、周溝内区画部の中心部から北側にかけて基本土層1層が、微高地状に高まっていることが確認できた。また、周溝内区画部には、貼り床・硬化面・周堤は検出されなかった。

周 溝

SD 255と SD 266により構成される。両者とも東端部が調査対象区外へ続いており詳細は不明であるが、その特徴より全体の形状は、円形周溝状遺構のように円形であったと推察できる。2号円形周溝状遺構の平面形は不整の半円状で、長径は 16.5m を測り、幅 0.9-3.2m、深さ 30cm を測る。周溝の北西隅にあたる SD 255と SD 266の間には、幅 1m 程度の周溝の途切れた部分が存在する。

これより各遺構について詳細を述べる。

SD 255(図版 19-21・53・54・85・123・124) 周溝の北側に位置する。平面形は楕円形・不整形の土坑や溝が連続した形を呈する。北側は楕円状に突出し、南側には刃所の、広い範囲での落ち込みがある。断面形は北側・西側では弧状を呈しゆるやかに立ち上がるが、南端では台形状を呈す。規模は長さ 7.2m、幅 3.2m、深さ 30cm を測る。主軸方向は N-88°-E を指す。覆土は 1層目に分層でき、1a-1d は

全体の上層を成す明青灰色粘土層である。2層以下は下層を形成する層であり、2-5・7-10・1層は灰色系粘土層、6・1層は灰色系粘土シルト層である。各層が各所で分断されているところがあることから、は数基の土坑や溝から形成される遺構である可能性が考えられる。出土遺物は土師器（86-96）である。小片を含め多量に出土しており、特に1・4・7層に集中していた。92は壺の口縁部-頸部で、破損せず口縁が上に向いた状態で出土した。94は裝飾壺もまた口縁部-頸部が破損せず出土し、その西側には裏・壺の胴部片が折り重なるように集中して出土している。89は小型の高杯で、赤彩が施されている。土師器以外では、4層と7層で炭化した棒状の木片や、樹木の根を縦に半載したものが覆土中に見られた。

SD266(図版19-21・54・55・85・86・123・124) 周溝の北西-南に位置する、平面形はSD259に同じく楕円形・不整形の土坑や溝が連続した形を呈し、北西側と中央部、南側に楕円もしくは不整形の広がりが見られる。また北西部ではSK264 南西部ではSK290・SK291に切られている。断面形はどの部分でも、基本的にはゆるやかに立ち上がる弧状を呈す。規模は長さ17m、幅3m、深さ24mを測る。覆土は20層に分層でき、各層が各所で分断されている所があることからSD266は数基の土坑や溝から形成される遺構である可能性も考えられる。1・2層は灰色粘質シルト層で、2層では炭化物が層全体に非常に多く含まれている。3層は青灰色粘土層である。この3層は、平面では北西側拡張部にあたる層である。4a-4c・4eは灰色系粘土層、4dは青灰色粘土シルト層である。5層は北側半分での下層にあたり、青灰色粘土層である。7・8層は灰色系粘質シルト層で、7層は周溝南西部全体に広がっていた可能性がある。9層は青灰色粘土層で、7・8層の下層にあたるが、5層と異なり、炭化物や砂礫の混入などが確認された。12層は灰色粘土層で、13-1層の上層にあたる。14層は灰色粘土層、13・15-1層は青灰色粘土層である。18・19層は灰色粘土層で、平面では中央拡張部にあたる層である。出土遺物は土師器（97-109）である。小片を含め多数の土師器が、周溝北西側・中央部・南側から集中して出土した。北西側から出土する土師器は2-8cm程度の小片が多く、そのほとんどが2層の炭化物層に集中しており、復元可能なものは出土しなかった。中央部からは97・105のほか、壺・甕と思われる破片の集中が3ヶ所で確認された。92は器台で、ほぼ完全な状態で出土した。103は鉢の底部で穿孔がある。遺物が一番集中していたのが南側で、12・14層を中心に器台・甕など多数の土師器が出土した。98・100は器台で、2点とも1層よりほぼ完形の状態で出土した。101は器台の脚部で、赤彩が施されている。

続いて周溝内区画部を構成する遺構について詳細を述べる。

周溝内区画部の施設

柱穴が1基確認されたが、このうち構造や軸方向から確実に2号円形周溝状遺構に伴うと考えられる遺構はP263とP293である。この他の柱穴については掘立柱建物の項で詳細を記述する。

P263・P293 周溝内のほぼ中央部に位置し、2基の間隔は36mを測る。2号円形周溝状遺構の東半分が調査区外にあるため断定はできないが、共に柱穴底面より根がらみと思われる木材が出土しており、1号円形周溝状遺構のP29・P48・P72・P73の例から見て、この2基の柱穴の東側には対になる柱穴が存在し、間隔の掘立柱建物であった可能性が考えられる。

P263(図版19-21・60・86・127) 平面形はほぼ円形であり、断面形は台形状を呈す。規模は径04m、深さ28mを測る。覆土は3層に分層でき、1層が青灰色粘質シルト層、2・3層が青灰色粘土層である。2層は腐植した木片を含む層で、根がらみはこの層より出土した。根がらみは腐植が進み、加工痕等は確認されなかったが、柱穴底部は東西方向に落ち込みがあり、これが根がらみとほぼ同じ軸方向であることから、本来はこの落ち込みと同程度の大きさであったと考えられる。

P293(図版 19- 21・ 60・ 86・ 127) 平面形は不整形円形であり、断面形は箱状を呈す。規模は径 0.35m、深さ 28cm を測る。覆土は 5 層に分層でき、2 本の根がらみが上下に重なる状態で、5 層の青灰色粘土層から出土した。これらの根がらみも腐植が進んでいたが、共に両端の状態から、柱穴内で折れたものが重なったとは考えにくく、始めからこのような状態で設置されたと思われる。

3) 土 坑

a 概 要

今回の調査で土坑と判断された遺構は 4 基ある。その分布としては、調査区の北東部全域から確認される。特に調査区北東隅の、河川跡に向かい張り出した部分から 彎円形周溝状遺構西側にかけて集中している。この位置の土坑は SK039・ 042・ 212 に見られるように、多量の土師器片が出土する事、遺構上層に砂礫を比較的多く含む層が堆積しているという特徴があり、調査区南側に分布する他の土坑とは性格を異にしている。平面形としては大部分が円形または楕円形であり、他に不整形形や長方形も見られる。断面形は箱状・台形状が多く、他に弧状や底面が緩やかな V 字状を呈するものも見られる。

b 各 説

SK004(図版 23・ 24・ 87) 29R 16・ 2グリッドに位置する。北側の大半を河川跡によって侵食されている。平面形は不明、断面形は弧状を呈する。規模は長軸 1.45m、短軸 0.95m、深さ 13cm を測り、ゆるやかに立ち上がる。覆土は 2 層に分層でき、1 層は灰黄色系粘質シルト、2 層は灰色系粘質シルトである。出土遺物は土師器である。甕を中心に多量の小破片が出土したが、類別可能な破片は硯、器台、高坏などを少量数えるのみであった。

SK009(図版 23・ 24・ 87) 30Q 14・ 15グリッドに位置する。平面形は楕円形、断面形は台形状を呈する。規模は長軸 1.7m 短軸 1m、深さ 14cm を測り、ゆるやかに立ち上がる。主軸方位は N - 75 - E を指す。覆土は 3 層に分層でき、1・ 2 層は炭化物を多く含む灰黄色系粘質シルト、3 層は灰色系粘質シルトである。出土遺物は土師器で、1・ 2 層を中心に硯、壺、器台などの破片を少量数えている。

SK011(図版 23・ 24・ 87) 30P 24・ 25グリッドに位置する。平面形は長方形、断面形は台形状を呈する。規模は長軸 (2.2m)、短軸 1.25m、深さ 16cm を測り、急斜度に立ち上がる。主軸方位は N - 20 - E を指す。覆土は 2 層に分層でき、1 層は灰黄色系粘質シルト、2 層は灰色系粘質シルトである。出土遺物は土師器で、壺などの破片を少量数えている。

SK035(図版 23・ 24・ 88) 30R 5グリッドに位置する。北側を確認トレンチによって壊されている。平面形は楕円形と考えられる。断面形は弧状を呈し、中央部が窪んでいる。規模は長軸 1m、短軸 0.7m、深さ 24cm を測り、ゆるやかに立ち上がる。主軸方位は N - 30 - W を指す。覆土は 3 層に分層でき、1- 3 層は黄灰色系粘質シルトである。出土遺物は土師器で、上層から硯と考えられる多量の破片を取り上げた。

SK039(図版 23・ 30・ 89) 30Q 13・ 14・ 18グリッドに位置する。平面形は長い楕円形、断面形は台形状を呈する。規模は長軸 2m、短軸 0.7m、深さ 26cm を測り、急斜度に立ち上がる。主軸方位は N - 2 - E を指す。覆土は 1- 4 層に分層でき、1 層は黄灰色系粘質シルト、2 層は灰色系粘質層、3 層は灰色系粘質シルト、4 層は灰黄色系粘質シルトである。出土遺物は土師器である。硯、壺、器台などの破片が、1 層から多量に出土した。2 層の砂礫からは土器の出土がほとんど無く、3 層からは少量の破片が出土した。SK041・ SD092 を切っている。

SK041(図版23・30・56・89・125) 30Q 12・13・17・18グリッドに位置する。西側を一部攪乱によって壊されている。平面形は長い楕円形、断面形は台形状を呈し、南側はゆるい階段状に一段浅くなっている。規模は長軸24m、短軸11m、深さ20mを測り、急斜度に立ち上がる。主軸方位はN-5-Wを指す。覆土は4層に分層でき、1-2層は黄灰色系粘質シルト、3層は灰色系の粗い砂質土、4層は灰色系粘質シルトである。底部が一段高い南側の4層上面からは炭化物の集中範囲が検出された。範囲は長径40cmの楕円形で、厚層1cmを測る。出土遺物は土師器である。一段低い南側の1-2層からは甕(123・124)が出土した。図示し得たもの以外では、甕、壺、鉢、高坏などの破片が、1-2層を中心に多量に出土している。また甕口縁部の破片には端部を丸く収めるものがあり、甕の半数を数えている。SK039に切られ、SK042を切っている。

SK042(図版22・23・30・89) 30Q 17グリッドに位置する。平面形は楕円形、断面形は弧状を呈する。規模は長軸(1m)短軸0.8m、深さ10mを測り、ゆるやかに立ち上がる。主軸方位はN-15-Wを指す。覆土は2層に分層でき、1-2層共に灰黄色系粘質シルトである。出土遺物は土師器で、少量の破片を取り上げた。SK041に切られている。

SK045(図版23・24) 29P 19・20グリッドに位置する。平面形は楕円形、断面形は弧状を呈する。規模は長軸17m、短軸14.5m、深さ20mを測り、ゆるやかに立ち上がる。主軸方位はN-70-Wを指す。覆土は2層に分層でき、1層は灰黄色系粘質シルト、2層は灰白色系粘質シルトである。出土遺物は土師器で、甕、器台などの破片を少量数えた。

SK057(図版23・25・90) 28P 13・18グリッドに位置する。平面形は角丸長方形、断面形は弧状を呈する。規模は長軸2.4m、短軸1.7m、深さ1.8mを測り、ゆるやかに立ち上がる。主軸方位はN-60-Eを指す。覆土は2層に分層でき、1層は灰色系粘質シルト、2層は黄灰色系粘質シルトである。出土遺物は土師器で、破片を少量取り上げた。

SK059(図版22-24・56・90・125) 27Q 20グリッドに位置する。平面形は円形、断面形はU字状を呈する。規模は長軸0.8m、短軸0.7m、深さ30mを測り、急斜度に立ち上がる。覆土は4層に分層でき、1層は灰オリーブ色粘質シルト、2-4層は灰色系粘質シルトである。鴛円形周溝状遺構のP029・P048・P072・P073と形状、規模等において共通点が多いが柱痕の検出は無かった。出土遺物は土師器(125)である。鉢の脚が甕から出土している。図示し得たもの以外では、甕、壺などの破片が少量出土している。

SK068(図版23・25・56・90・125) 30P 4・5グリッドに位置する。平面形は楕円形と考えられる。断面形は弧状を呈する。規模は長軸(17.5m)短軸1.7m、深さ1.2mを測り、ゆるやかに立ち上がる。主軸方位はN-20-Eを指す。覆土は3層に分層でき、1層は黄灰色系粘質シルト、2層は灰黄色系粘質シルト、3層は黄灰色系粘質シルトである。出土遺物は土師器で、甕(127)、壺(126)などを取り上げた。SIに切られている。

SK069(図版23・25・90) 30P 8グリッドに位置する。東側を攪乱によって壊されている。平面形は楕円形と考えられる。断面形は弧状を呈する。規模は長軸(11m)短軸1.35m、深さ1.6mを測り、ゆるやかに立ち上がる。主軸方位はN-45-Wを指す。覆土は2層に分層でき、1-2層は灰黄色系粘質シルトである。出土遺物は土師器で破片を少量数えた。

SK089(図版23・25・90) 30C 24・25グリッドに位置する。平面形は楕円形、断面形は弧状を呈する。規模は長軸2m、短軸1.05m、深さ10mを測り、ゆるやかに立ち上がる。主軸方位は真北を指す。覆土は2層に分層でき、1層は炭化物を多く含む黄灰色系粘質シルト、2層は灰オリーブ色粘質シルトである。出

土遺物は土師器で、破片を少量数えた。SIを切っている。

SK157(図版 22・25・91) 27R 13グリッドに位置する。掘建柱建物の柱穴検出作業のため、検出面を層近くまで下げた時点でプランが明確になり、掘削作業に入った。平面形は楕円形と考えられる。断面形は弧状を呈する。規模は長軸(0.7m)、短軸0.6m、深さ14cmを測り、ゆるやかに立ち上がる。主軸方位はN-42-Eを指す。覆土は2層に分層でき、1層とも灰色系粘質シルトである。出土遺物は土師器で、破片を極少量取上げた。

SK203(図版 23・25・91) 32M 17グリッドに位置する。平面形は南東側に攪乱を受けているため半円形を呈している。断面形は弧状を呈す。規模は長軸1.2m、短軸0.6m、深さ10cmを測る。主軸方位はN-35-Eを指す。覆土は2層に分層でき、1層は褐灰色粘質シルト層で層全体に炭化物の混入が確認できた。2層は黄灰色粘質シルト層で、若干の砂礫が含まれている。出土遺物は土師器小片を1層から取り上げた。

SK212(図版 23・26・56・91・92・125) 31P 22・31Q グリッドに位置し、SK246-249を切った状態で検出された。平面形は円形、断面形は台形状を呈す。規模は長軸1.2m、短軸1.1m、深さ24cmを測る。主軸方位はN-65-Eを指す。覆土は3層に分層でき、1層は褐灰色粘質シルト層、2層は黄灰色粘質シルト層である。3層は褐灰色粘土層で、層全体に炭化物の混入が見られ、層下方では炭化物が帯状に堆積している。出土遺物は土師器(128)である。遺構内全体、1層から壺・甕・器台を中心に破片を取上げたが特に3層の東側に大型の破片が集中し、128の装飾器台のほか、赤彩が施された器台や壺の破片等が、3層に堆積している炭化物の上方を覆うように出土した。切り合い関係よりSK246-249よりも新しい遺構である。

SK213(図版 23・26・92) 31Q 11・12グリッドに位置する。平面形は不整形を呈し、北端をP224に切られている。また中央部に円形の落ち込みが確認できた。断面形は弧状であるが、中央部はややV字状を呈している。規模は長軸1.7m、短軸1.2m、深さ18cmを測る。主軸方位はN-3-Wを指す。覆土は4層に分層でき、1層が3層を切る形で堆積している。1層は褐灰色粘質シルト層、2層は暗灰色粘質シルト層、3層は灰色粘質シルト層である。出土遺物は土師器ある。遺構中央にある落ち込み部分の、特に1層に集中して破片が出土したが小片が多い。

SK215(図版 23・26・92) 31Q 27グリッドに位置する。平面形は楕円形で、SK246の北西を切っている。断面は弧状を呈す。規模は長軸0.9m、短軸0.4m、深さ14cmを測る。主軸方位はN-15-Wを指す。覆土は単層の黄灰色粘質シルト層で、層全体に粒子の細かい砂礫と0.2-1cmの炭化物を少量含む。出土遺物は土師器を少量数えたが、どれも小片のため遺構の時期は判別できない。

SK218(図版 23・31) 31Q 22・23グリッドに位置する。平面形は不整形を呈し、東側を調査トレンチに切れ、SK238の北端を切っている。検出時にはSD234・238と同一の遺構であるとされていたが、断面観察により基の遺構に分かれる事が判明した。断面形は台形状を呈す。規模は長軸1.2m、短軸0.9m、深さ26cmを測る。主軸方位はN-35-Wを指す。覆土は3層に分層でき、1層は灰白色粘質シルト層で、2層との境に炭化物の集中が確認された。2層は褐灰色粘質シルト層で、特に層の南側に炭化物を多量に含んでいる。3層は灰白色粘土層である。出土遺物は少量の土師器を、主に1層から取り上げた。

SK219(図版 23・27・92) 31Q 27グリッドに位置する。平面形は楕円形でSK226の北側を切り、断面形は箱状を呈する。規模は長軸0.9m、短軸0.9m、深さ15cmを測る。主軸方位はN-10-Wを指す。覆土は3層に分層でき、1層は褐灰色粘質シルト、2層は黄灰色粘質シルト、3層は灰褐色粘質シルトである。どの層からも炭化物が確認されたが、3層での量は他の層に比べ若干多く、また遺物も3層から出土してい

る。出土遺物は土師器を少量取り上げたが小片が多く、そのため遺構の時期は不明である。

SK220(図版23・29・92) 31P 12・13グリッドに位置する。東側を鴨杭列に、西端をSK23Dに切られ、北側ではSD235を切っている。平面形は楕円形、断面形は台形を呈す。規模は長軸19m、短軸12m、深さ16mを測る。主軸方位は真北を指す。覆土は5層に分層でき、1層は灰黄色粘質シルト、2層は黄灰色粘質シルト、3層は灰色粘質シルトである。4層には粒子の細かい砂礫が多量に混入している。5層はSK220の東側を走っていた農業用水路により攪乱を受けている。出土遺物は土師器で、主に2層より取り上げるが小片が多い。

SK225(図版23・31・56・125) 31Q 17グリッドに位置する。西側をSD222に切られている。平面形は不整形、断面形は箱状を呈す。規模は長軸09m、短軸09m、深さ18mを測る。主軸方位はN-15-Eを指す。覆土は単層の灰色粘質シルト層である。出土遺物は土師器である。鉢点(129) 壺1点(130)などが出土している。

SK226(図版23・27・92) 31Q 6・7グリッドに位置する。北側をSK219に切られているが、平面形は楕円形であったと思われる。断面形は弧状を呈す。規模は長軸11m、短軸08m、深さ15mを測る。主軸方位はN-21-Wを指す。覆土は2層に分層でき、共に灰黄褐色粘質シルト層である。出土遺物は土師器で小片を少量数えた。

SK230(図版23・29・92) 31P 7・12グリッドに位置する。西側でSK220を切っている。平面形は楕円形、断面形はゆるやかなV字状を呈す。規模は長軸08m、短軸06m、深さ20mを測る。主軸方位は真北を指す。覆土は3層に分層でき、1層は褐灰色粘質シルト層、2層が黄灰色粘質シルト層、3層が灰色粘質シルト層である。どの層からも砂礫の混入が認められたが、特に2層で多量に混入している。出土遺物は土師器で小片を少量数えた。

SK232(図版23・27・56・92・125) 31P 14グリッドに位置する。東側を鴨杭列に切られている。断面形は弧状を呈す。規模は長軸14m、短軸05m、深さ18mを測る。主軸方位はN-12-Eを指す。覆土は3層に分層でき、1層が褐灰色シルト層、2層が褐灰色粘質シルト層、3層が灰色粘質シルト層である。出土遺物は土師器である。2層からは13の壺口縁部一頸部が、鴨杭列に壊された状態で出土した。この他にも土師器片が、主に2層より出土している。

SK233(図版23・27・92) 31P 14グリッドに位置する。西側を鴨杭列に切られている。断面形は箱状を呈す。規模は長軸14m、短軸06m、深さ20mを測る。主軸方位はN-12-Eを指す。覆土は5層に分層でき、1・3・4層が灰白色粘質シルト層、2層が灰白色粘土層、5層が灰色粘土層である。3層は炭化物を非常に多く含んでいる。出土遺物は土師器が確認できるが、SK232に比べ破片ばかりで量が少ない。SK232との間を鴨杭列が切っているため新旧関係は不明であるが、土層観察より1・2層がSK232の2・3層に該当するとも考えられることから、SK232とSK233は、同一の遺構である可能性がある。

SK238(図版23・31) 31Q 22グリッドに位置する。北端をSK218に、東端を調査トレンチに切られ、西端でSD236を切る。平面形は楕円形、断面形は弧状を呈す。規模は長軸11m、短軸07m、深さ16mを測る。主軸方位はN-35-Wを指す。覆土は3層に分層でき、1層は黄灰色粘質シルト層、2層は灰色粘質シルト層、3層は灰黄色粘質シルト層である。出土遺物は土師器である。遺構の北側、2層に比較的集中して出土した。

SK239(図版23・31) 31Q 12・17グリッドに位置する。東側をSD222に大きく切られている。平面形は三角形、断面形は弧状を呈す。規模は長軸09m、短軸04m、深さ15mを測る。主軸方位はN-50-W

を指す。覆土は単層の灰色粘土層である。出土遺物には土師器で小片を少量取り上げた。

SK242(図版 23・27・92) 32Q 16・17・21・22グリッドに位置する。北側は河川による侵食を受け、北東側を調査トレンチに切られている。平面形は不整形、断面形は台形状を呈す。規模は長軸 1m、短軸 0.7m、深さ 15cmを測る。主軸方位は N - 80 - Wを指す。覆土は 3層に分層でき、1層は黄灰色粘土層、2層は灰白色粘質シルト層、3層は灰白色粘質シルト層である。どの層も酸化が激しく、低湿地でよく見られる赤褐色の粒子を非常に多量に含んでいた。出土遺物は土師器である。壺の底部一胴部にかけての大型の破片が、2層よりまとまって出土している。この他にも 2層を中心に、土師器片が多く出土した。出土状況としては河川跡へ向かって土師器片の散布が見られ、SK242はその範囲が本来北側へ延びていた可能性がある。

SK243(図版 23・27・93) 31Q 19・24グリッドに位置する。平面形は楕円形、断面形は緩やかなV字状を呈す。規模は長軸 0.9m、短軸 0.6m、深さ 40cmを測る。主軸方位は N - 45 - Eを指す。覆土は 4層に分層でき、1・2層は灰黄色系粘質シルト層、3・5層は灰色系粘土層、6層は灰色シルト層である。4層の上方では炭化物が帯状に堆積している。出土遺物は 4層と 5層に見られるが、どれも土師器の小片である。

SK246(図版 22・23・26・57・92・93・125) 31P 22 31Q 1・2グリッドに位置する。北西側をSK212に、南西をSK219に切れ、東側でSK247を切る。平面形は楕円形、断面形は弧状を呈す。規模は長軸 1.5m、短軸 1m、深さ 20cmを測る。主軸方位は N - 20 - Wを指す。覆土は 2層に分層でき、1層は黄灰色粘質シルト層、2層は褐色粘土層である。2層の下方には多量の炭化物が集中している。出土遺物は土師器である。壺 1点(132) が出土している。多くが 2層の炭化物と共に出土している。

SK247(図版 23・26・92) 31Q 2グリッドに位置する。西側をSK212・SK246・SK248に切られている。平面形は断定できないが、楕円形であった可能性が高い。断面形は箱状を呈す。規模は長軸 0.9m、短軸 0.5m、深さ 4cmを測る。主軸方位は N - 20 - Eを指す。覆土は単層の黄灰色粘質シルト層である。遺物の出土はなかった。

SK248(図版 23・26・92) 31Q 2グリッドに位置する。南西側をSK212に切れ、北側でSK249を、南側でSK247を切る。平面形は楕円形であった可能性があり、断面形は台形状を呈す。規模は長軸 0.6m、短軸 0.3m、深さ 12cmを測る。主軸方位は N - 25 - Wを指す。覆土は 2層に分層でき、1層は褐色粘土層、2層は褐色粘質シルト層である。出土遺物は土師器で、1層より少量取り上げた。

SK249(図版 23・26・92・93) 31P 22・31Q 2グリッドに位置する。北側をSK250に、南側をSK212・SK248に切られている。平面形は楕円形であった可能性がある。断面形は弧状を呈す。規模は長軸 0.8m、短軸 0.7m、深さ 16cmを測る。主軸方位は真北を指す。覆土は 3層に分層でき、1・2層は黄灰色系シルト層、3層は灰色粘土層である。出土遺物は土師器で、小片を 1・2層より取り上げた。

SK250(図版 23・26・57・92・93・125) 31Q 3グリッドに位置する。北側でSK249を切っている。平面形は楕円形、断面形は弧状を呈す。規模は長軸 1.2m、短軸 0.7m、深さ 16cmを測る。主軸方位は N - 60 - Eを指す。覆土は 4層に分層でき、1層は褐色粘土層、2層は黄灰色粘質シルト層、3層は灰黄色粘質シルト層、4層は黄灰色シルト層である。2層南側の、SK249との境にあたる部分では、径 10cm程度の黄白色粘土塊が出土した。出土遺物は土師器である。13の器台の他、破片が遺構全体から出土した。

SK256(図版 22・27) 26S 3・8・9グリッドに位置する。平面形は長方形、断面は箱状であるが、北側では弧状を呈している。規模は長軸 1.8m、短軸 0.8m、深さ 15cmを測る。主軸方位は N - 84 - Wを指す。覆土は 3層に分層でき、1層は青灰色粘土層、2層は灰白色粘土層、3層は青灰色粘土層で、4層と 5層が

2層を切る形で堆積しており、これらはそれぞれが別の遺構であることも考えられる。出土遺物は土師器で、少量の破片を遺構全体から取り上げた。

SK279(図版22・27・93) 2SR 3・8グリッドに位置する。平面形は円形、断面形は台形を呈す。規模は長軸0.8m、短軸0.7m、深さ20cmを測る。主軸方位はN-30°-Eを指す。覆土は4層に分層でき、1層は灰白色粘質シルト、2層は褐灰色粘質シルト、3・4層はにぶい黄橙色粘質シルトである。4層は3層の土が僅かながら混入するものも、層全体が粒子の粗い砂礫層であった。出土遺物は土師器で、1~3層で小片を取り上げた。

SK353(図版23・28・93) 28N 23グリッドに位置する。平面形態は楕円形で、断面形態は弧状を呈する。長軸1.5m、短軸0.9m、深さ6~12mを測る。主軸方位は真北である。覆土は1層相当層を主体として、灰色砂質シルトの粒状または塊状を多量に含む土である。2層は炭化物をやや多く含み、3層は少量含む。一見すると、掘立柱建物の柱穴の覆土と同じである。遺物は皆無で、機能などは不明である。これと類似するものとして、SK360・SK363をあげることができる。しかし、掘立柱建物の柱穴と類似することから、SB2・3と何らかの関係のある遺構である可能性を指摘できる。

SK360(図版23・28・93) 27O 10グリッドに位置する。平面形態は楕円形で、断面形態は弧状を呈する。長軸0.85m、短軸0.5m、深さ12mを測る。主軸方位はN-32°-Eである。覆土は1層相当層を主体として、灰色砂質シルトの粒状または塊状を多量に含む土である。検出の際には確認できなかったが、掘り下げていく過程で北側においてピットを検出した。平面形態は円形を呈しており、径30cm、深さは40cmを測る。覆土は同様である。土坑の中にピット状のものがみられるといった構造は、SB2・3の柱穴と同様であり、このことはSK360自体が柱穴である可能性がある。出土遺物は皆無である。この遺構はSK363を切っている。

SK361(図版23・28・78) 28N 21・22 28O 1・2グリッドに位置する。平面形態は楕円形で、断面形態は弧状を呈する。長軸2.5m、短軸1.45m、深さ10cmを測る。主軸方位はN-35°-Wである。覆土は1層相当層を主体として、やや多目の炭化物を含む土である。出土遺物は数点あるが、すべて器種不明の破片である。この遺構はSIを切っている。

SK362(図版23・28・74) 30O 18・19・23・24グリッドに位置する。平面形態は楕円形で、断面形態は弧状を呈する。長軸3.25m、短軸1.65m、深さ10~12mを測る。主軸方位はN-50°-Eである。覆土は1層相当層を主体として、やや多目の炭化物を含み、SK361と類似する。この遺構はSIを切り、SI2により切られる。

SK363(図版22・23・28・93) 27O 5・10グリッドに位置する。平面形態は楕円形で、断面形態は弧状を呈す。主軸方位はN-50°-Wで、長軸1.35m、短軸0.9m、深さ14cmを測る。覆土は1層相当層を主体として、灰色砂質シルトの粒状または塊状を多量に含む土である。この遺構もSK360と同様で、検出の際には確認できなかったが、掘り下げていく過程においてやや北側からピットを検出した。ピットの平面形態は円形を呈しており、径30cm、深さ20cmを測る。SK363はSK360と同様に柱穴である可能性がある。この遺構はSK360により切られる。

SK404(図版22・23・30・93) 28R 11・16グリッドに位置する。平面形は楕円形である。断面形は弧状で、立ち上がりは緩やかである。規模は長軸1.25m、幅0.6m、深さ10cmを測る。方向はN-85°-Wである。覆土は2層に分層でき、1層は褐灰色粘質シルトで炭化物を少量含む。2層は緑灰色粘質シルトである。出土遺物は土師器の破片を1層から少量取り上げた。本遺構は、上部が削平を受けており、SB4在中

心とした円形周溝状遺構の周溝部を構成する可能性を残している。

SK409(図版22・29・94) 27R 24 27S 4グリッドに位置する。平面形は楕円形である。断面形は半円状で、立ち上がりは急斜度である。規模は長軸175m、短軸128m、深さ28cmを測る。方向はN-40°-Wである。覆土は2層に分層でき、1層は褐灰色粘質シルトで炭化物を少量含む。2層は褐灰色粘質シルトである。部分的に黄褐色粘土ブロックを多く含む。出土遺物は土師器の碎片を1層から少量取り上げた。本遺構は、上部に削平を受けており、SB4を中心とした円形周溝状遺構の周溝を構成する可能性を残している。

SK410(図版22・29・94) 27R 23・27S 4グリッドに位置する。平面形は円形である。断面形は弧状で、立ち上がりは緩やかである。南側はSK414と接する。規模は長軸1m、短軸0.85m、深さ24cmを測る。方向はN-70°-Wである。覆土は2層に分層でき、1層は黒褐色粘質シルトで、基本土層の1層と思われる土が踏み込まれていた。2層は褐灰色粘質シルトで、炭化物を多く含む。出土遺物は1層から赤系の土師器の細片を多く取り上げたが、器種は不明である。2層からは土師器の碎片を少量取り上げた。SK414との切り合い関係はなく、同時期の遺構と思われる。

SK411(図版22・30・94) 27S 12・13グリッドに位置する。平面形は円形である。断面形は弧状で、立ち上がりは緩やかである。規模は長軸1m、短軸0.9m、深さ12cmを測る。方向はN-20°-Wである。覆土は2層に分層でき、1層は褐灰色粘質シルトで炭化物を多く含む。2層は褐灰色粘質シルトで、部分的に黄褐色粘土ブロックを多く含む。出土遺物は1層から土師器の碎片を少量取り上げた。2層から土師器の破片を少量取り上げた。

SK412(図版22・29・95) 27S 9グリッドに位置する。平面形は楕円形である。断面形は弧状で、立ち上がりは緩やかである。規模は長軸1.7m、短軸1.25m、深さ12cmを測る。方向はN-35°-Wである。覆土は2層に分層でき、1層は褐灰色粘質シルトで炭化物を少量含む。2層は褐灰色粘質シルトで、炭化物を極微量含む、部分的に黄褐色粘土ブロックを少量含む。出土遺物は1層から土師器の小片を取り上げた。本遺構は、上部に削平を受けており、SB4を中心とした円形周溝状遺構の周溝を構成する可能性を残している。

SK414(図版22・29・94) 27R 23 27S 3グリッドに位置する。平面形は不整形である。断面形は半円状で、立ち上がりは緩やかである。北側にSK410と接する。規模は長軸155m、短軸125m、深さ30cmを測る。方向はN-25°-Wである。覆土は3層に分層でき、1層は黒褐色粘質シルトで、基本土層の1層と思われる土が踏み込まれていた。2層は褐灰色粘質シルトで、炭化物を多く含む。3層は褐灰色粘質シルトで、部分的に黄褐色粘土ブロックを多く含む。出土遺物は土師器の小片が中心で1層から取り上げた。SK410との切り合い関係はなく、同時期の遺構と思われる。本遺構は、上部に削平を受けており、SB4を中心とした円形周溝状遺構の周溝部となる可能性を残している。

4) ビット、溝、その他の遺構

a 概 要

ここでは、単独のビットや、溝、性格不明の遺構について記述する。ビットは、単独の遺構個別図に掲載したものはない。又、ビットの検出にあたっては、覆土の色が1層と酷似していたため、検出には非常に困難を極めた。このため、1層を精査後に、1層を完全に除去し、2層で、再度ビットの検出作業を行った。この結果、かなりのビットが検出され、掘立柱建物の柱穴として組み合わせた。溝の多くは、

組み合わせて円形周溝状遺構として報告したが、SD070・092・150・201・204・222・234・235・407・411については単独の遺構として報告した。

性格不明な遺構のうち、SX26については、2号円形周溝状遺構との関連も考えられる。SX50については竪穴建物の可能性もある。SX401・402・403については、北側に河川跡があり、1号円形周溝状遺構、2号円形周溝状遺構の中間に位置しているため、SB4との組み合わせで円形周溝状遺構と考えられる可能性もある。また、遺物の出土状況や土層の堆積状況については、2号円形周溝状遺構の周囲を巡る溝と酷似している。地床炉については単独で検出され、上部が削平を受けていたため、周辺の遺構との関連は不明である。

b 各 説

溝

SD070(図版 23・31・57・95・125) 28P 11・12・16・17グリッドに位置する。平面形は長い楕円形、断面形はU字状を呈する。中央南寄りには深くなっていて南北両端に向けてゆるやかに浅くなっている。規模は全長4.5m、幅1m、深さ4.8mを測り、急斜度に立ち上がる。主軸方位は真北を指す。覆土は7層に分層でき、1・4層は炭化物を含む灰オリーブ色系粘質シルト、2層は炭化物の少ない灰オリーブ色系粘質シルト、3・5層は灰白色系粘質シルト、6・7層は灰オリーブ色系粘質シルトである。出土遺物は土師器で、上層から多くの破片を取り上げた。また2層からは台付鉢(134)が出土した。

SD092(図版 23・30) 30Q 19グリッドに位置する。断面形はU字状を呈する。規模は全長1.95m、幅0.48m、深さ3.0mを測り、急斜度に立ち上がる。主軸方位はN-73-Wを指す。覆土は3層に分層でき、1・3層は灰黄色系粘質シルトである。出土遺物はほとんどみられなかった。西側先端をSK039に切られている。

SD150(図版 22・32・95) 27R 16・27グリッドに位置する。西側は攪乱によって壊されており不明である。断面形は弧状を呈する。規模は全長2.2m、幅0.8m、深さ2.0mを測り、ゆるやかに立ち上がる。主軸方位はN-70-Eを指す。覆土は2層に分層でき、1層は灰黄色系粘質シルト、2層は灰黄色系粘質シルトである。出土遺物は土師器で、破片を極少量数えた。

SD201(図版 23・32・95) 32M 7・8・13・14グリッドに位置する。断面形は弧状を呈す。規模は全長3.8m、幅0.7m、深さ1.0mを測る。主軸方位はN-68-Eを指す。覆土は2層に分層でき、1層は微量の炭化物を含む黄灰色粘質シルト層、2層は灰色粘質シルト層である。出土遺物は土師器片である。1・2層の南西側にやや集中して出土した。

SD204(図版 23・32・95) 32M 12・13・18・19グリッドに位置する。南西側に攪乱を受けている。断面形は弧状を呈す。規模は全長3.5m、幅0.6m、深さ1.0mを測る。主軸方位はN-40-Eを指す。覆土は3層に分層でき、1・2層は褐灰色シルト層、3層は灰色粘質シルトである。出土遺物は土師器で、少量を取り上げた。

SD222(図版 23・31・57・125) 31Q 12・13・17・18グリッドに位置する。断面は台形を呈す。規模は全長1.8m、幅0.7m、深さ2.2mを測る。主軸方位はN-50-Wを指す。覆土は3層に分層され、1層は黄灰色粘質シルト、2・3層は灰色粘質シルトで、炭化物の混入が認められる。南西でSK239、南東でSK225を切る。出土遺物は2・3層から土師器を取り上げた。遺構の中央部からは高坏(135)の脚部が出土した。

SD234(図版 23・31・95) 31Q 22・23グリッドに位置する。断面は台形を呈す。規模は全長2.4m、幅0.7m、深さ1.4mを測る。主軸方位はN-27-Eを指す。覆土は3層に分層でき、1・3層は灰色系粘質

シルト層である。遺構の南端を SK 238 に切られている。出土遺物は土師器で、遺構の南側、SK 238 近くにやや集中する。

SD235(図版 23・29・92) 31P 13グリッドに位置する。断面は弧状を呈す。規模は全長 18m、幅 0.4m、深さ 18m を測る。主軸方位は N - 45° - E を指す。覆土は 2層に分層でき、1層は灰白色粘質シルト層、2層は灰色粘土層である。北東側を 1号杭列に、南西側を SK 220 に切られる。出土遺物は土師器の小片を少量数えた。

SD407(図版 22・32・96) 27R 20・24・25 28R 16グリッドに位置する。断面形は U 字状で、立ち上がりは急斜度である。規模は全長 5.45m、幅 0.4m、深さ 24m を測る。方向は N - 3° - E である。覆土は 2層に分層でき、1層は褐灰色粘質シルトで部分的に炭化物が多く含まれていた。2層は褐灰色粘質シルトで黄褐色の粘土ブロックを多く含んでいた。セクション A - A 付近には炭化物の集中部分が見られた。出土遺物は土師器の小片を 1層から少量取り上げた。P162・163 に切られている。

SD413(図版 23・32・96) 28S 6・7・8グリッドに位置する。断面形は U 字状で、立ち上がりは急斜度である。北側を攪乱によって切られている。規模は残存長 3.3m、幅 0.58m、深さ 1.7m を測る。方向は N - 3° - W である。覆土は 2層に分層でき、1層は褐灰色粘質シルトで炭化物を多く含み、黄褐色の粘土ブロックを少量含んでいた。2層は褐灰色粘質シルトで黄褐色の粘土ブロックを少量含んでいた。セクション A - A 付近には炭化物の集中部分が見られた。出土遺物は赤彩された高坏の脚部の小片を 1層から取り上げたが、その他はいずれも小片である。

性格不明遺構

SX261(図版 33・57・98・125) 26R グリッドに位置する。北西側を調査トレンチに切られている。平面は不整形、断面は弧状を呈す。規模は長軸 4.9m、短軸 3.3m、深さ 14cm を測る。主軸方向は N - 28° - W を指す。覆土は 2層に分層でき、1層は灰黄色粘質シルト層、2層は灰色粘質シルト層である。遺構内にはピットと思われる円形の落ち込みが 4ヶ所確認されている。また北西部と中央部に炭化物の集中部分があり、特に北西側からは 5~10mm の厚さで、広範囲に渡って確認されている。出土遺物としては硯 2 点(136・137)を掲載した。

SX301(図版 23・33・77・97) 29N グリッドに位置する。平面形は隅丸方形で、断面形は弧状を呈する。長軸 405m、短軸 395m、深さ 18~23m を測る。主軸方位は N - 28° - W である。断面の観察により 3 つの層に分けることができる。1層目は炭化物と遺物を多量に含んでおり、上層の 2層と類似する。包含層掘削の時点では、炭化物と遺物の集中範囲として捉えていたが、掘り下げていくと、平面形態が明確となったので、これを遺構であると判断した。1層目は遺物包含層で、これを掘り下げていき、2層目上面では少量の遺物と炭化物集中部のみが見られた。炭化物集中部は北東角において検出した。炭化物といっしょに焼土塊もみられたが、点のみであるので、これを炉跡とする根拠としては弱い。そして、炭化物を除去すると、溝状のものを検出した。平面形態は L 字形・断面形態は U 字形を呈し、長さ 0.8m、幅 0.2m、深さは 2 層目上面より約 10cm を測る。これが炭化物・焼土と関連したものが、また、この機能などは不明である。2層目上面を床面と断定できる根拠が弱いことから、ここでは性格不明遺構とし、竪穴建物に準じる遺構とした。2層目と 3層目の覆土は 1層目相当層を主体とした土で、炭化物を少量含む。遺物は多量に出土しているが、器種を判別できるものはほとんどない。この遺構は東側において SJ4 により切られている。

SX401(図版 23・33・97) 28R グリッドに位置する。平面形は楕円形である。南側は SX 402 に接している。断面形は弧状で、立ち上がりは緩やかである。規模は長軸 2.9m、短軸 1.7m、深さ 20 cm を測る。方

向はN-3-Eである。覆土は 層に分層でき、1-4層は褐灰色粘質シルトで部分的に炭化物の集中が見られた。5層は黄色粘質シルトで、部分的にブロック状に粘土粒が混入する。出土遺物は1・2層から土師器の薄片を多量に取り上げた。器種を推定できるものは、赤彩された高坏の脚部の薄片のみである。

SX402(図版22・23・33・57・97・125) 28Rグリッドに位置する。平面形は不整形である。北側はSX40に接し、南東はSX403に接している。断面形は弧状で、立ち上がりは緩やかである。規模は長軸36m、短軸114m、深さ20cmを測る。方向はN-35-Wである。覆土は 層に分層でき、1-4層は褐灰色粘質シルトで部分的に炭化物の集中が見られた。5層は黄色粘質シルトで、部分的にブロック状に粘土粒が混入する。出土遺物は1・2層で土師器の薄片を多量に取り上げた。掲載遺物は、器台(138)、甕(139)である。

SX403(図版22・23・33・97) 28Rグリッドに位置する。平面形は楕円形である。北東側はSX402に接している。断面形は弧状で、立ち上がりは緩やかである。規模は長軸16m、短軸1m、深さ10cmを測る。方向はN-25-Wである。覆土は 層に分層でき、1・2層は褐灰色粘質シルトで部分的に炭化物の集中が見られた。出土遺物は土師器の破片を、甕から取り上げた。

SX505(図版22・23・33・98) 24Sグリッドに位置する。長軸39m、短軸23m、深さ20cmを測る。平面形は、南北方向に長い長楕円形で、長軸の方位は、N-35-Eを測る。遺構面の激しい削平と牛などに踏み込まれた痕跡が、多数観察された。覆土は 層で、主な土層は灰黄色系で、少量の炭化物を含む。底面はほぼ平坦で、断面は浅い弧状を呈す。付属施設として、円形もしくは楕円形のピット6基が検出された。規模、平面形、底面の状態、付属施設から当初は、竪穴建物と考えたが、床面が、明瞭でなく、床面と思われる 層と 層の層境での土師器片の出土量も少ないため、性格不明遺構とした。ただし、全体図での他遺構との配置関係から竪穴建物の可能性も考えられる。出土遺物は土師器の小破片のみである。

炉

地床炉(図版23・33・98) 32Mグリッドに位置する。長軸60m、短軸30mの不正形を呈する土とまざりあった焼土と灰と炭化物の広がり(層相当)の中に、長軸15m、短軸10mの焼土の集中範囲(層相当)が b層上面にて検出された。周囲に遺構の覆土は、見当たらず単独の炉として、地床炉とした。土層は、 層が淡赤褐色で 層は少量の灰と炭化物を含む灰赤褐色である 層は掘り方で灰黄色シルトである。掘り方の規模は、長軸45m、短軸30mの隅丸方形で深さ5mを測る。遺物は出土していない。

5) 掘立柱建物

a 概 要

掘立柱建物は、1棟検出されている。半数以上は、柱穴掘り方の平面プランの判別が困難で、なかには、層上面まで、削平してようやく検出されたものもあった。柱材の見えるものを除くと、わずかな炭化物の分布が確認する際よりどころであった。これらの掘立柱建物を建物構造や柱間から分類すると、 2間の総柱の掘立柱建物は、SB1・13の 2棟でほぼ正方形に近い東西棟・南北棟である。これらは、東柱を持つ高床式の倉庫と考えられる。SB13は、掘り方が検出されておらず、打ち込みの掘立柱建物である。その他の掘立柱建物は、すべて側柱の掘立柱建物である。本遺跡で最大規模の東西棟である 2間(4m・8m)のSB 2と 2間(5.3・6.8m)のSB3は、同一の場所の建て替え棟と判断した。SB 2は、SB3を南北方向に1.2m縮小し、東西方向に2.1m(1間分)拡大したものである。柱間が 2間 1間の掘立柱建物は、SB4・5・7・8・9・12の 6棟で、すべて側柱である。SB4・5・8は、南北棟で、SB6は、やや

小ぶりの東西棟である。その中でも SB7・12は、棟持ち柱の柱穴を有する亀甲型の建物で桁方向の軸をほぼ南北に持つ南北棟である。SB7は、SB5・6とほぼ同一の軸方向を有し、SB12は、桁列の入口の正面にあり、北東へ張り出した入口の柱と梁行方向の軸が、ほぼ同一である。SB7をはじめとするこれらの掘立柱建物間の関係、SB12と桁列の関係、その他、位置関係から類推される個々の掘立柱建物の時期などについては、考察で述べる。SB4については、周囲のSXとの関係を助案するためSXの各事実記載などで触れている。間 間の掘立柱建物は、SB10・11の2棟である。これらは、2円形周溝状遺構の内側から検出されたものである。この2棟については考察でふれる。SB 9は、西側のすべての柱穴を試掘杭などでこわされているが、東西は 間、南北は 間以上の南北棟と思われる。なお、SB1を除くすべての掘立柱建物は、いずれも掘り方を持ち、柱材の遺存状況はかなり良好なものもあった。

b 各 説

SB1(図版 35・36・99) 290グリッドに位置する。2間 2間の総柱建物である。規模は桁行2間(5m) 梁行2間(4m) 面積20㎡で、東西方向を軸にした長方形の建物となる。主軸方位はN-75°-Wである。柱間寸法は1.8-2.5mを測る。柱穴の平面形態は円形あるいは楕円形を呈する。規模は直径28-45cm、深さ40cm程度で、断面図は漏斗状を呈する。覆土は b相当層を主体とし、灰色砂質シルトの粒または塊を含む土である。柱痕に相当する部分には褐色土がみられ、下方では腐植土を確認できる。これは柱材が腐植して形成された腐植土で、柱の直径は10-15cm程度であると推測できる。また、この部分は灰色砂質シルトを含まない。このことから、灰色砂質シルトを含む土は柱を支える掘方の埋土として使用されていることがわかる。P 303とP 306の柱痕は褐色の腐植土であるが、柱痕周辺の土は粘性が強く、それらを除去すると複数柱痕が遺存しているようにみえた。一見すると同一の掘方に柱のみを立て直した感を受けるが、柱を抜く際にできた痕跡の可能性もある。基の柱穴からは褐色または腐植土の柱痕を確認できるが、柱材は確認できなかった。出土遺物はなく、S15と重複関係があり、S15よりも新しい。

SB2・3(図版 35・37・61・101・102・127) 28・29N・Oグリッドに位置する。ここでは2棟の建物を確認している。SB3は桁行2間(6.8m) 梁行2間(5.3m) 面積36.0㎡の側柱構造の掘立柱建物である。ただし、南東角の柱穴は現代の水田暗渠によって消失している。東西方向を主軸とし、主軸方位はN-63°-Wである。柱間寸法は2-2.6mを測る。SB2は桁行4間(8.8m) 梁行2間(4m) 面積35.2㎡の側柱構造の掘立柱建物である。東西方向を主軸とし、主軸方位はN-65°-Wである。柱間寸法は2-2.5mを測る。この建物はSB3からSB2へ建てかえる際に、梁行を縮小し、桁行を西へ間拡張していることが柱穴の切り合い関係から確認することができる。柱穴の規模は北側列長軸0.9-1.3m、短軸0.3m、南側列は長軸0.9m、短軸0.3mでいずれも南北に長い楕円形を呈する。これらの柱穴は断面から基の柱穴が切り合っていることが確認でき、内側の柱穴が外側の柱穴を切っていることが確認できる。また、内側の柱穴において全て柱材を検出していることは、外側の柱穴より内側の柱穴が新しいことを示している根拠のひとつとなる。SB3の柱穴は外側であり、径32-68cmの楕円形を呈する。深さは20-30cmの掘方で、柱材は確認できない。しかし、掘方の底面には柱当りを確認できる。SB2の柱穴は内側であり、径40-80cmの楕円形を呈する。深さは40-70cmを測る。柱材は内側に検出している。掘方は柱材へ向かって深く掘られており、スロープ状または階段状を呈する。これについてはいくつかの考え方があがるが、ここでは次のようなひとつの可能性をあげておく。掘方がスロープ状・階段状を呈していることについて、柱材を立てる際の機能的構造であると考えられる。柱材を寝かせる。ロープで引っ張りあげて、柱材を立てる。

という方法を想定できる。柱穴の覆土はSB2・SB3ともほとんど同様であり、⁶相当層に灰色砂質シルトの塊または粒を含む。覆土はSB1と同様である。出土遺物はP35とP32において出土しているが、破片であるために時期は不明である。

SB4(図版35・36・61・97・103・127) 28R・Sグリッドに位置する。桁行2間(35m) 梁行間(36m)の側柱構造の掘立柱建物である。主軸方位はN-7-Eを指し、面積は126㎡である。柱間寸法は、東側桁行北から18m、16m、西側桁行南から16m、17m、東側梁行36m、西側梁行36mを測る。柱穴は、側柱が径20~35mの円形(P450・P460・P468・P471・P483・P484)を呈し、深さは22m~58mを測る。側柱⁶基すべてには柱材が遺存し、概ね漏斗状の掘り方を有する。

SB5(図版35・38・61・100・127) 27・28Sグリッドに位置する。桁行2間(48m) 梁行間(42m)の側柱構造の掘立柱建物である。主軸方位はN-8-Wを指し、面積は202㎡である。柱間寸法は、東側桁行北から22m、25m、西側桁行南から22m、23m、北側梁行42m、南側梁行4mを測る。柱穴は、側柱が径25~40mの円形(P457・P478・P479・P480・P481・P482)を呈し、深さは27m~43mを測る。側柱で柱痕が遺存するのは4本(P457・P478・P479・P482)である。概ね箱状の掘り方を持つ。遺存度の良いP457の柱痕は樹種同定により、コナラ節であることが明らかとなった。

SB6(図版34・38・104) 27Rグリッドに位置する。南西側は柱穴の平面プランの判別が困難で、検出面を層まで下げて検出作業を行った。桁行2間(37m) 梁行1間(23m)の側柱構造の掘立柱建物である。主軸方位はN-85-Eを指し、面積は89㎡である。柱間寸法は、東側桁行北から205m、165m西側桁行北から165m、205m、北側梁行230m、南側梁行205mを測る。柱穴は径15~40mの円形で、断面形はU字状を呈する。深さは8m~30mを測る。柱穴から柱材の出土は無かった。

SB7(図版34・39・61・105・127) 27Q・Rグリッドに位置する。東側は柱穴の平面プランの判別が困難で、検出面を層まで下げて検出作業を行った。桁行2間(36m) 梁行間(355m)の側柱構造で、北側と南側に1基ずつの棟持柱(P159・P160)をもつ掘立柱建物である。P159・P160はともに柱筋から1本分外側に出る程度である。主軸方位はN-5-Wを指し、面積は128㎡である。柱間寸法は、東側桁行北から180m、170m、西側桁行北から190m、160m、北側梁行355m、南側梁行355mを測る。柱穴は、側柱が径32~65mの角丸方形(P154・P462・P152・P153・P086)または円形(P085)を呈し、深さは10m~50mを測る。棟持柱は径15~32mの円形と楕円径を呈し、深さは10m~27mを測る。棟持柱と側柱には明らかに規模の違いがあり、東京都立大学山田昌久助教授からP159・P160は棟持柱としての機能を果たすには小規模であるとの指摘を受けたが、この掘立柱建物は、建築の様式として、棟持柱付掘立柱建物として考えたい。側柱の断面形は漏斗状、棟持柱の断面形はU字状である。側柱⁶基すべてには柱根が遺存していて、遺存度の良いP086の掘り方下半部は柱根幅に合わせて構築されていた。また棟持柱(P159・P160)から柱材は出土しなかった。

SB8(図版34・39・61・106・127) 26Q・Rグリッドに位置する。桁行2間(63m) 梁行間(35m) 面積221㎡の、北側に向けてやや開き気味の南北棟である。主軸方位はN-5-Eを指す。柱間寸法は桁行が27m~33m、梁行が30m~36mである。⁶基の柱穴P272・P282~P286の平面形は円形または楕円形で、断面形はほぼ全て漏斗状を呈す。規模は径が28~55m、深さが26~50mと多少のばらつきが見られた。⁶基の柱穴全てに柱材が良好な状態で遺存しており、P272・P284では、掘り方下半部が柱根幅に合わせて構築されていた。東西の桁行き中央の柱は2本とも径が18m前後で、他の4本の柱の径が10m前後であることと比べ、建物の中心となる柱であったと考えられる。柱の基底部は全て平に加工されている。

P27の柱材からは、底部に人工的に入れられたと思われる切り込みが確認された。柱穴の覆土はやや粘性の強い灰色～灰黄色粘土層であり、粘土ブロックや腐植した木片が多く混入している。覆土からは少量の土師器片が出土しているが、出土状況からいずれも流れ込んだ遺物であると考えられる。

SB9(図版 34・41・61・107・128) 24R グリッドに位置する。西側が攪乱に切られていて、残存しない。残存桁行 間(19m) 梁行 間(4.4m)の側柱構造の掘立柱建物である。主軸方位はN-32-Eを指し、残存面積は8.4㎡である。柱間寸法は、北側桁行19m、南側桁行18m、東側梁行4.4mを測る。柱穴は、側柱が径25～35mの円形(P115・P116・P119・P120)を呈し、深さは18～22mを測る。側柱すべてに柱材が遺存する。概ね漏斗状の掘り方を持つ。

SB10(図版 34・40・61・108・128) 25S グリッドに位置する。桁行 間(24m) 梁行 間(235m)面積56㎡の、ほぼ正方形の総柱建物である。主軸方位はN-85-Eを指す。4基の柱穴P101・P103・P108・P112の平面形は円形または楕円形で、断面形はU字状、台形状、漏斗状を呈す。規模は径がP101・P103・P112で25m、P108で35m、深さは22～30mというように小振りの柱穴で構成されている。覆土はやや粘性の強い褐色系粘土で、腐植木片が混入している。柱材は4基全てで確認されたが、P103以外では腐植が進んでいた。P103の柱材は基底を平に加工しており、他の基の柱材も、おそらく同じような加工を施していた可能性がある。P108はP149を切っているが、両者の境にはP108の柱痕と同じ規模の柱痕が確認されており、P108は建てかえないしは据えかえた可能性がある。

SB11(図版 34・40・108) 25S グリッドに位置する。桁行 間(16m) 梁行 間(15m)面積2.4㎡の総柱建物である。主軸方位はN-57-Wを指す。4基の柱穴P106・P268・P269・P293の平面形は円形で、断面形は漏斗状・U字状を呈す。規模は径が25～42m、深さは20～28mを測り、SB10と同様小振りの柱穴で構成されている。覆土はやや粘性の強い灰色系粘土で、SB10とは違い腐植木片は殆ど混入していない。SB11では、柱穴に柱痕は残るものの、柱材は確認されなかった。

SB10とSB11は、東側が調査区外であることから、建物が東側に伸びる可能性も考えられる。

SB12(図版 35・41・43・64・110・111・114・128) 30P グリッドに位置する。南東側のP019は上部を暗渠によって壊されているが底部には柱材が遺存していた。桁行 間(36m) 梁行 間(38m)の側柱構造で、北側と南側に1基ずつの棟持柱(P014・P016)をもつ掘立柱建物である。P014・P016はともに柱筋から柱1本分外側に出る程度である。主軸方位はN-15-Wを指し、面積は13.7㎡である。柱間寸法は、東側桁行18m等間、西側桁行北から185m、169m、北側梁行3.8m、南側梁行3.8mを測る。柱穴は、側柱が径40～60mの円形を呈し、深さは44～52mを測る。棟持柱は径20～25mの円形を呈し、深さは28～32mを測る。棟持柱と側柱には明らかに規模の違いがあり、東京都立大学山田昌久助教授からP014・P016は棟持柱としての機能を果たすには小規模であるとの指摘を受けたが、この掘立柱建物は、建築の様式として棟持柱付掘立柱建物として考えたい。側柱の断面形は漏斗状、棟持柱の断面形はU字状である。側柱6基すべてには柱材が遺存し、掘り方下半部は柱材幅に合わせて構築されていた。また棟持柱(P014・P016)から柱材は出土しなかった。出土遺物は土師器で、P01から有段口縁をもつ壺の破片を取り上げた。

SB13(図版 34・40・61・109・128) 23Q グリッドに位置する。桁行 間(39m) 梁行 間(325m)面積11.4㎡の総柱の南北棟建物で長軸の方位は、N-37-Eを指す。柱間寸法は、東側桁行北から17m、18m、中央桁行18m、169m、西側桁行16m、18m、北側梁行東から15.5m、16m中央梁行15m、175m、西側梁行16m、18mを測る。柱材は、9本すべて遺存していたが、掘り方を持たない打ち込み柱である。

柱材の径は、8～10mで、打ち込みやすいように、先端部分を刃物で6cm以上、下方向に削り、鋭利に加工している。柱は、ほぼ地面に垂直に打ち込んであった。柱材の遺存状況は良好で、なお加工痕から類推される刃物は、鏝であろうか。

6) 杭列・整地層

a 概 要

調査区北東側には蛇行する河川跡が検出され、その西岸（調査区側）には河川跡へ向けて長く舌状に張り出す地区（長さ26m、幅13.5m）が存在する。1号杭列はその舌状の張り出し地区（以下舌状部とする）の付け根付近を南北に横断し、2号杭列は河川の西岸沿い舌状部の先端（東側）に検出された。1号と2号の杭列は構築方法や杭材の大きさ・掘り方の規模（幅と深さ）などにおいて共通点が多い。

b 各 説

1号杭列（図版42～45・57・62・64・68・111～114・125・128）29～31P-Rグリッドに位置する。攪乱、水路、暗渠によって3か所に分断されていて、北側と南側の両端は河川によって侵食されている。北端側は舌状部の付け根付近が河川跡へ向かって北側へ小さく突出した部分へ向かい、南端側は反対に河川によって侵食され湾曲した部分に向かっている。1号杭列の延長方向については、このまま河川に向かっていたが、屈曲して河岸を避けていたかは不明である。また中央やや北側寄りには杭列がわずかに途切れた部分を検出された。途切れた部分には図版42で図示した袖状の構造物が検出され、1号杭列によって区切られた舌状部への出入り口と考えられる。

これより1号杭列の詳細を述べる。

1号杭列は、溝状の布堀に杭を列並べて埋め戻す工法によって構築されている。布堀の規模は全長326m、幅は上部で30～40m、下部で15～20mと一定し、深さは最大70mを測る。断面形はやや上部の開いたU字状を呈し、垂直に近い角度で立ち上がっている。方向は河川跡によって分断された北端から9mの地点で、舌状部東側を囲むように35°屈曲している。屈曲部より北側の方向はN-10-Eを指し、南側はN-25-Wを指すが、それぞれ直線ではなく、緩やかに曲がったり小さく折れたりを繰り返している。出入り口と考えられる杭列の途切れた部分は南端から16～17m地点で、途切れた部分の長さは66mを測る。布堀底部の標高を等間隔に9か所列記する。北端から南端へと168m、18m、19m、175m、18m（出入り口部）17m（攪乱により推定値）17m、175m、198mを測る。屈曲部より北側の掘削深度は北端から8m付近にピークがあり、河川跡に向かって徐々に標高を下げていて、標高差は20mを測る。南側は出入り口付近が10～15m高い他はほぼ水平に進むが、南端から39m地点から河川跡へ向かって再び標高を上げる。南端から12mの地点の標高は21mを測り、1号杭列の掘り方中で一番浅くなっている。この底部の標高は杭列構築時の地形をおおよそ反映していると考えられる。覆土は3層に分層でき、1層は杭痕と考えられる褐色系粘質シルト、2層は掘り方と考えられる灰色系粘質シルトで、シルトブロックを多量に含む。3層は1層に近く、掘り方構築時に掘削を受け、そのまま残された層と考えられる。

杭は布堀の底部へ垂直に1列設置されていて、杭材は樹皮を残した丸太材が使用されていた。主列（出入り口部の施設を含まない）中で、杭材の遺存した杭痕は40本、その内小片のみ遺存したものは4本を数える。また杭痕を確認できたものは75本、その内表面の樹皮が一部遺存した杭痕は73本で、主列における杭痕の総数は、115本を数える。杭の直径は、遺存度のよい杭材で平均14.8m、表面の樹皮だけが遺存し

た杭痕は平均 12.2m を測る。杭間（柱間と同じく、杭の中心から中心までの距離）は杭材が遺存度のよい部分で平均 26m、表面の樹皮だけが遺存した部分で平均 23m を測る。杭材の隙間（杭と杭の間の長さ）は杭材の遺存度がよい部分で平均 9m、表面の樹皮だけが遺存した部分で平均 9m を測る。また杭材の底部先端は布堀底部より平均で 5cm 程深く設置されているが、打ち込まれた様子は確認できなかった。杭材底部は尖底がほとんどで、楔形に整形されていたが、杭が設置された刃部の方向には決まりが無かった。また鴨杭列、鴈杭列の杭材には寸法や形状の珍しい工具痕が観察でき、それぞれの杭の加工、整形には同一の工具が使用されていることが確認できた。

杭列の途切れた部分には、門柱に相当する位置に大きな材がそれぞれ設置されていた。門柱間の柱間は 114m、門柱間の出入り口幅は 66cm を測る。門柱の材は遺存度が低く、南側の門柱に材（218）の一部が出土したのみであり、材の底部先端の形状については明らかにできなかった。材痕は直径 20~22cm を測る。また南側の門柱際には東側に、北側の門柱際には北側に、それぞれ門柱に接するように小杭と考えられる痕が一部表面の樹皮を伴って検出された。この小杭痕は径 7~8cm、深さは 17~19m を測る。

出入り口の構造物は、本体とほぼ同じ形状の布堀によって構築されていて、杭は布堀の底部へ垂直に 1 列設置されている。構造物は出入り口の東側へ 2 列平行に検出し、出入り口を狭い通路状に仕切る形で設置されている。出入り口の構造物 2 列の幅は門柱幅より若干広く設置されている。出入り口の構造物 2 列の杭間は 12.3m、通路幅は 10.4m を測る。出入り口の構造物は南側が主列に接続しているが、北側は掘り方が独立している。規模は北側長さ 42m、南側長さ（52m）、上部の幅は北側 22m、南側 32m、下部の幅は北側 15m、南側 15m、深さは最大北側 33m、南側 22m を測る。断面形はやや上部の開いた U 字状を呈し、垂直に近く立ち上がっている。方向は N - 70° - E を指し、本体とほぼ直角であるが若干南側へ傾いている。杭痕は南側から 3本、北側から 2本検出された。南側の東寄り 2本には杭材が遺存し、他は表面の樹皮だけが遺存していた。杭痕の直径は平均 13cm、杭間は平均 18cm、杭痕間の隙間は平均 5.3cm を測る。出土遺物は土師器である。甕（140）・壺（141）などが出土している。大半の土器が小片で、他の遺構と隣接している部分での出土がほとんどであった。出土遺物のほとんどは、布堀構築時に流れ込み埋め込まれたものであると考えられる。鴨杭列は 5基の土坑 SK010・SK011・SK220・SK232・SK233 2条の溝 SD235・SD003（鴨円形周溝状遺構）と重複していてそのすべてを切っている。

鴨杭列出入り口部の西側には約 2m の間隔を置いて SB12が位置している。SB12は南北それぞれに棟持柱をもつ 2間の竪立柱建物で、主軸方位は N - 15° - W を指す。この方向は鴨杭列出入り口部の袖状構造物の方向と直交する。また SB12の北側南側 2間それぞれの中央の柱を結んだラインが鴨杭列出入り口部の中心へ向かっている。この両者の配置から鴨杭列と SB12は同時期に存在したと考えられ、SB12は鴨杭列によって画された区域への出入り口に設置された施設である可能性が高い。また鴨杭列と SB12が正対しないことや、約 2m の距離を置いた配置に関してその意図は明らかにできなかった。

鴈杭列（図版 43・45・57・62・68・114・115・125・128） 32R グリッドに位置する。攪乱、トレンチによって中央部と南側が壊されている。また河川跡に沿って位置するため、北側は上部の大半を河川によって侵食されている。さらに南北の両端も河川による侵食を受けていて、続き部分は検出されなかった。これより鴨杭列の詳細を述べる。

鴨杭列は、溝状の布堀に杭を 列並べて埋め戻す工法によって構築されている。規模は長さ 66m、布堀の幅は上部で 30~40m、下部で 15~20m、深さは最大 50m を測る。南側は攪乱のため布堀が底部まで壊されていて、南端から 12m 程は杭材のみが攪乱の底面に遺存していた。北側については布堀立ち上がり

の東側壁が河川によって侵食されていたが、布堀立ち上がり西側壁は僅かではあるが北端まで遺存していた。断面形はやや上部の開いたU字状を呈し、垂直に近い角度で立ち上がる。方向は南側でN-11-E、北側でN-22-Eと方向を変え、北端は河岸を回り込むように屈曲しN-12-Wである。布堀底部の標高は中央部で155-16m、南端で15m、北端で15mを測り、河岸に堆積するガツボ層が布堀の底部にあっている。覆土は3層に分層でき、1層は灰色系砂質シルト、2層は杭痕と考えられる褐灰色系粘質シルト、3層は掘り方底部で灰色系砂質シルトである。また2号杭列西側には整地層と考えられる盛土が、舌状部先端部に盛られていた。2号杭列はこの整地層を掘削して構築されていて、中央部では厚さ20cmを測る盛土が掘削されていた。

杭は布堀の底部へ垂直に列設置されていて、杭材は樹皮を残した丸太材が使用されていた。遺存した杭材は25本、その内小片のみ遺存したものは9本を数える。また杭痕を確認できたものは1本で、総数26本を数える。杭の直径は、遺存度のよい杭材で平均11.8cm、杭材が小片のみ検出された杭痕では平均10.7cmを測る。杭間は杭材の遺存度がよい部分で平均19cm、杭材が小片のみ検出された部分で平均21cmを測る。杭材の間隔は杭材の遺存度がよい部分で平均5.3cm、杭材が小片のみ検出された部分で平均8.5cmを測る。また杭材の先端は布堀底部より5-10cm深く設置されているが、打ち込まれた様子は確認できなかった。杭材底部は尖底がほとんどで、楔形に整形されていたが、杭が設置された刃部の方向には決まりがなかった。また1号杭列、2号杭列の杭材には寸法や形状の等しい工具痕が観察でき、それぞれの杭の加工、整形には同一の工具が使用されていることが確認できた。出土遺物は土師器で、器台(142)の破片を採取り上げた。

2号杭列の設置位置については不明点が多い。遺存した布堀の大半は河川跡と河岸の狭間に構築され、盛土された整地層の土留めの機能をはたしているかのような状況で検出された。しかし2号杭列中央部の土層断面では、整地層を載ち切る形で2号杭列の布堀が構築されていて、土留めの機能をはたす削材等の出土も確認されなかった。また構築方法や杭材の規模において1号杭列と2号杭列には共通点が多く、両者は区画された舌状部を挟んで設置された、一連の施設であると考えられる。

整地層(図版43・57・114・115・125) 32Q-Rグリッドに位置し、舌状部先端に検出された。舌状部の規模は、その付け根に位置する1号杭列出入り口部から先端部に位置する2号杭列北端までの長さ26m、中央付近の幅13.5mを測る。整地層の範囲は舌状部先端を囲むように三日月状を呈し、規模は整地層の河岸延長22m、幅4.9mを測る。整地層の深さは河岸が最も深く先端付近で20-40cmを測り、舌状部の中央に向かって徐々に浅くなっている。整地層の土層はb層に類似した灰黄色系粘質シルトが主体で、a層に類似した灰色系シルトブロックを混入した部分、灰白色系粘質シルトブロックを混入した部分、b層に類似した灰色系砂質ブロックを混入した部分等が観察できたが、明確な層境は確認できずそれぞれを区分けすることはできなかった。また河岸近くは整地層上部が河川により侵食されていたようで、整地層上面は河川に向かって傾斜していた。出土遺物は土師器である。器台(143)・壺(144)・甕(145)が出土している。2号杭列とSK24に切られていたが、整地層の下から遺構は検出されなかった。

7) 河 川 跡(図版45・57・60・63・116-119・125-127・129)

a 概 要

33Mグリッドから29Sグリッド付近にかけて認められた。調査区内での全長は長さ約110mほどで、最も狭い部分は約5m、最も幅が広い部分は約30m、最も深い地点は標高0.4mである。試掘調査の成果から

河川跡の存在は知られていたが、調査区北側に接するような形で、東西に流れる幅 2m 程度の驕川（おごろがわ）の、氾濫原であろうと考えられていた。遺構精査に伴って 20m 毎に幅 1m の南北・東西のトレンチを設定して表土より約 1m 程度の深さまで掘削し、セクションの観察を行った。その結果、広範囲に古墳時代の埋没河川を含むことが明らかになった。

河川跡の調査は先に設定した、20m 毎のトレンチの間に、さらにもう一本のトレンチを入れ、10m 毎にセクションの観察を行った。特に 29S グリッドライン付近には、遺物の存在が濃厚に予想されたため、一辺 8m のテストピットを設定し、遺物の包含状況を確認した（図版 117）。その結果、多数の遺物が出土したため、調査の最終段階で、調査区東側の河川跡全域の掘削調査を行った。その際に北側の 32R 付近で 2 号杭列を検出した。また、31S グリッド付近において覆土 3a・3b 層から大量の土師器が出土した。調査区北側の 33M グリッドから 32P グリッドにかけては、河川跡からの遺物の出土もなく、セクション観察の結果、昭和における驕川の埋め立て跡であることが明らかとなったため、全掘削は行わず、川岸のみの検出・掘削に留めた。

b 各 説

10m 毎に設定したトレンチの内、特に河川跡の堆積状況が類推出来る材料を提供した 3本について（図版 43）に示した。

セクション A（図版 46・119） 32S グリッドから 29S グリッドまでの約 30m の南北セクションである。最深部は北側隅で標高 0.4m となる。中央部 31P グリッドラインで東西セクション B に対応する。29P ラインで東西セクション C に対応する。表土付近は、度重なるほ場整備や河川の埋め立てによって大きく攪乱されている。以降、覆土 1・2・3a・3b・7・8 層の順でほぼ水平に堆積する。覆土 1 層は青灰色粘質シルトである。旧耕作土に相当し、部分的には 1 層に相当すると思われるが、ガツボが発達している部分もある。覆土 2 層は暗青灰色粘質シルトである。覆土 3 層は暗赤褐色砂質シルトである。層の多くの部分はガツボが発達し、ガツボと砂の互層である。32P グリッドラインから 31P グリッドラインにかけては、ほぼ水平に堆積し、細砂を主体とする上位を 3a 層・粗砂を主体とする下位を 3b 層に分けた。一部に、地盤液状化の名残と思われる痕跡が見られた。また、31P グリッドラインから 30P グリッドラインにかけては、ガツボの発達著しい。30P グリッドラインから 29P グリッドラインにかけては、径 20～30mm 程度の埋もれ木が横たわっているのが確認できる。遺物の出土は、覆土 3 層全域にわたっており、器種も多様である。覆土 3a 層を除去後に覆土 3b 層上面においても、大量の遺物の出土があった。覆土 4 層は、3 層の下層に位置する青灰色砂質シルトで、部分的に存在する。覆土 5 層は 3 層の下層に位置する褐色粘質シルトで、炭化物を少量含んでいる。遺物は出土しない。覆土 6 層は灰白色粘質シルトである。遺物は出土しない。覆土 7 層は褐色粘質シルトで、炭化物を少量含んでいる。遺物は出土しない。覆土 8 層は灰白色粘質シルトである。遺物は出土しない。31P グリッドラインから 30P グリッドラインにかけて、覆土 6 層から 8 層までが落ち窪み、3b 層が入り込んでいる部分があり、流路の変遷と地震動に伴う液状化や、地すべりやスランプ構造を伴うものである可能性も考えられる。同様の落ち窪みが、29P グリッドライン周辺にも見られる。

セクション B（図版 46・117・118） 31S グリッド杭から東に約 8m、西に約 5m の全長約 13m の東西セクションである。最深部は 31S グリッド杭から東に 2.5m の地点で標高 0.7m となる。表土付近は、度重なる圃場整備や、河川の埋め立てによって大きく攪乱されている。以降、相当層・相当層・層の順番で西側に堆積する。川岸は 31S グリッド杭から西に 3m の地点で、東側に向かって緩やかに傾斜している。

川の覆土は1・2a・2b・2c・2d・3・4層の順で、最深部に向かって東・西から緩やかに傾斜しながら堆積している。川岸のN層は、人工的と思われる堆積である。灰白色の粘土ブロックを主体とする層で、古墳時代の川岸に人工的に作られた護岸が崩落したものである可能性も考えられる。土師器の碎片が混入している。覆土2層は、耕地整理の際に、河川の埋め立てによる土が流入したものと考えられ、堆積の状況により2a・2b・2c・2dに分けた。川岸から緩やかに傾斜する覆土は3層で、土師器片が多数出土したが、いずれも細片で器種・時期を特定するには至らなかった。

セクションC (図版 46・57・118・125) 29Sグリッド杭から東に約8m、西に約5mの全長約13mの東西セクションである。最深部は29Sグリッド杭から東に6mの地点で標高1mとなる。表土直下の。相当層には、耕作の影響に伴う土層の乱れが見受けられる。以降、a相当層・b相当層の順番で堆積する。川岸は29S杭から東に約30mの地点で、東側に向かって緩やかに傾斜している。川の覆土は3a・3a・3層の順で最深部に向かって西から緩やかに傾斜しながら堆積している。川岸のN層はセクションBとはやや含有物が異なるが、同じく人工的な堆積と考えられる。覆土3層からは、高杯(148)が出土した。

2 遺 物

A 遺物の概要

ここでは、上層の調査で出土した遺物について概観する。層位的には、層(表土)、a・b層(包含層・古墳時代前期確認面層)より出土したものを上層の遺物とした。以下古墳時代前期の遺物、土師器の器種分類、その他の遺物の順で述べる。

1) 器 種 分 類

古墳時代前期の遺物の器種分類は、原則的に川村浩司氏による分類案[川村1993 高杯の分類を一部改変]に準拠して行い、第1図として転載し、観察表の分類の欄に記載した。なお - は欠損などにより分類を不能としたものである。但し川村氏の分類にあてはまらないものもあり、それらについては、滝沢規朗氏の分類[滝沢2004]を参照し本文に反映させた。また道端遺跡の時期設定と器種構成については第4章で述べる。

襦

A類：口頸部断面形態が、「く」字状もしくは、逆「コ」字状を呈するもの。「千種型襦」「北陸北東部系襦」「くの字口縁襦」「能登型襦」などと呼ばれる。

B類：口頸部断面形態が、有段で、口縁部外面が無文なもの。(宝達襦)

C類：口頸部断面形態が、有段で口縁部外面に擬凹線文を施すもの。「有段擬凹線襦」「月影形襦」「加賀型」などと呼ばれる。

D類：近江系の受け口状口縁を呈するもの。

E類：東海系の「S」字状口縁で台付のもの。

F類：山陰系の有段口縁襦。

G類：近畿系のタタキ襦。

H類：畿内布留(加賀高島系)の丸底のもの。

鉢

- A類：丸底有孔の鉢。甌の可能性もあり、大別器種とすべきかもしれない。
- B類：大型の非精製品。把握を有するものも多い。ススが明瞭に残るものもあり、煮沸機能を有した可能性が高い。
- C類：有段口縁・球胴で、八ヶ調整を残すなど、D類に比べ、「粗製」であるもの。
- D類：有段口縁・球胴で、ミガキ調整が丁寧に施されるものなど精製のもの。
- E類：有段口縁で浅い体部を有するもの。
- F類：小型無頸鉢で、側面が逆台形の呈するもの。
- G類：小型短頸鉢で、非精製のもの。
- H類：小型短頸鉢で、精製のもの。
- I類：椀状にゆるやかに立ち上がる体部で、低台を有するもの。蓋とする見解もある。

高坏

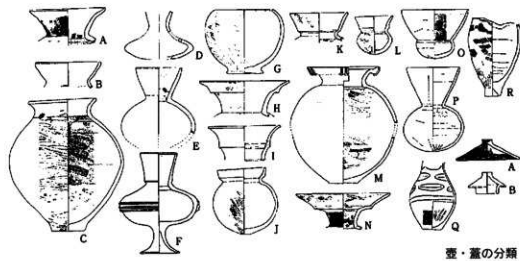
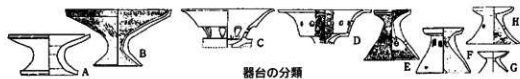
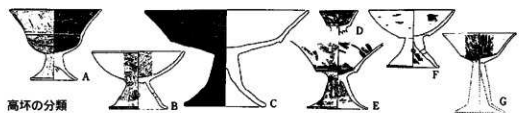
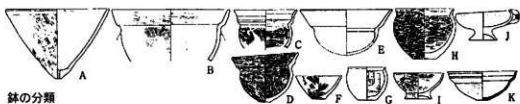
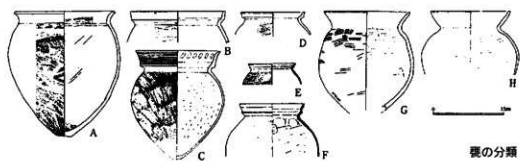
- A類：坏部が有段鉢（鉢D類）状を呈するもの。
- B類：坏部が浅い椀状を呈するもの。
- C類：大型で、浅い坏部を有し、坏部外面に稜をもつもの。
- D類：小型高坏。裾部が広く開く。
- E類：坏部が深く、外面稜を有するもの。
- F類：東海系高坏。坏部上半は内彎する。坏部外面には稜を有する、脚部は内彎しながら開く。
- G類：畿内系高坏。

器台

- A類：受け部が無段で、断面「く」字状にゆるく湾曲するもの。
- B類：受け部が有段で、断面「く」字状にゆるく湾曲するもの。
- C類：装飾性の高い有透器台。
- D類：深い受け部をもつもので、円形の透かし孔を有するものもある。
- E類：受け部が外反する小型器台。
- F類：受け部が有段の小型器台で、上段がほぼ直線的にのびるもの。上段外面最下位が垂下するものもある。
- G類：受け部が有段で、上段が外反し、端部がすぼまり気味の小型器台。東海系であろうか。
- H類：受け部が内彎する小型器台。畿内系であろうか。

壺

- A類：広口で口縁が外反するもの。
- B類：口縁が内彎し、球胴に近いもの。
- C類：口頸部が「く」字状を呈し、やや短頸で、長胴のもの。
- D類：「皮袋形壺」などと呼ばれるもので、体部中位～下位が外方に膨らむもの。体部の横断面が正円形を呈さない。
- E類：やや長頸で、頸部に段を有するもの。
- F類：台付の装飾壺。
- G類：無頸壺。上位に把手を有するものもある。
- H類：広口で有段口縁のもの。



第1図 古墳時代の土師器の器種分類図 (川村1993) より一部改変の上掲載)

I類：細口で有段口縁を呈し、口縁部下段が長いもの。頸部に突帯をめぐらせるものが多い。口縁部を小口厚させるものもある。円形押捺文や、列点状の刻文を施すなど、比較的装飾性が高い。

J類：口縁上段・下段とも短い有段口縁で、球胸を呈するもの。

K類：細口で有段口縁を呈し、口縁部下段が短いもの。下段の屈曲はほとんどみられなくなる。

L類：K類の小型品。型式変化の方向もK類とほぼ同様。小型器台とセットで使用された可能性がある。

M類：東海系二重口縁壺。

N類：畿内系有段口縁壺。

O類：畿内系の小型埴。

P類：畿内系の長頸壺。

Q類：東北系の壺を一括する。

R類：北海道系の壺。

蓋

A類：つまみを有し、下端内面にかえりを持たないもの。

B類：つまみを有し、下端内面にかえりを有するもの。壺F類等の蓋。最大径はA類よりも小さいものが多い。

B 古墳時代前期の遺物

本遺跡において古墳時代前期の遺構から出土し、当該期の遺物として認定しえるものは、土師器、土鍾、砥石、建築材などである。出土した土師器は、牛馬の耕作痕や圃場整備などで破砕されたためか、小破片が多い。復元・実測し、報告書に掲載されたものは、18点を数える。土師器の器種は、高坏、器台、鉢、壺、甕、蓋のほか、鉢のミニチュアである。土鍾は、2点、砥石3点、木製品のうち報告書に掲載したものは、部材として板材1点、把手と考えられるもの1点、柱材9点、杭材9点である。

1) 土器・土鍾・石製品

a 竪穴建物

SII(図版47-1-10・図版120) 高坏1点(1)、器台2点(2・3)、鉢2点(4・5)、壺1点(6)、甕4点(7-10)を図示し得た。1は坏部と脚端部を欠損する。脚部は筒状で、直線的に裾部に至り、裾部では外方に強く屈曲する。内・外面ともに摩滅がひどく調整などは不明である。内面では成形時の粘土紐の巻上げ痕が3か所確認することができる。これらの痕跡から粘土紐の厚みは15-20mmであることが分かる。坏部の底部内面では脚部の空洞を埋めるように粘土により栓をしている。裾部内面にはしぼり痕がみられ、裾部を外方に屈曲させる際にここをしぼって屈曲させたことを確認できる。2は受け部を欠損する。脚部は受け部と脚部の接合部からほぼ直線的に端部に至り、約60°で開く。端部は丸くおさめる。調整は、外面では斜め方向のハケメを施し、その後は未調整である。内面は脚部において横方向のハケメを施し、その後ナデによる調整を施している。3は装飾を施した器台であり北陸北東部に通有する器形である。受け部のみ残存する。立ち上がりは欠損しているが、他の遺跡のものなどを参照すると、立ち上がりに円形の孔をいくつか巡らす。口縁端部は四角く整形されている。調整は、立ち上がりより外周と外面では横方向のミガキを施し、立ち上がりより内周では不定方向のハケメ後、粗くミガキを施している。赤彩などは確認できない。類似する資料は、SK212(128)と河川跡(159)などから出土している。4はウイングラス

形の鉢で東海系の瓢壺を模したものである。脚部を欠損する。体部は有段で、段部から口縁端部は高く、内彎して立ち上がる。段部より下部は低い。調整は、外面ではヘラナデ後ミガキを施し、内面ではヘラナデを施す。類似する資料は西隣りの中条町反貫目遺跡をあげることができる。5は短頸鉢である。頸部一口縁部にかけてはやや内湾ぎみに立ち上がり、肩部はなで肩で、胴部は口縁部よりやや大きく、球状を呈する。底部は欠損する。調整は両面ともに丁寧ミガキを施される。6は長頸壺である。頸部から口縁部は長く、直線的に立ち上がる。胴部の最大幅は中心よりやや上に位置し、やや肩が張ったような形状を呈する。底部は欠損するが、丸底と考えられる。全体的に摩滅がひどく、調整などは不明確であるが、頸部内面では横ハケをわずかに確認することができる。外面は色彩の痕跡を確認できる。7は頸部から口縁部にかけて屈曲ぎみに外反し、口縁部は平坦面をもつ。端部ではやや上方につまみ出した形状を呈する。肩部以下は欠損する。8はなで肩で、頸部から口縁部では大きく外反する。端部は丸くおさめる。調整は両面ともにヘラナデを施す。9は7と同様の形態を呈するが、9は口縁端部が面取りされている。断面などの観察から、頸部の粘土紐接合部分には外面から薄く粘土を補強していることを確認できる。調整は、外面ではハケ、内面ではヘラナデを施す。10は底部のみで、平底である。底部外面はヘラケズリを施し、平らに整形されている。調整は、外面ではハケ、内面ではハケをわずかに確認でき、ハケメの消えている部分はナデによるものである。

SB(図版47-11-20・図版120) 器台2点(11・12)、壺3点(13・14・16)、甕4点(15・17-19)、砥石1点(20)を图示し得た。11は受け部に8の孔をもつ装飾器台である。受け部はくの字状に屈曲し、口縁部にかけては外反する。口縁端部は方形を呈する。脚部は坏部との接合部から裾部にかけて緩やかに外反し、裾部ではやや強く外反する。端部は方形を呈する。脚部高と脚裾部径はほぼ同じで、受け部と脚部とは脚部のほうがやや長く、全体的にスマートな形状である。調整は、脚部内面以外はすべての部分において縦・横方向のミガキを施しており、つくりも丁寧である。12は受け部を欠損する。脚部はほぼ直線的に大きく開き、端部は丸くおさめる。脚部高と脚裾部径では脚裾部径のほうが大きく、やや扁平な形状である。全体的に摩滅を受けており、調整などは不明確である。13と14は縁帯部に一本描きの沈線と棒状浮文による加飾を施された口縁部から頸部で、肩部から底部を欠損する。成形は同様で、粘土紐をらせん状に積み上げていき、甕のような形状の原形をつくる。そして、もう1つ澱積み上げ、口縁部と頸部の境に粘土を貼り付け、屈曲部をつくりあげる。外面は粘土を貼り付けることにより縁帯部を形成する。その上から、横方向の一本描き沈線を3系施し、四方に2本1セットにした棒状浮文を貼り付ける。棒状浮文の剥離している部分には縦方向の沈線を確認でき、貼り付ける際の印または接着しやすいうようにこれを付けていると推察する。縁帯部には飾りを付ける以前に、横方向のハケメを施し、整形する。棒状付文はヘラ状工具などを使用せず、指によって形成される。両方ともほぼ同様であるが、13の沈線の中央が幅広く、こういった沈線の幅が異なるものは13のみである。口径において大小とあることから、装飾壺には大きさに種類以上認められる。16は壺の底部である。底部側面をナデることにより、底部と胴部が明瞭に分かれており、高台状のものを形成する。底部外面は粗くナデしており、内面はヘラナデを施す。底部のみであるが、やや小型の壺を想定する。17-19は甕の口縁部-頸部で、肩部-底部は欠損する。口縁端部の形態により種類に分けることができる。断面形態が方形を呈する17と端部を上方につまみ上げ、断面形態が菱形を呈する18・19である。調整はナデのみ確認できる。19は甕の底部である。底部は平底である。胴部下半の外面はヘラケズリ、内面はヘラナデを施す。底部径は小さいがここから大きく立ち上がっていくものと考えられる。20は砥石の破片で、擦り面を3面確認することができる。擦り目の方向は一定ではなく、

不定方向である。同質のものはS14とSK00からも出土しており、何らかの関係を示唆する資料である。

S14(図版48・29・30・図版120) 壺(29)・磁石(30)を図示し得た。29は口縁部のみ残存しているが、球状の胴部と丸底を呈する。頸部から口縁部にかけてはやや内湾して立ち上がり、やや開いた口縁部を呈する。両面ともミガキと赤彩を施す。30は、欠損部分はみられるが、面の擦り面を確認することができる。擦り目の方向は不定方向で一定しない。石質は20の磁石などと同様である。

S15 S19は2時期の竪穴建物を確認しており、遺物も層位別に取り上げているので、それぞれ分けて説明していく。出土層位は 壩と4層において比較的多く出土している。壩は新しい方の竪穴建物でS15-1とし、4層は古い方の竪穴住居でS15-2とする。

S15-1(図版48・21~24・図版120) 蓋(21)・器台(22)・襖(23・24)を図示し得た。21はつまみ部を欠損する。天井部から口縁部はほぼ直線的で、口縁端部はやや丸くおさめる。一見すると、器台の脚部にも類似するが、形態の特徴から蓋と判断した。器台脚と考えるとX字脚と思われる。全体的に摩滅を受けているが、ハケメまたはヘラナデを施している。22は受け部を欠損する。脚部は、高さと裾部径がほぼ同様で、ややスマートな形状を呈する。脚部中央よりやや上方に孔を4つ穿つ。脚端部には凹線がみられ、他にこのような形態のものはみられない。脚部内面以外すべての部分に赤彩とミガキを施し、丁寧な作りである。23は底部のみである。底部径は24より大きい。調整は両面ともハケメを施す。24はほぼ完形である。口縁端部は方形で、やや下につまみ出したような形状を呈する。頸部はくの字状に屈曲し、頸部と胴部の接合部分は粘土を上から貼り付けているために厚くなっている。胴部は卵形を呈しており、最大径は中央よりやや上方に位置する。底部径は小さく、粗いナデを施す。外面調整は、肩部が斜め方向のハケメ、中央部が横方向のハケメ、下部が縦方向のハケメと部分的にハケメの方向を使い分けている。内面には粘土紐の痕跡を確認でき、らせん状に積み上げ、ヘラナデを施して成形する。

S15-2(図版48・25~28・図版120) 鉢(25・26) 壺(27) 襖(28)を図示し得た。25は片口と台をもつ鉢である。全体的に厚く、胎土も粗く、粗雑な作りである。体部から口縁部にかけてはやや内湾しており、端部は丸くおさめる。片口は一部分しか残存していないが、粗雑な作りである。台は指押さえによって貼り付けられ、輪状を呈する。全体的に摩滅を受けており、調整は不明確である。外面はハケメを施しており、柵目の間隔が大きいものを使用している。26は口縁部のみ残存する。頸部は屈曲部をもち、二重口縁状となる。口縁部はやや開いて立ち上がる。端部は丸くおさめる。体部は欠損しているが、球状で丸底を呈すると想定できる。両面ともミガキと赤彩を施す。27は口縁端部と胴部を欠損する。頸部から口縁部は二重口縁状となる。頸部は緩やかに外反して立ち上がり、一度垂直に立ち上がるが、すぐに外反する。外面はミガキを施しているが、赤彩・黒色などは認められない。28は胴部以下を欠損する。頸部はくの字状に屈曲する。口縁部内面は緩やかに内湾しており、S字状となるが、これは口縁部を成形する際に、強くナデのために偶然できたのであろう。端部は方形を呈する。肩部はややなで肩で、胴部の最大径は中央よりやや上方に位置し、24と同形態と考えられる。しかし頸部から口縁部にかけての立ち上がりが短く、より寝ている。頸部に粘土の貼り付けがなく、薄く作られている。

S16(図版48・31・32・図版120・121) 壺(31)・襖(32)を図示し得た。31は頸部から口縁部のみ残存し、二重口縁の壺である。S15-2の27とは異なり、厚みがある。これは襖に類似する口縁部を原型として、そこに粘土を張り合わせていくことにより、二重口縁を形成する。また、外面にミガキはみられず、ナデのみとなり、作り・調整などから27とは異なった性質を持つ土器である。32は底部のみである。底部径は小さく、S15-1の24と類似する。外面は縦方向のハケメを施す。

b 円形周溝状遺構

1号円形周溝状遺構

1号円形周溝状遺構の出土遺物は、外側の周溝を構成する各遺構（SD003・SD027・SD056・SK00など）からの出土遺物がその大半を占める。外側の周溝（SD003・SD027・SD056・SK001）で、類別可能な遺物の総点数は33点を数え、各器種の割合は襦52%、壺19%、器台18%、高坏6%、鉢9%である。内側の周溝（SD028・SD031・SD049・SD053）で、類別可能な遺物の総点数は58点を数え、各器種の割合は襦62%、壺18%、器台7%、高坏5%、鉢10%である。

SD031（図版49-33-35・図版121）出土した破片点数は多量で、器台、襦などの遺物が出土している。各器種とも大半は同一個体が破砕したものである。これらのうち図示し得たものは、器台1点（35）、襦2点（33・34）である。33の体部は球胴に近く、最大径が胴部上半にある倒卵形を呈する。頸部で鋭く屈曲し、直立気味に長く伸びて上方で外反する口縁部をもつ。口縁端部は面取りされる。34は頸部で屈曲し直立気味に伸びて上方で外反する口縁部をもつ。口縁端部は、面取りされている。39は受け部底から直線的に開き、途中でゆるく外反する脚部である。

SD049（図版49-36・37・図版121）出土した破片点数は少量である。出土範囲は東側に集中している。西側は小片が点在していた。図示し得たものは、襦2点（36・37）である。36の体部は球胴を呈し、小さな平底の底部を伴っている。頸部で屈曲し、やや外方へ伸びて上方でゆるく外反する口縁部をもっている。口縁端部は丸く収められている。37は頸部で屈曲し、直立して上方へ伸び上方で外反する口縁部をもつ。口縁端部は面取りされている。

SD053（図版49-38-40・図版121）出土した破片点数は少量で、器台、襦などの遺物が出土している。各器種とも大半は同一個体が破砕したものである。これらのうち図示し得たものは器台1点（38）、襦2点（39・40）である。38は受け部底から外反しながら開く脚で、裾部で小さく屈曲している。39は胴部から頸部への境が不明瞭で、直立気味に伸び上方で外反する口縁部をもつ。口縁端部は上方へつまみあげられている。40は頸部で屈曲し、やや直立気味に伸びて、上方で外反する口縁部をもつ。口縁端部は、面取りされている。

SD003（図版49-41-43・図版50-44-50・図版121）出土した破片点数は多量で、高坏、器台、壺、襦などの遺物が出土している。各器種とも大半は同一個体が破砕したものであるが、東側開口部張出からは個体識別不能な小破片が多数出土した。これらのうち図示し得たものは、高坏の脚1点（41）、器台1点（42）、小型の器台1点（43）、壺2点（45・46）、鉢1点（44）、髷4点（47-50）である。41は坏部底から直線的に開き、裾部で外反する。脚部径に対して器高が低い。42は水平な受け部底で屈曲し、外反して広がる口縁部をもっている。受け部底から開く脚は裾部で外反している。43はゆるく内彎する浅い受け部をもち、口縁端部は面取りしてやや垂下している。脚部径に対して器高が低い。44は浅い皿状の体部下半に小さな平底の底部を伴っている。底部は内面が窪んでいる。壺の可能性もあるが、ここでは鉢に分類した。45は有段口縁をもつ壺である。頸部がやや外傾して直立気味に伸び、口縁有段部に2個一組の棒状浮文を貼り付けている。SK038上部の包含層出土の破片と接合している。47はやや内傾した頸部をもち、上方で強く外反する口縁部の端部をつまみあげている。48は頸部で鋭く屈曲し、外方へ直線的に伸びて中ほどでかすかに屈曲する口縁部をもつ。頸部外面に斜め方向のハケ調整が丹念に施されている。49は頸部が直立した筒状を呈する。上方で外反する口縁部をもち、口縁端部は丸く収められている。49の体部は球胴を呈

する。頸部で鋭く屈曲し、やや直立気味に伸びて上方で外反する口縁部をもっている。口縁端部はやや丸く収められている。50は尖底である。

SD027(図版 50・51・58・図版 51・59・62・図版 121・122) 出土した破片点数は多量である。高坏、器台、鉢、壺、甕などの遺物が出土している。各器種とも大半は同一個体が破砕したもので、完形に近い個体が点在し、小破片が大量に出土する部分などは無かった。これらのうち図示し得たものは、高坏 3点(51・53) 器台 2点(54・55)、鉢 1点(56)、壺 4点(57・60)、甕 1点(61)、土鍾 1点(62)である。51は坏部と口縁部の境に段をもち、坏底部から内彎して開く口縁部をもつ。52は坏部底から外反して開く脚で、先端部はすばりながら上方へわずかに持ち上がっている。53は脚部柱状部に膨らみがなく、裾部が屈曲外反している。54はゆるく内彎する受け部をもち、口縁端部は丸く収められている。脚部は受け部底から直線的に開いている。脚部径に対して器高が低い。55は浅く直線的に開く受け部底の端部を外方へ伸ばし、この受け部底の端部手前に一回り小さく、やや外傾して開く受け部上半を接合している。56は小型無頸の鉢である。内彎した深くて丸い体部を呈する。内傾する口縁端部は丸く収めている。平底の底部をもっている。57は有段口縁をもつ壺である。頸部下端を肥厚させ、口縁有段部下端を突出させている。58は球胴と考えられる体部に、突出した平底の底部を伴っている。59の体部は球胴を呈する。胎土が密で焼成が良好、外面はよく磨かれている。SD 02全域の上層下層から広範囲に亘って破片が出土した。60は突出した平底の底部をもつ。破損面はすべてまるく角がとれていて、破砕後もこの形で使用されていた印象を受ける。61は胴部上半部に最大径をもった倒卵形の体部に、平底を伴っている。口縁部上方の外反は弱く、口縁端部はやや丸く収められている。62は管状土鍾である。長さ 5 cm、幅 4 cm、口径 0.9 cmで、外面・内面ともにヘラナデ調整が施されている。

SD056(図版 51・63・69・図版 52・70・図版 122) 出土した破片点数は多いが、円形周溝状遺構の外側の周溝 SD 50の中では比較的遺物量は少なかった。鉢、壺、甕などの遺物が出土している。各器種とも大半は同一個体が破砕したものである。これらのうち図示し得たものは、高坏の脚 1点(63)、鉢 1点(64)、壺 3点(65・67)、甕 3点(68・70)である。63は膨らみがほとんどない柱状の脚部をもち、裾部で屈曲している。64は丸い体部をもち、頸部外面に擬凹線文を巡らせている。口縁端部外面には極弱い稜をもち、丸く収めている。65は突出した平底の壺底部である。底部内面中央は、深く窪んでいる。66は頸部に段を有し、細くて長い口縁部をもっている。口縁端部が欠損し、外面の風化が著しい。67は丸い体部をもち、頸部で鋭く屈曲し、口縁部は直線的に開いている。68は頸部で鋭く屈曲し、外方へ直線的に伸びて上方で外反する口縁部をもつ。口縁端部は面取りされている。69は、いはゆる「S字状口縁」をもつ甕である。70は頸部で鋭く屈曲し、やや直立気味に伸びて上方で外反する口縁をもつ。口縁端部は面取りされている。

SK001(図版 52・71・79・図版 53・80・84・図版 122・123) 出土した破片点数は多量である。上層からは小破片が密集していた。高坏、器台、鉢、壺、甕などの遺物が出土していて、各器種とも大半は同一個体が破砕したものである。これらのうち図示し得たものは、高坏 2点(71・72)、器台の脚部 1点(73)、壺 6点(74・78・80)、甕 4点(79・81・83)である。石製品(84)が出土している。71は中ほどで内側へかすかに屈曲する坏部で、口縁部先端の外面を面取り状にすぼめている。72は坏部底から、外反して開く脚で、裾部でさらに外反している。脚部は、面取りされている。73は受け部底から外反して開く脚である。74は口縁が内彎しながら開き、先端部を極わずかに屈曲させて丸く収めている。75は外傾、外反して伸びる口頸部をもち、口縁部先端に縁帯を作り出している。縁帯には 2個一組の様状浮文が貼り付けられ、

それぞれの棒状浮文の間には横位の一本描き沈線が上下に2本施されている。加飾は口唇部に及び、2-3mmの間隔で刻みが施されている。また一繋がりには伸びる口頸部内面には、なだらかな山形の凸帯を貼り付けて突出させ、有段口縁の内面の形状を作り出している。また79はSD003出土の破片と接合している。76は7とほぼ同様のもので、球胴と考えられる体部から鋭く屈曲して外方へ直線的に伸びる口頸部をもち、口頸部内面になだらかな山形の凸帯を貼り付けて突出させている。77は75・76とほぼ同様のもので、外反外傾して伸びる口頸部をもち、78の体部は球胴を呈する。鋭く屈曲する頸部は直立して伸び、上方で外反している。79の体部は倒卵形を呈する。頸部で鋭く屈曲し、外方へ伸びて上方で外反する口縁部をもち、口縁端部は丸く収められている。80は大型の甕で、球胴の体部に平底の小さな底部を伴っている。81は頸部で鋭く屈曲し、やや外方に伸びて上方で外反する口縁部をもち、口縁端部は面取りされている。体部外面はヘラケズリ調整が施されている。82は頸部で屈曲して直立気味に伸び上方で外反する口縁部をもち、口縁端部は面取りされている。83は胴部上半部に最大径をもった倒卵形の体部に、平底の底部を伴っている。頸部で鋭く屈曲し、やや直立気味に伸びて上方で外反する口縁部をもち、口縁端部は面取りされている。砥面をもち84は砥石である。上面を欠損しているものの、下面は砥石整形時の形が残っており、裏面から表面に向かい薄くなるよう作られている。砥面は表面全体に確認できる。表面中央には縦に延びる幅約8mm、深さ約5mmを測る断面形がV字状の溝があり、この周囲にもやや浅めで同様の溝が広がっている。石材は砂質凝灰岩である。

SK054(図版 53- 85・ 図版 123) 覆土中からは図示した89以外はわずかな破片が出土しただけである。89はSK038出土の高椀120と同類と考えられ、内面が黒色に処理されており、120の小型品と考えられる。

SK034(図版 55- 110-119・ 図版 124) 出土した破片点数は多量で、上層からは小破片が密集して出土した。高坏、器台、鉢、壺、甕などの遺物が出土していて、各器種とも大半は同一個体が破砕したものである。これらのうち図示し得たものは、高坏1点(110)、器台1点(111)、壺4点(112-115)、甕4点(116-119)である。110は坏部底と口縁部の境で屈曲し段をもつが坏部内面はゆるやかな曲線を呈する。口縁部はやや直線的に開き、脚部は外方へ強く開いている。111は屈曲するように外反する有段の受け部をもち、水平になった口縁部上段を先端部で再び内彎させている。口縁端部は丸く収められている。脚部は受け部底から直線的に開いている。112は口縁端部に縁帯を作り出したもので、縁帯に一本描き沈線、口唇部に刻みが施されている。他の例からみて縁帯には棒状浮文が貼り付けられていたと考えられる。113は球胴と考えられる体部から鋭く屈曲して外方へ直線的に伸びる口頸部をもち、口縁部先端に縁帯を作り出している。縁帯には2画一組の棒状浮文が貼り付けられ、それぞれの棒状浮文の間には横位の一本描き沈線が上下に2本施されている。加飾は、口唇部及び、2-3mmの間隔で刻みが等間隔に施されている。また口縁部内側になだらかな凸帯を貼り付けて突出させ、有段口縁の内面の形状を作り出している。また113はSK00から出土した破片との接合個体である。114は頸部で屈曲し直線的に伸びる口縁部である。115は強く外反する頸部をもち、有段口縁の外面上端には2画一組の円形浮文が貼り付けられている。器肉は厚手であるが、胎土は緻密である。116は頸部で屈曲して直立気味に伸び上方で外反する口縁部をもち、口縁端部は丸く収めている。117は胴部の上半部に最大径をもった小型の甕である。頸部で屈曲し、やや外方へ伸びて上方で外反する口縁部をもち、口縁端部がつまみあげられている。118は頸部で屈曲し、やや外方へ伸びて上方で強く外反する口縁部をもち、口縁端部は面取りされている。口径に対して口縁部が短い。119は頸部で屈曲し、やや外方へ伸びて上方で外反する口縁部をもち、口縁端部は面取りされている。

SK038(図版 56- 120~122・図版 124・125) 出土した破片点数は少量で、高坏、壺、甕などの遺物が出土している。各器種とも大半は同一個体が破碎したものである。これらのうち図示し得たものは、高坏 1点(120)、壺 1点(121)、甕 1点(122)である。120は椀形の深い坏底部に外反して伸びる口縁部をもっている。また坏底部から外反して開く脚部をもつ。坏底部と口縁部を分ける屈曲部の稜線は外面より内面のほうが高い位置にある。鉢の可能性も考えられるが、ここでは高坏として扱った。121の体部は球胴と考えられ、体部から屈曲してやや内傾気味に伸びるほどで外反する頸部をもつ。外方へ長く伸びる口縁部の内面には段が無くなつたから、外面の口縁部下端に段を有している。また口縁端部を外反させている。122の体部は胴部最大径を中位よりやや下方にもつた下膨れを呈する。頸部で屈曲して直線的に伸びる口縁部をもち、口縁端部は丸く収められている。

2号円形周溝状遺構

2号円形周溝状遺構を構成する各遺構(SD 255・SD 266)の出土遺物で、類別可能な遺物の総点数は 184 点を数え、各器種の割合は甕 53%、壺 8%、器台 13%、高坏 13%、鉢 13%である。

SD 255(図版 53- 86~90・図版 54- 91~96・図版 123・124) 出土した破片点数は多量で、高坏、器台、壺、甕などの遺物が出土している。各器種とも大半は同一個体が破碎したもので、遺存状態は良好である。これらのうち図示し得たものは、高坏 3点(86~88)、器台 3点(89~91)、壺 3点(92~94)、甕 2点(95・96)である。86は坏底部と口縁部の境に段をもっていると考えられ、口縁部は直線的に開いている。87は坏底部と口縁部の境に段をもち、口縁部はゆるやかに内彎しながら開いている。脚部は途中でゆるやかに外反している。外面、坏部内面は丁寧なみがかれ、赤彩が施されている。86・87東海系の高坏であろう。88は内彎気味に開く脚で、裾部で外方へ弱く屈曲している。非常に小型で、脚部径に対して器高が低い。89・90は受け部が内彎し、口縁端部を丸く収めている。受け部底から直線的に開く脚をもち、90は裾部で強く外反している。89・90はともに外面、受け部内面に赤彩が施されている。91はゆるやかに内彎して開く受け部をもち、口縁端部は丸く収められている。受け部底から直線的に開く脚である。92は有段口縁をもつ壺である。頸部がやや外傾して直立気味に伸び、口縁有段部下端を垂下させている。93・94は球胴と考えられる体部から鋭く屈曲し、外方へ直線的に伸びる口頸部をもち、口縁部先端に縁帯を作り出している。縁帯には2画一組の棒状浮文が貼り付けられ、それぞれの棒状浮文の間には横位の一本描き沈線が施されている。94の加飾は口唇部に及び、2~3mmの間隔で刻みが施されている。また94は口頸部内面になだらかな山形の凸帯を貼り付けて突出させている。95は下膨れの体部に、小さな平底の底部を伴っている。96は体部上半に最大径をもつ小型の甕で、頸部で屈曲、外反する口縁部をもつ。口縁端部はまるく収められている。

SD 266(図版 54- 97~105・図版 55- 106~109・図版 123・124) 出土した破片点数は多量で、北端部と南端部は特に遺物が集中していた。器台、鉢、甕などの遺物が出土している。各器種とも大半は同一個体が破碎したもので、遺存状態は良好である。これらのうち図示し得たものは、器台 6点(97~102)、鉢 3点(103~105)、壺 1点(106)、甕 2点(107・108)、蓋 1点(109)である。97は直線的に伸びる受け部をもち、端部は丸く収められている。脚部は受け部底から直線的に開き、裾部で屈曲、外反している。98・99はゆるく内彎する坏部をもち、口縁端部外面をすぼめるように面取りしている。脚部は受け部底から直線的に開き、裾部で屈曲、外反している。98は外面と坏部内面に赤彩が施されている。100はゆるく内彎する受け部をもち、口縁端部は弱く面取りされている。脚部は受け部底からやや内彎して開いている。101は受け部底から直線的に開く脚で、裾部で弱く屈曲している。102はゆるく外反する受け部をもち、口縁

部先端部は段を有し、すぼめるように上方へつまみ上げられている。脚部は受け底部からほぼ直線的に開いている。103は小型無頸の鉢である。内彎気味に開く体部をもち、口縁端部は直立し、丸く収めている。かすかに窪む平底の底部をもっている。104は内彎した深くて丸い体部をもち、平底の底部を伴っている。105は内彎気味に開く体部をもつと考えられ、底部有孔の鉢である。106は平底の壺の底部である。107は頸部で鋭く屈曲し、上方で外反する口縁部をもつ。口縁端部はつまみ上げられている。体部はほとんど欠損している。108の体部は球胸を呈する。頸部で鋭く屈曲し、外方へ直線的に伸びる口縁部をもち、上方でやや外反している。口縁端部は面取りされている。109は平らな頂部まで直線的に開く蓋のつまみである。

c 土 坑 ・ 溝

土 坑

SK041(図版 56- 123・ 124・ 図版 125) 甕 2点(123・ 124) を図示し得た。123は底部を欠損する。頸部はくの字状に屈曲し、口縁部にかけては緩やかに外反する。頸部から口縁部は短い。端部は丸くおさめる。肩部はなで肩で、胴部の最大径はほぼ中央部に位置し、球状を呈する。両面ともにハケメを施す。124は胴部を欠損する。頸部はくの字状に屈曲し、ほぼ直線的に立ち上がり口縁部に至る。端部は先細りで丸くおさめる。肩部がやや張り、胴部の最大径は中央部よりやや上方に位置するものと推測する。

SK059(図版 56- 125・ 図版 125) 鉢 1点(125) を図示し得た。体部上半を欠損する。全体的に摩滅を受けており、調整などは不明である。脚部は短く、緩く外反して端部に至る。端部は平坦面を持つ。時期については不明である。

SK068(図版 56- 126・ 127・ 図版 125) 甕 1点(127) と壺 1点(126) を図示し得た。127は口唇部面取りでややゆるく外反する。体部外面ハケ目調整の128は頸部がゆるく外反し口縁部はほぼ直立すると思われる。

SK212(図版 56- 128・ 図版 125) 器台 1点(128) を図示し得た。128は立ち上がり端部と脚部を欠損する。SI0の11とは異なる形態の裝飾器台である。受け部はほぼ直線的に端部に達する。端部は平坦面をもつ。内面には立ち上がりを貼り付けるが、外面にはミガキと赤彩を施す。類似する資料としてはSI0の3とSD027の55をあげることができるが、本遺跡では完形のもの出土していない。SI- 3の1を含めこれらは北陸北東部に通有する裝飾器台である。

SK225(図版 56- 129・ 130・ 図版 125) 鉢(129) ・ 壺(130) を図示し得た。129は粗雑なつくりで輪状の台を貼り付ける。体部上半を欠損するが、類似する資料として、SI5- 2(25) をあげることができ、口縁部には片口をもつと考えられる。130は胴部のみ残存する。長頸または短頸のものがつき、底部は丸底を想定する。胴部はやや扁平な形状を呈しており、最大径はほぼ中央部に位置する。外面にはミガキと赤彩を施す。

SK232(図版 56- 131・ 図版 125) 壺(131) を図示し得た。131は頸部から口縁部のみ残存する。頸部から口縁部にかけては緩やかに外反する。二重口縁状を呈する。これは二重口縁を作り出すために粘土を貼り付け、三角形に整形する。両面に黒色処理を施す。内面には剝離部分があり、そこにはハケメを確認でき、原型の上に粘土を貼り付けていることを確認できる。

SK246(図版 57- 132・ 図版 125) 壺 1点(132) を図示し得た。大きく外反して伸びる口縁部をもつ、口縁部下端外面に粘土を貼りつけて段を作り出して、口頸部内面に段をもたない。

SK250(図版 57- 133・ 図版 125) 器台(133) を図示し得た。133は脚端部を欠損する。脚部中央より

上部には3つの孔を穿つ。坏部はほぼ直線的に立ち上がり、端部は丸くおさめる。脚部は孔の部分から膨らむ。この器形は本遺跡では他に類例がない。

溝

SD070(図版 57- 134・図版 125) 鉢(134)を图示し得た。134は台付き・片口を伴うものである。体部は卵形を呈する。口縁部は内湾し、端部は内傾・平坦面をもつ。S15- 20の25は輪状の台であったが、134は平底の台である。片口も明瞭に確認でき、全体的に25より精緻なつくりである。調整はハケメを施す。

SD222(図版 57- 135・図版 125) 高杯 点(135)を图示し得た。裾部がやや太く裾部下端で強く外反する脚である。SI出土の高杯と類似する。外面磨減して調整は不明である。

d 性格不明遺構・杭列・整地層

性格不明遺構

SX261(図版 57- 136・137・図版 125) 裏 点(136・137)を图示し得た。136の口縁部はゆるく外反し口唇端部を丸く収める。137の口縁部はややつよく外反し、上方につまみ上げ、口唇端部は面取りである。

SX402(図版 57- 138・139・図版 125) 裏口縁 点(139)・器台 点(138)を图示し得た。139は端部面取りで口唇部を上方につまみ上げている。139は短脚で裾部が開く、受け部は有段で外反する。

杭 列

鴨杭列(図版 57- 140・141・図版 125) 裏 点(140)と壺底部 点(141)を图示し得た。140は口縁部がゆるく外反し、口唇端部は面取りだが丸く収める形に近い。141は、外面縦ヘラミガキ調整が入る。

2号杭列(図版 57- 142・図版 125) 器台 点(142)を图示し得た。おそらく器台の受け部であろう。有段で外反する。

整 地 層(図版 57- 143~145・図版 125)

整地層からは裏 点(145)、器台の脚 点(143)、壺の口縁(144)が出土している。143は受け部底が直線的に内傾している。脚部も受け部底から直線的に開いている。144は焼成もよく胎土も致密で外面に縦ヘラミガキ、内面に横ヘラミガキ調整が入る。143は布留型の裏の口縁か。

e 河川跡・包含層・耕作土

ここでは、河川跡、古墳時代前期の包含層、耕作土の順で述べる。

河川跡 図版 57- 146~152・図版 58- 153~170・図版 59- 171~180・図版 63- 226・図版 125- 126・129) 河川跡の遺物は、浅箱(59 39 10cm)で約3箱出土している。器種は、高坏、器台、鉢、壺、裏、蓋と遺構内とほぼ同様の器種組成を示す。そのうち掲載したものは、146から180の39個体である。以下、掲載の順にその詳細を述べる。

蓋は、146・147の2点である。いずれもA類で頂部を細い柱状に仕上げたものであり、外反して伸びる体部を有すと思われる。高坏は、148~152の5点である。148は短脚で、坏部が有段の鉢状を呈するものか。149は、内外面に赤彩が施されている。150は、脚部の中ほどの部分が膨らみ、脚の裾部下端が、「はの字」状に開く。調整は、丁寧な縦のへら磨きが見られる。畿内系高坏であるが、北陸北東部で周知されているタイプか。151は、脚部が踏ん張り、外反して開く、F系の東海系と在地系を折衷した高坏であろう。152は脚裾部が、すばまり気味である。これも、東海系であろう。器台は、153~159・162の8点である。153

は、受け部底より外反して開く脚部を有し、口縁端部を丸く収める。154は、受け部底より直線的に開く脚部を有す。155・154は、受け部底より外反して開く脚部を有す。159は、脚部の上部から裾部に丁寧な縦へら磨きと赤彩が施されている。157・158は、短脚で裾部が広く開く。157は、受け部と脚部外面に赤彩が施されている。158は、裾部の接地部が広い。159は、北陸北東部に通有する裝飾器台である。受け部が、はずれており、貼り付けるための円形に細い溝を二重にめぐらせた工具痕が、観察された。鉢に分類したのは、160・161・164～168である。160は、短頸の精製鉢で内外面にいいないなへら磨きが見られる。161は、内外面に丁寧なへら磨きがなされ、赤彩がなされている。164は、非精製で外面に、煤が付着している。162は、受け部外面が若干垂下しているタイプで受け部内面、外面、脚部に丁寧な細かいへら磨き調整が施されている。169は、内面に黒色処理が施されている。167・168は、各々丸底、平底の有孔の鉢である。甌として使用したものか。168は、ミニチュアの鉢とした。手づくねである。壺は、163・169～173・179である。163は有段で頸部が短い。169は、内外面赤彩で、器肉が非常に薄く、調整は、外面は縦、内面は横に、丁寧なへら磨きが入る。170は、胴部中央が張り出した球脚で長頸の壺であろう。外面に横・斜めの丁寧なへら磨きがある。171・172は、ともに口縁下段が短い、172の方が、口縁端部への開きが大きい。171は、外面に赤彩が施され、内面には、丁寧な横へら磨き調整が施されている。173は、口縁内面に丁寧な横へら磨き調整が施されている。179は突出した平底の底部である。174から178は、甌とした。174・179は、口唇端部をつまみあげている。176は、器肉も薄く、焼成も良好でシャープな造りであり口唇端部を丸く収めるタイプ、177は、東海系S字状口縁の横壺と思われる。178は、口唇部面取りで、面の中央にわずかな窪みを残す。180は、土鐘である。縦へら削り成形が施されている。なお、河川跡出土の遺物は、遺構出土の遺物と器種組成、年代において密接な関連があると思われることから、明確に判別できた器種別の破片数、甌口縁部の形態別の数などを最後にあげておく。内訳(単位は片)は、高坏14器台146 壺78(口縁43・底部35) 鉢97 甌682(口縁582・底部100)であり、甌口縁部の形態別の内訳は、口唇部端部面取りの形態337 同丸く収める形態245である。

包含層(層)(図版 59- 181～185・図版 126) 181は器台の受け部が、外反する小型器台が、182は、精製で短頸の鉢で、183は、いわゆる手づくねのミニチュアの鉢である。184は、外面赤彩の鉢か壺であろう。鉢だとすると底部が小さい平底でD類であろうが、185は、口縁端部が面取りされた甌である。

耕作土(層)(図版 59- 186～189・図版 126) 186～188は、蓋である。186は、下端内部にかえりを持たないもので、頂部を細い柱状に仕上げたものであり、外反して伸びる体部を有す。187・188は、のかえりを有すものである。189は受け部有段の小型の器台で口唇端部がほぼ直線的に上に伸びるものである。

2) 建築材他

建 築 材

1. 写円形周溝状遺構に伴う柱穴からは根太・根がらみが、SB2・4・5・7～10・12・13からは柱材が、1. 写杭列からは杭材がそれぞれ出土した。

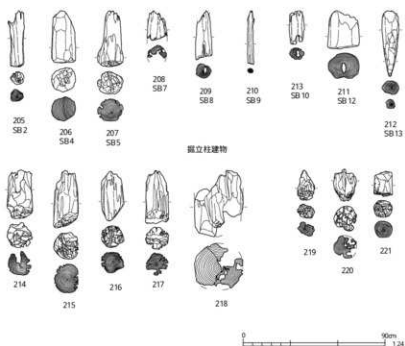
根がらみ(図版 60- 192～194・図版 127) 写円形周溝状遺構内のP26から192が、P29から193・194が出土した。3点とも柱穴の底面に横たわった状態で出土しており、湿地において柱材等の沈下を防ぐ効果があったと考えられる。192は腐植が顕著であり、加工痕等は認められない。樹種はトネリコ属である。193・194も腐植が進み加工痕は不明瞭だが、194の表裏両面はやや平坦であり、稜も比較的明瞭な事から、人工的な加工が施されている可能性がある。2点ともクリを使用している。

根太(図版 60-195~204・図版 127) 鴨円形溝溝状遺構内の P029から 195~200が、P048から 201・202が、P073から 203・204が出土した。10点全てが柱穴の底面に平行に横たわった状態で出土しており、柱材等上部の構築物の沈下を防ぐ役割を果たしていたと考えられる。199・202など遺存状態の比較的良好なものもあるが、全体的に腐植が顕著であり、加工痕等は確認できなかった。一見して木材ではなく木の枝を用いているように見えるが、樹種は全てヤマグワであるなど統一性がみられ、他の木材を加工した残りで適した部分が、根太として使用されている可能性が考えられる。

柱材(図版 61-205~213・図版 127・128) 今回の調査で確認されている掘立柱建物では柱材の遺存状態が良好のものが多く、1棟中9棟で出土している。各掘立柱建物から一点を選別し実測を行ったが、実測対象以外の柱材も含め全体的な特徴としては、SB13のものを除き、接地面が平坦に加工されていることが挙げられる。樹種はトネリコ属・コナラ節等、建築材によく見られるものを使用している。209はSB2のP33より出土した。枝の根元を残したまま柱材として使用されている。接地面は腐植が進むものの中央に稜が走り、大きく分けて2方向から平坦になるよう加工を施したと考えられる。樹種はコナラ節である。209はSB4のP46より出土した。接地面中央部には加工痕が認められ、2方向から平坦に加工している。他の柱材が丸材であるのに対し分割材を用いているが、側面の腐植が激しく加工痕は確認されなかった。樹種はトネリコ属である。207はSB5のP45より出土した。側面上部は腐植が顕著である。接地面ではほぼ全面に加工痕が残り、2方向ないしは3方向より、平坦となるよう加工を施している。樹種はコナラ節である。208はSB7のP46より出土した。側面・接地面共に腐植が酷く、加工痕は全く認められない。樹種はコナラ節である。209はSB8のP28より出土した。腐植が進むが、接地面では僅かな範囲であるが、平坦に加工した痕が認められた。また接地面中央には幅約12mの切り込みがあり、腐植ではなく人工的な加工である可能性がある。樹種はコナラ節である。210はSB9のP115より出土した。211はSB12のP013より出土した。側面・接地面共に腐植が進んでいる。接地面に僅かながら加工痕と思われる稜が残るが、方向等は確認できなかった。樹種はヤマグワである。212はSB13の中央列の北から2番目の打ち込み柱である。接地面に加工痕が明瞭に残っており、チョウナのような工具で上部から先端部へ大きく面取りを行っている。面数は6面あるが、特に意識せず無造作に面取りを行ったように思われる。形状と出土状況から見て、打ち込み柱と考えられる。また柱材の状態や加工に使用された道具から、古墳時代以降の可能性もある。樹種はエゴノキ属である。213はSB10のP103より出土した。他の柱材と比べ小振りである。側面・接地面共に腐植は顕著で、接地面中央の穴の傍に僅かながらの加工痕しか認められなかったが、この加工痕より接地面は平坦に加工されていたことが判明した。樹種はトネリコ属である。

杭材(図版 62-214~221・図版 128) 鴨杭列から42点、鴻杭列から25点の杭材が出土した。その中より遺存状態が比較的良好なものを、鴨では5点、鴻からは3点を選別し実測を行った。腐植が顕著である218を除き、殆ど全ての接地面に加工痕が確認されて、その方向は一定で、側面から接地面の稜に向かっており、稜を境に2面の切り出し面を持つ。

214~218は鴨杭列から出土した。214は接地面中央に加工痕が残り、接地面の稜に向かい、同一の工具で2方向から切り出したものである事が確認された。稜を境として一方の面が狭くなっているが、これは木を切り出す際に倒す方向を決める切り込みを入れた痕と思われる。219は接地面中央部が欠損するものの、他の部分で明瞭な加工痕が確認された。214と同じく2方向から切り出しており、やはり稜を境として一方の面が極端に狭くなっている。使用工具は刃幅約43mの鉄斧と考えられる。216は中央部に一文字状の欠損があるものの、側面から欠損部に向かう方向での加工が確認できた。先の2点と比べ、欠損部を境



第120 柱材・杭材

とした面の幅はほぼ均等であり、接地面が楔形を呈す杭材である。215と同じく、切り出しには刃幅約43cmの鉄斧を使用しているものと考えられる。側面に僅かながら樹皮が残存する。217は接地面中央に、切り出し時にできたと思われる段差があり、稜を境に反対側の面が先に切り出されていると考えられる。使用工具は215と同じく刃幅約43cmの鉄斧であろう。218は「鴨」杭列の中で、列の途切れる部分に使用されていた、ひときわ大きな杭材である。全体に腐植が激しく、加工痕は全く認められなかった。

219～221は「鵝」杭列から出土した。219は接地面全体で加工痕が明瞭であり、稜を境に一方の面が狭くなっている。また稜が他の杭材と比べ鋭く、切り出した後に形を整えた可能性がある。切り出しには幅42cmの鉄斧を使用していると考えられ、他の杭材と比べ、加工面の断面が階段状となる部分が多く見られる。220は若干腐植が進むが加工痕は明瞭で、稜を境にした2面の幅・角度はほぼ等しい。221は接地面がほぼ平坦に見えるが、加工痕は他と同じく刃幅42cmの鉄斧と考えられるものであり、意識して平坦にしたのではないように見える。「鴨」・「鵝」杭列で出土した杭材の中で、このように平坦な接地面を持つものは221のみである。3方向から切り出されており、一番狭い三角形の面は、おそらく切り落とし痕を整えたものであろう。側面では樹皮の残存が2か所で確認された。

「鴨」杭列と「鵝」杭列の杭材を比較すると、径の大きさが列により違いがあるように感じるが、図版42・44・49杭列の個別遺構図の断面図を見ると、「鴨」杭列においては場所により材の使い分けを行っており、遺存状態が良く実測対象となり得た材が、径の大きい杭材を使用している部分に集中していたためである。「鴨」杭列の他の部分では、「鵝」杭列と同程度の径の杭材が使用されている。また「鵝」杭列の杭材は、「鴨」杭列のものよりも遺存状態が良好であった。

杭材の特徴としては、接地面の形状が稜を境として加工の幅・角度に偏りがみられるものと、ほぼ均等でくさび型のもの2種類に分けられる。加工幅に違いが見られるのは、片方が切り出す際の方向付けにされたと考えられ、またくさび型のものはその中央に切り落とし痕が残っていない事などから、前者が樹木

を切り出した状態のままで使用しているもの、後者は切り出した後に加工されたものである可能性がある。杭材を切り出した工具は加工痕より、218を除く 3点全てで刃幅約 4.2m の鉄斧を使用しているものと考えられる。また杭材の樹種は 8点全てがハンノキ部であり、樹種鑑定に出したものの以外も全て同じ樹種の可能性がある。

その他の木製品（図版 60・190・19 図版 127） 2点とも河川跡の 3層から出土している。190は板材である。両端部の幅に差があり、細い方は欠損している。全体的に丁寧な加工が施されている。端部幅広の方には先端部に凹み痕が認められ、組み合わせで使用した可能性がある。樹種はスギである。191は不明木製品である。半分が欠損しており、中央の抉りは、元は方形の孔であったと予想され、掘削道具等の把手であった可能性がある。樹種はマツ属である。

C その他の時代の遺物

本遺跡から出土した古墳時代前期以外の遺物もしくは、明確に古墳時代前期の遺物として認定しえない遺物のうち、土器は、珠洲焼の播鉢、珠洲焼の甕、弥生中期の壺、甕口縁である。石器は、緑色凝灰岩（グリーンタフ）の石核、砥石、剥片、縄文の石鏃である。ほかに古銭 2枚が出土している。

土師器以外の土器（図版 63・222～226・図版 129） 弥生式土器、珠洲焼が出土している。222は珠洲焼の播鉢である。節目は、一単位 1本で幅 2.7m を測る。口縁端部の形状から、時期は吉岡康輔の編年区分 [吉岡 1994] での 期と考えられる。223は珠洲焼甕の胴部片である。内面に指頭痕、外面に平行タタキ痕が認められる。時期は不明である。224は珠洲焼甕の胴部片である。内面には指頭痕、外面に平行タタキ痕が認められる。厚みがありしっかりとした印象を受け、大型の甕の破片と考えられる。時期は不明である。225は弥生式土器の壺である。口縁端部はやや外反気味であり、底部は平底である。口縁部には縄文が施されている。胴部には直線状と連弧文状の文様が磨消縄文によって擦出され、微かであるが赤彩も残る。沈線の太さは約 2mm と細く繊細な印象を受ける。以上の特徴から、225は主に南東北に分布範囲を持つ南御山 2式であると考えられる。越後平野でも阿賀野川流域の安田町六野瀬遺跡、中条町乙遺跡、新潟市石動遺跡等数遺跡で出土例が確認されている。[石川 2000] 226は、頸部の屈曲が緩やかで口唇部に薄く波線状に緑帯を貼り付けた後に刻みが施され、内外面にハケ目調整が施されている。本遺跡の他に下谷地遺跡・平田遺跡のなどに出土例がある小松式期の甕の口縁としておけるが、東海地方から南関東に特有の形態で、相模湾沿岸では 2世紀代後半から 4世紀代前半までの出土例がある、ハケ目付甕 A と呼ばれるものである可能性もあろう。[赤塚 1996]

銭貨（図版 63・227～228・図版 129） 耕作土より 227・228の 2点が出土した。形状はやや横に広がる円形である。表面の文字はやや摩滅し判別し難いが、2点とも篆書で「元豊通宝」とあり、裏面は無文である。元豊通宝は初鋳年が 1078年の北宋銭であるが、日本で模倣し流通したものが数多くあり、この 2点がどちらであるかは不明である。素材は銅である。

石製品（図版 63・229～23 図版 129） 包含層、耕作土より砥石、石核が出土した。229は自然礫と考えられるが、中央が括れ、特徴的な形状を呈している。青田遺跡 [荒川 2004] に異形礫とした 群があり、ここでも掲載した。石材は石英である。230は砥石片である。層より出土しており、砥面が 6mm 程度残存している。石材は凝灰岩である。231は石核である。表面・裏面共に原石の状態から、全体的にある程度加工が施されている。石材は緑色凝灰岩で、玉等の石製品の素材として使用したであろうが、素材を割り取ったにしては剥離が細かく、何らかの大型製品の製作途中であった可能性が考えられる。232は砥石で

ある。自然石をそのまま砥石として使用している。表面・裏面・下面を砥石として使用している他、敲打痕も認められる。石材は凝灰岩である。

石器(図版 63・233-237・図版 129) 遺構内・包含層より石鏃・剥片が出土した。石鏃は遺構より 1点、包含層から 5点出土しており、そのうちの 4点を図示した。233は包含層より出土した剥片である。表面と側面に調整の剥離を施した様に観察できるが、石器として使用されていたかは不明である。石材は頁岩である。234は完形の有茎式石鏃である。側面は外側にむけて緩やかなカーブを成し、表面と裏面左側は丁寧な剥離調整が施されているが、裏面の右の基端部では多少乱雑である。石材は赤色チャートである。235は有茎式石鏃で、一方の基端部と茎部を欠損している。他の石鏃と比べ鏃身幅は細く、側面は内側に向けて緩やかなカーブを成す。丁寧な剥離調整が施されている。石材は頁岩である。236は有茎式石鏃で、一方の基端部を欠損する。基端部と茎部の間には大きな抉りが作られている。側面は235と同じく内側にカーブを成す。表面は丁寧な剥離調整が施されており、裏面にはやや大ぶりの剥離が残る。石材は頁岩である。237は凹基式石鏃である。器厚が他の石鏃に比べ薄く、小振りな印象を受ける。先端部は尖っておらず、基端部は左右で形状が異なる。剥離は他の石鏃に比べて乱雑に残り、製作途中である可能性がある。石材はチャートである。

第 章 下層の調査

1 調査の概要

下層の調査は上層の調査が終了したグリッドから順次行った。当初下層の調査は、20～25M～Uグリッド付近の2050mについては包含層を全面発掘して調査を行い、その他の範囲については約3割を目途とした部分調査を行うという設計であった。しかし、上層の調査の際に、20mごとに縄文時代の遺構確認面である層まで東西・南北に幅50m程度のトレンチを掘削しており、その際層位的に整合性のある縄文時代の遺物は出土せず、包含層の存在も確認されなかった。また、遺構は平面や土層セクションの観察においても検出されなかった。それゆえ、下層の調査は埋文事業団の指導により、全体の約3割を目途とした部分調査に切り替えた。調査は第1窓のようなトレンチを設定して行った。トレンチ幅はバックホーを使用する関係で6mに設定し、約20m間隔で南北方向に8本設定した。トレンチ番号は調査区の東端をトレンチ1とし、西に向かって順番に番号をつけた。トレンチの掘削深度は地表面から平均して15m程度とし、層相当層が確認できるまで掘削を行ったが、遺構・遺物の検出はなかった。

2 調査の経過

トレンチ1は16Wグリッドから19Wグリッドまで約35mを測る。掘削深度は平均して標高175mまでである。標高22m付近から厚さ25m程度の層厚でグライ化した土が相当層が堆積していたが、表土付近から10m程度の厚さでガツボが広がっていた。遺構の検出、遺物の出土はなかった。

トレンチ2は17Uグリッドから21Uグリッドまで約40mを測る。掘削深度は平均して標高16mまでである。標高22m付近には相当層が広がっていた。標高15mまで部分的に掘削したところ灰白色粘土層を検出した。灰白色粘土層には自然と思える炭化物が多数混入していた。遺構の検出、遺物の出土はなかった。トレンチ1から2にかけては、広範囲にガツボが広がっていることが確認できた。(図版117)この付近は水はけが悪く、土地改良前には沼状になっていたという。

トレンチ3は20Sグリッドから27Sグリッドまで約75mを測る。掘削深度は平均して標高22mまでである。標高22mまで掘削した時点で、相当層が検出された。相当層上面には自然の樹木多数が検出された。グライ化が著しい。遺構の検出、遺物の出土はなかった。

トレンチ4は21Qグリッドから31Qグリッドまで約70mを測る。掘削深度は平均して標高20mまでである。標高22mで相当層が検出された。遺構の検出、遺物の出土はなかった。

トレンチ5は22Oグリッドから31Oグリッドまで約90mを測る。掘削深度は平均して標高18mまでである。標高18mで相当層が検出された。遺構の検出、遺物の出土はなかった。

トレンチ6は26Mグリッドから32Mグリッドまで約65mを測る。掘削深度は平均して標高14mまでである。標高14mで相当層が検出された。遺構の検出、遺物の出土はなかった。

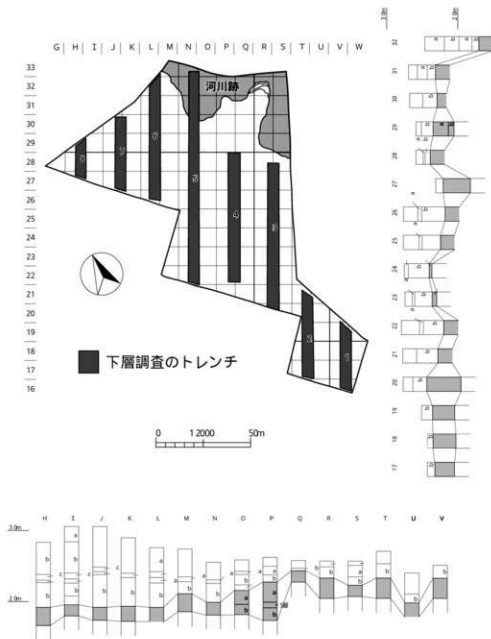
トレンチ7は27Kグリッドから31Kグリッドまで約40mを測る。掘削深度は平均して標高14mまでである。標高14mで相当層が検出された。27Kグリッド付近の標高16mにおいてガツボ上の落ち込みが見られた。

埋没河川の可能性もある。相当層上面においては、自然の樹木多数が検出された。31Kグリッド付近においては、直径30mの樹木が80mの間隔で南北に横たわっていた。江戸時代から明治時代にかけて水田の水門などの可能性もある。遺構の検出、遺物の出土はなかった。

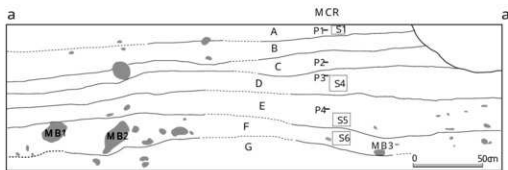
トレンチ 8は28グリッドから29グリッドまで約20mを測る。掘削深度は平均して標高19mまでである。標高19mで相当層が検出された。遺構の検出、遺物の出土はなかった。

トレンチ 3・4・5付近には、表土から50m程度掘削を行ったところで、層相当層に自然の樹木が多数埋没している状況が確認された。また、それに伴う自然の炭化物層が所々に見られた。

トレンチ 6・7・8付近においては、層相当層付近で広範囲にガツボが発達しており、トレンチ 3・4・5と同様に自然の樹木が多数埋没しているのが確認された。また、昭和30年代に盛んにおこなわれた油田探査のためのボーリング跡が数か所検出された。



第13図 下層調査全体図



第16図 河川内堆積物の縦断セクション及び分析試料採取階準（ハッチングは木材化石）

中一細粒砂、その上位は②の堆積ユニットからなる。各ユニットの下部は灰色中粒砂、上部は灰色シルト質中一細粒砂よりなり、直径716cmの木材化石や植物遺体を多く含む。木材化石は特に南側で多く含まれる。E層の最下部は灰色粗一中粒砂からなり、上方に510nmの木片が多く含まれる。その上位は④の堆積ユニットからなり、各ユニットの下部は灰色中一細粒砂、上部は植物遺体を多く含むオリ・黒色有機質シルトないしシルト質中一細粒砂などからなる。各ユニットはMCR地点付近で明瞭で、層厚は1540mである。D層の下部は灰色シルト質中粒砂、上部はオリ・黒色有機質シルト質中粒砂からなり、直径12mの木材化石や種実類を多量に含む。本層は北側で厚くなる。C層は下部に灰色中一粗粒砂がレンズ状に分布し、上部は黒褐色有機質細粒砂質シルトよりなり、灰色中粒砂がブロック状に混入し12mの木材化石を少量含む。B層は南側で厚く、③以上の堆積ユニットからなる。各ユニットの下部は灰色極粗一粗粒砂ないし中一細粒砂、上部は黒褐色有機質シルト質中粒砂ないし有機質砂質シルトからなる。MCR地点では上位のユニットは不明瞭で灰色中一細粒砂に、黒褐色有機質シルト質中一細粒砂がレンズ状ないし不定形に混入する。A層は黒褐色有機質シルト質細粒砂からなり、木屑や繊維状の細かな植物遺体を多量に含む。

C 分析方法と結果

河川内堆積物には珍しい種実類が含まれていたが、異地性の可能性も否定できない。こうしたことから現地性と異地性を検討するため、流水中の挙動が異なる種実類、花粉、木材の各部位の植物化石群の調査を行うことにより総合的に検討した。さらに、植物の各部位の挙動と関わる堆積物の特性を明らかにするため、大型植物化石と同試料で粒度組成の調査も平行して行った。

1) 花粉化石群

花粉化石群の調査は4層で行った（第15・16図）。花粉化石の抽出は、試料約1gを秤量し体積を測定後、10 KOH（湯煎約15分）- 傾斜法により粗粒な植物遺体および砂を取り除く - 48 HF（約15分）- 重液分離（比重215の臭化亜鉛）- アセトリシス処理（濃硫酸 1 無水酢酸 9 の混液で湯煎 5分）の順に処理を行った。プレバラ - ト作成は、残渣を適量に希釈しタッチミキサ - で十分攪拌後、マイクロビベットで取りグリセリンで封入した。また、堆積物の性質を調べるために、花粉分析層率において有機物量、泥分（シルト以下の細粒成分）砂分量および生業の指標となる微粒炭量について調査した。有機物量の変動については強熱減量を測定した。強熱減量は、るつぼと乾燥試料約2gの質量をはかり、るつぼを電気マッフル炉内に置き750 で 3時間強熱し、強熱による減量を乾燥重量百分率で算出した。微粒炭量は、

No	層位	分析試料の特徴	堆積物の組成 (重量%)				基礎砕屑物の粒度特性	
			細砂	砂	泥	植物遺体 強熱重量	平均粒径 m	分極度 φ90
S1	A	細かな植物遺体を多く含む黒褐色有機質シルト質細粒砂	00	41.2	7.0	51.8	269.015	0.81
S4	D	植物遺体を含むオリ・ブ黒色有機質中一細粒砂	00	73.2	3.0	23.9	200.025	0.80
S5	E	植物遺体を含む灰色中一細粒砂	00	85.7	2.4	11.9	190.027	1.11
S6	F	植物遺体を多く含む灰色有機質中一粗粒砂	0.4	60.7	2.0	37.0	127.041	-
P1	A	黒褐色有機質シルト質細粒砂	00	57.1	25.7	17.2	-	-
P2	C	黒褐色有機質細粒砂質シルト	00	29.4	52.5	18.1	-	-
P3	D	オリ・ブ黒色有機質シルト質中一細粒砂	00	63.8	24.7	11.5	-	-
P4	E	オリ・ブ黒色有機質細一中粒砂質シルト	00	42.7	38.0	19.3	-	-

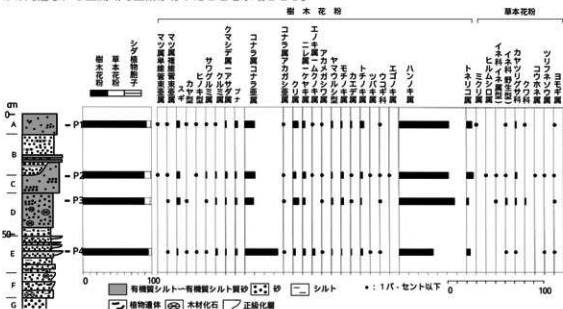
第 2 表 大型植物化石分析 S および花粉分析 P 試料の堆積物の特徴

デジタルカメラでプレバラ - トの顕微鏡画像を取り込み、画像解析ソフトの NIH Image で微粒炭の水平投影面の積算面積を測定した。

分析試料は各層内で相対的に泥質な層準を選んで調査した。分析層率の有機物量は 12.19%、泥分が 25.53% (第 2 表、第 1 図) と流速がほとんど無いような環境で堆積したと考えられる。

河川内堆積物より産出した分類群のリストとその個数を第 3 表に、花粉分布図を第 1 図に示す。出現率は、樹木は樹木花粉、草本・胞子は花粉胞子数を基数として百分率で算出した。図表中で複数の分類群をハイフンで結んだものは、分類群間の区別が明確でないものである。花粉の顕微鏡写真に示した AFRMY 番号は単体標本の番号を示し、これら標本は古代の森研究吉に保管してある。

産出傾向は、下部でコナラ亜属の頻度が高いものの概ね同様な組成を示す。すなわち、ハンノキ属が優占しない高率に占め、落葉広葉樹のコナラ亜属、クリ属、ニレ属・ケヤキ属、トチノキ属、トネリコ属、および針葉樹のスギなどを伴う。高率に占めるハンノキ属やトネリコ属は、周辺で湿地林を形成していたと考えられ、これらを除いた他の分類群の組成ではクリ属が 4.16% と比較的多く占め目立つ。クリ属花粉は虫媒花で広域に散布しにくい、普通、近接して生育していない場合は低率である。また、草本花粉は稀であるが、抽水植物のミクリ属やコウホネ属、浮葉植物のヒルムシロ属、およびイネ属型花粉が僅かに産出した。一方、微粒炭量は堆積速度が不明なため詳細な検討はできないが、 $27.9 \text{mm}^2/\text{cm}^3$ と少ないものの周辺ないし上流域で生葉があったことを示唆させる。



第 1 図 河川内堆積物の主要花粉分析分布
(出現率は、樹木花粉数、草本・胞子は花粉胞子数を基数として百分率で算出した)

1 道端遺跡の河川内堆積物から産出した植物化石群

和名	学名	P1	P2	P3	P4
樹木					
モミ属	<i>Abies</i>	1			
マツ属単葉種系属	<i>Pinus subgen. Haploxylois</i>	3	2		
マツ属複葉種系属	<i>Pinus subgen. Diploxylois</i>	1	2	3	3
マツ属(不明)	<i>Pinus (Unknown)</i>		1	1	
コウヤマキ属	<i>Sciadopitys</i>	1			
スギ	<i>Crypsomeria japonica</i> (L.f.) J.D. Don	20	17	12	5
カヤ型	<i>Torreya</i> type	1	1	1	1
ヒノキ型	<i>Chamaecyparis</i> type	2	1		2
サウダルミ属	<i>Piceocarya</i>	5	6	2	2
ケルミ属	<i>Juniper</i>	2	6	4	10
クマシダ属 - アサダ属	<i>Carpinus - Quercus</i>	9	12	4	5
カバノキ属	<i>Betula</i>	2	3	2	1
ハンノキ属	<i>Alnus</i>	318	271	197	171
ブナ	<i>Fagus crenata</i> Blume	18	10	7	10
イヌブナ	<i>Fagus japonica</i> Maxim.	1			
コナラ属コナラ亜属	<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>	63	57	32	163
コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	2	1	2	4
クリ属	<i>Castanea</i>	37	19	21	12
シイノキ属	<i>Castanopsis</i>	1		1	
ニシキ属 - ケヤキ属	<i>Ulmus - Zelkova</i>	17	20	10	15
エノキ属 - ムクノキ属	<i>Celastris - Aphananthe</i>	4	1		15
ヤドリギ属	<i>Morum</i>				
ザンショウ属	<i>Zanthoxylum</i>	1			1
ユズリハ属	<i>Aspidophyllum</i>	4	3		1
アカメガシワ属	<i>Mollisia</i>	2	2	1	3
ヤマウルシ型	<i>Rhus trichocarpa</i> type	12	7	6	5
モチノキ属	<i>Ilex</i>	10	15	10	5
ニシキギ科	Celastraceae			1	
カエデ属	<i>Acer</i>	11	5	3	6
トチノキ属	<i>Aucularia</i>	24	13	5	12
クロウメモドキ科	Rhamnaceae	1	2		
ブドウ属	<i>Vitis</i>		2	1	
ツタ属	<i>Berberidaceae</i>			2	1
シナノキ属	<i>Tilia</i>				1
ツバキ属	<i>Camellia</i>		1		1
ウコギ科	Araliaceae	3	2	2	2
ミズキ属	<i>Cornus</i>				1
エゴノキ属	<i>Syrinx</i>		1		
トネリコ属	<i>Fraxinus</i>	36	39	9	20
ガマズミ属	<i>Ulmus</i>		1	1	
草本					
ミクリ属	<i>Sporogonium</i>	2			
ヒルムシロ属	<i>Poastrum</i>		1		
イネ科(イネ属型)	<i>Gramineae (Cypera type)</i>			1	
イネ科(野生型)	<i>Gramineae (Wild type)</i>	3	3	8	4
カヤツリグサ科	Cyperaceae	9	13	6	3
ユリ科	Liliaceae	1			
クワ科	Moraceae	1		5	
クワ科 - イラクサ科	Moraceae - Urticaceae				1
タゲ属サナエダ節 - ウナギツカミ節	<i>Polygomon sect. Persicaria-Echinocaulon</i>	1	2		1
アザケ科 - ヒユ科	Chenopodiaceae-Amaranthaceae			1	
コウホネ属	<i>Nyctar</i>		4		
キンボウゲ科	Ranunculaceae	2			
ユキノシタ科	Saxifragaceae	13	21	6	5
バラ科	Rosaceae				1
マメ科	<i>Lepidimnaceae</i>		2		
ツリフネソウ属	<i>Asplenium</i>		2		1
ヨモギ属	<i>Artemisia</i>	6	2	3	3
シダ植物					
ゼンマイ属	<i>Osmunda</i>	7		2	
他のシダ植物孢子 樹木花粉数	other Pteridophyta	7	6	7	4
樹木花粉数	Arboreal pollen	611	524	340	478
草本花粉数	Nonarboreal pollen	39	54	30	19
シダ植物孢子数	Fern spores	7	6	9	4
花粉・孢子数	Pollen and Spores	657	584	379	501
不明花粉	Unknown pollen	15	10	8	5
樹木花粉量(粒数 cm ⁻³)		53600	77690	15770	9910
樹木花粉量(m ³ cm ⁻³)		67	97	51	27

第3表 河川内堆積土より産出した花粉化石の組成表

2) 大型植物化石群

a 大型植物化石群の記載

大型植物化石群の調査はS1 S4 S5 S6の4層で行った(第14・15図)。各試料はブロックで採取し

分析に供した。大型植物化石の抽出は、試料の湿重を計り、5mm、1mm、0.25mmの篩を用いて水洗選別した。各篩の残渣から実体顕微鏡を用いて同定可能な部位を選別し、観察および同定を行った。種実類は60アルコール液浸標本にして古代の森研究室に保管してある。

産出した分類群を利用しない有用植物(第4表)とそれ以外の植物(第5表)に分けてまとめた。表中の個体数は産出した完形ないしほぼ完形数、()内は破片数である。

第4表には栽培植物、利用された痕跡のある植物および有用植物を示した。栽培植物はイネとエゴマ近似種を産出したが13個と僅かである。実を利用した痕跡のある植物としては、種実類が破片として多く産出したタムシバないしコブシ、アカメガシワ、カラスザンショウ、トチノキ、クマヤナギ属、ブドウ属、ミズキ、エゴノキ、ハクウンボクなどがある。これらは壁が硬くて厚く破片になりにくい種類で、特にカラスザンショウとハクウンボクは硬く厚い果皮であるため強い力で打撃を受けないと破片にならない。こうしたことから、これら種実類は人が何らかに利用した後の生活ゴミと考えられる。また、利用の痕跡はないが有用植物として、コナラ、ナラガシワ、クワ属、キハダ、マタタビ、ニワトコなどが産出した。これら種実類の層位的産状はS4~S6では概ね同様で、S1はわずかにコナラとクワ属を産出したのみであった。S1は露頭での観察の際に肉眼で認められる植物化石は確認できず、細かい木屑や繊維状の植物遺体が多く含まれていた。

利用しない有用植物のうち、食用の可能性があるのは甘みの強いムクノキ、クワ属、ヤマブドウ、ミズキと、縄文時代から植物食とされているコナラ、ナラガシワ、トチノキである。他にタムシバ、サンショウ、カラスザンショウ、キハダ、クマヤナギ属、ケンボナシ属、マタタビ、ニワトコは薬用として利用可能と考えられる。また、アカメガシワは赤色染料抽出植物、エゴノキ、ハクウンボクは灯油採取植物として知られている。

分類群	試料番号 産出部位	S1 S4 S5 S6			
		100g	1050g	1960g	2500g
栽培植物					
イネ	<i>Oryza sativa</i> L.			13	
エゴマ近似種	<i>Perilla</i> cf. <i>fontescirensis</i> Lim. & Britton, var. <i>japonica</i> of Hassk. & Hara				1
実を利用した痕跡のある植物					
ムクノキ	<i>Aphananthe aspera</i> (Thunb.) Planch.			1	
タムシバ	<i>M. sulcifolia</i> (Sieb. et Zucc.) Maxim.			5	
タムシバまたはコブシ	<i>M. sulcifolia</i> (Sieb. et Zucc.) Maxim. and/or <i>M. kobus</i> DC.	3	8		3
アカメガシワ	<i>Mollera japonica</i> (Thunb.) MacL. Arg.	632	1350		152
カラスザンショウ	<i>Z. ailanthoides</i> Sieb. et Zucc.	410	624		9
トチノキ	<i>Artocarpus subrotundus</i> Blume			1	4
クマヤナギ属	<i>Berberis</i>			6	1
ケンボナシ属	<i>Hemonia</i>	514	1418		24
ブドウ属	<i>Vitis</i>			1	2
ミズキ	<i>Cornus controversa</i> Hemslay			7	4
エゴノキ	<i>Styrax japonica</i> Sieb. et Zucc.	410	66		13
ハクウンボク	<i>S. obtusata</i> Sieb. et Zucc.	3	4		13
		1075	37148		33142
利用の痕跡はないが有用植物					
コナラ	<i>Quercus serrata</i> Thunb.	1	1	1	1
					4
ナラガシワ	<i>Quercus aliena</i> Blume			1	38
				3	3
コナラ部	<i>Quercus sect. Prinos</i>			1	5
コナラ属	<i>Quercus</i>			1	1
				7	14
クワ属	<i>Morus</i>			1	17
サンショウ	<i>Zanthoxylum piperitum</i> DC.				2
キハダ	<i>Phellodendron amurense</i> Rupr.			6	1
ヤマブドウ	<i>Vitis coquinifera</i> Pursh			5	2
マタタビ	<i>Actinidia polyzona</i> (Sieb. et Zucc.) Planch. et Maxim.			6	13
ニワトコ	<i>Sambucus sieboldiana</i> (Miq.) Blume et. Griseb.			1	15
					4

第4表 河川内堆積物より産出した栽培植物、利用された痕跡のある植物および有用植物の大型植物化石

1 道端遺跡の河川内堆積物から産出した植物化石群

分類群	試料番号	51	54	55	56
	産出部位	100g	1050g	1960g	2500g
林冠植物					
サウグルミ	<i>Prunus yezoensis</i> Sieb. et Zucc.		5	8	2
イヌシデ	<i>Carpinus tchonetii</i> Maxim.		2	5	1
アサダ	<i>Ostrya japonica</i> Sieg.			1	
カバノキ属	<i>Betula</i>			1	
ブナ	<i>Fagus crenata</i> Blume				1
ケヤキ	<i>Zelkova serrata</i> (Thunb.) Makino		3	13	1
エノキ	<i>Celastrus sibiricus</i> Pers. var. <i>japonicus</i> (Planch.) Nakai		3	5	1
ヒメコソウ	<i>Broussonetia kazusiki</i> Sieb.			1	
ホオノキ	<i>Magnolia obovata</i> Thunberg			1	1
ニガキ	<i>Pyrusus guaiacifolius</i> (D. Don) Benn.			1	1
ミツバカエデ	<i>Acer circifolium</i> (Sieb. et Zucc.) K. Koch		2		3
イタヤカエデ	<i>Acer mono</i> Maxim.		4		1
カエデ属A	<i>Acer</i> A.		3	1	1
イイギリ	<i>Ilex polycarpa</i> Maxim.			15	7
クサギ	<i>Cleodendron trichotomum</i> Thunb.		2	2	
ゴマギ	<i>Viburnum sieboldii</i> Miq.		4	7	2
林床植物					
タマアジサイ近似種	<i>Hydrangea involucrata</i> Siebold		2	7	5
ツチアケビ	<i>Galeola septentrionalis</i> Reicheb. fl.			18	12
ミスヒキ	<i>Polygonum filiforme</i> Thunb.			1	
林縁や路傍植物					
ウルシ属	<i>Rhus</i>			4	1
ムラサキシキブ属	<i>Callicarpa</i>		5	18	24
ウコギ属	<i>Acrostichum</i>				1
タラノキ	<i>Aralia elata</i> (Miq.) Seemann		2	19	53
キンミスヒキ	<i>Agrimonia japonica</i> (Miq.) Koidz.			1	
フジ属	<i>Wisteria</i>	1	62	62	82
ノボドウ	<i>Ampelopsis brevipedunculata</i> (Maxim.) Trautv.			6	1
カナムグラ	<i>Hemalis scandens</i> (Lour.) Merrill			3	1
スズメウリ	<i>Melothria japonica</i> (Thunb.) Maxim.		1		1
開けた場所					
ネバリタデ	<i>Polygonum siccifolium</i> Makino				3
またはハナタデ	<i>Andor P. japonicum</i> Ham. var. <i>laciniatum</i> (Meisn.) Ohwi				
ヒユ属	<i>Amaranthus</i>			1	
イヌコウジュ属	<i>Morla</i>		3	4	1
湿地植物					
ハンノキ	<i>Alnus japonica</i> (Thunb.) Steud.		27	57	63
ヤチダモ	<i>Fraxinus mandshurica</i> Rupr. var. <i>japonica</i> Maxim.		6	8	28
ミス属	<i>Pilea</i>		4	10	7
ミノソバ	<i>Polygonum thunbergii</i> Sieb. et Zucc.				4
ボトクワタデ近似種	<i>P. cf. pubescens</i> Blume			3	1
ヤチヤチ	<i>P. subpiper</i> L.	1	7	1	1
ツリフネソウ	<i>Impatiens neriifolia</i> Miq.		4	3	1
抽水植物					
ヘラオモダカ	<i>Alisma canalculatum</i> A. B. et Bonche				1
ミクリ属	<i>Sagittaria</i>		30	33	21
ウキヤガラ	<i>Scirpus yagusa</i> Ohwi		1		
ホタルイ属	<i>Scirpus</i>		3	2	4
イグサ属	<i>Juncus</i>				
ミスオトギリ	<i>Tridax japonicum</i> (Blume) Makino		1	12	36
浮葉植物					
コバノヒルムシロ	<i>Potamogeton orientalis</i> Regel et Maack				1
その他生育地を決定できない植物					
イネ科A	<i>Gramineae</i> A.		1		
カヤツリグサ属	<i>Cyperus</i>		1	18	
スゲ属A	<i>Carex</i> A.		5		1
カラムシ属	<i>Boehmeria</i>		7	19	28
キンボウグ科	<i>Ranunculaceae</i>				1
ケシ科	<i>Papaveraceae</i>				1
スミレ属	<i>Viola</i>			6	
ゴマノハグサ科	<i>Scrophulariaceae</i>				3
オドリコソウ属	<i>Lamium</i>			1	
ナス属A	<i>Solanum</i> A.			1	
不明A	<i>Unknown</i> A.		1		1

第5表 河川内堆積物より産出した有用植物を除く大型植物化石

第5表には有用植物を除く大型植物化石を、推定される生育地別にまとめた。まず、高木や中高木となり落葉広葉樹林の林冠を構成する種類としては、イヌシデ、アサダ、カエデの仲間、ケヤキ、イイギリなどを産出した。これらの落葉広葉樹林の林床に生育する種類としてタマアジサイ近似種、ツチアケビ、ミスヒキを、林縁から路傍、開けた場所に生育する植物としては、ムラサキシキブ属、ウコギ属、タラノキ、イヌコウジュ属などを産出した。つる植物であるフジ属やカナムグラ、スズメウリは樹木や人の作った構

などに絡んで生育する。また、河川および後背湿地などの水域に群落を形成する水湿性植物も産出してゐる。湿地に生育する湿生植物のハンノキ、ヤチダモ、ミズ属、ミソソバ、ポントクタデ近似種、ヤナギタデ、ツリフネソウ、比較的浅い水域に生育する抽水植物のヘラオモダカ、ミクリ属、ウキヤガラ、ホタルイ属、イグサ属、ミズオトギリ、やや水深のある場所に生育する浮葉植物のコバノヒルムシロを産出した。

b 特筆すべき大型植物化石の形態記載

エゴマ近似種：果実を産出した。シソ属特有の多角形の網目が表面にあり、基部がやや薄い偏球形である。長さはである。他のシソ属やイヌコウジュ属などよりかなり大きく果実のふくらみが大きい。

コナラ：殻斗は横から見ると三角形で表面には鱗片が密に覆っている。鱗片の表面は平らである。幼果も三角形である。

ナラガシワ：殻斗は横から見ると楕円形で表面を覆う鱗片の中央が膨らんでいるので、おうとつが激しく見える。幼果も円盤状の楕円形である。

ムクノキ：内果皮の破片を産出した。表面は細かい網目模様があり、内果皮壁は槽状構造になっている。

タムシバまたはコブシ：タムシバの種子は楕円形でややし字に曲がり、基部がややへこんで小さい突起があり、頂部はやや突出して先端が尖っている。コブシは同様の外形で頂部がなだらかなため、破片になるとこの2種は区別がつかない。モクレン属の果実の利用は現在の日本では知られていないが、中国に分布する近縁の *Magnolia officinalis* は漢方薬として利用されており、当時、薬として利用されていた可能性もある。

タマアジサイ近似種：アジサイ属の果実は短円柱に2本の花柱が出てゐるが、なかでもタマアジサイは果実の頂部が平坦になっている。この果実は頂部が平坦でタマアジサイの可能性がある。

ヤマブドウ、ブドウ属：種子は完形の場合やや縦に長い心形でヤマブドウは背面にある匙状の溝の頂部が円に近く周囲の溝が明瞭である。破片の場合はヤマブドウかどうか区別がつかない物が多いのでブドウ属とした。

ノブドウ：種子は横に長い心形でよく膨らみ、背面の溝は水滴型となり、ブドウ属のような丸い頭はない。一般には薬用として知られていないが、現在でも山間部で消炎効果のある民間薬として利用されている。

ヤチダモ：トネリコ属の果実は翼がついているが、幅が広い翼をもつ果実はヤチダモとシオジに限られる。さらにシオジは翼の表面が平滑であるが、本遺跡で産出した果実は縦の稜が数本認められるためヤチダモの果実である。

エゴノキ、ハクウンボク：内果皮は楕円形で縦に3本の溝と3本の稜があり、基部には斜めに楕円形のへそがある。エゴノキは外形が楕円形で表面の凹凸が激しく、全面にある網目模様はやや粗く、稜が目立たない。またへそはやや大きい。エゴノキと比較するとハクウンボクは外形が紡錘形に近く、へそは小さいので紡錘形に沿う形でついている。また表面の網目模様はかなり細かいため、平滑で光沢を帯びるものが多く、3本の稜がはっきりしている。種子には有毒物質が含まれるが、灯りなどに種子を絞った油成分を用いる。

c 大型植物化石試料の粒度組成

試料は大型植物化石試料から分割して用いた。粒度分析は、試料 50~100g をビ - カ - に取り、恒温乾燥器を用いて 100 で乾燥する。秤量した後に 4 の標準ふるいを通して砂分と泥分にわけた。砂分は水を

加え傾斜法により植物遺体と無機碎屑物に分離した。無機碎屑物については、恒温乾燥器を用いて100で乾燥し、標準ふるいを12 間隔で4 まで重ねて振とうした。

堆積物の特徴は第 2 表に示した。平均粒径、分級度は積率法により算出した。堆積物の重量組成は、砂分が大半の試料で卓越するものの植物遺体が12.5%を占め、遺体屑が多量に含まれていることがわかる。粒度分布は泥分の多いSを除いては正規分布を示す。平均粒径は1.27~2.69 (0.15~0.4mm)の間で変動し、上位ほど細粒になる。分級度は0.81~1.11と普通である。[百原・吉川 1997] は、最大13.1mmのアカガシ亜属の殻斗や果実を含む種実類(平均約4mm)が平均粒径15~20 前後の中粒砂と挙動し、匍行ないし躍動様式によって運搬されることを明らかにした。種実類が多く含まれるS4~S6では、510nmの破片のコハクウンボクが多く、平均粒径が1.27~2.0 の中粒砂(正規分布集団の分離は行っていない)からなることから、種実類の多くは水流の営力により異地性の植物遺体が堆積したことを示す。一方で、S1は細粒なため大型の種実類が含まれない。

3) 木材化石の樹種

F層に含まれる木材化石のうち直径13mm(MB1)、16mm(MB2)、6mm(MB3)の試料の樹種同定を行った。木材からは、剃刀で横断面、接線断面、放射断面を切り出し、ガムクロラールでプレパラートに封入し、生物顕微鏡で観察および同定した。

樹種は、MB1がハンノキ科、MB2がトネリコ属、MB3がコナラ節であった。調査を行った試料数は少ないが、大きな木材化石は湿地林を構成する種であることから、木材化石の大半は周辺に分布していた樹木によりもたらされた可能性がある。

D 考 察

旧河川は、時期を特定する資料は得られていないが、青田遺跡の花粉化石群の変遷史に基づくと集落が形成された時期に存在していた可能性がある。すなわち、本遺跡の南方約12kmに位置する青田遺跡では縄文晩期から平安時代頂の花粉化石群の変遷が明らかにされ[吉川 2004]、スギが弥生時代以降に拡大したことがわかっている。道端遺跡ではスギ花粉は1.4%と低率であること、花粉化石群に目立った変化が見られないこと、流速がほとんど無いような環境で堆積していることから、異地性花粉を含むものの概ね後背地の植生を反映した結果と考えられる。こうしたことからスギの拡大開始期の初期の堆積層と推定され、集落が営まれた時期に存在していた可能性がある。また、旧河川が集落と同時期に存在していたと仮定した場合、写杭列は曲流した旧河川の突洲の上流側に、鴨杭列は舌状に伸びた陸地の基部にあたる曲流の湾曲部外側の頂部に造られていることになる。つまり、鴨杭列は洪水時に流水から集落をまもるため、写杭列は舌状に伸びた陸地が浸食されないようするために造られた施設と推定され調和的である。

河川内堆積物に含まれる種実類は、遠方ではなく比較的近距離から移動し、さらに人により利用された後に廃棄されたとみられる遺体が多く含まれていた。陸地ないし水域に散布された種実類は、水流により運搬堆積した場合には完形で産出する例が多い。比較的壊れやすい果実種子は、もともと柔らかい、水を含むと柔らかくなるもの、あるいは硬いが薄い壁を有するものに限られる。エノキ、ムクノキ、クワ属、コナラ属の殻斗、カエデ属の果実、ゴマギ、ヤチダモ、ミソソバなどは柔らかい。また、クワ属、ヒメコウソ、アカメガシワは硬いが壁が薄いため破片となりやすい傾向がある。しかし、本遺跡では硬く厚く破片になりにくい種類が破片として多く産出し、そうした種実類にホオノキ、タムシバ、カラスザンショウ、

クマヤナギ属、ブドウ属、ミズキ、エゴノキ、ハクウンボクがある。カラスザンショウとハクウンボクは特に硬く厚い果皮であるため、強い力で打撃を受けないと破片にならない。さらに、本遺跡で産出した破片となった種実類の表面の細胞も摩滅されていないことから、他の無機碎屑物とともに長時間攪拌を受けるような運搬作用は受けていないと考えられる。また、粒度組成からは種実類が中粒砂と同じ挙動をしたことが推定されているが、曲流の内側の砂礫は上流から移動してきたものではなく流速の大きな外側の河床の砂礫が、ら旋流によって内側に堆積したとする説もある。つまり、有用植物と推定される種実類に破片の状態で産出した遺体が多いこと、摩滅されていないことなどから、これら種実類は川岸に廃棄された生活ゴミが洪水時に砂とともに移動して堆積した可能性が考えられ、道端遺跡の集落と関係した生活ゴミである可能性がある。

周辺の植生は、後背湿地にはハノキやヤチダモの湿地林が形成され、丘陵や山地にはコナラを主としナラガシワ、クリ、ブナ、ケヤキ、サウグルミ、イヌシデ、エノキ、クワ属、カラスザンショウ、キハダ、アカメガシワ、イタヤカエデ、トチノキ、クマヤナギ属、イギリ、ミズキ、ハクウンボクやつる植物のヤマブドウ、マタタビなどの豊富な植物相からなる落葉広葉樹にスギを混じえた森林が形成されていた。また、林床にはツチアケビやタマアジサイ近似種、林縁や路傍にはムラサキシキブ属やタラノキ、ニワトコ、湿地周辺の微高地にはヤマウルシが分布していたとみられる。また、露頭で目立っていたハクウンボクは破片が多く、花粉化石も稀であることから、周辺にはなく丘陵や山地に分布していたと考えられる。

一方、クリ属花粉の頻度が全般に高いことから、集落の周辺にクリ林が分布していた可能性がある。クリ属花粉は広域に散布し難いため近接して分布していない限り低率である。さらに、古墳時代頃には周辺の丘陵や山地ではコナラ亜属を主とする落葉広葉樹林が形成されていたと推定され [吉川 2004]、流水により搬入された場合にもコナラ亜属花粉が多く含まれクリ属は相対的に低率になると考えられる。また、越後平野北部にある縄文後期の野地遺跡 [吉川ほか 2002] や縄文晩期の青田遺跡 [吉川 2004] では沖積低地の微高地でクリ林が形成されていたことが推定されている。こうしたことから集落の周辺の微高地にクリ林が形成されていた可能性は高いと思われる。

旧河川の堆積環境は、河川内堆積物が十数回の堆積ユニットから構成されることから、しばしば洪水の影響を受けたことがわかる。河川内は、初期には流水が支配的な環境にあったが、その後、普段の流れは弱いがしばしば洪水の影響を受ける環境へと変化したと推定される。こうした流れの弱い水域には抽水植物のゴウホネ属やミクリ属、ミズオドリソウ、ホタルイ属、浮葉植物のコバノヒルムシロなどが生育していたとみられる。

以上のように、河川内堆積物は集落と概ね同時期に存在した可能性があり、さらに生活ゴミに伴う果実類が多く含まれていることがわかった。また、ハクウンボクやアカメガシワなどの多種の植物を利用し、クリ林も形成されていた可能性が指摘された。ところで、洪水性の堆積物のため、そこに含まれる植物化石群は上流域から移動した異地性化石群とみる場合が一般的である。事実、現在の河川においても掃き寄せられ堆積した植物遺体が多く見受けられる。道端遺跡では、植物化石群の組成、種実類の産状、微地形および堆積物の特徴から種実類が近距離から移動したと推定し、さらに集落と関係した生活ゴミである可能性が指摘された。当然、微地形や堆積物を十分検討した上で議論しなければならないが、洪水性堆積物に含まれる植物遺体からも生業に関わる多くの情報が得られる可能性があることを今回の調査は示している。

2 道端遺跡より出土した加工材の樹種

吉川純子（古代の森研究吉）・鈴木三男（東北大学大学院生命科学研究所）

A 試料と方法

道端遺跡は、越後平野北部の沖積低地に立地する古墳時代前期を中心とした集落跡で、円形周溝状遺構と掘立柱建物跡、土坑、溝などが検出されている。ここでは集落の木材利用状況の資料を得ることを目的に、掘立柱建物跡の柱、円形周溝状遺構の根太、樹皮敷き遺構の樹皮と炭化材、杭列の樹種同定を行った。

出土加工材からは直接剃刀を用いて横断面、接線断面、放射断面の3方向の切片を採取し、ガムクロールを用いてプレパラートに封入した。切片は生物顕微鏡で観察及び同定した。樹皮は横断面方向の切片を作成し、生物顕微鏡で観察した。炭化材は小ブロックで材片を採取し、横断面、接線断面、放射断面の3方向に割りにとって落射型顕微鏡で観察及び同定した。

B 道端遺跡における木材利用

出土した加工材の樹種同定結果を第6表に示す。また、第18図に柱材と杭列の樹種を平面図に示した。

掘立柱建物跡は、9軒の住居の柱を各1本ずつ調査した結果、コナラ節5点、トネリコ属2点とヤマグワ、エゴノキ属が各1点であった。コナラ節は弥生時代以降、古墳時代、古代に竅穴住居などの柱材として利用される例が多い樹種である。トネリコ属、ヤマグワは時々柱材として利用される。エゴノキ属は柱材として出土した例はほとんどないが、現在では床柱の利用例があり、樹高10~15m、直径20~45cmほどに

遺構	層位	試料番号	状況	樹種
掘立柱建物 SB12		P013	柱根	ヤマグワ
掘立柱建物 SB2		P333	柱根	コナラ節
掘立柱建物 SB9		P115	柱	コナラ節
掘立柱建物 SB5		P457	柱根	コナラ節
掘立柱建物 SB8		P283	柱	コナラ節
掘立柱建物 SB4		P466	柱根	トネリコ属
掘立柱建物 SB13		SB135	柱	エゴノキ属
掘立柱建物 SB10		P103	柱	トネリコ属
掘立柱建物 SB7		P085	柱	コナラ節
池円形周溝状遺構	5層	P263	根がらみ	トネリコ属
池円形周溝状遺構	5層	P293	根がらみ	クリ
池円形周溝状遺構		P029	根太	ヤマグワ
池円形周溝状遺構		P048	根太	ヤマグワ
	3層	河川跡	板目板	スギ
	3層	河川跡	心持ち皮つき部材	マツ属
遊杭列		15	丸木	ハンノキ節
遊杭列		23	丸木	ハンノキ節
遊杭列		18	丸木	ハンノキ節
遊杭列		13	丸木	ハンノキ節
遊杭列		23	丸木皮つき	ハンノキ節
遊杭列		20	丸木皮つき	ハンノキ節
遊杭列		18	丸木	ハンノキ節
遊杭列		110	丸木	ハンノキ節
SD27		樹皮 1	樹皮	不明樹皮
SD27		樹皮 4	樹皮	スギ科またはヒノキ科
SK038		炭化樹木	炭化材	ハンノキ節

第6表 道端遺跡の古墳時代前期の遺構より出土した加工材の樹種

なる場合もあるので掘立柱建物の柱などであれば使用されてもおかしくはない。平面図を見ると、コナラ節はやや大型や中型の建物に利用されているが、そのほかの樹種を使用している建物は中型と小型に偏って使用されているようにも見える。

2列の杭列の1号から5本、2号から3本の樹種の調査を行ったところ、いずれもハンノキ節であった。ハンノキ節は低地に多く生育し、調達がたやすいが木材強度はコナラ節やトネリコ属の半分程度で、耐久性を要求されるような構築物には使用しない樹種とされている。2号杭列は旧河川の流れとほぼ沿う方向に、1号杭列は半農状の陸地の基部に造られており、洪水時に河岸の集落を守るための護岸の杭列であった可能性が考えられる。

円形周溝状遺構から出土した根太と思われる木片は、1号ではヤマグワ、2号はトネリコ属とクリであった。クリは柱材として検出されていないが、調査区内の多くの柱材がすでに抜き取られているため、耐久性が良いとされるクリは優先的に再利用されていた可能性が示唆される。

樹皮敷遺構 SD 27 ではスギ科またはヒノキ科の樹皮 1 点と不明種 1 点が検出され、SK 38 の板状の炭化材はハンノキ節であった。スギ科やヒノキ科の材は殺菌作用のある物質を含んでいるため、湿った土に直接敷いても腐りにくい。ハンノキ節の炭化材は板状の加工材が炭化したものとみられ、薄いが樹皮ではなく木部であった。

C 出土した樹種の細胞学的記載

マツ属 (*Pinus*)

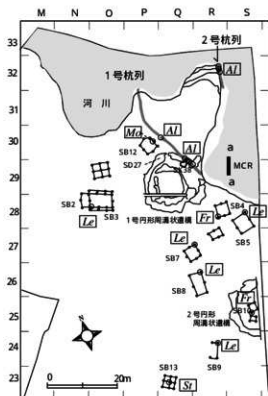
横断面では比較的大型の垂直樹脂道が見られ、接線断面でも水平樹脂道が見られる。分野壁孔は窓状であるが、保存が悪く放射板道管の内壁の状態が観察できないため、アカマツかクロマツかは不明である。

スギ (*Cryptomeria japonica* D Don)

早材から晩材への移行はやや急で年輪界は明瞭である。分野壁孔はスギ型で分野に 3 から 5 個分布している。

スギ科またはヒノキ科 (Taxodiaceae and or Cupressaceae)

樹皮を出土した。樹皮は形成層から外側に向かってつくられるので内側のものほど若い組織である。内側から繊維細胞、篩細胞、柔細胞の順にそれぞれ 1 細胞層ずつ順を追って同心円状に配列し、外側に押し出されて篩部が機能を失うにしたがって柔細胞が再度細胞分裂を始め著しい厚壁組織の塊をつくる。この厚壁組織は横断面で見たとき、マツ属やカラマツ属などは厚くて短いレンズ状に発達し、コウヤマキなどは薄いが短いレンズ状に発達する。スギ科とヒノキ科は薄くて大変長いレンズ状に発達するため切片



第 18 図 掘立柱建物と杭列の樹種
調査材、A ハンノキ節、L コナラ節、M ヤマグワ、F トネリコ属、S スギ科属、F ヒノキ科属

を作成した時にはほぼ層状に観察できるのが特徴である。

ハンノキ属ハンノキ節 (*Ahus sect Ahus*)

やや小さい道管が放射方向に数個複合する散孔材、年輪界は明瞭。穿孔板は階段状で2段以上の場合が多い。放射組織は単列同性と集合放射組織がある。ヤシャブシ節は集合放射組織が少ないが、ハンノキ節は頻繁に出現し、集合放射組織の部分で年輪界が内側に顕著にへこむ。

クリ (*Castanea crenata Sieb. et Zucc*)

環孔材で孔圈部の幅は広く、孔圏外で急に径が小さくなり、小導管は単独あるいは2、3個集まって火災状に配列する。導管内にはチロースが発達する。放射組織は単列である。

コナラ属コナラ節 (*Quercus sect Prinus*)

環孔材で年輪界に沿って大導管が1から3列並び、孔圏外で急に径が小さくなり、薄壁で角ばった小導管が単独あるいは2、3個集まって火災状に配列する。横断面で広放射組織が確認できる。接線断面で確認すると広放射組織と単列放射組織の2種類しかないことがわかる。

ヤマグワ (*Morus bombycis*)

年輪のはじめに大きい道管が並び、小導管が単独もしくは2-3個横もしくは斜めに複合して分布する環孔材である。道管の穿孔は単一で穿孔は交互状、道管内壁には比較的明瞭ならせん肥厚がある。放射組織はやや青の高い1-4列程度の紡錘形で異性である。

エゴノキ属 (*Styrax*)

道管が放射あるいは斜め方向に数個ずつ複合している散孔材。晩材部では径を減じ、穿孔板は1段前後の階段状である。晩材部では接線状の木部柔組織が目立つ。放射組織は異性で1-4細胞幅で、翼状の単列部を挟み多列部が縦につながる。

トネリコ属 (*Fraxinus*)

年輪のはじめには大導管が1列に配列し、その後急に径を減じて数個放射方向に複合して散在する環孔材。小導管の壁は厚い。放射組織は同性で1-2列の比較的きれいな紡錘形である。穿孔板は単一で内部にはチロースがある。

1 道端遺跡の河川内堆積物から産出した植物化石群の引用文献

百原 新・吉川昌伸 1997 「蛇行河川内での大型植物化石群の堆積過程」『植生史研究』5 p15-27

吉川昌伸 2004 「青田遺跡における縄文時代晩期以降の花粉化石群」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第133巻

青田遺跡 関連諸科学・写真図版編。新潟県教育委員会・〈財〉新潟県埋蔵文化財調査事業団 p35-42

吉川昌伸・吉川純子 2002 「野地遺跡における縄文時代後・晩期の花粉化石群および大型植物化石」

『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成15年度』

新潟県教育委員会・〈財〉新潟県埋蔵文化財調査事業団 p42-44

3 道端遺跡の放射線炭素年代測定・土壌理化学分析・ 蛍光 X線分析・X線回折分析・テフラ分析

バリノ・サーヴェイ株式会社

A はじめに

道端遺跡は新潟県荒川町大字南新保字道端に所在し、胎内川扇状地の北東扇端部分に立地する。過去に実施された 2 度の発掘調査では、縄文時代後期後葉 晩期前葉と考えられる土坑や炭化物集ちや、古墳時代前・後期、中世 近世の遺物が確認されている。また、これらの発掘調査に伴い行われた自然科学分析調査では、縄文時代後 晩期以降の古環境や当該期における動物利用、テフラと考えられる堆積物について検討がなされている [石川・内藤ほか 2002, 渡邊・内藤ほか 2003]。

今回の発掘調査では、古墳時代前期と考えられる竪穴建物跡、円形周溝状遺構、土坑等の遺構が検出され、この他に遺物が伴わず時期不明の竪立柱建物、杭列なども確認されている。このうち、円形周溝状遺構では、周溝内側からピットや炉などが検出され、周溝内からは土器が多量に検出され、土坑の中には樹皮状の木質が土坑底面に敷かれるように検出される状況が認められている。また、遺物では、古墳時代前期に比定される土器を主体として、土錘や石器などが出土している。

本報告では、発掘調査区内の土層観察所見から推定される地形発達及び堆積環境について考察を行い、さらに、発掘調査成果から課題とされた 1) 杭列の年代観、2) 樹皮状と木質が土坑底面から検出された土坑の用途推定、3) 2) で対象とした土坑内より出土した金属あるいは鉱物片と想定される不明遺物の鑑定、4) 周溝及び土坑内より検出された黄褐色粘土の由来推定、の 4 点を検証することを目的とし、自然科学分析を実施した。

B 土層観察所見

今回の発掘調査区を概観すると、古墳時代前期の遺構が検出される微高地、微高地西側の遺構が検出されない区域、微高地東側の淘汰の良い砂と流木を主体とする流路といった状況が確認されており、微高地上の遺構が流路によって削剥される状況から、古墳時代前期以降に流路によって微高地の一部が削剥されていることが指摘されている。

本遺跡で主体となる古墳時代前期の遺構が検出される微高地の形成過程や堆積環境の変化を検討することを目的として、上述した微高地及びその東西の区域で土層観察を行った。本遺跡の基本土層は発掘調査時の所見では、上位より、a b層に分層され、地点により b層の下位に 1層の堆積層が認められている。b層以深については下位より青灰色極細粒～細粒砂、青灰色シルト、青灰粘土に分層されているが、層相観察結果では基本的に上方細粒化を示す一連の堆積物と推測される。b層は灰～褐灰色粘土からなり、地点により下部は青灰～褐灰色を呈する。植物遺体を多量に含み、酸化鉄の濃集も認められる。当土層は、古墳時代前期の遺構検出面に相当する。c層は灰褐色シルトで下部に砂分を含むが、砂分の多寡は地点によって大きく異なる。当土層は、古墳時代前期の遺物包含層に相当する。d層はやや腐植質の褐色シルトからなるが、発掘調査区全体からは認められず、微高地西側で痕跡的に認められている。e層は暗褐色シルトからなり、耕作土とされている。

発掘調査区内に設定されたトレンチの土層断面を対象に、層より下位に認められる青灰色極細粒～細粒砂と青灰色シルト～粘土層の観察では、微高地西側で層厚が厚く、微高地部では層厚が薄くなる傾向が認められたことから、青灰色極細粒～細粒砂の層高を考慮すると、本遺跡における微地形の発達は、少なくともこの時期には始まっていた、あるいは発達過程であった可能性がある。また、微高地西側の b層下中部では、草本質と考えられる植物遺体がやや密となる層の存在や、立ち木（根材）の可能性がある縦方向に伸びる木材が確認されることから、湿地あるいは河畔のような環境であったことが推測される。なお、現段階では特定に至らないが、微高地西側の土層断面の層下中部に認められる植物遺体がやや密となる層と、過去の発掘調査で確認された腐植土層（層）に対応する可能性がある。古墳時代前期の遺物包含層および遺構検出面である c層は、基質は b層と類似するが、b層との境に砂分を含むことから、この時期に砂分を供給する氾濫があったと考えられる。ただし、c層は、地点により層相が異なることから、氾濫は小規模、あるいは、複数回であった可能性がある。層は、上述したように遺跡内でも痕跡的に認められるのみであり、全容は把握しえないが、少なくとも古墳時代前期以降の河川氾濫等の影響と考えられる。

ところで、過去の発掘調査では、基本土層の層より下位の明青灰～青灰色シルト層（a・b層）の層間に炭化物層及び給源不明のテフラ層が確認されているが、今回の土層観察を行った地点では、これらに相当する土層は確認されなかった。

C 試料

1) 杭列の年代観

杭列列は、微高地北側及び微高地北端部より別検出されており、当遺構は共存する遺物がないことや、遺構検出面が古墳時代前期と考えられる遺構よりも上位であったことから、古墳時代前期以降の可能性が指摘された。ここでは、杭列の年代観や別の木柱列の時期差について検討するため、放射性炭素年代測定（AM法）を実施する。

試料は、鴨杭列より採取された木材 16 点、馬杭列より採取された木材 182 点、計 4 点である。これらの試料のうち、発掘調査時で樹皮等の観察が不可能であった鴨杭列の木材 16 を除く試料は、芯持丸木材であり樹皮、あるいは、樹皮の痕跡が認められる試料を選択し、樹皮、あるいは、樹皮の痕跡の内側、最終形成年輪に相当する部分より採取している。

2) 土坑の用途推定

土坑及び土坑状の掘り込みの底面から樹皮状の木質が検出される状況は、SD27・SK34・38で確認されている。このうち、SK38では、樹皮状の木質がいくつも重複する状況や、一部が炭化する状況が確認されている。また、SK34では、樹皮状の木質とともに、板材状を呈する木片も多数確認されている。ここでは、これら土坑の用途、特に、土坑墓の可能性を検証するため、土壌中のリン酸・腐植含量（炭素）に着目し、土壌理化学分析を実施する。

試料は、上述の土坑のうちSK34・38を対象とし、SK34の8層より採取された土壌2点、SK38の2層及び木質部直上、5層から採取された土壌4点、対照試料としてSK38南側の微高地上の基本土層b層上部に相当する土壌1点（3地点以下、基本土層）の計7点である。

3) 不明遺物の鑑定

試料は、SK 34の 8層中より出土した光沢を有する物質 1点であり、肉眼観察では金属片あるいは鉱物片と想定された。ここでは、当試料の由来や素材を検討するため、蛍光 X線分析・X線回折分析を実施する。

4) 黄褐色粘土の由来

本遺跡では、前述のように縄文時代の遺物包含層より給源不明テフラが検出されており、当該期における鍵層と成りうる可能性が示唆されている。本遺跡においても、発掘調査所見によりテフラの可能性がある黄褐色粘土が採取されており、その検証が課題とされた。そこで、ここでは、試料中のテフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石の抽出を目的として、テフラの検出同定を実施する。試料は、SK 38および SK 250 31Qの 3層より採取された黄褐色を呈する粘土の 2点である。

D 分析方法

1) 放射性炭素年代測定

測定は株式会社加速器分析研究所の協力を得て、AMS法により行う。なお、放射性炭素の半減期は LIBBYの半減期 5568年を使用する。測定年代は 1950年を基点とした年代 (BP) であり、誤差は標準偏差 (One Sigma) に相当する年代である。測定年代の補正に用いた ^{13}C の値は、加速器を用いて試料炭素の ^{13}C 濃度 ($^{13}C/^{12}C$) を測定し、標準試料 PDB (白亜紀のペレムナイト類の化石) の測定値を基準として、それからのずれを計算し、千分偏差 (パーミル) で表したものである。また、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV 4.4 (Copyright 1986-2002 M Stuiver and P J Reimer) を用い、いずれの試料も北半球の大気圏における暦年校正曲線を用いる条件を与え計算を行っている。

2) 土壌理化学分析

リン酸含量は硝酸・過塩素酸分解・バナドモリブデン酸比色法、腐植含量はチューリン法 [土壌養分測定法委員会 1981] [土壌標準分析・測定法委員会 1986] による。以下に各項目の操作工程を示す。

a リン酸含量

試料を風乾後、軽く粉砕して 200 μ m の篩を通過させる (風乾細土試料)。風乾細土試料の水分を加熱減量法 (105 $^{\circ}C$ 、5時間) により測定する。風乾細土試料 100g をケルダール分解フラスコに秤量し、はじめに硝酸 (HNO_3) 約 5mL を加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸 ($HClO_4$) 約 10mL を加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で 100mL に定容してろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸 (P_2O_5) 濃度を測定する。測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量 (P_2O_5 mg/g) を求める。

b 腐植含量

風乾細土試料の一部を粉砕し、0.9mm の篩いを全通させる (粉砕土試料)。粉砕土試料 0.100~0.500g を 100mL 三角フラスコに正確に秤りとり、0.4N クロム酸・硫酸混液 10mL を正確に加え、約 200 $^{\circ}C$ の砂浴上で

正確に 5 分間煮沸する。冷却後、0.2 フェニルアントラニル酸液を指示薬に 0.2N 硫酸第 1 鉄アンモニウム液で滴定する。滴定値および加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの有機炭素量 (Org (乾土)) を求める。これに 172 倍乗じて腐植含量 () を算出する。

3) 蛍光 X線分析・X線回折分析

a 蛍光 X線分析

蛍光 X線分析装置 (理学電気工業製: RIX 1000) を利用し、遺物構成元素の定性分析を実施し、FP法 (ファンダメンタルパラメーター法) により、概略の化学組成を求める。この方法は試料に X線 (一次 X線) を照射し、含有される元素が発する固有 X線 (二次 X線) を測定することにより、その成分を知ろうとするものである。なお、本装置による定量可能元素は希ガス元素を除いた F から U の範囲にある元素である。

装置条件を以下に示し、測定条件の詳細を第 7 表に示す。

(装置条件)

ターゲット: Cr

管電圧: 50KV

管電流: 50mA

試料マスク: 30mm

試料スピンドル: OFF

ダイアグラム: 20mm

測定雰囲気: 真空

なお、測定は試料をポリエチレン膜 (6 μm) で挟み、スナッピングでポリエチレン容器 (ケムプレ

測定元素	測定スペクトル	吸フィルタ	アッチネータ	スリット	分光結晶	検出器	PHA		スキャン条件			測定時間 sec
							LL	UL	開始 deg	終了 deg	ステップ deg	
HEAVY	K	OUT	1 1	5φ	LF1	SC	100	300	5000	90000	002	01
Cr	K	IN	1 1	5φ	LF1	SC	100	300	67000	72000	002	04
Mn	K	IN	1 1	5φ	LF1	SC	100	300	61000	65000	002	04
Ca	K	OUT	1 1	5φ	GE	PC	100	300	59000	65000	005	04
K	K	OUT	1 1	5φ	GE	PC	100	300	67000	73000	005	04
P	K	OUT	1 1	5φ	GE	PC	150	300	138000	144000	005	04
Si	K	OUT	1 1	5φ	PET	PC	100	300	106000	112000	005	04
Al	K	OUT	1 1	5φ	PET	PC	100	300	140000	147000	005	04
Mg	K	OUT	1 1	5φ	TAP	PC	150	250	42000	48000	005	10
Na	K	OUT	1 1	5φ	TAP	PC	150	250	52000	58000	005	10
S	K	OUT	1 1	5φ	GE	PC	150	300	108000	114000	005	04
F	K	OUT	1 1	5φ	TAP	PC	150	300	88000	94000	005	10
Cl	K	OUT	1 1	5φ	GE	PC	150	300	90000	96000	005	04

第 7 表 蛍光 X線定性測定条件

ックス製 CatNo1540) 上部に固定する。容器底部にマイクロポラスフィルム (5 μm) を固定し、装置付属試料ホルダーにセットして実施する。

b X線回折分析

遺物の可能性を考慮し非破壊調査を前提としている。そのため、試料はブロックサンプルとして扱い、測定を実施する。測定条件の詳細については、表 8 に示す。試験結果の同定解析は、測定回折線の主要ビ

ークと回折角度から原子間隔および相対強度を計算し、それに該当する化合物または鉱物を、PDFデータベースに基づいた X線粉末回折線総合解析プログラム JADEにより検索し、同定する。

4) テフラ分析

試料約 20gを蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。

装置	理学電気機 Mult Ix
Target	Cu (K)
Monochromator	Graphite曲
Voltage	40KV
Current	40mA
Detector	SC
Calibration Mode	cps
Divergency Slit	1
Scattering Slit	1
Receiving Slit	0.3mm
Scanning Speed	0.5 m/h
Scanning Mode	連続法
Sampling Range	0.01
Scanning Range	2-25

第 8 表 X線回折分析測定条件

E 結 果

1) 放射性炭素年代測定

遺構名	試料名	試料の質	補正年代 BP	1 σ ()	測定年代 BP	CodeNo
鴨杭列	木材 16	生 材	1750 40	29.85 0.71	1830 30	JAA 40984
鴨杭列	木材 20	生 材	1770 40	29.12 0.65	1840 30	JAA 41589
鴨杭列	木材 18	生 材	1720 40	29.09 0.60	1790 30	JAA 41590
鴨杭列	木材 23	生 材	1700 40	28.39 0.65	1760 30	JAA 41591

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期 5568年を使用。
- 2) B \pm 値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
- 3) 付記した誤差は、測定値 (測定値の 68%が入る範囲) を年代値に換算した値。

第 9 表 放射性炭素年代測定結果

遺構名	試料名	補正年代 BP	暦年較正年代 (cal)				相対比	Code No
			calAD	calAD	calBP	calBP		
鴨杭列	木材 16	1747 35	calAD 242	calAD 264	calBP 1708	1686	0.237	JAA 40984
			calAD 269	calAD 340	calBP 1681	1610	0.763	
鴨杭列	木材 20	1767 35	calAD 229	calAD 263	calBP 1721	1687	0.362	JAA 41589
			calAD 275	calAD 339	calBP 1675	1611	0.638	
鴨杭列	木材 18	1718 34	calAD 258	calAD 282	calBP 1692	1668	0.271	JAA 41590
			calAD 289	calAD 299	calBP 1661	1651	0.109	
			calAD 321	calAD 352	calBP 1629	1588	0.438	
			calAD 366	calAD 383	calBP 1584	1567	0.182	
鴨杭列	木材 23	1702 35	calAD 261	calAD 279	calBP 1689	1671	0.199	JAA 41591
			calAD 324	calAD 396	calBP 1626	1554	0.801	

計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4 (Copyright 1986 2002 M. Stuiver and Reimer) を使用。計算には、表に示した丸める前の値を使用している。付記した誤差は、測定値 (測定値の 68%が入る範囲) を年代値に換算した値。

第 10 表 暦年較正結果

結果を第 9 表、暦年較正結果を第 10 表に示す。試料の測定年代 (補正年代) は、鴨杭列の木材 16 は 1750BP、鴨杭列の木材 20 は 1770BP、鴨杭列の木材 18 は 1720BP、鴨杭列の木材 23 は 1700BP を示す。

2) 土壌理化学分析

結果を第 1 表に示す。試料の土性は、いずれも粘質土であり、国際法区分における野外土性 (ペドロジスト懇談会編 1984) は H α (重粘土) に分類される。いずれの土壌もオリーブ黒一灰色を呈し、還元的な色

地点名	試料名	土性	土色		P ₂ O ₅ mg/g	注記
SK 34	8層	HC	10Y 3 1	オリーブ黒	3.07	S 034 29Q 樹皮 燻
SK 34	9層	HC	N 5 0	灰	1.34	S 034 29Q 燻
SK 38	木質部上位 2層	HC	10Y 5 1	灰	2.54	SK 38 燻
SK 38	木質部上位 3層	HC	10Y 5 1	灰	3.19	SK 38 燻
SK 38	木質部直上	HC	7.5Y 4 1	灰	1.46	SK 38 木質直上
SK 38	木質部下位 燻	HC	10Y 4 1	灰	1.28	S 038 29Q 木質下
3地点	3	HC	10Y 5 1	灰	1.25	3地点 3

土性：土壌調査ハンドブック（ペドロロスト研究会編、1994）の野外土性による。
 HC 重粘土（粘土 45～100%、シルト 0～58%、砂 0～58%）

第1表 土壌理化学分析結果

調であることや明瞭な酸化鉄斑が見られることから、湿性な環境下におかれた経緯があることが推察される。

分析調査結果では、基本土層の炭素含量は 143 であるに対し、SK 34燻土で 225、657 と高い値を示す。一方、SK 38ではいずれの試料も 122 153 程度の値であり、基本土層と大きな差は認められない。一方、リン酸含量では、対照試料とされる基本土層で 125P₂O₅ mg/g程度であるのに対し、SK 34 8層で 307P₂O₅ mg/g SK 38木質部上位 2層で 254P₂O₅ mg/g 木質部上位 3層で 319P₂O₅ mg/gと多い傾向が認められるが、この他の試料では 128 146P₂O₅ mg/g程度であり、基本土層と大きな差は認められない。

3) 蛍光 X線分析・X線回折分析

不明物質の蛍光 X線スペクトルを第 1図、化学組成を第 12表に、また X線回折図を第 2図に示す。

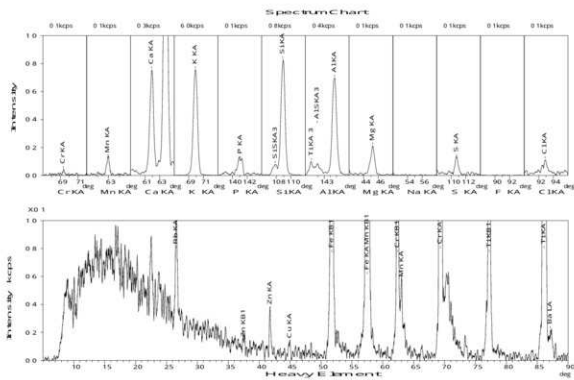
SK 34の 8層より出土した不明遺物の化学組成は、SiO₂、Al₂O₃などといった、いわゆる珪酸塩鉱物の骨格をなす成分のほか FeO、MgOなども高い割合で検出されている。一方、X線回折分析結果では、雲母鉱物、緑泥石および針鉄鉱が検出された。回折線ピークの同定データとしては、雲母鉱物に phlogopite 緑泥石に clinocllore および針鉄鉱に goethiteを使用した。雲母鉱物（001）面反射の回折線は 10.1（2 : 88）に比較的明瞭な回折線を示している。緑泥石の（001）面反射および（002）面反射の回折線は、それぞれ 14.4（2 : 63）および 7.2（2 : 123）に微弱に回折している。なお、X線回折分析では、雲母鉱物は類似した回折線を示すため、雲母鉱物の種類は判別できないが、蛍光 X線分析の結果に示される鉄やマグネシウムの多い化学組成を考慮すると黒雲母と考えられるため、黒雲母の一種である金雲母（phlogopite）のデータを適用している。

4) テフラ分析

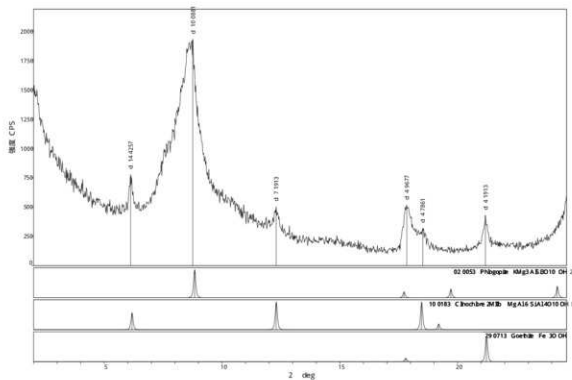
SK 250 3層、SK 38から出土した粘土は、いずれの試料とも処理後に得られた砂分からは、スコリア・火山ガラス・軽石とされる碎屑物は認めることができなかった。砂分の状況は、試料ともにほぼ同様であり、極粗粒砂以下の石英および長石類の破砕片が主体を占め、黒雲母や輝石類および磁鉄鉱などの鉱物片が微量混在する。

成分名	スペクトル	X線強度 kcps	分析結果 wt
MgO	Mg KA	0.1620	7.80
Al ₂ O ₃	Al KA	1.1373	19.97
SiO ₂	Si KA	1.8128	40.61
P ₂ O ₅	P KA	0.0194	0.18
SO ₂	S KA	0.0202	0.19
Cl	Cl KA	0.0138	0.05
K ₂ O	K KA	5.2153	5.02
CaO	Ca KA	0.2370	0.18
TiO ₂	Ti KA	1.7539	3.63
Cr ₂ O ₃	Cr KA	0.0036	0.14
MnO	Mn KA	0.0123	0.28
FeO	Fe KB1	1.0594	21.83
CuO	Cu KA	0.0076	0.02
ZnO	Zn KA	0.0297	0.05
Rb ₂ O	Rb KA	0.0710	0.05
BaO	Ba LA	0.0014	0.01
Total	-	-	100.01

第12表 SK 34 8層出土の不明遺物の化学組成



第 1 図 SK34 8 層出土の不明遺物の蛍光 X 線スペクトル



第 2 図 SK34 8 層出土の不明遺物の X 線回折図

F 考 察

1) 杭列の年代観

分析を行った 1号杭列の木材 1620、2号杭列の木材 1823の年代(補正年代)は、1770 1700年前の値を示し、暦年較正結果においても相対比の高い年代範囲に注目すると、紀元3世紀頃の年代を示す。この年代は、概ね古墳時代前期に相当し、微高地上からは出土遺物から古墳時代前期と考えられる遺構が検出されていることから、これらの遺構は、ほぼ同時期に存在した可能性がある。

ところで、1号杭列と2号杭列の間では、暦年較正年代では1号杭列は3世紀後半から4世紀中頃、2号杭列は4世紀前半から4世紀後半末と、1号杭列がやや古い値を示す傾向にある。ただし、放射性炭素年代測定の誤差等を考慮すると、有意差として指摘することは困難であり、現段階では、少なくとも、ほぼ同一時期に伐採された木材を利用し、構築された遺構であると考えられる。

2) 土坑の用途推定

土壌中に普通に含まれるリン酸量、いわゆる天然賦存量については、いくつかの報告事例があるが [Boven 1983, Bolt & Bruggenwert 1980][川崎ほか 1991][天野ほか 1991] など、これらの事例から推定される天然賦存量の上限は約 30 P₂O₅ mg/g 程度である。また、人為的な影響(化学肥料の施用など)を受けた黒ボク土の既耕地では 55 P₂O₅ mg/g [川崎ほか 1991] という報告例があり、当社におけるこれまでの分析調査事例では骨片などの痕跡が認められる土壌では 60 P₂O₅ mg/g を越える場合が多い。

本分析結果では、SK 34 8層及び SK 38の2・3層において、天然賦存量の上限に近い 254319 P₂O₅ mg/g のリン酸が検出された。対照試料である基本土層と比較してもリン酸が多く含まれることから、これら試料については何らかの形でリン酸が富化されていることが指摘される。ただし、SK 34 8層では腐植含量も高い特徴にあることから、植物遺体由来の可能性も予想され、一概に骨などの遺体成分由来して

いる指摘することはできない。また、今回調査を実施した遺構覆土は還元状況下におかれた経緯が想定され、土壌中でのリン酸固定が弱く、移動・拡散しやすい状況にあったと予想される。仮に骨などの遺体成分が当時の遺構内にあったとしても、リン酸固定能の高い火山灰土壌のように遺構覆土に残留・固定される可能性が低く、さらに、周辺からのリン酸成分の流入の可能性も考えられることから、リン酸富化の要因を一概に遺構内容物や用途と結びつけることは出来ない。

一方、腐植含量は、SK 34の腐植含量が高い傾向にあり、SK 34の遺構覆土に有機物が集積されていることが指摘される。なお、SK 34遺構覆土に集積されている有機物の本質的な性状に関して、腐植物質として存在しているものか、土坑底面で認められた木質樹皮のような未分解の植物遺体として存在しているかは、本結果のみで判断することは困難である。したがって、覆土中の微細植物片の確認や腐植形態などの調査が必要である。なお、SK 38については基本土層と腐植含量に大きな差異が認められないことから、有機物の集積が少ない土壌であるといえる。

以上の結果、SK 34はリン酸及び腐植含量は、共に高い値を示すことから土壌中の有機物由来、あるいは、未分解の植物遺体由来の可能性が指摘され、用途の一つとして考えられる土坑墓であるか判断することは困難である。一方、SK 38では、腐植含量は基本土層とほぼ同じであり、リン酸が天然賦存量の上限に近い値を示すことから、リン酸の富化が指摘された。ただし、当地点の土壌は還元状況下でリン酸固定能の弱い状況にあると想定され、移動・拡散及び流入の可能性もある。そのため、本分析結果のみか

ら土坑墓と判断することは難しく、さらに、微細遺物の検出状況や土地利用の履歴などの調査や、遺物や遺構の考古学的所見を含めて検討することが望まれる。

3) 不明遺物の鑑定

SK 34 8層から検出された不明遺物は、表面に金属光沢のようなものが認められることから、金属片あるいは鉱物片と予想された。蛍光 X線分析及び X線回折分析の結果では、この不明遺物は鉱物片であり、その組成から黒雲母片と判定される。X線回折分析では、黒雲母の他に緑泥石および針鉄鉱が検出されているが、これらは黒雲母の変質および風化作用により生成される鉱物であり、黒雲母の結晶内部に共生しているものと考えられる。

鉱物片と判定されたことから、顕微鏡及び肉眼による観察を行った結果、肉眼では黒色を呈し、雲母特有の薄板状の積層が観察される。薄板の平面は光を反射するため、一見、金属光沢と思われる反射がみられるが、これは雲母に特有な (001) 面の劈開による反射である。黒雲母片は、粒径 6 μ m 大と粗晶質であることから、花崗岩類に由来する鉱物片と考えられる。水系に花崗岩類の分布する荒川及び胎内川由来の扇状地堆積物にも含まれていることは明らかであり、遺跡周辺でも容易に認められるものと理解される。

4) 黄褐色粘土の由来

本遺跡では、トレンチ断面の土層観察では、過去の調査で確認された明瞭なテフラ層は確認できなかった。ただし、発掘調査時にテフラの可能性のある黄褐色粘土が SK 38や SK 25から採取された。これらの試料の分析の結果、いずれの試料からも、スコリア・火山ガラス・軽石などのテフラに由来する砕屑物は認められず、極粗粒砂以下の石英および長石類の破砕片を主体に、黒雲母、輝石類、磁鉄鉱などの鉱物片が混在する岩石由来の砕屑物が確認された。本遺跡の立地を考慮すると、砂分の主体を占める石英および長石類は、荒川上流域の朝日山南部に分布する白亜紀の花崗岩および楯形山地に分布する花崗閃緑岩など [新潟県 1989] に由来すると考えられ、いずれも河川作用による堆積物であると判断される。

ところで、本地域周辺では、越後平野北部の沖積低地から 4枚のテフラ層が検出されており、層序対比の重要な指標とされている。これらは、下位より始良 Tr火山灰 (AT)、浅間草津テフラ (AsK)、加治川火山灰 (KJ)、浅間六合軽石 2または 3にそれぞれ対比されており、いずれも火山ガラスを主体とするシルト質のテフラとして確認されている [安井ほか 2002]。さらに、前述のように本遺跡においても、対比不明ではあるが火山ガラスからなるテフラ層が検出されている [土部 2003]。これらの分析例から、道端遺跡および周辺域の低地下よりテフラ層が検出される可能性はあると考えられ、今後の発掘調査においてもテフラ層の確認に留意する必要がある。

引用文献

- 天野 洋司・太田 健・草場 敬・中井 信 1991 「中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量」
『土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発』農林水産省農林水産技術会議事務局編 28 36 p
- Bowen H J M 1979 Environmental Chemistry of Elements (浅見 輝男・茅野 充男 (訳) 1983 「環境無機化学」
『元素の循環と生化学』博友社 297p)
- Bolt G H Bruggenwert M G M 1976 SOIL CHEMISTRY (岩田 進午・三輪 春太郎・井上 隆弘・種 達行 (訳)

1980

『土壌の化学』学会出版センタ - 309p)

土壌標準分析・測定法委員会編 1986 『土壌標準分析・測定法』博友社 354p

土壌養分測定法委員会編 1981 『土壌養分分析法』養賢堂 440p

川崎 弘・吉田 淳・井上 恒久 1991 『九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量』『土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発』農林水産省農林水産技術会議事務局編 23 27 p

ト部厚志 2003 『火山灰分析』『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 12 巻 日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書 道端遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 44 46 p

石川智紀・内藤真一ほか 2002 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 11 巻 日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書 道端遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 26p

渡邊裕之・内藤真一ほか 2003 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 12 巻 日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書 道端遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 55p

新潟県商工労働部工業振興課 1989 『新潟県地質図(20万分の1)および説明書』新潟県

農林省農林水産技術会議事務局監修 1967 『新版標準土色帖』

ベドロジスト懇談会編 1984 『土壌調査ハンドブック』博友社 156p

安井 賢・鶴井幸彦・小林巖雄・ト部厚志・渡辺秀男・見方 功 2002 『越後平野北部の沖積低地における汽水湖沼の成立過程とその変遷』『第四紀研究』41 185 197 p

第 章 考 察

1 出土土器の時期設定と主な遺構出土土器の器種構成

A 出土土器の時期設定

出土土器の年代観については、3時期にわたる遺構の重複関係と川村浩司氏による上越市における土器編年[川村 2000]や南加賀の漆町遺跡編年[田嶋ほか 1986]などとの対比を行なった。そして、道端遺跡として道端 1期(川村編年 3段階から 4段階前半、漆町 7群へ 8群前半並行)道端 2期(川村編年 4段階後半、漆町 8群後半並行)に大きく 2時期区分し、さらに道端 1期を道端 1-1期(川村編年 3段階前半、漆町 7群前半並行)と道端 1-2期(川村編年 3段階後半へ 4段階前半、漆町 7群後半へ 8群前半並行)に細分した。以下道端 1-1 期 - 2 期を代表する遺構出土の掲載土器を挙げて各期の器種構成に言及する。

B 主な遺構出土土器の器種構成

道端 1-1の遺構出土土器の器種構成

ここでは、S13 S15- 及び 1号円形周溝状遺構の内側の溝を有する建物跡(以下 1号円形周溝状遺構 A)を構成する各遺構(SD 031・ 049・ 053)出土の土器について述べる。S13は、器台(11・ 12)、裝飾壺(13・ 14) 甕(17・ 18・ 19) S15- 2からは、片口鉢(25)、赤彩の鉢(26)、赤彩の壺(27) 甕(28)、1号円形周溝状遺構 Aを構成する各遺構(SD 031・ 049・ 053)からは、器台(35・ 38) 甕(33・ 34・ 36・ 37・ 39・ 40)を図示した。S13と 1号円形周溝状遺構 Aは、供献具としての器台・壺と煮沸具もしくは貯蔵具としての甕類というシンプルな器種構成をとることにおいて共通点を持つ。S13の 11は、川村編年 3段階からみられる裝飾器台で北陸北東部に通有する代表的な器形である。S15- 2は、供献具と考えられる赤彩の鉢・赤彩の壺、煮沸具もしくは貯蔵具としての甕、に調理具としての片口鉢が加わる。

道端 1-2の遺構出土土器の器種構成

ここでは、本期の代表的な遺構である 1号円形周溝状遺構の外側の溝を有する建物跡(以下 1号円形周溝状遺構 B)(SD 003・ SD 027・ SD 056・ SK 001・ SK 054・ SK 034・ SK 038)、2号円形周溝状遺構(SD 255・ SD 266)についての器種構成に言及する。

1号円形周溝状遺構 B

SD 003からは、まず高環の脚(41)、器台 2点(42・ 43)を図示したが、42は、前出の 11と同器形の裝飾器台だが、11にくらべ脚が短く口径も大きく、裾部の開きも大きい。そのほかに鉢(44)、壺(45・ 46)、甕(47-50)を図示したが、高環・器台と壺の 49は供献具、赤彩の施されていない鉢は食膳具、壺の 46は貯蔵具、甕類は煮沸具もしくは貯蔵具であろう。本遺構の器種構成は、基本的な器種構成である。甕と壺と器台に供献具と考えられる高環と食膳具と考えられる鉢が各 1点加わったことが、道端 1-1との違いである。

SD 024からは、高環 3点(51-53)、器台 2点(54・ 55)、低台付の椀タイプの小型の鉢(56)、壺 4点(57

→60)、甕(61)を図示した。鉢も赤彩され、甕もほぼ1個体で出土し、この遺構の器種構成は、大部分が、供献具で占められていると言っても過言ではない。なかでも高杯は3点と多い。器台は、川村編年4段階以降に出土する54の低台の小型器台と川村編年3・4段階にみられる55の北陸北東部通有の装飾器台である。本遺構の器種構成は、供献土器が多く、道端期・Ⅰの器種構成とくらべ明らかに祭祀的な色彩が濃いものになっている。

SD056からは、高杯(63)、小型短頸鉢(64)、壺3点(65-67)、甕(68-70)を図示した。高杯と小型装飾壺66・小型丸底壺6が供献具、小型短頸鉢は食膳具、65の壺・甕は、煮沸具もしくは貯蔵具である。特に、69は、東海系のS字状口縁の台付甕の模倣と思われる、煮沸具に限定できるものである。

SK00からは、高杯2点(71・72)、器台(73)、壺7点(74-78・80)、甕(79・81-83)を図示した。本遺構も煮沸具もしくは貯蔵具である甕と壺を除きほとんどの遺物が、供献具と考えられる。特筆すべきは、壺M類が3点出土していることでやはり祭祀的な色彩が濃い遺構と言える。また、この東海系のパレス壺の系譜である壺M類と東海系高杯と思われる7など東日本系統の土器が、目を引くことも本遺構の器種構成の特色の一つと言える。

SK034は、高杯(110)、器台(111)、壺4点(112-115)、甕4点(116-119)を図示した。高杯、器台、壺の供献具、と煮沸具もしくは貯蔵具である甕類という器種構成である。ここでも壺M類が2点見られる。また、円形浮文のついた赤彩の壺も出土している。本遺構は樹皮が底面に敷かれた土坑で、円形周溝状遺構の一部を構成し、墓坑の可能性もあるが、副葬品的な遺物もなく断定できない。

SK038は、高杯(120)、壺(121)、甕(122)を図示した。高杯は、内外面黒色処理がなされ、日常的に使用した可能性を考え、食膳具としておく。壺は供献具、甕は煮沸具もしくは貯蔵具である。本遺構も樹皮が底面に敷かれた土坑で、円形周溝状遺構の一部を構成し、墓坑の可能性もあるが、SK034と同様に副葬品的な遺物もなく断定できない。

2号円形周溝状遺構

SD259からは、高杯3点(86-88)、器台3点(89-91)、壺3点(92-94)、甕2点(95・96)を図示した。86・87の東海系高杯、壺M類(93・94)が出土し、東日本系統の土器が目立つ。本遺構も供献具中心で祭祀的な様相が濃い遺構と言える。

SD260からは、器台6点(97-102)、鉢3点(103-105)、壺(106)、甕2点(107・108)、蓋(109)を図示した。本遺構は、器台が供献具、鉢は103・104が食膳具、105の有孔鉢はおそらく甑と考えられ、調理具とする。

道端期の遺構出土土器の器種構成

本期の代表的な遺構であるSIの器種構成について述べる。

SIは、高杯(1)、器台2点(2・3)、鉢2点(4・5)、壺(6)、甕4点(7-10)を図示した。高杯、器台、壺が供献具、鉢は食膳具、甕は煮沸具もしくは貯蔵具である。本遺構は、古墳時代前期のあらゆる器種が出揃っている感がある。

以上、本遺跡の各期の器種構成について述べたが、全体を概観してわかるのは、道端期(川村編年3段階前半、漆町群前半並行)は、器種構成もシンプルであるが、年代が新しくなるにつれて、器種も豊富になることである。道端期(川村編年4段階後半、漆町編年4段階後半並行)のSIになると器種も豊富で器形もバリエーションに富んでいる。また、円形周溝状遺構に含まれる各遺構の出土土器をみるとや

は祭祀的な様相が濃いということが言える。祭祀的な遺構の性格が器種構成に反映していると考えられる。

2 本遺跡の集落の景観について

A 概 要

この論では、主に竪穴建物・円形周溝状遺構・掘立柱建物柱・杭列を中心とする個々の遺構を発掘所見と出土遺物からどのような時期の遺構としてとらえるか、どのような組み合わせの遺構の単位なのか、また、これら複数の遺構群への言及を通じて、往時の集落の推移していく景観に可能な限り接近してみたいと思う。なお、各遺構の位置、規模、付属施設、出土遺物の詳細は、事実記載、個別遺構図版、遺物図版などを参照していただきたい。

B 遺構出土土器の年代と重複関係からみた遺構配置関係の推移

本遺跡の主な遺構群は、第2図にみられるごとく、1号円形周溝状遺構と2号円形周溝状遺構及び入口施設を伴った杭列を中心に、二つないし三つの遺構単位に分けることができると考えた。ここで扱うのは、これらの2基の円形周溝状遺構および杭列を中心に、周囲に検出された竪穴建物（竪穴建物と明確には、認定できなかったが、規模、形状などからその可能性を持つと考えられる遺構も含む）と掘立柱建物である。またここで遺構存続時期の段階的な推移について述べられるのは、遺物から得られる情報量が比較的多く、重要な遺構間に重複関係を有する1号円形周溝状遺構、入口施設を伴った1号杭列、竪穴建物、掘立柱建物のセット関係についてだけで、掲載し得る遺物が少なく、遺構間の重複関係もあまりない、2号円形周溝状遺構周辺の遺構群の時期については、出土遺物の検討と1号円形周溝状遺構の遺物の年代観との比較によるしかなかった。以下、古墳時代前期の土師器の年代観を援用しつつ、遺構間の重複関係・遺構の軸方位・配置関係によって分類した、1号円形周溝状遺構を中核とする遺構群（A群）、2号円形周溝状遺構を中核とする遺構群（B群）、他の単位の遺構群（C群）について述べる。なお古墳時代前期の土師器の年代観は、川村浩司氏の編年案〔川村2000〕に依拠した。

1) 1号円形周溝状遺構を中核とする遺構群（A群）

本遺跡の中心となる遺物の年代は、川村編年のⅡ段階であり、まずそれを道端Ⅰ期と設定したが、SI4・SI4・1号円形周溝状遺構出土遺物の一部にⅣ段階後半以降に比定される遺物が出土したため、これらの遺物の出土する時期を道端Ⅰ期とした。又、道端Ⅰ期は1号円形周溝状遺構の内外の周溝の重複関係や掘立柱建物の重複関係から二つの時期に細分せざるを得ず、Ⅰ期をⅠ期、Ⅱ期に区分した。

道端Ⅰ期（川村編年Ⅱ段階前半代）

道端Ⅰ期は、1号円形周溝状遺構Aを中心にSI3・SI5・2で構成される。これらの遺構群は、出土遺物の年代、遺構間の重複関係からおそらく川村編年のⅡ段階（漆町群並行）の末頃に姿をあらわした遺構群であろうと考える。1号円形周溝状遺構Aは、SD031・049・053によって構成される。これらの遺構の掲載遺物（33～40）のうち、頸部がやや長く直線的で口唇端部の垂下が見られる甕33は古い様相をもつものの、器台35・38、端部面取りの甕36・39の形態からⅡ段階におさまる遺物群と判断した。この遺溝は、次の道端Ⅱ期にさしかかる頃、1号円形周溝状遺構Bの出現時、川村編年Ⅳ段階以前のどこの時点で、その中心的な役割を終えたと思われる。SI3は、SI1・2によって直接・間接に切れ、これらの竪穴建物

の重複関係のなかで最も古い遺構であり、遺物の時期も 12の小形器台、18・19の覆の口唇端部を上方につまみ上げた形状などに 3段階以前の古い様相がうかがえる。ただし、S13は、次の道端 - 2期まで残ると考えられる。11の装飾器台、13・14の装飾壺などの 3段階の指標となる遺物が、道端 - 2期に属する鴨円形周溝状遺構 Bの SD 003にもセットとして出土したことなどは、両者の関連性と同時並存の可能性を示唆するもので興味深い。S15- 2は、S15- 1に拡張される前の竪穴建物である。遺構の構築する年代は、27の二重口縁壺、28の布留傾向の甕などから、3段階とした。また S15- 2は、S15- 1との時期差も明確ではないが、両者の遺構間層序からこの遺構の廃棄時は、3段階の前半のある時期と推測する。この竪穴建物は、この期に姿を消す唯一の遺構である。

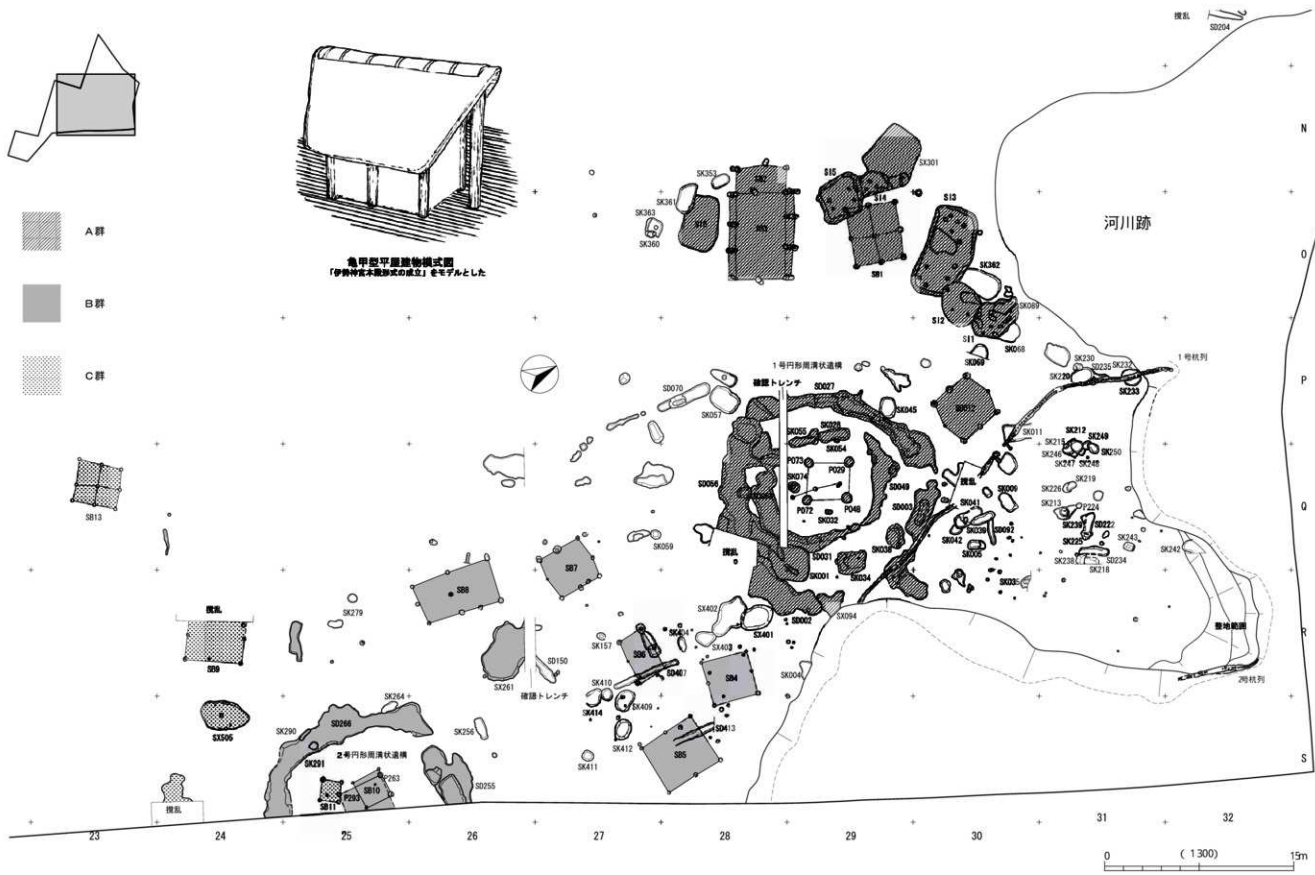
道端 - 2期 (川村編年 3段階後半から 4段階前半代)

この期のはじまりは、1号鴨円形周溝状遺構 Bが、遺跡の景観のうちにはじめてその姿をあらわしはじめてきたところであろう。この期に属する遺構群は、1号鴨円形周溝状遺構 Bを筆頭に、前期から続く S13 S13が廃棄されたあとに造られる S12 S15- 1 S15 S15- 2で構成される遺構群である。1号鴨円形周溝状遺構 Bは、SD 003・SD 027・SD 056・SK 01・SK 054で構成され、SK 034 SK 038もこの遺構に付属すると考えられる。これらの遺構の掲載遺物 (41・85 110-122) で、装飾壺 75・76を指標としてそのほとんどは、川村編年 3段階に出土してもおかしくないものばかりだが、それ以外で明確にこの段階外と言えるものは、以下の遺物である。それらは、古い器形で 3段階には見られない SD 056の壺口縁 66 川村編年 4段階に属する SD 003の覆の口縁 48・SD 027の口唇端部を丸くおさめる覆 61 4- 5段階に出現する SD 027の小形器台 5などである。これらの事実から推測できるのは、鴨円形周溝状遺構 Bを個別の遺構単位で見ると、SD 003は、少なくとも 4段階以降に廃棄され、SD 027は、4段階後半のどこかで廃棄されたということである。そして 1号鴨円形周溝状遺構 Bをひとつの遺構として見た場合には、川村編年の 3段階後半に構築され、4段階の後半前後にさしかかる頃に廃棄されたと考えられることもできる。S12は、遺物の出土量も少なく掲載に値するものは、なかった。おそらくこの遺構は、存続期間も短くこの期の早い時期に廃棄されたのであろう。S15- 1は、S15- 2を拡張し造られている。(第 10章 10B 参照) 出土遺物の時期は、22の器台、24の覆の形態から第 3段階におさまるものである。S12は、掲載遺物 31・32から 3段階・4段階のいずれかに属するかは判断できないが、それ以前・以後ではなく、位置的に平行関係にある SB 3と同時期の遺構と考えた。また SB 3は、主軸方位が 1号鴨円形周溝状遺構の外溝を有する建物跡の 4本の支柱穴を持つ竪立柱建物の主軸方位に直交し、また次の 3期に登場する SB 2に切られていることから、鴨円形周溝状遺構 Bと同時期の遺構としてこの期においた。なお、この期の遺構群には、鴨円形周溝状遺構 Aを加えていないが、上屋が廃棄されても、周溝部は、鴨円形周溝状遺構 Bと同時に開口していた可能性もあろう。

道端 3期 (川村編年 4段階後半代)

この期に属する遺構は、前期から続く SD 003をのぞく鴨円形周溝状遺構 B (周溝部のみの可能性もある) S11 S14 SB 1 SB 2 SB 12 鴨・2列である。この期のはじまりは、遺跡北東部の舌状の河川への張り出し部を囲うように、入り口施設を伴う鴨・2列がその張り出し部の付け根に造られ、鴨・2列が遺跡の北東部縁辺を横切る河川の西岸に造られた時期である。前述したように、この期に鴨円形周溝状遺構の少なくとも周溝部は、まだ開口していると考えたが、鴨・2列に壊されている SD 003は、この期のはじまる頃にはすでに廃棄されていたはずである。

S11・4は、本遺跡出土の遺物年代の下限を示す遺物を有する遺構で、重複関係においても最も新しい。S11は、土坑など切り合い、古い時期の遺物も混入しているが、柱状の脚が裾部下端で強く外反する高



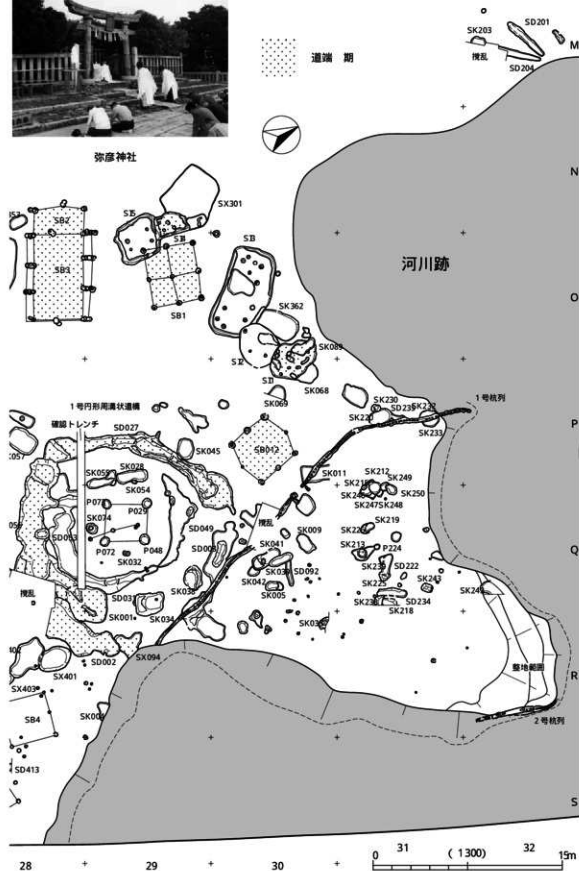
第2図 遺構群配置図



第2図 時期別遺構配置図 期



弥彦神社



第 2 図 時期別遺構配置図 期

環1 赤彩した丸底の壘6、頸部の屈曲部がゆるやかで、口唇端部をまるくおさめる罫などには、川村編年の4段階でも5段階に近い様相がみられる。次にSI4の小形丸底壘口縁29も同様の時期の所産と思われる。このSI4と南北方向に平行して建てられたSB1や前期においたSB3を南北方向に半間分縮小し、東西方向に一間分拡張して建て替えたSB2なども配置関係や重複関係から本遺跡の最後の時期に姿を現す遺構のひとつと考えられる。最後にSB12と入口施設を伴う1号杭列及び整地された河川の西岸に築造された2号杭列にふれておく。SB12は、機持ち柱を有する2間 間の亀甲形を呈する東西棟で側柱構造の掘立柱建物である。1号杭列の入口部の正面に建てられ、張り出し部へ向かって突き出た二本分の入口部の杭と南北方向の軸方位を同じくし、東西2間の中央の柱同士を結んだ線が、入口のほぼ中心を通る。このことからSB12は、1号杭列と密接な関係を持つ建物と判断した。また1号杭列は、SD003をはじめとする重複関係を有するあらゆる遺構を横断しこわしている。また杭材の樹種は、樹種同定の結果、1号杭列・2号杭列ともにハンノキであり(第6表参照)双方とも布堀りの掘り方構造を有すること、それとともに杭材の暦年較正年代は、1号杭列が、3世紀後半・4世紀中頃、2号杭列が4世紀後半・末と示されたが、(第9・10表参照)これらの年代の違いは、放射性炭素年代測定の見積りという指摘があり、ほぼ同一時期の伐採年代を得ている。これらの年代は、道端 期の遺構存続年代に十分合致するものである。出土遺物は1号杭列から裏(140)・壘底部(141)、2号杭列から器台受け部(142)、整地層からは、器台脚(143)・壘口縁(144)・裏口縁(145)などである。これらの遺物も川村編年の5段階に入るものはない。ここに図示した遺構群が、おそらく本遺跡の廃絶前の景観と考えられる。

2) 2号円形周溝状遺構を中核とする遺構群と他の1単位の遺構群

前述したように2号円形周溝状遺構周辺の遺構群は、切り合いもなく出土遺物も少ないため、最も出土遺物の多い2号円形周溝状遺構の遺物の年代幅によって、当該遺構群の帰属する時期を決定するしかない。2号円形周溝状遺構は、SD255・SD264によって構成される。東海系の高坏86・87・縁帯に棒状浮文を貼り付けたM類の壘93・94・小型の器台98・99・100などは、5段階に属する。また、4段階以降に入るものは、89・90・97などの小型の器台である。これらのことから、2号円形周溝状遺構は、5段階後半中心で4段階後半代前後のどこかの時点で廃棄された可能性を考え、道端 2期を中心に機能した遺構であると推定する。2号円形周溝状遺構周辺の遺構群は、SB4・5・6・7・8・9・10・11・13・SX261・505などである。SX261からは、裏A類2点(136・137)を掲載したが、明確な時期を示す遺物ではない。SB4は、SX401・402・403などとの組み合わせで、周溝状遺構を構成する建物跡になる可能性もあるが、ここで検討する。

これらの遺構群は、主軸方位、配置関係から以下の二つのグループ化が可能である。

B群

ここには、SB4・5・6・7・8・SX261と2号円形周溝状遺構の周溝内区画部で主柱穴との重複関係を有するSB10が、含まれる。これらの遺構群の配置は、2号円形周溝状遺構の北西もしくは北に配置された遺構であり、1号円形周溝状遺構に帰属する遺構群の配置と同様である。また、SB4を除くSB5・6・7・8・9は、短軸、長軸いずれかの軸方位が、ほぼ同じであり、この軸方位は、SB10と2号円形周溝状遺構のP263・P293を主柱穴とする掘立柱建物の軸方位ともほぼ重なる。B群の遺構群の配置は、2号円形周溝状遺構の北西にSB8・そのすぐ東にSX261・北にSB7・そこからほぼ直角に東へ折れて、SB6・SB5をつづく。そしてSB4のみが軸方位がややずれ、SB3の北西に位置する。これらから、読み取りえることは、まず、2号円形周溝状遺構の周溝内区画部の建物が、SB10と2号円形周溝状遺構のP263・P293を主柱穴とする掘立柱

建物で、2時期にわたる遺構であるということである。P263・P293の底面には、柱を固定し、動かないようにするための根がらみが、出土しているように、これらが主たる建物の柱穴跡であろう。また、後述するようにSB1も周溝内にあるが、この2の建物と軸方位が大きくずれており、2号円形周溝状遺構と異なる他の単位の遺構群の掘立柱建物と考えたほうが自然であろう。よってB群の遺構群は、2号円形周溝状遺構に伴う時期の遺構として、道端 - 2期に帰属する遺構とする。

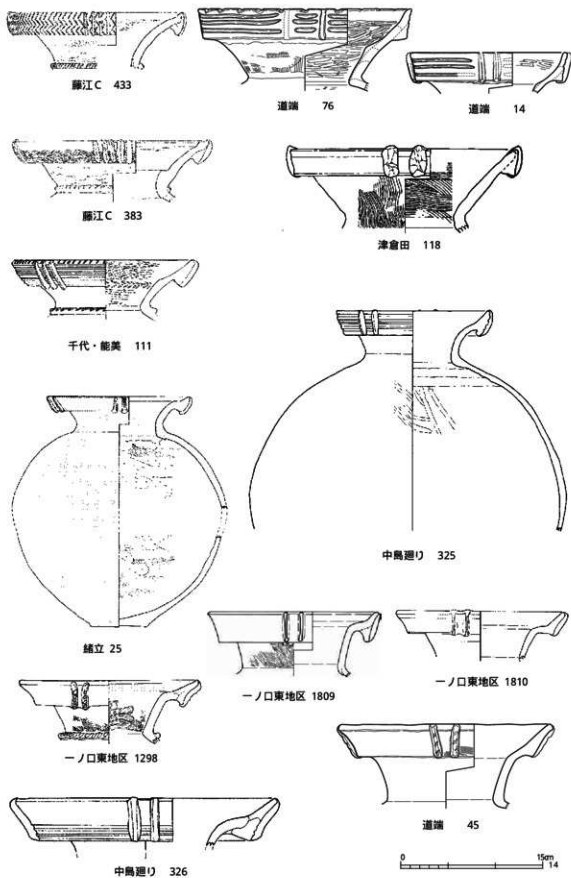
C群

SB9 11・13・SX509がC群の遺構群である。これらは、長軸、短軸いずれかの軸の方位が、同一であることが、唯一の根拠であるが、2号円形周溝状遺構に伴う遺構群を取り出し、結果残った遺構群である。SB9と長軸方向が同一のSX509は、床面が、明確でないことなどから竪穴建物と認定しなかったが、床面と想定しえる面に6箇のピットが検出され、竪穴建物に準ずる遺構といえる。SB11は、2号円形周溝状遺構の主柱穴と切り合い関係を有するが、新旧関係は、不明である。SB13は、2周間の総柱構造の掘り方を持たない打ち込みの掘立柱建物である。この遺構群の分布する2号円形周溝状遺構の南西に当たる23・24R・Sグリッド付近は、古墳時代前期の包含層も残っており、牛馬などの耕作による攪乱も激しく、散見される遺物も小破片ばかりで、年代のわかるものはない。C群の遺構群の帰属する時期は、不明であるが、これらの遺構群の検出は、東側調査区外にあるだろう他の遺構の存在をうかがわせる。前述したように、周溝を有する建物跡に伴う遺構群は、その西側・北側に位置していることが、1号・2号円形周溝状遺構とそれに属する遺構群の位置関係から推測できる。このことは、逆にこれらの遺構群の東、もしくは、南東側に周溝を有する建物跡が存在する可能性を示唆するものである。

3 壺M類の土師器

今回の調査で判明した、道端 2期において中心的な位置を占めたであろう 1号円形周溝状遺構と1号円形周溝状遺構を軸として半環状に配置される竪穴建物群から出土した土師のなかで、特定の土師を取り扱って述べていきたいと思う。

壺についてはM類（以下道端M類）が出土していて、13・14・75・76・93・94・112・113が挙げられる。今回出土した道端M類の特徴は個々の詳細で述べた通り、ひとつながりに伸びる口頸部内面にゆるやかな山形の帯を貼り付けて突出させ、口頸部内面に二重口縁の内面の形状を作り出していることである。そして道端M類は、SK034を含めた1号円形周溝状遺構の外側の周溝を構成する各遺構間SK001(2・3)・SK034(3・4)・SD003(2)で接合関係が明らかになり、1号円形周溝状遺構について述べる上で重要な位置を占めることとなった。また棒状浮文を有する45(SD003・露出土)も壺M類として取り上げ、類似の土師とともに図示(第24図)した。藤江C[布尾和史・布尾幸恵2002]433 津倉田[笹沢・小島1999]118は口頸部の形態がひとつながりで、道端M類の口頸部基本形態に類似性がみられる。藤江C383は口頸部内面に特徴的な段をもつ。実測図からはこの段が粘土帯の貼り付けによるものか不明であるが、蓋などを乗せるための実用的な形態であるように思える。千代・能美[橋本・福海2003]11は、口頸部形態と口頸部の内面処理が道端M類に一番近く、また口唇部に刻みが施されることなどから祖形のひとつとして注目したい。ただし千代・能美11の胴部は下膨れ状を呈すると考えられ、緒立[金子ほか1983]25中島廻り[小島1991]325にみられる球胴が道端M類の胴部に近い形態であると想像される。49は有段口縁をもつ壺で口縁部に棒状浮文を貼り付けている。縁帯の幅が頸部の長さにならば短く、通常の有段口縁よ



第24図 壺 M類

り壺M類に近いバランスを備えている。45と類似した形態をもつ土器として一ノ口遺跡東地区〔鈴木ほか1994〕1298・1809・1810(図示した。これらの土器は45と等しく口頸部が直線的に段を有し、頸部の外傾角が少なく直立に近い角度になっている。また頸部内面への帯の貼り付けは見られない。

これらを整理すると図示した壺M類を口頸部の形状から大きく3つに分類することができる。

1、外傾して開く口頸部をもつ。口頸部が一繋がり連続して直線的である。頸部が緩く外反するものこのタイプに含めた。また口径部内面には粘土帯を貼付けて突出させたものがある。藤江C 433 津倉田118 千代・能美111 道端M類がこれに相当する。

2、頸部が直立気味に伸び上方で外反する。曲線的な形状の口頸部をもつ。楠立25 中島廻り329がこれに相当する。

3、直立気味に伸びる頸部をもつ。頸部は上方で屈曲外傾し水平に近い角度になるものも多く、口頸部との境で再び屈曲する。一ノ口遺跡東地区1298・1809・1810 道端 49がこれに相当する。

今回の調査では遺構の新旧関係や伴する遺物などからは不明な点が多く、1～3のグループを時期別に並べるとは難しい。1～3のグループは同時期に存在した同類のバリエーションであるか、時期差による形態の変化であるのか今後課題を残すものである。

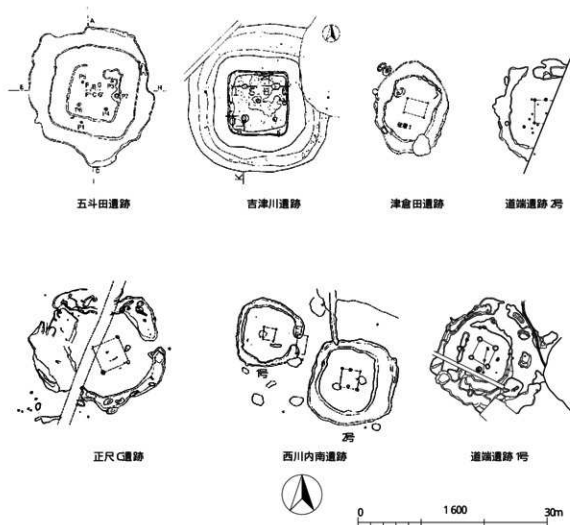
次に道端M類個々の相違点について触れてみたい。円形周溝状遺構から出土した75・76・113はS3出土の13・14に比べて口径が大きく、また口唇部に刻みが施されている。S3出土の13・14は、口径が小さいにもかかわらず縁帯の幅は1号円形周溝状遺構出土の道端M類とほぼ同じで、口唇部に刻みが施されていない。これらは小型化と省略を現したひとつの形であると考えられる。そしてこの二つのタイプ(原型とその省略形)は各遺構の性格(祭祀もしくは首長の居住する建物にたいして、一般的な竪穴建物)を反映していると考えられないだろうか。

器台には前代(2段階)の特徴を残すと考えられるD類(11・42)があり、赤彩されたこのふたつの器台はそれぞれ(SD003・S3)の遺構内でも目立つ存在になっている。この2つの土器は受け部底がほぼ水平で、受け部の形状はほぼ同形である。法量でいえば受け部底の径と器高がほぼ同じである。相違点は11(S3出土)の口径が小さく、脚高が高いことで、11は42(1号円形周溝状遺構出土)よりスマートな印象を受ける。このことは道端M類における1号円形周溝状遺構と竪穴建物との関係に共通した事柄であり、円形周溝状遺構と竪穴建物(S3)の関係を考える上で大きな手掛かりである。

4 本遺跡の円形周溝状遺構の性格について

円形周溝状遺構をどのような性格の遺構と考えるかについては、大別すると2つの考え方に分けられると思う。まず、第一は、周溝墓という規定である。第二は、溝に区画された建物跡という規定である。さらに建物跡と考えた場合にもこの遺構の性格を規定する場合(1)日常生活を営む溝を伴った住居跡で、単位の住居群の首長などの居住する中心的な建物とするか(2)単位の住居群の、溝に区画された共同の祭壇とするか、という2つの考え方があると思われる。結論から先に述べると、私たちは、当該遺跡の円形周溝状遺構を溝に区画された建物跡と考える。それは、以下の理由による。まず、円・罌円形周溝状遺構の周溝内区画部に明確な墓坑などの主体部がないことである。SK001 SD02などには、落ち込みもあり、SK03やSK03Bなどの一定の深さを持つ土坑もあるが、人骨などの墓を明示する遺物の出土もなく、SK03やSK03Bのリン酸分析の結果からも墓と認定できる結果も見出されなかった(第4章第3節)。次に、

4 本遺跡の円形周溝状遺構の性格について



第2図 周溝を有する建物跡

遺跡名	遺構名	周溝内区画面積	方形区画内面積	柱間面積
五斗田	方形周溝状遺構	193	64	203
吉津川	周溝を持つ平地式住居	217	100	250
津倉田	住居1・SD66	84	-	88
正尺C	周溝状遺構	154	-	194
西川内南	2号円形周溝状遺構	975	-	130
道端	1号円形周溝状遺構	140	-	98
	2号円形周溝状遺構	(120)	-	(13)

第1表 周溝を有する建物跡の面積 単位㎡()内推定値

周溝の内側に上屋根を支える4体の柱穴を有することである。全貌の明らかな1号円形周溝状遺構は、柱材は出土していないものの、主柱穴の底面に柱の沈みこみを防ぐための根太が残されていた(図版16)。全体の半分しか検出されていない2号円形周溝状遺構の主柱穴と思われる2箇の柱穴に柱を動かさないように固定する根がらみが残されていた(図版20)。1号円形周溝状遺構は、主柱穴の掘り方の大きさからも2号円形周溝状遺構より柱も太く、建物の存続年代は長いと考えられる。ただし、2号円形周溝状遺構は、周溝の内部にSB10・1があることから、建て替えの可能性もあり、2時期もしくは3時期を考えることもできよう。最後に、副葬品とおもわれる遺物(ガラス玉、勾玉、底部穿孔の壺)などが出土していないことである。福田聖は、方形周溝墓と周溝を有する建物との相違について述べているが[福田2000]この中で、明確な区分の目安になると思われたことは、a方台部・区画部の形態、b周溝の幅と深さにある程度の違いが見られること、c器種構成の3点である。aについては、周溝を有する建物跡の特徴として外周の形態と周溝内区画部の形態が同一であることをあげている。この意味は、溝の外側の上端と内側の上端によって囲まれた各々の平面形が相似関係にあるということである。本遺跡の周溝状遺構は、1号円形周溝状遺構(内・外)・2号円形周溝状遺構ともこれに該当する。bについては、深さが、50cmに満たないもの、特に幅1m以上で深さが50cmに満たないものは、周溝を有する建物跡である可能性が高い、としている。1号円形周溝状遺構の内と外の周溝の幅は、それぞれ0.4から2.5mと0.8mから3.4mを測り、深さは、それぞれ最大で20cmと35cmを測る。2号円形周溝状遺構は、幅0.9mから3.2mを測り、深さは最大で30cmを測る。後世のは壊整備などで削平されていることを考慮しても、幅に比べてかなり浅く、bの区分の目安に該当する。cについては、壺と合わせて甕の出土比率が高いとしている。1号円形周溝状遺構(内・外)・2号円形周溝状遺構ともに明確に判別しえる壺と甕を加えた出土比率は、8割から9割で、cの器種構成についてもこれに該当している(第4章参照)。発掘所見を基盤にした以上の観点をもとに、本遺跡の周溝状遺構を、「周溝墓」ではなく、「周溝を有する建物跡」と規定した。

次に当該遺構が、(1)日常生活を営む溝を伴った住居跡で、単位の住居群の有力家長等の居住する中心的な建物とするか(2)単位の住居群の、溝に区画された共同の祭壇跡と考えるか、という問題に入らうと思う。

第2遺は、新潟県内の周溝を有する建物と思われる遺構を市史、報告書、年報、研究会発表要旨、見学会資料などから転載したものである。この図から吉津川遺跡の周溝を持つ平地式住居は、当然として五斗田遺跡の方形周溝状遺構も明確に平地式建物に分類されるものと考えられる。両者は、周溝内区画部に幅20cm前後の細い溝によって区切られる方形区画を有する共通点が見られ、これは、壁溝跡であるという報告者の見解があるからである[田村2004]。津倉田遺跡の住居1とSD66正尺C遺跡の周溝状遺構西川内南遺跡の2号円形周溝状遺構道端遺跡の1号円形周溝状遺構同2号円形周溝状遺構等については、これらの建物に壁溝跡のないことがただちに高床式建物であることに直結しないが、高床式の可能性のある掘立柱建物跡といえる。他の遺跡の周溝状遺構については、正式な報告がないものもあり、詳しい言及は避けるが、本遺跡の基の周溝状遺構については、以下の発掘所見に注目したい。

1号円形周溝状遺構・2号円形周溝状遺構には、周溝内区画部に貼り床・硬化面などの床の痕跡が、認められず、また周堤も検出されていない。また1号円形周溝状遺構の4体の主柱穴のうち、東側2本の主柱穴のさらに東側正面に位置するSK032の内部には、炭化物の貯留があり、東京都立大学山田昌久助教授からは、1号円形周溝状遺構Bの主柱穴との位置関係からはしご穴の可能性があり、との指摘も受けている。これらの事実から、本遺跡の周溝状遺構内の掘立柱建物は、平地式ではなく高床式と判断する。第13

表は、これらの周溝を有する建物跡の周溝内区画部面積、方形区画内面積（この場合、壁溝に囲まれた部分の面積で建物面積を意味する）、柱間面積、溝のタイプ〔岡本 2003〕を一覧表にしたものである。（数字は、各掲載図から測定し、四捨五入したもので正確な数字ではないが、目安として参照していただきたい。）これによると、の平地式建物の建物面積＝居住面積は、約 64 から 100㎡とかなり広い。本遺跡の 1 号円形周溝状遺構を高床と考えるとその柱間面積＝居住面積は、わずか 9.8㎡とあまりに狭く、日常生活を営む有力家長などの居住施設としては、とうてい考えられない。これは、2 号円形周溝状遺構についても同様である。居住施設でなければ、ただちに祭祀施設であると結論するわけではないが、この高床式の建物を祭祀に用いた建物と考えたのは、溝に区画された周溝内区画部に建てられていること、そしてなによりも重要なのは、この周溝状遺構が他の遺構にこわされていないことである。つまり A 群の構成員の紐帯が維持されている間、もしくは集落外の強制力が（例えば大和政権などの）加わらない限りは、独立したエリアとして確保され続けているのではなかろうか。これらのことから周溝を有する建物跡は、1 単位の、血縁関係を紐帯とする集団の共同の祭場施設と考えるのが妥当であろう。なお、祭場説については、東北芸術工科大学の宮本長二部教授から貴重な見解をいただいた。本遺跡においてだけでなく、津倉田遺跡の住居 1 と SD 66 正尺遺跡の周溝状遺構、西川内南遺跡の 2 号円形周溝状遺構などを含め、これら周溝を有する建物については、周堤や床の有無から、平地式か、高床式かの判断をし、その建物面積＝居住面積などを検討し、その機能を判断することが、重要だと考えられる。

5 SB 12と出入口施設を伴った杭列の性格について

図版 43・44に見られるように、1 号杭列は、本遺跡の北東部に位置する舌状の河川跡への張り出し部の付け根を南北方向に横断する。布堀構造の掘り方を有し、杭列のほぼ中央に東へ袖状の突き出しを持った出入り口施設が、敷設されている。その施設の正面中央に亀甲型の横持ち柱の独立柱建物 SB12が、位置し、軸方向などから、両者の密接な関係がうかがえる。また一方張り出し部の西側半分には二十数基の土坑群が検出され、河川跡西岸の縁辺にある整地範囲内の一部には、2 号杭列が検出されている。これら 2 列の杭列は、樹根も同一、掘り方も双方布堀構造で、同時期の同製作者の遺構と考えられる（第 2 章 2 節参照）。以下これらの遺構の性格や役割について述べてみる。

SB12は、亀甲型の独立横持ち柱付建物である。このタイプの建物は、縄文時代後期からあり、祭殿（神殿）形式の建築と考えられている。〔宮本 2001 山田 2001 広瀬 1998〕本遺跡では、前節で述べたように、1 号円形周溝状遺構を血縁集団単位の共同の祭場跡と考えた。また、第 2 節で述べたように SB12 1 号・2 号杭列は、本遺跡の終末期の遺構と想定した。これらのことから、1 号円形周溝状遺構を廃棄した後、SB12を祭殿とし 1 号杭列を含む祭祀施設として、A 群（2 節）の構成員が利用した可能性が考えられる〔宮本 2001〕。この場合 1 号杭列は、金子拓夫氏の指摘のように集落内外の境界に位置し、結界のような役割を帯びていたのでは、あるまいか？だが、そうすると舌状の張り出し先端部の河川の西岸縁辺を囲う 2 号杭列に、どのような役割をあたえればよいのか？ 1 号杭列を含み、2 号杭列も土木的な機能として土止めの可能性もあるが、地盤を弱くするため土止めには適さない布掘りの掘り方構造と断ち割り断面に杭を打ち込んだ形跡がみられないことから、ここでは、別の可能性を探ってみたい。つまり、これらは祭祀施設と考えるべきで、張り出し部を意識し、その場所を圍繞することく杭列による結界を張ったと考えてみたいのである。ここで本遺跡の SB12を祭殿とした 1 号杭列を含む祭祀施設を神社の祖形として考え

てみる。神社の祖形の姿に対する興味深い見解は次のようである。「神社の原初的な姿としてまず考えられるものに神籬（ひもろぎ）・磐境（いわさか）がある。ヒモロギのヒは、霊で神聖を意味する。ヒモロギとは神を宿し留める樹のことで、樹木そのもの、または真垣（籬）のように並列した樹のうちに神を請じ祭るものをいう。」[岡田 1993] この説を援用すると、特に 弔杭列などは密度にばらつきはあるものの、杭間も 10cm前後を計り、まるで閉塞した内部を見えないようにするための目隠し塼のような機能を与えられていた遺構と考えれば、まさに百本を超える樹木を隙間なく[真垣（籬）のように並列した]姿としてとらえることができる。これらの杭列は、言い換えれば舌状の張り出し部に神を請ずるための装置であり、そして SB12は、その請じた神に祈る拝殿として使用されたと考えることができよう。興味深いことは、旧い祭殿（神殿）としての 1号円形周溝状遺構が、SB12と杭列によって圍繞された新しい祭殿（神殿）に変貌したちょうどその時期の姿が、本遺跡の終焉時（川村編年 4段階後半以降）に垣間見られることである。つまり 4部でも述べたが旧い祭殿（神殿）である 1号円形周溝状遺構をこわした 1号杭列出現の背景に、4世紀後半代に新潟北東部の一集落に及んだ大和政権などの中央の強制力の影をみることも可能ではないだろうか。なお、舌状の張り出し部に検出された土坑・溝の出土遺物である。SK 041(123・124) SK 212(128) SK 225(129・130) SK 232(131)・SD 222(135) などを見ると、SD 222(135) の高杯の脚が川村編年 4段階後半以降でも 3段階に近い様相をみせるがそれ以外は、すべて 3〜4段階に確実におさまるものであり、この区域に 弔杭列、 2号杭列による結界が張られた後は閉塞され破壊されたと思われる。

6 終わりに

本遺跡は、3単位の遺構群によって構成される河川に沿って営まれた拠点集落跡と考えられる。その時期は、出土遺物から川村編年の 3段階から 4段階にわたる。本遺跡を拠点集落と考えたのは、出土遺物の面から述べると遺物の編年時期の中心が川村編年の 3段階・4段階でも、各遺構内の遺物を通覧すると 2段階末から 3段階にさしかかる頃までの年代幅（60年〜70年）をもつこと、遺構の配置関係及び重複関係の面から述べると、円形周溝状遺構を中心に住居区画と祭祀の区画が明瞭に分かれており、少なくとも掘立柱建物、竪穴建物などの住居群が 3時期の重複関係を持つことなどである。拠点集落規定の条件は様々考えられると思う。居住域、生産域、墓域の明確な区分、集落の継続期間の長さなどがその条件として挙げられよう。本遺跡の集落は、前述したように生産域の存在は確認し得なかったが、居住域を明確に分離しており、本遺跡の集落の構成員が少なくとも 2世代にわたって、生活を継続したと推察され、拠点集落と考えてもよいと思われる。

その他にも発掘、整理から数々のことが、明らかになったが、自然科学分析の成果も、本遺跡の性格を知る上で多くの貴重な情報を与えてくれた。花粉化石群の分析（第 4章 1節 参照）では、周辺、あるいは上流で粟を栽培していた可能性、何種類かの植物が河川に投棄されていた事実は、それらの種実を食用、薬用、染料、灯火の油の利用などの可能性をみだし、当時の集落の人々の生業や生活を浮き彫りにさせた。樹種の分析においては、1・ 2号杭列についての自然科学分析からの見解は、集落を水害から守るための護岸用の杭と推定しているが、発掘所見と考古学的な見地から、前述したように異なる可能性を探ってみた。放射性炭素年代測定（AMS法）では杭列の材の伐採年代が、本遺跡の存続年代を推測する意味でも大きな成果をあげたといえる。その結果 弔杭列の暦年較正年代は、3世紀後半から 4世紀中頃、 2号杭列

は、4世紀前半から4世紀後半から末と出ているが、この違いに有意差は、指摘できず、誤差の範囲内におさまると考えられている。樹皮敷き土坑内のリン酸分析では、遺体埋葬の可能性に消極的であり、これらの土坑に貯蔵穴などの異なる用途を考えさせる分析結果となっている。

本遺跡の発掘調査の成果が、新潟県北東部の古墳時代前期の集落研究の一助となれば幸いである。多くの方々のご助言、ご指導によって本報告ができることに深い感謝の意を表し、結とする。

要 約

- 1 道端遺跡は、岩船郡荒川町大字南新保字道端9他に所在し、現況は水田であり標高は約23mを測る。
- 2 発掘調査は、日本海東北自動車道の建設に伴い、平成16年度に実施した。調査面積は22900㎡上層11450㎡、下層11450㎡で、遺跡は法線内にとどまらず東側に広がっている。
- 3 遺跡は荒川の支流の乙大日川（旧胎内川）の自然堤防縁辺の後背湿地に位置している。
- 4 発掘調査の結果、上層で古墳時代の前期の5m前後の遺物包含層が確認されたが、下層では遺物包含層は確認されなかった。
- 5 本遺跡は、河川跡の西岸沿いに営まれた拠点集落跡である。
- 6 遺構は、竪穴建物6軒、円形周溝状遺構2基、掘立柱建物1棟、杭列2列、整地層4か所、土坑4基、溝10条、性格不明遺構6基、単独の炉1基が検出された。遺構の時期はいずれも古墳時代前期と考えられる。
- 7 遺構は2基の円形周溝状遺構を中心に、遺構群がまとめられる。
- 8 調査区北東部の河川跡への舌状の張り出し部分の付け根に1号杭列が、その先端に2号杭列が検出された。1号杭列の中央部分には出入り口施設があり、その正面に亀甲型の掘立柱建物S81が検出された。2号杭列は河川西岸の縁辺に盛築された整地層の上から掘り込まれていた。
- 9 1・2号杭列は放射炭素年代測定の結果、いずれも4世紀代の所産と考えられる。
- 10 古墳時代前期の遺物としては、土師器、土錘、石製品、建築材他、が出土した。
- 11 その他の時代のものは、中世の珠洲焼、銭貨、弥生時代中期の土器、縄文時代の石鏃・剥片、所属時期不明の石核が出土した。
- 12 河川からは多くの種実が出土し、分析の結果、それらの植物が食料・薬用・染料・灯火用油などに使用された可能性がある。

引用・参考文献

- 赤塚次郎^{はか} 1996『鎚と襖のデザイン』第4回東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会
- 朝岡政康・鎌山えり^か 2003『東国遺跡』新潟市教育委員会
- 甘粕 健^{はか} 1992『古津八幡山古墳測量調査報告』新潟市教育委員会新潟大学
- 甘粕 健^{はか} 1996『磐舟浦田山古墳群発掘調査報告』村上市教育委員会・新潟大学考古学研究室
- 荒井 格・脇本博康^{はか} 2004『富沢遺跡第13次発掘調査報告書』宮城県仙台市教育委員会
- 荒川隆史・加藤 学 1999『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第9集 和泉A遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 荒川隆史^{はか} 2004『新潟県埋蔵文化財調査報告書第13集 青田遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 荒川町 1974『荒川町郷土史』荒川町
- 荒川町史編纂委員会 編 1988『荒川町史』資料編3 荒川町
- 荒川町教育委員会 編 1991『あらかわ歴史散歩』荒川町
- 家田順一郎 1981『曾根遺跡』豊浦町教育委員会
- 家田順一郎 1982『曾根遺跡』豊浦町教育委員会
- 石川智紀・内藤真一^{はか} 2002『新潟県埋蔵文化財調査報告書第11集 道端遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 石川日出志 2000『南御山2式土器の成立と小松式土器の接触』『北越考古学』北越考古学会(新潟田市)
- 石野博信^{はか} 1994『古墳時代の研究 第2巻』雄山閣
- 磯崎正彦 1979a『新潟・蒸線特殊改良工事にかかわる緒立遺跡第1次発掘調査報告書』黒崎町教育委員会
- 磯崎正彦編 1979b『新潟・蒸線特殊改良工事にかかわる緒立遺跡第2次発掘調査報告書』黒崎町教育委員会
- 伊藤康倫^{はか} 1993『二本松東山遺跡』聖籠町教育委員会
- 岡田米夫 1993『神社・日本史小百科』東京堂出版
- 岡本淳一郎 2000『「周溝をもつ建物」の基礎的研究』『展覧会』秋山進午先生古希記念富山大学考古学研究室論集 富山大学考古学研究室
- 及川良彦 1998『関東地方の低地遺跡の再検討』『青山考古』第15号 青山学院大学
- 及川良彦 1999『関東地方の低地遺跡の再検討(2)』『青山考古』第16号 青山学院大学
- 及川良彦 2001『関東地方の低地遺跡の再検討(3)』『青山考古』第18号 青山学院大学
- 折口信夫 1987『第2巻 神道宗教編』『折口信夫全集』中央公論社
- 片野徳蔵 2004『胎内川流域のわが郷土』私家版
- 加藤 学^{はか} 2000『正尺C遺跡』財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成12年度。財 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤学・尾崎高宏 2001『正尺C遺跡・正尺A遺跡』第4回発掘調査報告会。新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 金子拓男^{はか} 1983『緒立遺跡発掘調査報告書』黒崎町教育委員会
- 神林村史編纂委員会 編 1985『神林村誌』通史編 神林村
- 川上貞雄・木村宗文・鈴木郁夫 1989『新津市史』資料編第1巻 原始・古代・中世 新潟市教育委員会
- 川上貞雄 1997『曾根遺跡』豊浦町教育委員会
- 川村浩司 1993『北陸北東部における古墳出現前後の土器組成』『環日本海地域比較史研究』第2号 新潟大学環日本海地域比較史研究会
- 川村浩司 2000『上越市の古墳時代の土器様相 - 関川右岸下流域を中心に - 』『上越市史研究』第5号 新潟県上越市

- 川村浩司 2003『古墳出現期の土師器の研究』高志書院
- 建設省北陸地方建設局羽越工事事務所 編 1975『羽越災害復旧工事誌』建設省北陸地方建設局羽越工事事務所
- 小池邦朋・藤塚 明 1993『新潟市の埴遺跡』新潟市教育委員会
- 小島幸雄 1991『中島廻り遺跡発掘調査報告書』上越市教育委員会
- 小林昌二 編 1996『古代王権と交流』名著出版
- 小林青樹 2004『東海以東』『季刊考古学』89号 雄山閣
- 駒形敬朗 2001『五斗田遺跡・県営ほ場整備事業に伴う発掘調査』長岡市教育委員会
- 坂井秀弥^{ほか} 1989『新潟県埋蔵文化財調査報告書第5集 山三賀 遺跡』新潟県教育委員会・建設省新潟国道工事事務所
- 坂井秀弥 1995『越後・佐渡』『全国古墳編年集成』雄山閣
- 笹沢正史・小島幸雄 1999『新潟県上越市上千原ほ場整備関連発掘調査報告書 津倉田遺跡』上越市教育委員会
- 上越市編さん委員会 2003『上越市史』『資料編2考古』上越市
- 鈴木俊成^{ほか} 1994『新潟県埋蔵文化財調査報告書第6集 一ノ口遺跡東地区』新潟県教育委員会・財 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 聖籠町史編纂委員会 2004『聖籠町史』資料編4 近現代 聖籠町
- 関 雅之 1999『墓塚遺跡』豊栄市教育委員会
- 胎内川沿岸土地改良区 編 2002『胎内川沿岸土地改良区50年のあゆみ』胎内川沿岸土地改良区
- 滝沢規朗 2004『新潟県における弥生後期から古墳時代の土器について』新潟県考古学談話会発表要旨。新潟県考古学談話会
- 田嶋明人^{ほか} 1986『漆町遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
- 辰巳和弘 1997『古墳社会の信仰』『季刊考古学』59号 雄山閣
- 田辺早苗^{ほか} 2001『神林村埋蔵文化財調査報告第9次田遺跡・道土遺跡』神林村教育委員会
- 田村浩司 2004『三条市吉津川遺跡・藤ノ木遺跡の調査概要』『新潟県考古学会第14回大会研究発表発表要旨』新潟県考古学会
- 寺嶋裕助・佐藤優一^{ほか} 2004『新潟県埋蔵文化財調査報告書第13集 反貫目遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 豊栄市史編纂委員会 1988『豊栄市史』資料編1 考古編 豊栄市
- 新潟県教育委員会・村上市教育委員会 1962『新潟県文化財調査報告書第9巻舟・磐舟橋跡推定地調査報告書』新潟県教育委員会・村上市教育委員会
- 新潟県北蒲原郡役所 1916『新潟縣北蒲原郡志』新潟県北蒲原郡役所
- 布尾和史・布尾幸恵 2002『藤江C遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
- 橋本正博・福海貴子 2003『千代・能美遺跡』石川県小松市教育委員会
- 広瀬和雄 1998『弥生時代の神鏡』『都市と神殿の誕生』新人物往來社
- 福田 聖 2004『方形周溝墓と周溝を有する建物跡』『方形周溝墓の再発見』同成社
- 水澤幸一 2002『中条町埋蔵文化財調査報告第2巻 船戸川崎遺跡4次』中条町教育委員会
- 水澤幸一・吉村光彦 2002『中条町埋蔵文化財調査報告第2巻 船戸榎田遺跡4次・5次 船戸川崎遺跡6次』中条町教育委員会
- 宮本長二郎 2001『伊勢神宮の本殿形式の研究』『神道史研究』第49巻第3号 神道史学会
- 村上市史編纂委員会 1999『村上市史』遺史編1 原始・古代・中世 村上市
- 村上市史編纂委員会 2000『村上市史』別編 絵図・地図・年表 村上市
- 山崎忠良^{ほか} 2004『新潟県埋蔵文化財調査報告書第13集 下副遺跡』新潟県教育委員会・財 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 山田隆一 2004『近畿・大型建物の変遷とその性格について』『季刊考古学』89号 雄山閣
- 吉井雅典 1994『荒川町埋蔵文化財発掘調査報告第2巻 古谷地E遺跡・寺田遺跡・赤井遺跡』荒川町教育委員会
- 吉岡康暢 1994『中世須恵器の研究』吉川弘文館
- 吉村光彦 2002『中条町埋蔵文化財調査報告第2巻 大塚遺跡第2次』中条町教育委員会

- 吉村光彦 2004『中条町埋蔵文化財調査報告第29巻 大塚遺跡第3次』。中条町教育委員会
- 渡辺ますみ 1993『緒立A遺跡発掘調査報告』。黒崎町教育委員会
- 渡辺ますみ 1994『緒立C遺跡発掘調査報告』。黒崎町教育委員会
- 渡邊裕之・内藤真一ほか 2003『新潟県埋蔵文化財調査報告書第12巻 道端遺跡』。新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

古墳時代前期の土師器類表

凡例

- 1 法 量 の数値は指定値である。
- 2 土 質 新腐 縄文土色焼 小山・竹筒 2002
- 3 土 質 「口」は口縁部、「体」は体部。「彫」は彫痕。「突」は突部を表す。「」は調整の順序を表す。
- 4 口 縁 口縁部残存率を x / 30% 表した。

土器類表 1

標号	器種	分形	形状	出土位置	土質	法	量	口径	底径	高さ	土		色		調		内	外	口縁	備	考
											口	体	外	内	口	体					
1	甕	G	300	S1	2	-	110	77	20	密	9/87/ 灰白土質褐色	9/87/ 灰白土質褐色	良好	ナナ	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明
2	甕	H	300	S1	2	142	113	12	13	密	2/97/ 灰褐色	2/97/ 灰褐色	良好	八ツ	ナナ	不明	不明	不明	不明	不明	不明
3	甕	H	300	S1	2	132	118	12	13	密	2/97/ 灰褐色	2/97/ 灰褐色	良好	八ツ	ナナ	不明	不明	不明	不明	不明	不明
4	鉢	A	300	S1	2	98	70	10	10	密	10/87/ 灰褐色	10/87/ 灰褐色	良好	八ツ	ナナ	不明	不明	不明	不明	不明	不明
5	鉢	H	300	S1	2	98	70	10	10	密	10/87/ 灰褐色	10/87/ 灰褐色	良好	八ツ	ナナ	不明	不明	不明	不明	不明	不明
6	鉢	E	300	S1	2	98	70	10	10	密	10/87/ 灰褐色	10/87/ 灰褐色	良好	八ツ	ナナ	不明	不明	不明	不明	不明	不明
7	鉢	A	300	S1	2	98	70	10	10	密	10/87/ 灰褐色	10/87/ 灰褐色	良好	八ツ	ナナ	不明	不明	不明	不明	不明	不明
8	鉢	A	300	S1	2	98	70	10	10	密	10/87/ 灰褐色	10/87/ 灰褐色	良好	八ツ	ナナ	不明	不明	不明	不明	不明	不明
9	鉢	A	300	S1	2	98	70	10	10	密	10/87/ 灰褐色	10/87/ 灰褐色	良好	八ツ	ナナ	不明	不明	不明	不明	不明	不明
10	甕	A	300	S1	2	-	39	26	26	密	10/87/ 灰褐色	10/87/ 灰褐色	良好	八ツ	ナナ	不明	不明	不明	不明	不明	不明
11	甕	H	300	S1	3	176	105	118	118	密	10/87/ 灰褐色	10/87/ 灰褐色	良好	八ツ	ナナ	不明	不明	不明	不明	不明	不明
12	甕	H	300	S1	3	-	106	58	58	や中密	10/87/ 灰褐色	10/87/ 灰褐色	良好	八ツ	ナナ	不明	不明	不明	不明	不明	不明
13	甕	M	300	S1	3	144	-	52	52	や中密	10/87/ 灰褐色	10/87/ 灰褐色	良好	八ツ	ナナ	不明	不明	不明	不明	不明	不明
14	甕	M	300	S1	3	96	44	43	43	や中密	10/87/ 灰褐色	10/87/ 灰褐色	良好	八ツ	ナナ	不明	不明	不明	不明	不明	不明
15	甕	M	300	S1	3	96	44	43	43	や中密	10/87/ 灰褐色	10/87/ 灰褐色	良好	八ツ	ナナ	不明	不明	不明	不明	不明	不明
16	甕	A	300	S1	3	-	62	23	23	密	10/87/ 灰褐色	10/87/ 灰褐色	良好	八ツ	ナナ	不明	不明	不明	不明	不明	不明
17	甕	A	300	S1	3	94	-	26	26	密	10/87/ 灰褐色	10/87/ 灰褐色	良好	八ツ	ナナ	不明	不明	不明	不明	不明	不明
18	甕	D	300	S1	1	176	-	31	31	密	2/97/ 灰褐色	2/97/ 灰褐色	良好	八ツ	ナナ	不明	不明	不明	不明	不明	不明
19	甕	A	300	S1	1	193	-	36	36	密	2/97/ 灰褐色	2/97/ 灰褐色	良好	八ツ	ナナ	不明	不明	不明	不明	不明	不明
20	甕	石	300	S1	1	140	-	40	40	や中密	10/87/ 灰褐色	10/87/ 灰褐色	良好	八ツ	ナナ	不明	不明	不明	不明	不明	不明
21	甕	A	260	S1	1	113	-	40	40	密	10/87/ 灰褐色	10/87/ 灰褐色	良好	八ツ	ナナ	不明	不明	不明	不明	不明	不明
22	甕	A	260	S1	1	62	-	17	17	や中密	2/97/ 灰褐色	2/97/ 灰褐色	良好	八ツ	ナナ	不明	不明	不明	不明	不明	不明
23	甕	A	260	S1	1	62	-	17	17	密	2/97/ 灰褐色	2/97/ 灰褐色	良好	八ツ	ナナ	不明	不明	不明	不明	不明	不明
24	甕	A	260	S1	1	176	44	25	25	密	10/87/ 灰褐色	10/87/ 灰褐色	良好	八ツ	ナナ	不明	不明	不明	不明	不明	不明
25	鉢	C	260	S2	2	172	68	137	137	粗	10/87/ 灰褐色	10/87/ 灰褐色	良好	八ツ	ナナ	不明	不明	不明	不明	不明	不明
26	鉢	C	260	S2	2	140	-	72	72	密	10/87/ 灰褐色	10/87/ 灰褐色	良好	八ツ	ナナ	不明	不明	不明	不明	不明	不明
27	甕	I	260	S2	4	-	72	72	72	や中密	2/97/ 灰褐色	2/97/ 灰褐色	良好	八ツ	ナナ	不明	不明	不明	不明	不明	不明
28	甕	H	260	S2	4	197	-	76	76	密	2/97/ 灰褐色	2/97/ 灰褐色	良好	八ツ	ナナ	不明	不明	不明	不明	不明	不明
29	甕	A	260	S4	1	140	-	40	40	密	10/87/ 灰褐色	10/87/ 灰褐色	良好	八ツ	ナナ	不明	不明	不明	不明	不明	不明
30	甕	石	260	S4	1	140	-	40	40	密	10/87/ 灰褐色	10/87/ 灰褐色	良好	八ツ	ナナ	不明	不明	不明	不明	不明	不明
31	甕	H	260	S6	1	214	-	49	49	密	2/97/ 灰褐色	2/97/ 灰褐色	良好	八ツ	ナナ	不明	不明	不明	不明	不明	不明
32	甕	S	260	S6	1	-	19	32	32	や中密	2/97/ 灰褐色	2/97/ 灰褐色	良好	八ツ	ナナ	不明	不明	不明	不明	不明	不明
33	甕	A	260	S0/31	2	152	-	239	239	密	2/97/ 灰褐色	2/97/ 灰褐色	良好	八ツ	ナナ	不明	不明	不明	不明	不明	不明
34	甕	A	260	S0/31	2	194	-	53	53	や中密	2/97/ 灰褐色	2/97/ 灰褐色	良好	八ツ	ナナ	不明	不明	不明	不明	不明	不明
35	甕	H	260	S0/31	2	160	98	70	70	密	2/97/ 灰褐色	2/97/ 灰褐色	良好	八ツ	ナナ	不明	不明	不明	不明	不明	不明
36	甕	H	260	S0/31	2	160	98	70	70	密	2/97/ 灰褐色	2/97/ 灰褐色	良好	八ツ	ナナ	不明	不明	不明	不明	不明	不明
37	甕	A	260	S0/49	2	140	-	44	44	密	2/97/ 灰褐色	2/97/ 灰褐色	良好	八ツ	ナナ	不明	不明	不明	不明	不明	不明
38	甕	A	260	S0/49	2	130	74	44	44	密	2/97/ 灰褐色	2/97/ 灰褐色	良好	八ツ	ナナ	不明	不明	不明	不明	不明	不明
39	甕	A	260	S0/53	9	173	-	69	69	密	10/87/ 灰褐色	10/87/ 灰褐色	良好	八ツ	ナナ	不明	不明	不明	不明	不明	不明
40	甕	A	260	S0/53	6	114	-	44	44	や中密	2/97/ 灰褐色	2/97/ 灰褐色	良好	八ツ	ナナ	不明	不明	不明	不明	不明	不明
41	甕	H	300	S0/53	2	-	162	56	56	や中密	2/97/ 灰褐色	2/97/ 灰褐色	良好	八ツ	ナナ	不明	不明	不明	不明	不明	不明

土器観音表 2

報告 種類 分類	出土位置		法基 高	口径 底径	胎厚	胎土		内 面 色		外 面 色		構成	装 飾		口縁 寸法	備 考
	テラコッタ	遺物 番号				内 面	外 面	内 面	外 面	装 飾	装 飾					
42 厨出 D	300	30003	2	265	138	123	密	107R/ 灰黄褐色	107R/ 灰黄褐色	107R/ 灰黄褐色	良好	灰 蓮花半	各一:蓮花半 蓮:蓮花半	4	赤形 底、胎筋跡く	
43 厨出 D	300	30003	2	78	15	16	密	257F/ 赤褐色	257F/ 赤褐色	257F/ 赤褐色	良好	蓮花半	蓮:蓮花半	4	赤形 外、胎筋跡く、瓦 4	
44 厨出 D	300	30003	13	32	32	32	密	257F/ 赤褐色	257F/ 赤褐色	257F/ 赤褐色	やや不良	不明	蓮花半	36	赤形 外、胎筋跡く	
45 厨出 C	300	30003	1	211	-	84	やや密	107R/ 灰黄褐色	107R/ 灰黄褐色	107R/ 灰黄褐色	良好	蓮花半	蓮花半	36	赤形 外、胎筋跡く	
46 厨出 C	300	30003	2	292	-	53	やや密	257F/ 赤褐色	257F/ 赤褐色	257F/ 赤褐色	良好	蓮花半	蓮花半	36	赤形 外、胎筋跡く	
47 厨出 A	300	30003	2	238	-	49	やや密	107R/ 灰黄褐色	107R/ 灰黄褐色	107R/ 灰黄褐色	良好	蓮花半	蓮花半	36	赤形 外、胎筋跡く	
48 厨出 A	300	30003	2	292	-	53	やや密	107R/ 灰黄褐色	107R/ 灰黄褐色	107R/ 灰黄褐色	良好	蓮花半	蓮花半	36	赤形 外、胎筋跡く	
49 厨出 A	300	30003	2	172	-	147	密	107R/ 灰黄褐色	107R/ 灰黄褐色	107R/ 灰黄褐色	良好	蓮花半	蓮花半	36	赤形 外、胎筋跡く	
50 厨出 F	299	30027	2	-	34	34	密	257F/ 赤褐色	257F/ 赤褐色	257F/ 赤褐色	良好	蓮花半	蓮花半	36	赤形 外、胎筋跡く	
51 厨出 F	299	30027	7	-	143	68	密	107R/ 灰黄褐色	107R/ 灰黄褐色	107R/ 灰黄褐色	良好	蓮花半	蓮花半	36	赤形 外、胎筋跡く	
52 厨出 H	299	30027	8	-	146	81	密	107R/ 灰黄褐色	107R/ 灰黄褐色	107R/ 灰黄褐色	良好	蓮花半	蓮花半	36	赤形 外、胎筋跡く	
53 厨出 H	299	30027	7	92	108	71	密	107R/ 灰黄褐色	107R/ 灰黄褐色	107R/ 灰黄褐色	良好	蓮花半	蓮花半	36	赤形 外、胎筋跡く	
55 厨出 F	299	30027	2	-	69	69	密	107R/ 灰黄褐色	107R/ 灰黄褐色	107R/ 灰黄褐色	良好	蓮花半	蓮花半	36	赤形 外、胎筋跡く	
56 厨出 G	299	30027	2	165	56	64	密	107R/ 灰黄褐色	107R/ 灰黄褐色	107R/ 灰黄褐色	良好	蓮花半	蓮花半	36	赤形 外、胎筋跡く	
57 厨出 K	299	30027	37	174	70	77	密	107R/ 灰黄褐色	107R/ 灰黄褐色	107R/ 灰黄褐色	良好	蓮花半	蓮花半	36	赤形 外、胎筋跡く	
58 厨出 F	299	30027	2378	-	227	227	密	107R/ 灰黄褐色	107R/ 灰黄褐色	107R/ 灰黄褐色	良好	蓮花半	蓮花半	36	赤形 外、胎筋跡く	
60 厨出 A	299	30027	7	96	57	57	やや密	257F/ 赤褐色	257F/ 赤褐色	257F/ 赤褐色	良好	蓮花半	蓮花半	36	赤形 外、胎筋跡く	
61 厨出 A	299	30027	35	146	44	220	やや密	107R/ 灰黄褐色	107R/ 灰黄褐色	107R/ 灰黄褐色	良好	蓮花半	蓮花半	36	赤形 外、胎筋跡く	
62 厨出 F	299	30027	2	-	52	41	密	107R/ 灰黄褐色	107R/ 灰黄褐色	107R/ 灰黄褐色	良好	蓮花半	蓮花半	36	赤形 外、胎筋跡く	
63 厨出 F	299	30027	2	-	77	77	密	107R/ 灰黄褐色	107R/ 灰黄褐色	107R/ 灰黄褐色	良好	蓮花半	蓮花半	36	赤形 外、胎筋跡く	
64 厨出 G	299	30027	1	190	-	77	密	107R/ 灰黄褐色	107R/ 灰黄褐色	107R/ 灰黄褐色	良好	蓮花半	蓮花半	36	赤形 外、胎筋跡く	
65 厨出 G	299	30027	1	80	39	39	密	257F/ 赤褐色	257F/ 赤褐色	257F/ 赤褐色	良好	蓮花半	蓮花半	36	赤形 外、胎筋跡く	
66 厨出 F	299	30027	2	-	80	76	密	107R/ 灰黄褐色	107R/ 灰黄褐色	107R/ 灰黄褐色	良好	蓮花半	蓮花半	36	赤形 外、胎筋跡く	
67 厨出 F	299	30027	1	86	-	80	やや密	107R/ 灰黄褐色	107R/ 灰黄褐色	107R/ 灰黄褐色	良好	蓮花半	蓮花半	36	赤形 外、胎筋跡く	
68 厨出 A	299	30056	1	189	-	115	密	257F/ 赤褐色	257F/ 赤褐色	257F/ 赤褐色	良好	蓮花半	蓮花半	36	赤形 外、胎筋跡く	
69 厨出 E	299	30056	1	180	-	163	やや密	257F/ 赤褐色	257F/ 赤褐色	257F/ 赤褐色	良好	蓮花半	蓮花半	36	赤形 外、胎筋跡く	
70 厨出 A	299	30056	1	185	-	127	密	257F/ 赤褐色	257F/ 赤褐色	257F/ 赤褐色	良好	蓮花半	蓮花半	36	赤形 外、胎筋跡く	
71 厨出 B	299	30056	23	293	-	68	密	257F/ 赤褐色	257F/ 赤褐色	257F/ 赤褐色	良好	蓮花半	蓮花半	36	赤形 外、胎筋跡く	
72 厨出 B	299	30056	3	-	140	68	密	257F/ 赤褐色	257F/ 赤褐色	257F/ 赤褐色	良好	蓮花半	蓮花半	36	赤形 外、胎筋跡く	
73 厨出 B	299	30056	3	-	130	74	密	257F/ 赤褐色	257F/ 赤褐色	257F/ 赤褐色	良好	蓮花半	蓮花半	36	赤形 外、胎筋跡く	
74 厨出 B	299	30056	2	157	-	76	密	257F/ 赤褐色	257F/ 赤褐色	257F/ 赤褐色	良好	蓮花半	蓮花半	36	赤形 外、胎筋跡く	
75 厨出 M	299	30056	2	210	-	20	密	257F/ 赤褐色	257F/ 赤褐色	257F/ 赤褐色	良好	蓮花半	蓮花半	36	赤形 外、胎筋跡く	
76 厨出 M	299	30056	23	203	-	79	密	257F/ 赤褐色	257F/ 赤褐色	257F/ 赤褐色	良好	蓮花半	蓮花半	36	赤形 外、胎筋跡く	
77 厨出 M	299	30056	2	200	-	77	密	257F/ 赤褐色	257F/ 赤褐色	257F/ 赤褐色	良好	蓮花半	蓮花半	36	赤形 外、胎筋跡く	
78 厨出 A	299	30056	1	174	-	141	密	257F/ 赤褐色	257F/ 赤褐色	257F/ 赤褐色	良好	蓮花半	蓮花半	36	赤形 外、胎筋跡く	
79 厨出 A	299	30056	1	174	-	153	密	107R/ 灰黄褐色	107R/ 灰黄褐色	107R/ 灰黄褐色	良好	蓮花半	蓮花半	36	赤形 外、胎筋跡く	
80 厨出 A	299	30056	1	174	-	153	密	107R/ 灰黄褐色	107R/ 灰黄褐色	107R/ 灰黄褐色	良好	蓮花半	蓮花半	36	赤形 外、胎筋跡く	
81 厨出 A	299	30056	3	210	-	101	密	257F/ 赤褐色	257F/ 赤褐色	257F/ 赤褐色	良好	蓮花半	蓮花半	36	赤形 外、胎筋跡く	
82 厨出 A	299	30056	24	246	-	86	密	257F/ 赤褐色	257F/ 赤褐色	257F/ 赤褐色	良好	蓮花半	蓮花半	36	赤形 外、胎筋跡く	
83 厨出 A	299	30056	2	170	-	42	25	密	257F/ 赤褐色	257F/ 赤褐色	良好	蓮花半	蓮花半	36	赤形 外、胎筋跡く	
84 厨出 G	299	30056	4	170	-	50	密	257F/ 赤褐色	257F/ 赤褐色	257F/ 赤褐色	良好	蓮花半	蓮花半	36	赤形 外、胎筋跡く	
85 厨出 F	299	30056	1	176	-	61	密	257F/ 赤褐色	257F/ 赤褐色	257F/ 赤褐色	良好	蓮花半	蓮花半	36	赤形 外、胎筋跡く	
86 厨出 F	299	30056	4	224	-	109	密	257F/ 赤褐色	257F/ 赤褐色	257F/ 赤褐色	良好	蓮花半	蓮花半	36	赤形 外、胎筋跡く	
87 厨出 F	299	30056	1	88	-	49	密	107R/ 灰黄褐色	107R/ 灰黄褐色	107R/ 灰黄褐色	良好	蓮花半	蓮花半	36	赤形 外、胎筋跡く	
88 厨出 H	299	30235	1	96	-	53	密	257F/ 赤褐色	257F/ 赤褐色	257F/ 赤褐色	良好	蓮花半	蓮花半	36	赤形 外、胎筋跡く	
89 厨出 H	299	30235	1	90	-	140	密	107R/ 灰黄褐色	107R/ 灰黄褐色	107R/ 灰黄褐色	良好	蓮花半	蓮花半	36	赤形 外、胎筋跡く	
90 厨出 H	299	30235	1	90	-	140	密	107R/ 灰黄褐色	107R/ 灰黄褐色	107R/ 灰黄褐色	良好	蓮花半	蓮花半	36	赤形 外、胎筋跡く	

建築材他観覧表

報告番号	器種	グリット	出土地点	層位	長さ	法	量	厚さ	運付状況	木取り	樹種	備考
190	板材	31S	河川跡	層	380	幅・直径	15	右端欠損	板目	スギ		
191	不明	31S	河川跡	層	100	幅・直径	85	1/2欠	芯持	マツ属		掘削機の手か
192	根がらみ	25S	2号円形周溝	層	113	幅	38	不明	-	トネリコ属		腐植土層
193	根がらみ	25S	2号円形周溝	層	216	幅	40	不明	-	クリ		
194	根がらみ	25S	2号円形周溝	層	218	幅	51	不明	-	ヤマグワ		腐植土層
195	根太	29Q	1号円形周溝	層	472	幅	50	不明	-	ヤマグワ		腐植土層
196	根太	29Q	1号円形周溝	層	213	幅	44	不明	-	ヤマグワ		腐植土層
197	根太	29Q	1号円形周溝	層	204	幅	52	不明	-	ヤマグワ		腐植土層
198	根太	29Q	1号円形周溝	層	515	幅	29	不明	-	ヤマグワ		腐植土層
199	根太	29Q	1号円形周溝	層	110	幅	29	不明	-	ヤマグワ		腐植土層
200	根太	29Q	1号円形周溝	層	1175	幅	21	不明	-	ヤマグワ		腐植土層
201	根太	29Q	1号円形周溝	層	358	幅	56	不明	-	ヤマグワ		腐植土層
202	根太	29Q	1号円形周溝	層	242	幅	25	不明	-	ヤマグワ		腐植土層
203	根太	29Q	1号円形周溝	層	59	幅	17	不明	-	ヤマグワ		腐植土層
204	根太	29Q	1号円形周溝	層	37	幅	14	不明	-	ヤマグワ		腐植土層
205	柱根	29N	SB2	層	473	幅	113	上端欠損	丸材	コナラ属		平底
206	柱根	28R	SB4	層	331	幅	152	上端欠損	芯外し	トネリコ属		平底
207	柱根	28S	SB5	層	354	幅	161	上端欠損	丸材	コナラ属		平底
208	柱根	27R	SB7	層	187	幅	120	不明	丸材	コナラ属		平底
209	柱根	26R	SB8	層	311	幅	103	上端欠損	丸材	コナラ属		平底
210	柱根	24R	SB9	層	452	幅	48	上端欠損	丸材	コナラ属		平底
211	柱根	30P	SB12	層	243	幅	196	上端欠損	丸材	ヤマグワ		平底
212	柱根	23Q	SB13	層	417	幅	107	上端欠損	丸材	エゴノキ属		尖底
213	柱根	25S	SB10	層	212	幅	97	上端欠損	丸材	トネリコ属		平底
214	杭	29Q	鴨杖列		308	幅	163	上端欠損	丸材	ハンノキ部		底部開形
215	杭	29Q	鴨杖列		365	幅	180	上端欠損	丸材	ハンノキ部		底部開形
216	杭	29Q	鴨杖列		421	幅	190	上端欠損	丸材	ハンノキ部		底部開形
217	杭	30Q	鴨杖列		337	幅	148	上端欠損	丸材	ハンノキ部		底部開形
218	杭	30Q	鴨杖列		315	幅	230	上端欠損	丸材	ハンノキ部		底部開形
219	杭	32R	鴨杖列		190	幅	109	上端欠損	丸材	ハンノキ部		底部開形
220	杭	32R	鴨杖列		205	幅	157	上端欠損	丸材	ハンノキ部		底部開形
221	杭	32R	鴨杖列		159	幅	118	上端欠損	丸材	ハンノキ部		平底

その地の時代の土器観察表

報告番号	種別	器種	時期	出土地点		法量 cm		色		調		調整		備考
				グリット番号	遺構番号	層位	口径	器高	底径	外周	内周	内面	外面	
225	弥生土器	甕	弥生中期	27R	包含層	層	131	141	44	黄褐色-黒褐色	黄褐色-黒褐色	良	横子	横子 高麗瓦文 赤い酒し
226	弥生土器	甕	弥生中期	30S	河川跡	層	216	5	259/5/	黒灰黄色	259/5/	良好	ナ子	ナ子 ハケ 口：刺突文
222	埴原須	漆鉢	13世紀-14世紀			耕作土			1080/5/1	5R5/1	良	良	口クロナ子	節目単位 幅2cm 11体
223	埴原須	甕				耕作土			N6/1-N5/1	N6/1-N4/1	良	良	平打タケ牛腹	
224	埴原須	甕				耕作土			N4/1	N4/1	良	良	平打タケ牛腹	

銭貨観察表




報告番号	種別	器種	出土地点		法量 cm		初鑄年		王朝名	備		
			グリット	遺構番号	層位	長さ	幅	厚さ			重量	
227	銭貨	元龜通宝	31P	-	耕作土	235	250	090	20	1078	宋	裏無文
228	銭貨	元龜通宝	28R	-	耕作土	245	245	100	25	1078	宋	裏無文

石器・石製品観察表

報告番号	種別	器種	出土地点		法量 cm			石材		備考
			グリット	遺構番号	層位	長さ	幅	厚さ	重量 g	
20	石製品	砥石	30C	S13	層	930	645	355	2595	凝灰岩
30	石製品	砥石	29N	S14	層	510	640	210	700	凝灰岩
84	石製品	砥石	28Q	SK001	層	1880	1795	835	20650	砂質凝灰岩
229	-	自然礫	29P	-	層	365	305	-	520	石灰
230	石製品	砥石	29O	-	層	750	230	755	855	凝灰岩
231	石製品	石槌	30Q	-	層	1200	980	715	10320	緑色凝灰岩
232	石製品	砥石	29Q	-	層	950	1200	550	7420	凝灰岩
233	石器	剥片	31R	-	層	740	440	110	325	頁岩
234	石器	石鏃	27Q	-	層	345	170	055	35	チャート
235	石器	石鏃	25R	-	層	395	155	055	35	頁岩
236	石器	石鏃	24R	-	層	310	185	060	25	頁岩
237	石器	石鏃	31Q	SK239	層	240	170	040	20	チャート

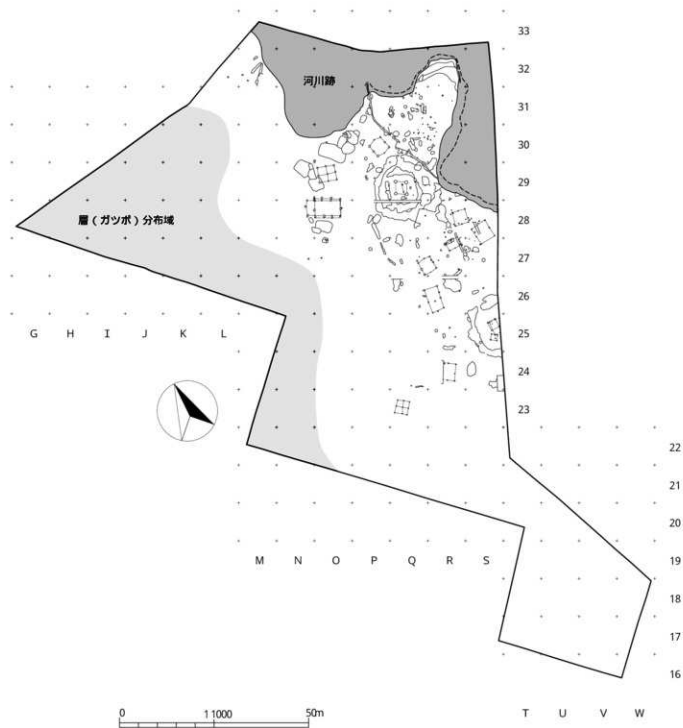
図 版

凡 例

- 1 柱根は  のスクリーントーンで示した。
- 2 土師器の赤彩範囲は  のスクリーントーンで示した。
- 3 土師器の黒色処理範囲は  のスクリーントーンで示した。



(5万分の1地形図「中条」を改変使用)



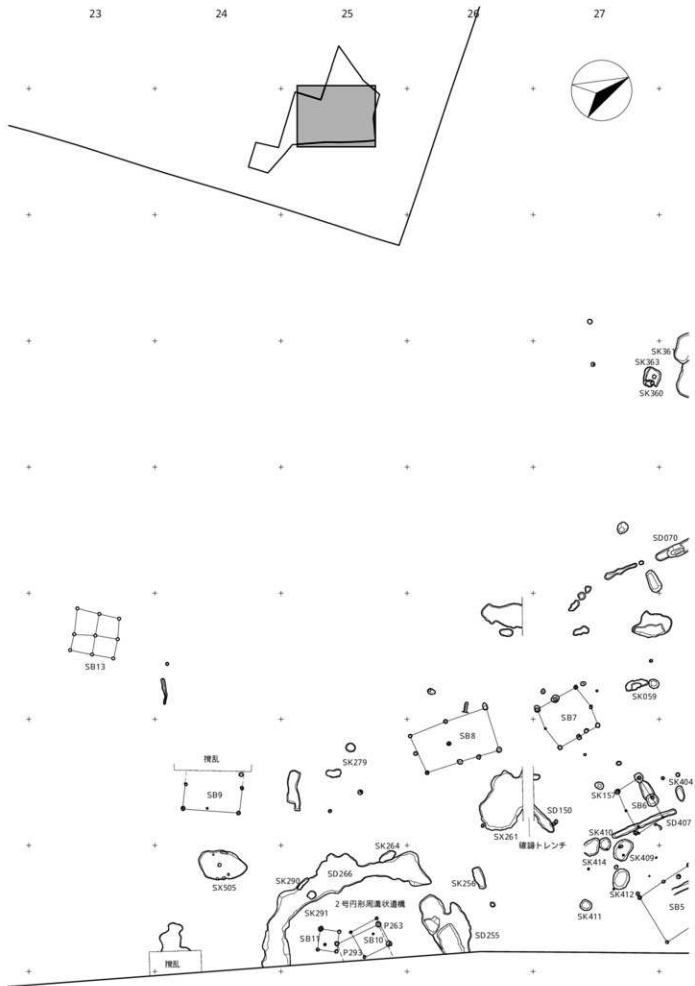
23

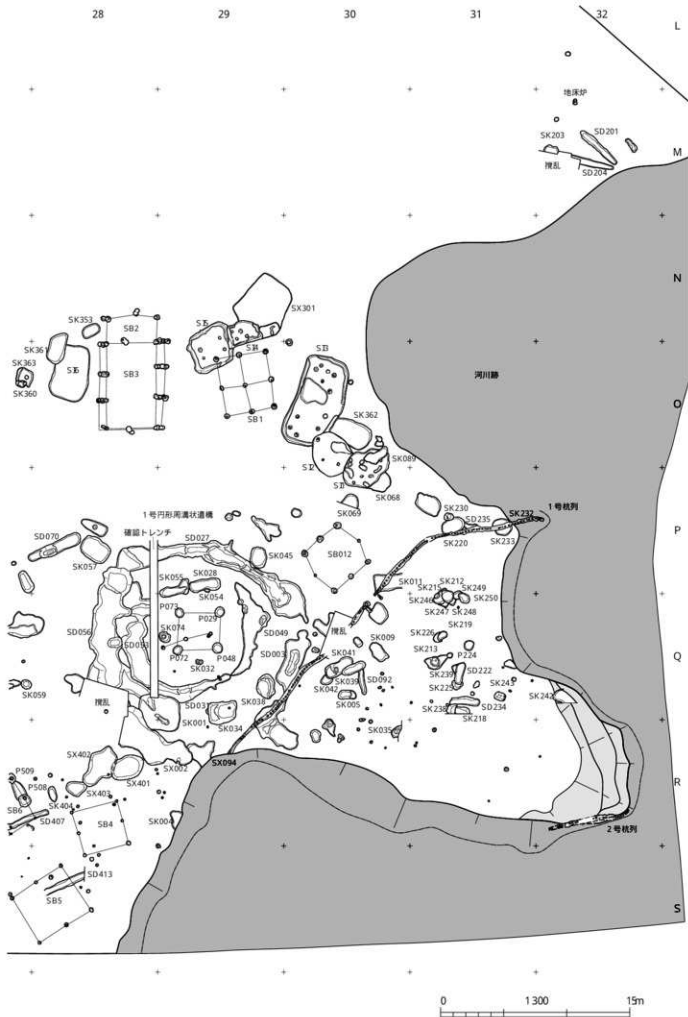
24

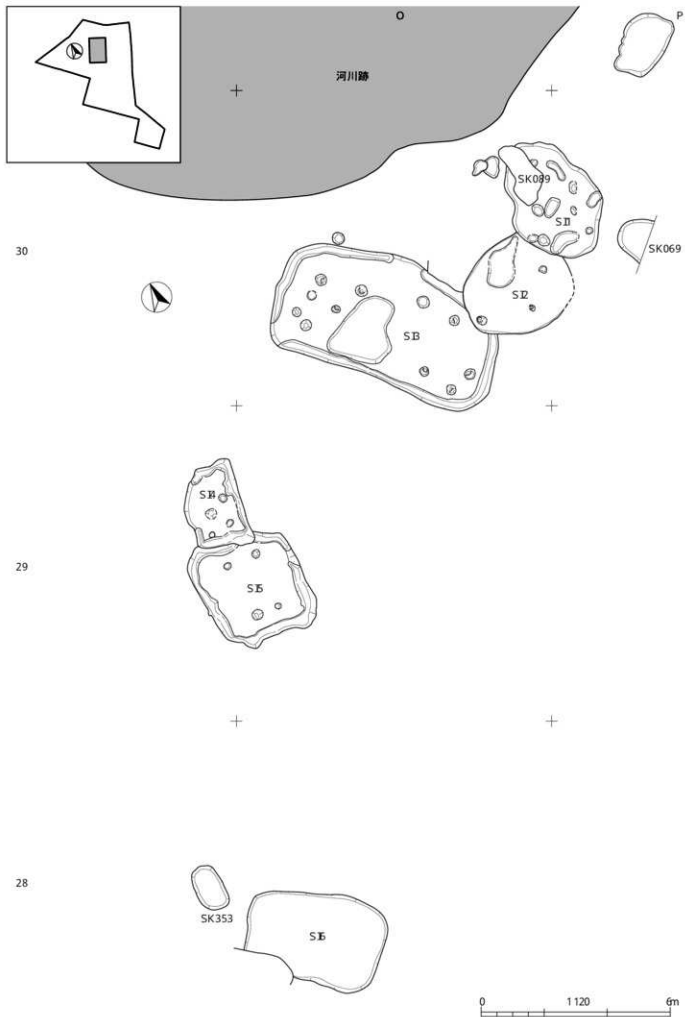
25

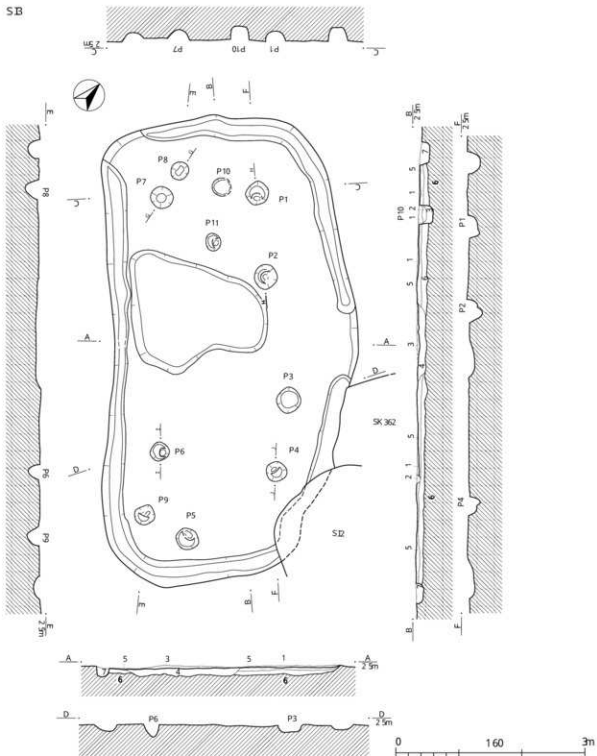
26

27









SB

- 1 2.5Y 4 2暗灰黄色
- 2 2.5Y 4 2暗灰黄色
- 3 2.5Y 4 1灰白色
- 4 2.5Y 5 1黄灰色
- 7.5Y 5 1灰色

粘質シルト aDの相当層径1~3mmの炭化物を多量に含む
粘質シルト 相当層径1~2mmの炭化物を多量に含む
粘質シルト 径20~30mmの炭化物を多量に含む

粘質シルトを斑紋状に多量含む
径2~3mmの 層相対のシルト粒を少量含む
径1~2mmの炭化物をやや多量含む
粘質シルト 径1~2mmの炭化物を少量含む
粘質シルトを多量用粒状に
径2~3mmの 層相対のシルト粒子を少量含む
粘質シルトを多量用粒状に
径1~2mmの 層相対のシルト粒子を多量含む

- 5 2.5Y 5 2暗灰黄色
- 6 7.5Y 5 1灰色
- 7.5Y 4 1灰色
- 7 7.5Y 5 1灰色
- 7.5Y 4 1灰色

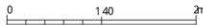
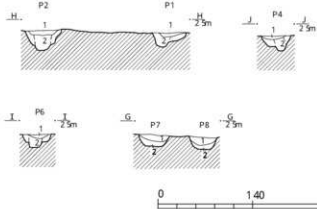
P1-P2, P4-P6-P8
1 5Y 6 1灰色
2 5Y 4 1灰色

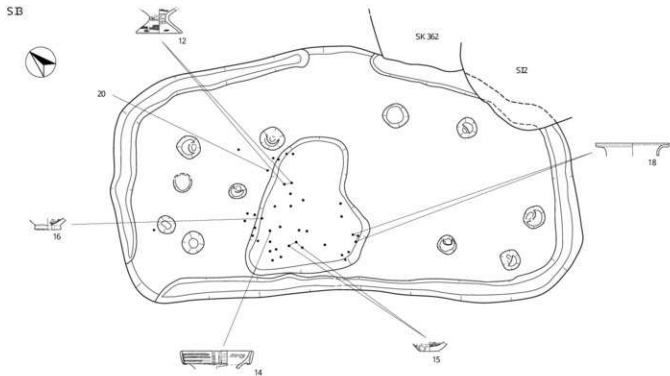
粘質シルト 径10~20mmの 層の粒子を少量含む
粘質シルト 径30~50mmの 層のブロックを少量含む

P10

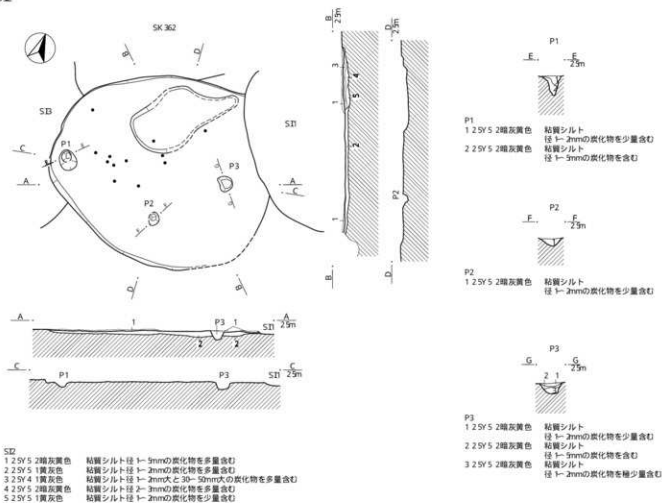
- 1 2.5Y 5 2暗灰黄色
- 2 5Y 5 2灰オリーブ色
- 3 7.5Y 5 1灰色
- 7.5Y 4 1灰色

粘質シルト 径2~3mmの炭化物を少量含む
粘質シルト 径1~2mmの 層相対のシルト粒を少量含む
粘質シルト
粘質シルトを多量に含む
径2~3mmの 層相対のシルト粒子を多量に含む

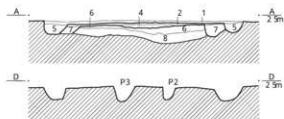
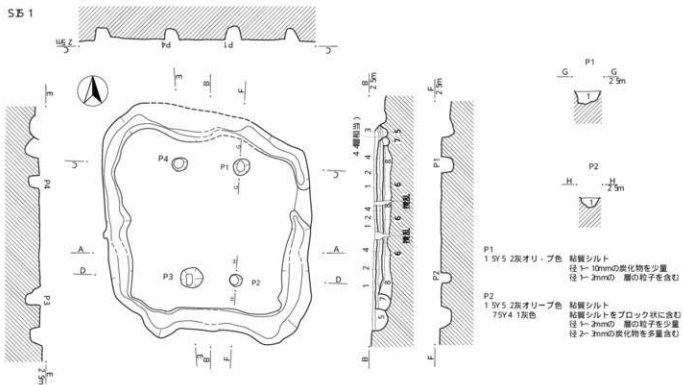




SD



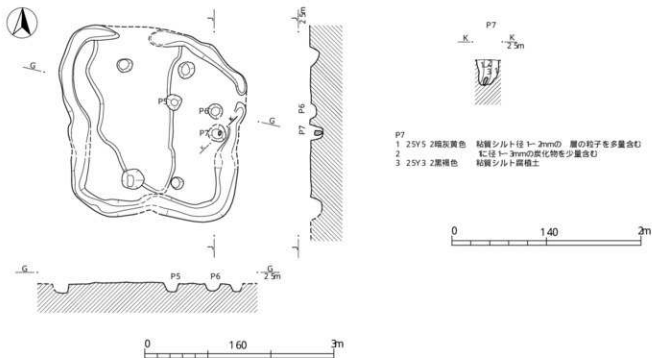
S51



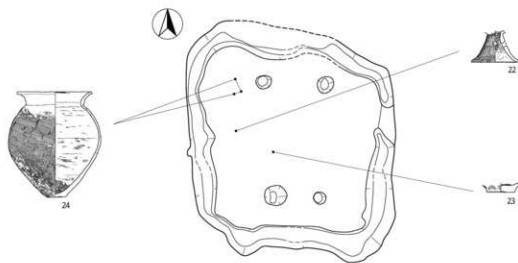
S5

- 1 2.5Y5 2暗灰黄色 粘質シルト径1-2mmの炭化物を少量含む
- 2 2.5Y5 2暗灰黄色 粘質シルト径1-2mmの炭化物を少量含む
- 3 2.5Y6 1黄灰色 粘質シルト径3-5mmの炭化物を少量含む
- 4 5Y4 1灰色 粘質シルト径10-20mmの炭化物を少量含む
- 5 5Y5 1灰色 粘質シルト
- 6 5Y6 1灰色 砂質シルトを塊状に少量含む
- 7 2.5Y6 1黄灰色 粘質シルト径3-5mmの炭化物を少量含む
- 8 5Y5 1灰色 粘質シルト 層相対的シルトを少量含む
- 9 5Y5 1灰色 粘質シルト径1-2mmの 塵の粒子を少量含む

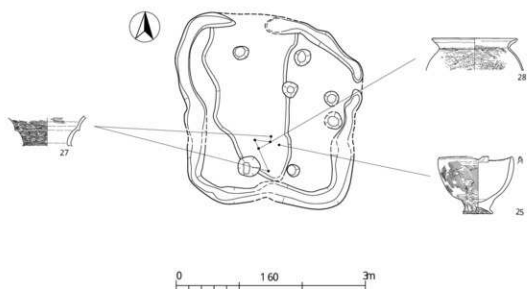
S52



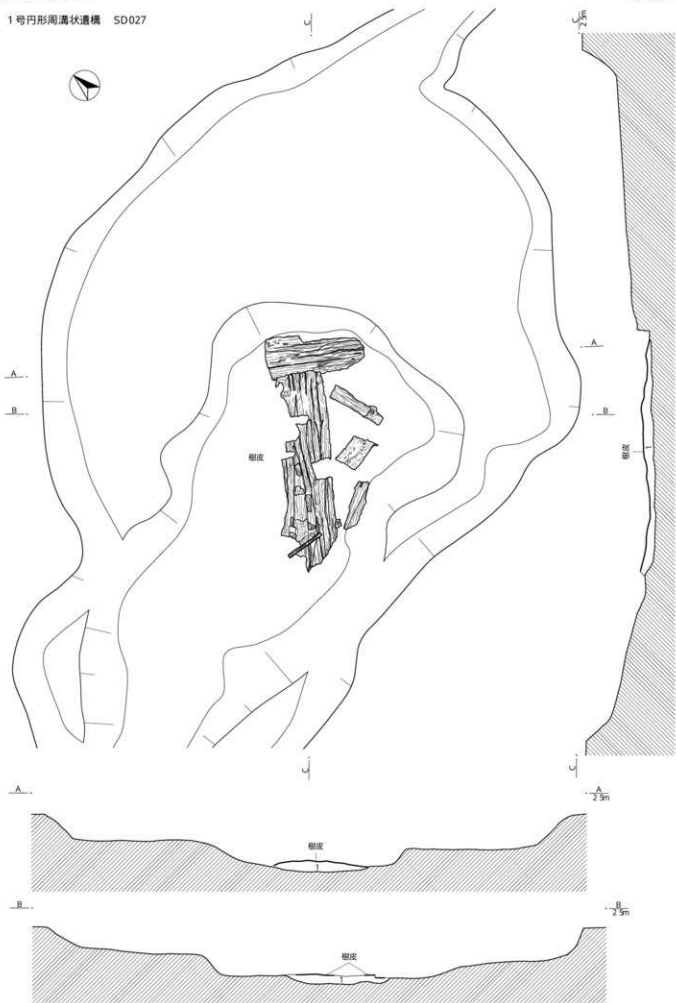
SB 1



SB 2

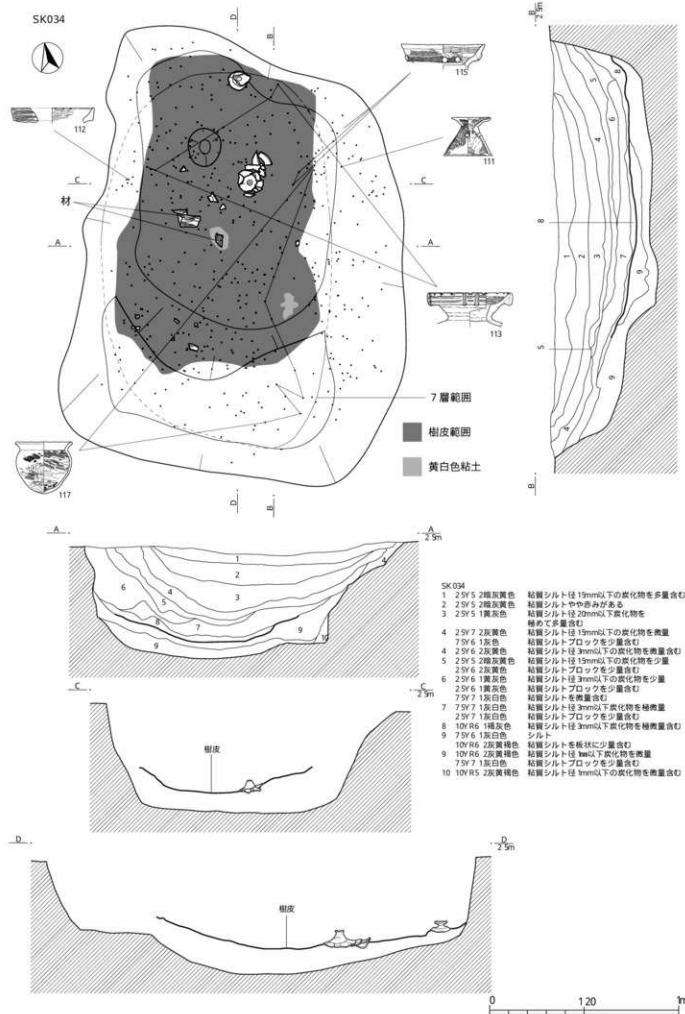


1号円形周溝状遺構 SD027

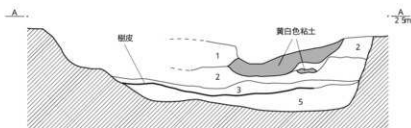
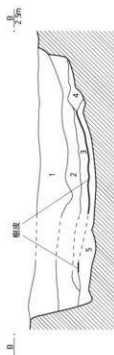
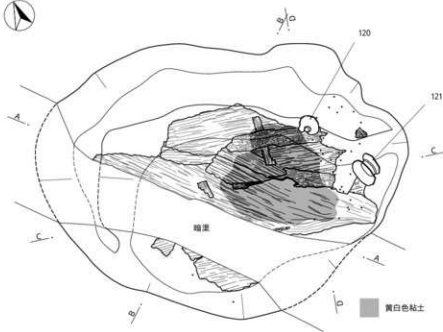


SD027 断面下
 1 2376 1層灰色 粘質シルト
 5BGS 1層灰色 粘質シルトブロックを散置に含む。

0 1.20 1m

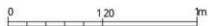
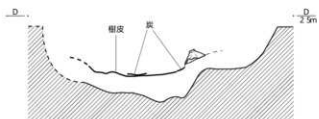
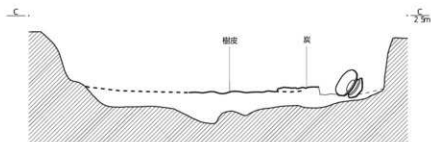


SK038

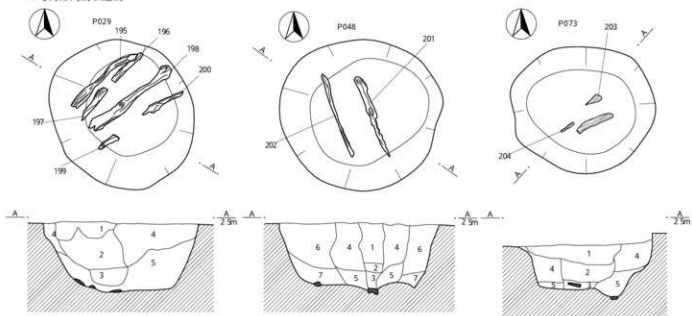


SK038

- | | | |
|---|--------------|---------------------------------------|
| 1 | 2SY6 2灰黄色 | 粘質シルト径 1-10mm炭化物を微量含む |
| 2 | 2SY7 1灰白色 | 粘質シルト径 2-10mm炭化物を少量含む |
| 2 | 2SY6 2灰黄色 | 粘質シルト 1辺冲積的立場 |
| 3 | 5Y6 2灰オリーブ色 | 粘質シルト径 1-2mm炭化物を微量含む |
| 4 | 2SY6 1オリーブ灰色 | 砂質シルト 5Y 5 1灰色粘質シルトブロックを少量含む |
| 5 | 7SY6 1灰色 | 粘質シルト径 1-3mm炭化物微量 5Y 5 1灰色砂質ブロックを少量含む |



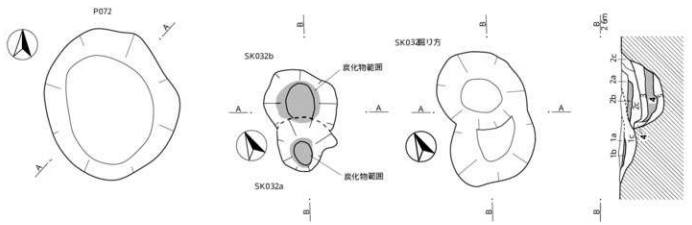
1号円形周溝状遺構



- P029**
- 1 25Y6 1黄灰色 粘質シルト径 3mm以下の炭化物を微量
 - 2 25Y6 1黄灰色 砂質シルトブロックを少量含む
 - 3 10YR6 2灰黄色 粘質シルト径 3mm以下の炭化物を少量含む
 - 4 25Y7 2黄灰色 黄灰砂質シルトブロックを少量含む
 - 5 25Y7 2黄灰色 粘質シルトを少量含む
 - 6 1と比べ赤味を帯びた粘質シルトが主体
 - 7 10YR6 2灰黄色 粘質シルト 定量的な粘質シルトブロック径 1mm以下の炭化物を微量に含む
 - 8 25Y7 1灰白色 砂質シルト
 - 9 粘土シルトブロックを径 5mm以下の炭化物を微量に含む
 - 10 25Y7 1灰白色 砂質
 - 11 粘質シルトブロックを少量含む

- P048**
- 1 25Y6 2灰黄色 粘質シルト径 3mm以下の炭化物を少量含む
 - 2 25Y5 1黄灰色 粘質シルト径 5mm以下の炭化物を微量含む
 - 3 7.5Y5 1灰色 シルト
 - 4 5Y6 1灰色 粘質多量含む
 - 5 25Y6 1黄灰色 粘質シルト径 2mm以下の炭化物を微量含む
 - 6 7.5Y5 1灰色 砂質シルトブロックを少量含む
 - 7 5Y5 1灰色 粘質シルト径 3mm以下の炭化物を微量含む
 - 8 5Y7 1灰色 粘質シルトブロックを多量含む
 - 9 5Y5 1灰色 砂質シルト
 - 10 25Y7 2黄灰色 灰黄粘質シルトブロックを多量含む
 - 11 7.5Y5 1灰色 砂質
 - 12 7.5Y6 1灰色 粘質シルトブロックを多量含む

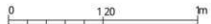
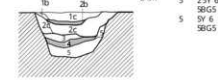
- P073**
- 1 25Y6 2灰黄色 粘質シルト径 2mm以下の炭化物を微量含む
 - 2 7.5Y5 1灰色 シルトブロックを微量含む
 - 3 25Y6 1灰色 粘質シルト
 - 4 25Y5 1黄灰色 シルトブロックを少量含む
 - 5 5Y5 1灰色 粘質シルト
 - 6 25Y6 1灰色 粘質シルト
 - 7 5Y5 1灰色 砂質シルト
 - 8 5Y6 1灰色 粘質シルトを多量含む
 - 9 7.5Y6 1灰色 粘質シルト
 - 10 7.5Y5 1灰色 砂質多量下部に植物遺体を少量含む



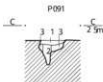
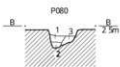
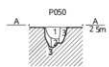
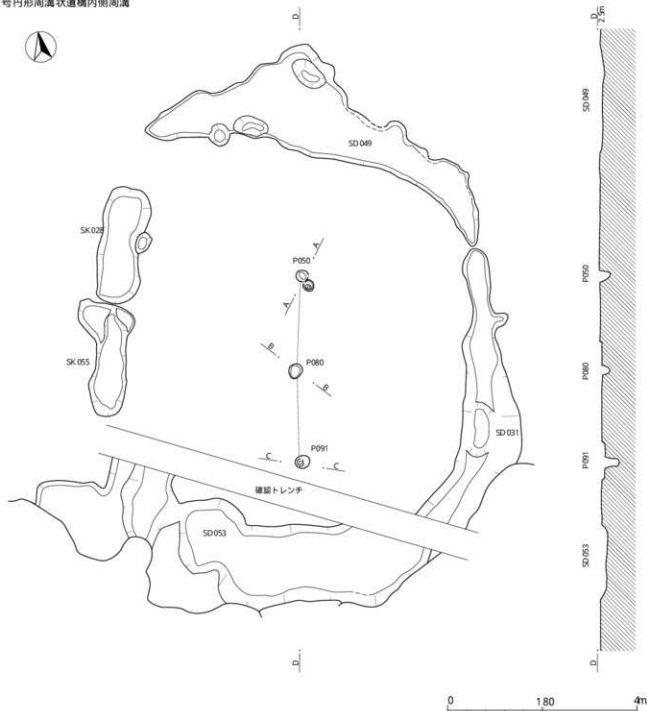
- P072**
- 1 25Y6 2灰黄色 粘質シルト
 - 2 25Y7 2黄灰色 粘質シルト径 5mm以下の炭化物を微量
 - 3 10YR5 2灰褐色 粘質シルトブロックを少量含む
 - 4 25Y7 1灰白色 シルトブロックを少量含む
 - 5 25Y7 2黄灰色 粘質シルト
 - 6 5Y6 1灰色 粘質シルト径 5mm以下の炭化物を微量
 - 7 5Y5 1灰色 シルト
 - 8 25Y6 2灰黄色 粘質シルトブロックを多量含む
 - 9 25Y5 1黄灰色 粘質シルト
 - 10 25Y6 1灰白色 粘質シルトブロックを少量含む

- SK032**
- 1a 5Y3 1オリーブ黒色 粘質シルト径 3mm以下の炭化物を少量含む
 - 1c 5Y4 1灰色 粘質シルトに
 - 1b 5Y5 1黄灰色 粘質シルトブロックを少量含む
 - 2a 5Y3 1オリーブ黒色 粘質シルト径 3mm以下の炭化物少量
 - 2b 5Y2 1オリーブ黒色 粘質シルト径 10mm以下の炭化物を多量に含む
 - 2c 5Y6 1灰色 粘質シルト径 10mm以下の炭化物を多量に含む
 - 2d 5Y5 1黄灰色 粘質シルト
 - 2e 25Y6 2灰オリーブ色 粘質シルトに3とほぼ同様
 - 3 5Y6 2灰黄色 粘土シルトブロックを少量含む
 - 4 5Y5 1灰色 粘質シルト径 3mm以下の炭化物を少量含む
 - 5 5Y5 1灰色 粘質シルト径 5mm以下の炭化物を多量含む
 - 6 5Y5 1灰色 粘質シルト
 - 7 25Y6 2灰オリーブ色 粘質シルトブロックを多量含む
 - 8 5Y6 1灰色 シルトブロックを多量含む
 - 9 5Y5 1黄灰色 粘質シルト
 - 10 5Y6 1黄灰色 シルトブロックを多量含む

- P072**
- 1 25Y6 2灰黄色 粘質シルト
 - 2 25Y7 2黄灰色 粘質シルト径 5mm以下の炭化物を微量
 - 3 10YR5 2灰褐色 粘質シルトブロックを少量含む
 - 4 25Y7 1灰白色 シルトブロックを少量含む
 - 5 25Y7 2黄灰色 粘質シルト
 - 6 5Y6 1灰色 粘質シルト径 5mm以下の炭化物を微量
 - 7 5Y5 1灰色 シルト
 - 8 25Y6 2灰黄色 粘質シルトブロックを多量含む
 - 9 25Y5 1黄灰色 粘質シルト
 - 10 25Y6 1灰白色 粘質シルトブロックを少量含む



1号円形周溝状遺構内側周溝



P050

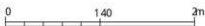
- | | |
|--------------------|----------------------|
| 1 25Y6 1黄灰色 | 粘質シルト径 5mm以下の炭化物少量含む |
| SBG6 1黄灰色 | 砂質シルトブロック少量含む |
| 2 30Y R6 3cにs11黄褐色 | 粘質シルト径 3mm以下の炭化物少量含む |
| SBG5 1黄灰色 | 砂質シルトブロック多量 |
| 3 SBG5 1黄灰色 | 粘質シルト |
| SBG6 1黄灰色 | 粘質シルトブロック少量含む |

P080

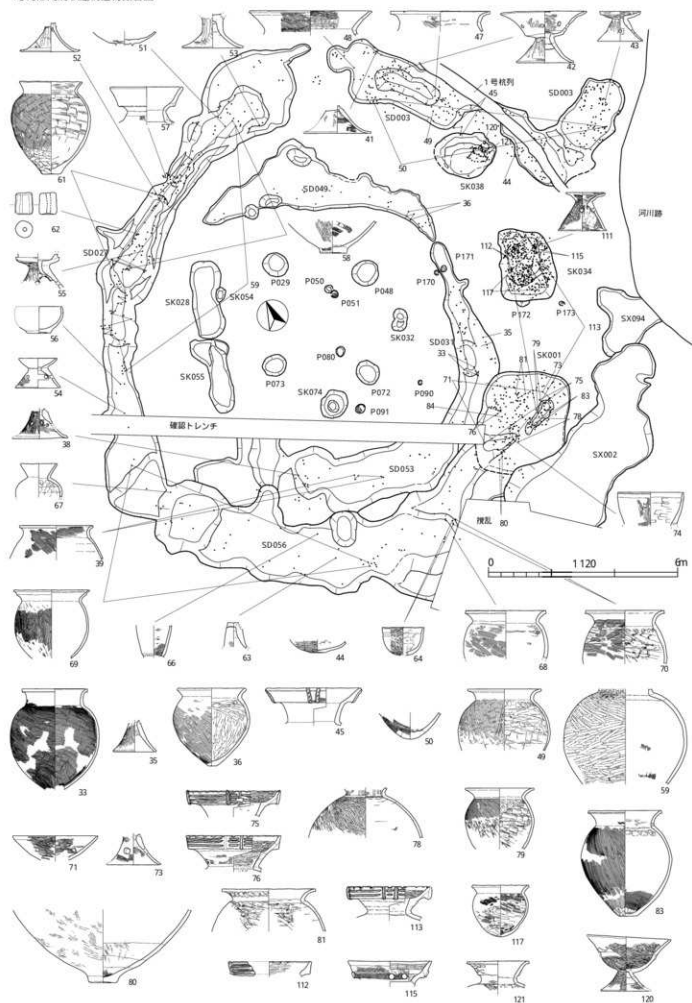
- | | |
|---------------|-----------------------|
| 1 25Y6 2灰黄色 | 粘質シルト径 5mm以下の炭化物を微量含む |
| 2 25Y 5 2暗灰黄色 | 粘質シルト径 1mm以下の炭化物を微量含む |
| 3 7.5Y 5 1灰色 | シルト |
| 25Y6 2灰黄色 | 粘質シルトブロックを多量含む |

P091

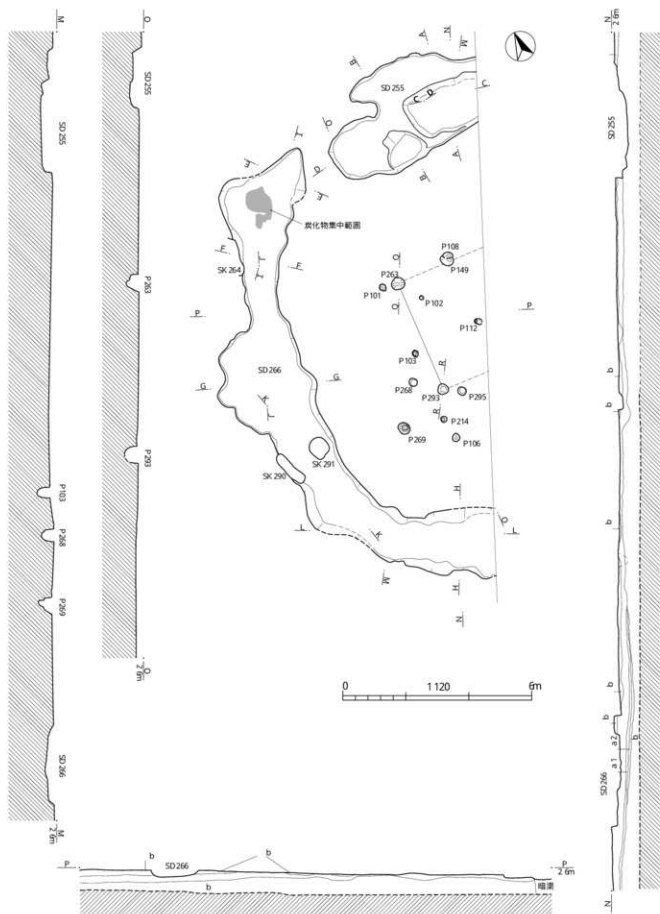
- | | |
|--------------|---------------------|
| 1 25Y6 2灰黄色 | 粘質シルト径 1mm以下の炭化物を微量 |
| 7.5Y 5 1灰色 | シルトブロックを微量含む |
| 2 25Y 6 2灰黄色 | 粘質シルト |
| 7.5Y 5 1灰色 | シルトブロックを微量含む |
| 3 7.5Y 5 1灰色 | シルト |
| 25Y6 2灰黄色 | 粘質シルトブロックを多量含む |



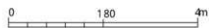
円形周溝状遺構遺物接合図



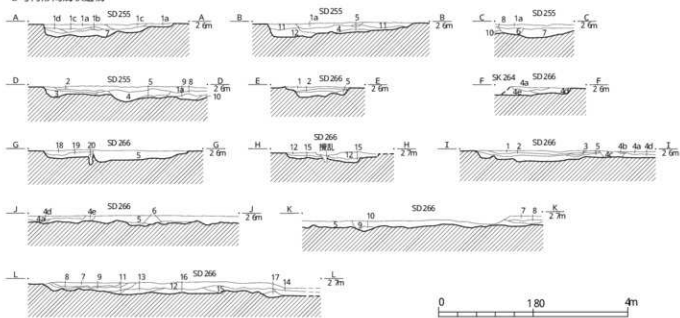
2号円形周溝状遺構



- a1 層に 23Y7 2灰黄色粘質シルトブロックを多量に含む
 a2 層に 10YR4 2灰黄緑色粘質シルトブロック ガンゴを多量に含む

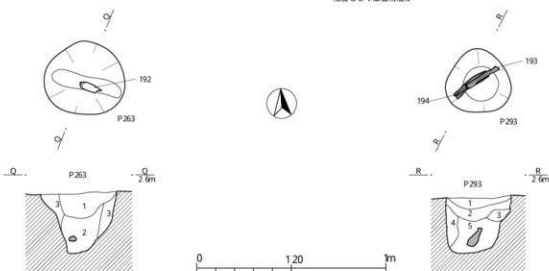


2号円形周溝状遺構



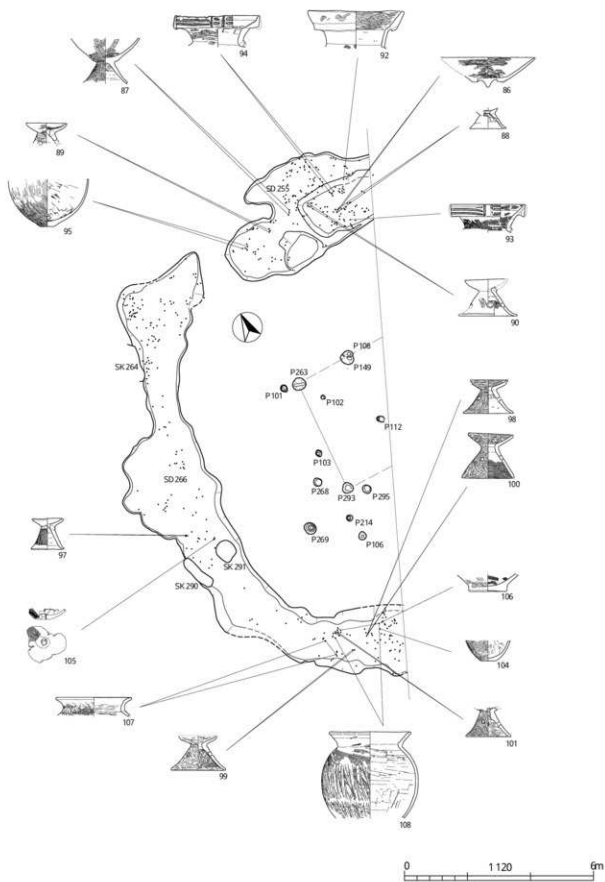
- SD255
- 1 a SB7 1明青灰色 粘土径1-3mm炭化物を微量含む径1-2mmの粘土粒 5Y8 1を多く含む
 - 1 b 1 a 1 ぬり炭化物を多く含む層
 - 1 c 1 a 1 ぬり炭化物を多く含む層
 - 2 5Y6 1灰白色 粘土径1-5mmの炭化物を少量含む 径1-2mmの粘土ブロック SB7 1を少量含む 粒子の縁が1砂礫を少量含む
 - 3 75Y6 1灰白色 粘土径1-8mmの粘土ブロック 10BG6 1を極めて多く含む
 - 4 3に同じ
 - 5 N6 1灰白色 粘土径5-10mmの粘土ブロック 25Y6 1を少量含む 径1-2mmの粘土粒 25Y7 1を少量含む
 - 6 SB7 1明青灰色 粘土径1-3mmの粘土ブロック 10BG6 1を極めて多く含む 層に特に中央下方に集中 径1-5mmの粘土粒ブロック 75Y7 1を少量含む
 - 7 3に径1-2mmの炭化物を微量含む粒子の縁が1砂礫を少量含む 粘土ブロックは下方にやや集中している
 - 8 75Y6 1粘土と 10BG6 1粘土が粒・ブロック状に混ざりあう層
 - 9 SB7 1明青灰色 粘土径1-3mmの粘土粒 5Y8 1を少量含む径1-5mmの炭化物を微量含む
 - 10 75Y6 1灰白色 粘土径1-2mmの粘土粒 5Y8 1を少量含む
 - 11 10Y6 1灰白色 粘質シルト径1-3mmの炭化物を微量含む 径1-3mmの粘土粒 5Y7 1を少量含む
 - 12 10BG6 1粘土と 75Y6 1粘土が粒・ブロック状に混ざりあう層 径1-3mmの粘土粒 5Y7 1を少量含む

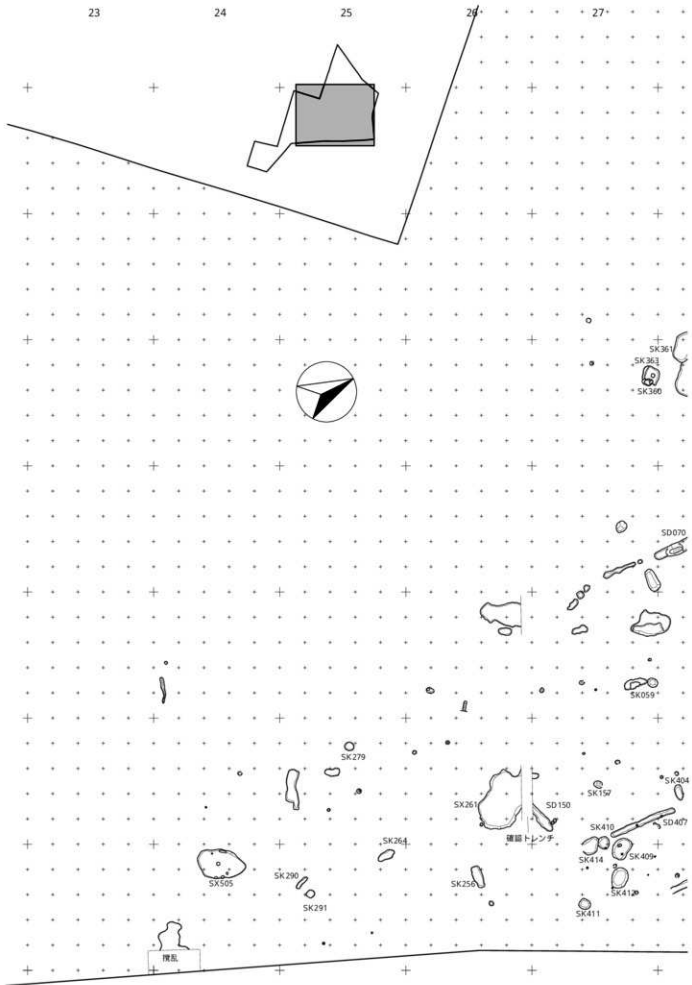
- SD266
- 1 10YR6 1灰白色 粘質シルト径1-5mmの炭化物を少量含む粒子の縁が1砂礫を少量含む
 - 2 5Y6 1灰白色 粘質シルト径1-10mmの炭化物を極めて多く含む 1よりほぼ1砂礫を多く含む径1-2mmの粘土粒 5Y8 1を少量含む
 - 3 SB6 1青灰色 粘土径1-2mmの粘土粒 5Y7 1を多く含む
 - 4 a 25Y6 1黄灰色 粘土径1-10mmの炭化物を多く含む粒子の縁が1砂礫を少量含む
 - 4 b 25Y7 1灰白色 粘土径2-4mmのシルトブロック 10BG6 1を多く含む径1mm以下の粘土粒 25Y8 1を微量含む
 - 4 c 25Y6 1黄灰色 粘土径1-2mmの粘土粒 25Y8 1を多く含む
 - 4 d 10BG6 1青灰色 粘質シルト径1-2mmの炭化物を微量含む 径1-3mmの粘土粒 25Y6 1・25Y8 1を多く含む粒子の縁が1砂礫を少量含む
 - 4 e 75Y6 1灰白色 粘土径1-3mmの炭化物を微量含む径1-3mm・10-40mmの粘土ブロック 25Y8 1を多く含む
 - 5 10BG6 1青灰色 粘土径2-10mmの粘土粒ブロックを多く含む
 - 6 5Y7 1灰白色 粘質シルト径1-3mmの粘土粒 10YR6 1を少量含む径5-10mmの粘土ブロック 5Y6 1を少量含む
 - 7 5Y6 1灰白色 粘質シルト径1-5mmの炭化物を少量含む径1-3mmの粘土粒 5Y8 1を少量含む
 - 8 5PB6 1青灰色 粘質シルト径2-3mmの炭化物を少量含む径1-2mmの粘土粒 5Y8 1を少量含む
 - 9 5PB6 1青灰色 粘土径1-5mmの炭化物を少量含む径1-3mmの粘土粒径10-30mmの粘土ブロック 25Y7 1を多く含む粒子の縁が1砂礫を少量含む
 - 10 10BG6 1青灰色 粘土径1-2mmの粘土粒 25Y6 1を少量含む
 - 11 10BG6 1青灰色 粘土径1-3mmの粘土粒 5Y8 1を少量含む
 - 12 5Y6 1灰白色 粘質シルト径1-5mmの粘土粒を少量含む 径1-2mmの粘土粒 5Y8 1を少量含む
 - 13 SB5 1青灰色 粘土径1-2mmの炭化物を微量含む径1-3mmの粘土ブロック 25Y7 1を多く含む
 - 14 5Y5 1灰白色 粘土径2-20mmの炭化物を少量含む径1-3mmの粘土粒 75Y8 1を多く含む
 - 15 25Y6 1灰白色 粘土径1-5mmの粘土粒を少量含む径1-3mmの粘土粒 25Y8 1を少量含む 粒子の縁が1砂礫を少量含む
 - 16 SBG5 1青灰色 粘土径2-8mmの粘土ブロック 25Y7 1を少量含む
 - 17 10BG6 1青灰色 粘質シルト径2-5mmの粘土粒ブロック 25Y6 1を少量含む
 - 18 10Y6 1灰白色 粘土径5-20mmの炭化物を多く含む粒子の縁が1砂礫を少量含む
 - 19 75Y6 1灰白色 粘土径1-3mmの炭化物を微量含む 1よりはほぼ1砂礫を多く含む 径1-2mmの粘土粒 5Y8 1を少量含む
 - 20 25Y5 1青灰色 粘土径1-3mmの炭化物を少量含む径5-10mmの粘土ブロック 10BG5 1を多く含む 柱間もしくは積層物か



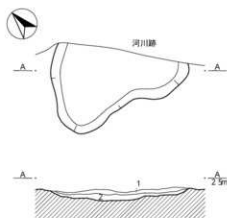
- P263
- 1 25Y6 1青灰色 粘質シルト径1-2mmの炭化物を少量含む 径1-2mmの粘土粒 25Y8 1を多く含む 径2-5mmの粘土粒ブロック SB6 1を少量含む
 - 2 SB6 1青灰色 粘土径1-2mmの粘土粒 25Y8 1を少量含む 径3-50mmの腐食木片を含む径1粘土ブロックを少量含む
 - 3 10BG6 1青灰色 粘土径10-20mmの粘土粒 5Y7 1を少量含む

- P293
- 1 10YR6 1黄灰色 粘質シルト径1-3mmの炭化物を少量含む粒子の縁が1砂礫を少量含む
 - 2 75Y6 1灰白色 粘土
 - 3 SB5 1青灰色 粘土
 - 4 25Y6 1黄灰色 粘土径1-2mmの粘土粒 5Y7 1径5-10-10mmの粘土ブロック SB6 1を少量含む
 - 5 SBG5 1青灰色 粘土径1-2mmの粘土粒 SB6 1径2-3mmの粘土粒 75Y6 1を少量含む 径5-20mmの腐食木片 25Y4 1を多く含む



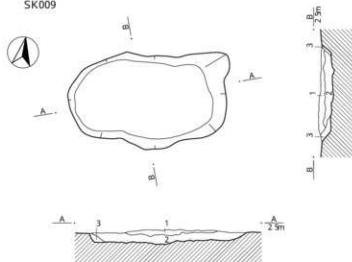


SK004



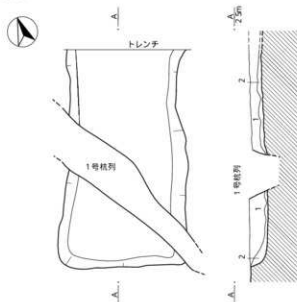
- SK004
 1 25Y5 2褐灰黄色 粘質シルト径 5mm以下の炭化物を少量含む
 2 5Y6 2灰オリーブ色 粘質シルト径 1mmの炭化物を微量含む

SK009



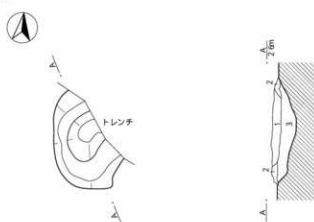
- SK009
 1 25Y5 2褐灰黄色 シルト径 3mm以下の炭化物を少量含む
 2 25Y5 2褐灰黄色 粘質シルト径 10mm以下の炭化物を多量含む
 3 5Y6 2灰オリーブ色 粘質シルト径 3mm前後の炭化物を微量含む

SK011



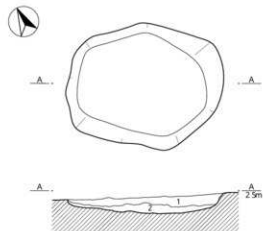
- SK011
 1 25Y5 2褐灰黄色 粘質シルト径 10mm以下の炭化物を多量
 5G Y5 1緑灰色 径 50mm以下のシルトブロックを少量含む
 2 5Y6 2灰オリーブ色 粘質シルト径 1mm以下の炭化物を微量
 5G Y5 1緑灰色 径 50mm以下のシルトブロックを少量含む

SK035



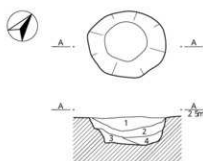
- SK035
 1 25Y6 2灰黄色 粘質シルト径 5mm以下の炭化物と粗砂を微量含む
 2 25Y6 2灰黄色 粘質シルト径 10mm以下の炭化物を少量含む
 3 25Y6 2灰黄色 粘質シルト径 2mm以下の炭化物を微量含む

SK045

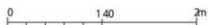


- SK045
 1 25Y6 2灰黄色 粘質シルト径 5mm以下の炭化物を微量含む
 2 25Y7 1灰白色 粘質シルト径 1mm以下の炭化物を微量
 5G G6 1青灰色 粘質ブロックを多量含む

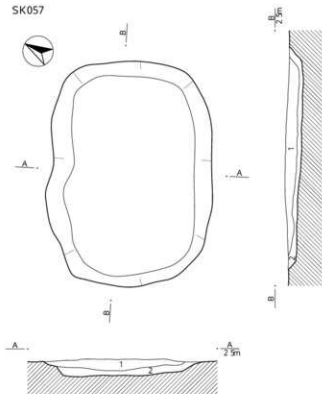
SK059



- SK059
 1 5Y5 2灰オリーブ色 粘質シルト径 10mm以下の炭化物を少量
 75Y6 2灰オリーブ色 粘質シルトブロックを少量含む
 2 5Y5 1灰色 粘質シルト径 10mm以下の炭化物を少量
 75Y5 1灰色 シルトブロック少量含む
 3 75Y5 1灰色 粘質シルト
 5Y5 2灰オリーブ色 粘質シルトブロックを少量含む
 4 5Y5 1灰色 粘質シルト径 15mm以下の炭化物を少量
 75Y7 2灰白色 粘質シルトブロックを少量含む



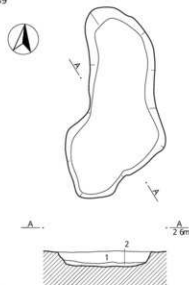
SK057



SK057

- 1 5Y 6 1灰色 粘質シルト径5mm以下の炭化物を少量含む
2 25Y 6 1黄灰色 粘質シルト径3mm以下の炭化物を微量含む

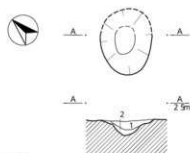
SK089



SK089

- 1 25Y 5 1黄灰色 粘質シルト径20mm以下の炭化物を多量含む
2 75Y 5 2灰オリブ色 粘質シルト径5mm以下の炭化物を微量含む

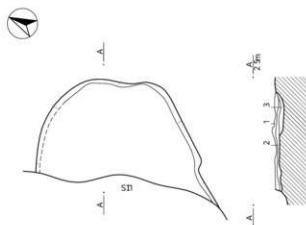
SK157



SK157

- 1 75Y 5 1灰色 粘質シルト
5Y 6 2灰オリブ色 粘質シルトブロックを下部に多量含む
2 75Y 4 2灰オリブ色 粘質シルト径1mm以下の炭化物を微量含む

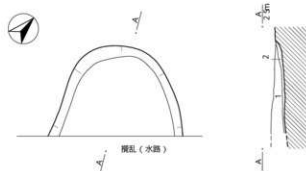
SK068



SK068

- 1 25Y 6 1黄灰色 粘質シルト径10mm以下の炭化物を少量含む
2 5Y 7 2灰黄色 粘質シルトブロックを微量含む
2 25Y 7 2灰黄色 粘質シルト径3mm以下の炭化物を少量含む
3 25Y 6 1黄灰色 粘質シルト径1mm以下の炭化物を微量含む

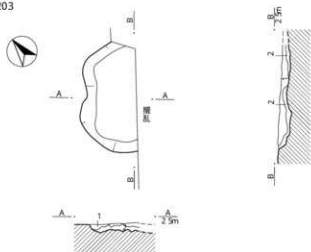
SK069



SK069

- 1 25Y 6 2 灰黄色 粘質シルト径10mm以下の炭化物を少量
10Y R4 1 橘灰色 シルトブロックを少量含む
2 25Y 7 2 灰黄色 粘質シルト径3mm以下の炭化物を少量含む

SK203

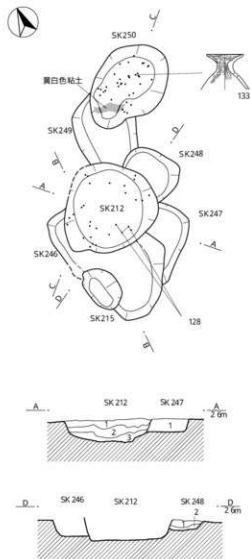


SK203

- 1 10Y R4 1 橘灰色 粘質シルト径1~7mmの炭化物を多量含む。
2 25Y 6 1 黄灰色 粘質シルト壁が41砂礫粒を若干含む

0 1.40 2m

SK212・215・246・247・248・249・250



SK 212

- 1 10Y R6 1 褐灰色 粘質シルト径 1-2mmの炭化物を極微量
砂礫を極微量含む
- 2 25Y 5 1 黄灰色 粘質シルト径 2-10mmの炭化物を微量含む
1より極微量砂礫を含む
- 3 10Y R5 1 褐灰色 粘土径 5-10mmの炭化物を極めて少量含む

SK 246

- 1 25Y 6 1 黄灰色 粘質シルト径 1-10mmの炭化物を少量砂礫を少量含む
- 2 10Y R5 1 褐灰色 粘土径 1-10mmの炭化物を多量含む 層の下中に集中している
炭化物の周囲に径 1-2mmの粘土粒 25Y 8 1 灰白色を含む

SK 247

- 1 25Y 5 1 黄灰色 粘質シルト径 1-2mmの炭化物を微量含む
径 1-2mmの粘土粒 10Y R7 1 灰白色を少量含む

SK 248

- 1 10Y R5 1 褐灰色 シルト径 1-10mmの炭化物を微量砂礫を少量含む
- 2 10Y R6 1 褐灰色 粘質シルト径 1-2mmの粘土粒 10Y R7 2Cに黄1層褐色を極めて多量含む

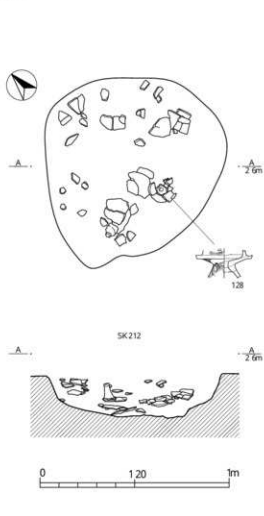
SK 249

- 1 25Y 6 1 黄灰色 シルト粘土塊 25Y7 3 浅黄色微量含む砂礫を少量含む
- 2 5Y 6 1 黄白色 シルト
- 3 5Y 6 1 灰色 粘土径 1-5mmの粘土塊 25Y7 3 浅黄色を多量含む

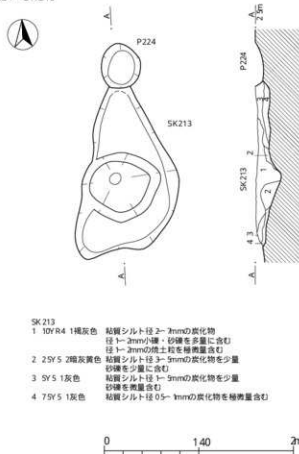
SK 250

- 1 10Y R5 1 褐灰色 シルト径 2-7mmの炭化物、砂礫を少量含む
径 2-5mm砂礫を少量含む
- 2 25Y 6 1 黄灰色 粘質シルト径 1-5mmの炭化物を微量含む
- 3 25Y 7 2 灰黄色 粘質シルト
- 4 5Y 6 1 黄灰色 シルト

SK212



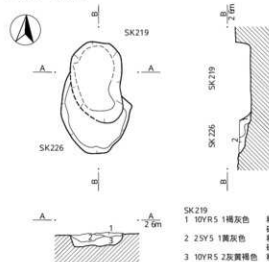
P224・SK213



SK 213

- 1 10Y R4 1 褐灰色 粘質シルト径 2-7mmの炭化物
径 1-2mm小礫・砂礫を多量を含む
径 1-2mmの粘土粒を極微量含む
- 2 25Y 5 2 黄灰色 粘質シルト径 3-5mmの炭化物を少量
砂礫を少量を含む
- 3 5Y 5 1 灰色 粘質シルト径 1-5mmの炭化物を少量
砂礫を微量含む
- 4 75Y 5 1 灰色 粘質シルト径 0.5-1mmの炭化物を極微量含む

SK219・SK226



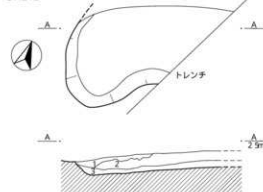
SK219

- 10YR5 1 褐灰色 粘質シルト径1~2mmの炭化物を微量含む砂礫を少量含む
- 25Y5 1 黄灰色 粘質シルト径1~3mmの炭化物を微量含む砂礫を微量含む
- 10YR5 2 灰褐色 粘質シルト径1~2mmの炭化物を少量含む砂礫を微量含む

SK226

- 10YR6 2 灰褐色 粘質シルト径0.5~9mmの炭化物を少量含む径1mm程度の砂礫を少量含む粘質シルト砂礫を少量含む
- 25Y6 2 灰褐色 粘質シルト砂礫を少量含む

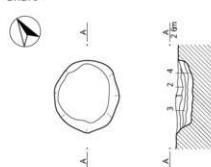
SK242



SK242

- 25Y6 1~7 1 黄灰色 粘土径1~5mmの炭化物を少量含む径1~5mmの小礫を少量含む
- 25Y7 1 灰白色 粘土粘質シルト塊径5~20mmを極めて多量含む径1~10mmの炭化物を少量含む径3~20mmの土器碎片等の破片が多く出土する層
- 25Y7 1 灰白色 N5 1 灰色 粘質シルトブロック径1~3cmを多量含む

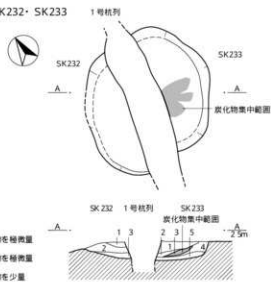
SK279



SK279

- 25Y7 1 灰白色 粘質シルト径1~3mmの炭化物を少量含む砂礫を微量含む
- 10YR6 1 褐灰色 粘質シルト径1~2mmの炭化物を少量含む砂礫を微量含む土器片が混入する層
- 10YR7 2に5Y1黄褐色 粘質シルト径1~2mmの炭化物を少量含む1~2mmより粒の大きい砂礫を少量含む径0.5~1mmの小礫が混入する
- 10YR7 2に5Y1黄褐色 全体的に粒の大きい砂礫層

SK232・SK233



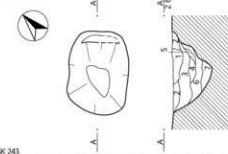
SK232

- 10YR6 1 褐灰色 シルト粘質シルト炭化物はほとんど含まず土器破片が出土する層
- 75Y6 1 褐灰色 粘質シルト
- 10Y6 1 灰色 粘質シルト

SK233

- 10YR7 1 灰白色 粘質シルト径1mmの炭化物を微量含む
- N7 灰白色 粘土
- 10YR7 1 灰白色 粘質シルト径1~10mmの炭化物を極めて多量含む
- 10YR7 1 灰白色 粘質シルト径1mmの炭化物を微量含む
- 10YR7 1 灰色 粘土

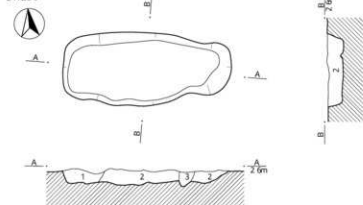
SK243



SK243

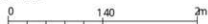
- 10YR7 3に5Y1黄褐色 粘質シルト径1~3mmの炭化物を微量量を含む土器破片が混入する層
- 25Y6 2 灰黄色 粘質シルト径1~3mmの炭化物を少量含む砂礫を微量含む
- 75Y6 1 褐灰色 粘土径1~10mmの炭化物を少量含む
- 10YR6 1 褐灰色 粘土径1mm程度の炭化物を微量含む
- 25Y7 2 灰黄色 粘土塊径5~10mmを多く含む
- 5Y6 1 灰色 粘土径2~3mmの炭化物を微量量含む
- 25Y7 2 灰黄色 粘土塊径5~3mmを極めて多く含む
- 5Y5 1 灰白色 シルト
- 25Y7 2 灰黄色 粘土塊径5~20mmを多く含む層の西側に集中している
- 25Y6 2 灰黄色 粘土径2~3mmの炭化物を微量量を含む層の上面に径1~4mmの炭化物が層状に集中する土器破片が混入する層

SK256

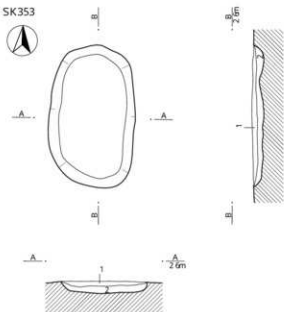


SK256

- 5B6 1 黄褐色 粘土
- 5Y7 1 灰白色 粘土ブロック径10~20mmを多く含む径2~10mmの炭化物を微量含む
- 5Y7 1 灰白色 粘土径0.5~1mmの炭化物を微量含む
- 5B6 1 黄褐色 シルトブロック径20~50mmを極少量含む
- 5B6 1 黄褐色 粘土径0.5~5mmの炭化物を少量含む
- 5Y7 1 灰白色 粘土ブロック径5~10mmを多く含む



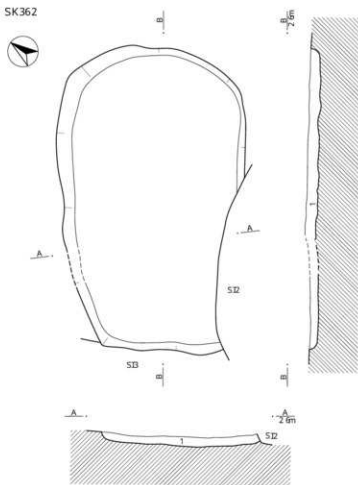
SK353



SK353

- 1 2SY4 1黄灰色 粘質シルト径50-60mmの 層相当のシルト塊を少量含む
径2-3mmの炭化物を少量含む
- 2 5Y4 2灰オリーブ色 粘質シルト径1-2mmの炭化物を少量含む
径1-2mmの 層の粒子を少量含む

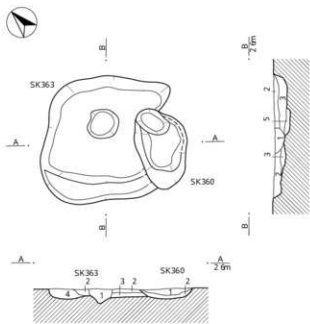
SK362



SK362

- 1 5Y4 2灰オリーブ色 粘質シルト径2-3mmの炭化物を多量径30-50mmの炭化物を少量含む

SK360・363



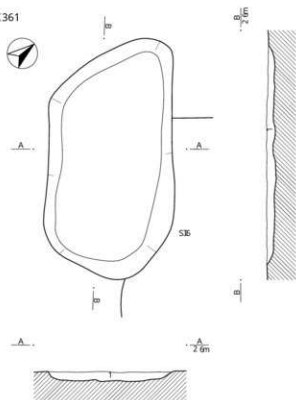
SK360

- 1 2SY4 1黄灰色 粘質シルト径1-2mmの炭化物を少量
径10-20mmの 層の粒子を多量含む
- 2 2SY5 1黄灰色 粘質シルト径10-20mmの 層の粒子を多量含む

SK363

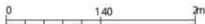
- 1 10YR4 1橘灰色 粘質シルト径10-20mmの炭化物を少量
径1-2mmの炭化物を多量
径1-2mmの 層の粒子を少量含む
- 2 2SY4 1黄灰色 粘質シルト径1-2mmの炭化物を少量
径10-20mmの 層の粒子を多量含む
- 3 2SY4 1黄灰色 粘質シルト 層の粒子を少量含む
- 4 2SY4 1黄灰色 粘質シルト径1-2mmの炭化物を少量
径10-20mmの 層の粒子を多量含む
- 5 2SY5 1黄灰色 粘質シルト径10-20mmの 層の粒子を多量含む

SK361

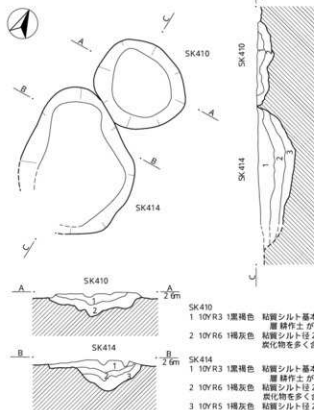


SK361

- 1 5Y5 1灰色 粘質シルト
7SY4 1灰色 粘質シルトを間状に多量
径1-30mmの炭化物を多量含む

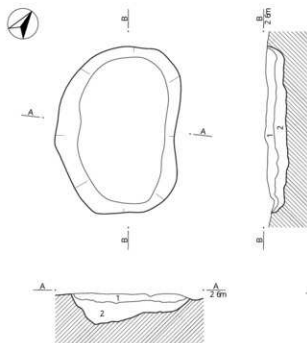


SK410・414



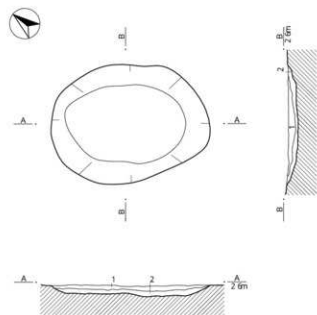
- SK410
- 10YR3 1黒褐色 粘質シルト基本土層の層 耕作土が踏み込まれた層
 - 10YR6 1褐灰色 粘質シルト径2~3mmの炭化物を多く含む
- SK414
- 10YR3 1黒褐色 粘質シルト基本土層の層 耕作土が踏み込まれた層
 - 10YR6 1褐灰色 粘質シルト径2~3mmの炭化物を多く含む
 - 10YR5 1褐灰色 粘質シルト径2~3mmの粘土ブロックを多く含む
 - 2.5Y 5.6黄褐色

SK409



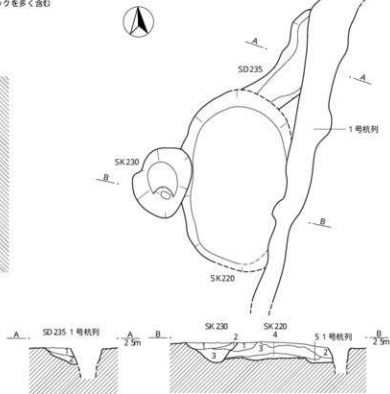
- SK409
- 10YR6 1褐灰色 粘質シルト径2~4mmの炭化物を少量含む
 - 10YR5 1褐灰色 粘質シルト
 - 2.5Y 5.6黄褐色 粘土ブロック径2~3mmを多く含む

SK412



- SK412
- 10YR6 1褐灰色 粘質シルト径1~2mmの炭化物を少量含む径2~3mmの小石を含む
 - 10YR5 1褐灰色 粘質シルト径1~2mmの炭化物を微量含む
 - 2.5Y 5.6黄褐色 粘土ブロック径2~3mmを少量含む

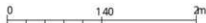
SK220・230・SD235



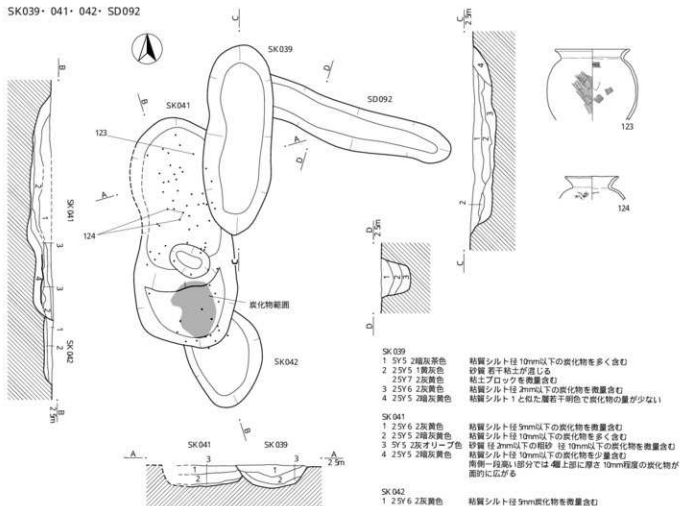
- SD235
- 5Y 7.1灰白色 粘質シルト径1~3mmの炭化物を微量含む。土師器と思われる赤褐色の粒(2~3mm)が微量含む
 - 10Y 6.1灰色粘土 微量量のマンガン粒以外に混入物はみられない。

- SK230
- 10YR5 1褐灰色 粘質シルト径0.5~1mmの炭化物を微量含む 砂礫を極めて少量含む
 - 2.5Y 5.1黄灰色 粘質シルト1とはほぼ同質であるが砂礫が若干少ない
 - 5YR5 1灰色 粘質シルト砂礫を少量含む

- SK220
- 2.5Y 6.2灰黄色 粘質シルト砂礫を微量含む
 - 2.5Y 7.2灰黄色 粘質シルト径1~2mmの小礫、砂礫を多く含む径1~3mmの炭化物を微量含む
 - 3.5Y 6.2灰黄色 粘質シルト径0.5~2mmのマンガン粒を微量含む
 - 2.5Y 5.1黄灰色 粘質シルト径1~3mmのマンガン粒を微量含む
 - 5.7Y 5.1灰色 粘質シルト径1mm程度のマンガン粒を少量含む 河川により擾乱を受けた



SK039・041・042・SD092



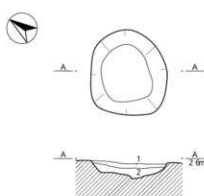
- SK039
 1 5Y5 2暗灰青色 粘質シルト径10mm以下の炭化物を多く含む
 2 2S5 1黄灰色 砂質 若干粘土が混じる
 2S5 7 2灰黄色 粘土ブロックを微量含む
 3 2S5 6 2灰黄色 粘質シルト径2mm以下の炭化物を微量含む
 4 2S5 5 2暗灰黄色 粘質シルト1と似た緩若干明色で炭化物の量が少ない

- SK041
 1 2S5 6 2灰黄色 粘質シルト径9mm以下の炭化物を微量含む
 2 2S5 5 2暗灰黄色 粘質シルト径10mm以下の炭化物を多く含む
 3 5Y5 2灰オリーブ色 砂質 径2mm以下の細砂 径10mm以下の炭化物を微量含む
 4 2S5 5 2暗灰黄色 粘質シルト径10mm以下の炭化物を少量含む
 炭層一段落1部分では、層上部に厚さ10mm程度の炭化物が面的に広がる

- SK042
 1 2S5 6 2灰黄色 粘質シルト径9mm炭化物を微量含む
 2 2S5 6 2暗灰黄色 粘質シルト
 5Y5 1 灰黄色 粘質シルトブロックを少量含む

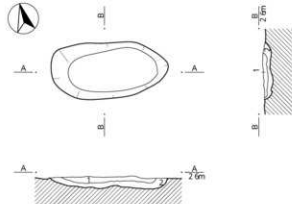
- SD092
 1 2S5 6 2灰黄色 粘質シルト
 7S5 6 1灰黄色 粘質シルトブロックを少量含む
 2 2S5 6 2灰黄色 粘質シルト
 2S5 6 2灰黄色 粘質シルトブロックを少量含む
 3 2S5 5 2暗灰黄色 粘質シルト径2mm炭化物を微量含む
 7S5 5 1灰黄色 粘質シルトブロックを微量含む

SK411

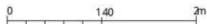


- SK411
 1 10YR 6 1褐灰色 粘質シルト径2-3mmの炭化物を多く含む
 2 10YR 5 1褐灰色 粘質シルト径2-3mmの
 2S5 5 6黄褐色 粘土ブロックを多く含む

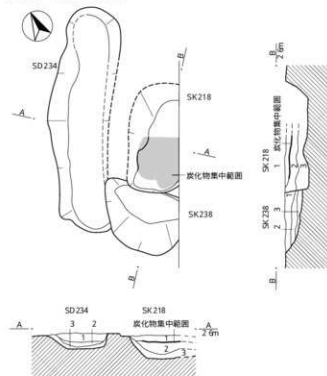
SK404



- SK404
 1 10YR 6 1褐灰色 粘質シルト径2-4mmの炭化物を少量含む
 2 5G5 1緑灰色 粘質シルト



SK218・SD234・SK238



SK218

- 10Y R7 1灰白色 粘質シルト径 1~2mmの炭化物を少量含む
砂礫を少量含む土跡の小片がみられる
- 10Y R6 1褐灰色 粘質シルト 径 1~10mmの炭化物を多量含む
土跡層と思われる赤褐色の径 2~3mmが稀少量含む
- 2.5Y 7 1灰白色 粘土粒 1~5mmの炭化物を少量含む

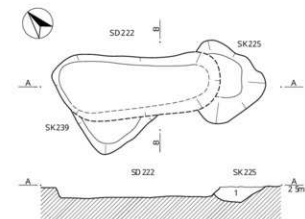
SD234

- 10Y R7 1灰白色 粘質シルト径 1~2mmの炭化物を少量含む
砂礫を少量含む
- N7 1灰白色 粘質シルト径 1~5mmの炭化物を少量含む
5Y 2~2.5Y 7 2 粘土ブロック 0.5~1mを少量含む
- 7.5Y R5 1褐灰色 粘質シルト径 1~2mmの炭化物を少量含む
5Y 7 1灰白 粘土粒 2~3mを少量含む土跡層小片を含む

SK238

- 2.5Y 6 1黄灰色 粘質シルト径 1~2mmの炭化物を稀少量含む
- 5Y 6 1灰色 粘質シルト径 1~2mmの粘土粒が層の下方に少量みられる
- 2.5Y 6 2灰黄色 粘土シルト径 2~3mmの炭化物(砂礫)を稀少量含む
径 1mm前後の粘土粒を多く含む

SD222・SK225・SK239



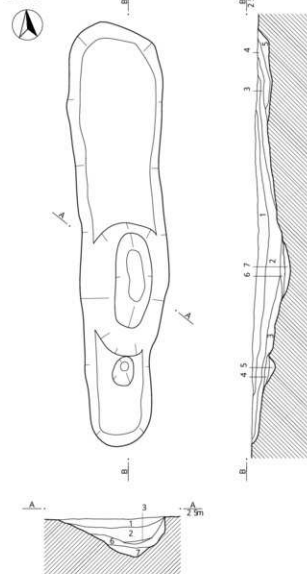
SD222

- 2.5Y 6 1黄灰色 粘質シルト
- N6 1灰色 粘質シルト径 1~10mmの炭化物を少量含む
砂礫を少量含む
- N6 1灰色 粘質シルト径 2~5mmの炭化物を少量含む

SK225

- 7.5Y 6 1灰色 粘土シルト径 1~5mmの炭化物を少量
砂礫を稀少量含む

SD070



SD070

- 5Y 5 2灰オリブ色 粘質シルト径 15mm以下の炭化物を少量含む
- 5Y 5 2灰オリブ色 粘質シルトより砂が少なくて細か(炭化物が少な)
- 5Y 7 2灰白色 粘質シルト径 3mm以下の炭化物を稀少量含む
- 5Y 5 2灰オリブ色 粘質シルト径 5mm以下の炭化物を少量含む
- 5Y 7 2灰白色 粘質シルト径 2mm以下炭化物を少量含む
- 7.5Y 5 2灰オリブ色 粘質シルトブロック少量含む
- 5Y 5 2灰オリブ色 粘質シルト径 5mm以下炭化物
- 2.5Y 7 2灰黄色 粘質シルトブロック多量含む
- 5Y 5 2灰オリブ色 粘質シルト径 1mm以下の炭化物を稀少量
2.5Y 7 2灰黄色 粘質シルトブロックを少量含む
- 7.5Y 6 2灰オリブ色シルトブロックを少量含む

0 140 2m

SD150

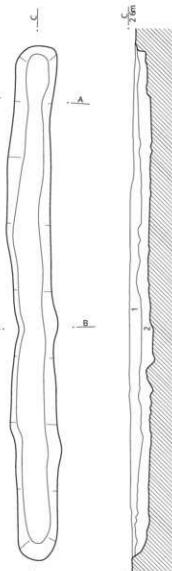


SD150

- 1 25Y6 2灰黄色 粘質シルト径3mm以下の炭化物を少量含む
- 2 25Y6 1黄灰色 粘質シルト径3mm以下の炭化物を微量含む
- 25Y7 2灰黄色 粘質シルトブロックを少量含む
- 75Y5 2灰オリーブ色 シルトブロックを多量に含む



SD407

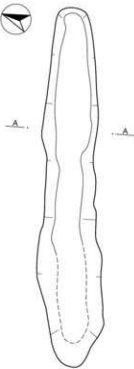


SD407

- 1 10YR6 1褐灰色 粘質シルト径2-3mmの炭化物を多く含む
- 2 10YR5 1褐灰色 粘質シルト径2-3mmの
- 25Y5 6黄褐色 粘土ブロックを多く含む



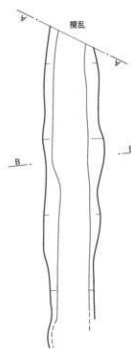
SD201



SD201

- 1 25Y5 1黄灰色 粘質シルト径2-3mmの炭化物を微量含む
土部底の小片(2-4cm)が混入する層
- 2 75Y6 1灰色 粘質シルト土器器片
1-4cmが混入する層

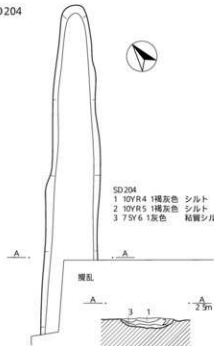
SD413



SD413

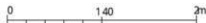
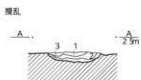
- 1 10YR6 1褐灰色 粘質シルト径2-3mmの炭化物を多く含む
径2-3mmの25Y5 6黄褐色
粘土ブロックを少量含む
- 2 10YR5 1褐灰色 粘質シルト
径2-3mmの炭化物を多く含む
25Y5 6黄褐色 径2-3mmの粘土ブロックを少量含む

SD204

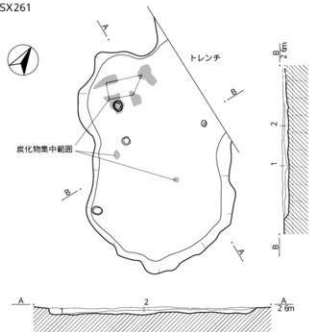


SD204

- 1 10YR4 1褐灰色 シルト
- 2 10YR5 1褐灰色 シルト
- 3 75Y6 1灰色 粘質シルト



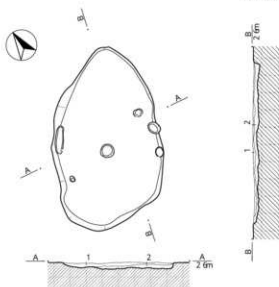
SX261



SX261

- 1 25Y6 2灰黄色 粘質シルト径 10mm以下の炭化物を少量含む
- 5Y7 1灰白色 粘質シルトブロックを微量含む
- 2 75Y6 1灰色 粘質シルト
- 75Y7 1灰白色 粘質シルトブロックを微量含む

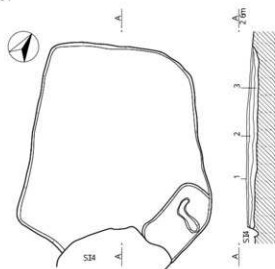
SX505



SX505

- 1 25Y5 1黄灰色 粘質シルト径 1-3mmのカーボンを少量鉄分を微量含む
- 2 25Y7 2灰黄色 粘質シルト径 2mm以下のカーボンを微量鉄分を微量含む

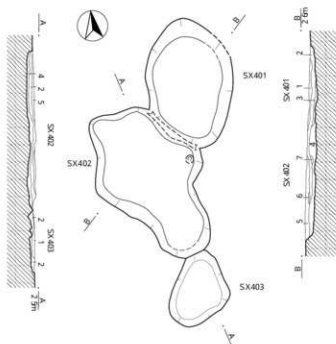
SX301



SX301

- 1 5Y5 2灰オリーブ色 粘質シルト径 1-2mmの炭化物を少量含む
- 2 5Y4 2灰オリーブ色 粘質シルト径 1-2mmの炭化物を微量含む
- 3 5Y4 1灰色 粘質シルト径 1-2mmの炭化物を微量含む

SX401・402・403

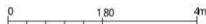


SX401・402

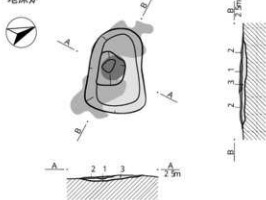
- 1 10Y R6 1褐灰色 粘質シルト径 2-3mmの炭化物を少量含む
径 1-2mmの小石が部分的に集中
- 2 10Y R5 1褐灰色 粘質シルト径 1-2mmの炭化物が部分的に集中している
- 3 10Y R6 1褐灰色 粘質シルト径 1-2mmの炭化物を少量含む
- 4 10Y R6 1褐灰色 粘質シルト径 1-2mmの炭化物を少量含む
- 5 5Y7 6黄色 粘質シルトブロック状に粘土が入る
白色小石を少量含む
- 6 5Y7 6黄色 粘質シルトブロック状に粘土が入る
白色小石を多量含む
- 7 5Y7 6黄色 地山混じり

SX403

- 1 10Y R6 1褐灰色 粘質シルト径 2-3mmの炭化物を少量含む
- 2 10Y R5 1褐灰色 粘質シルト径 1-2mmの炭化物を少量含む

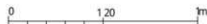


地床炉



地床炉

- 1 25Y R7 4赤赤褐色 シルト焼土
シルトを少量含む
- 2 25Y R6 2赤赤色 シルト
シルトを微量含む
炭カーボンを含む
- 3 25Y 4 2灰黄色 粘質シルト
- 25Y 6 2灰黄色 径 5-10mmの焼土ブロックを少量含む
微量のカーボンを含む



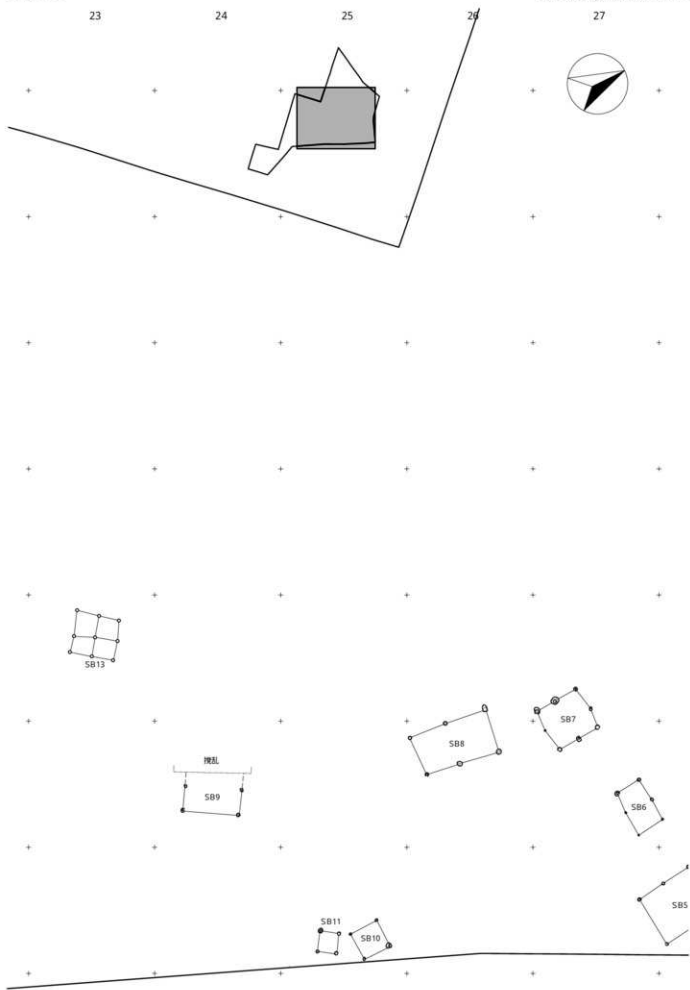
23

24

25

26

27



28

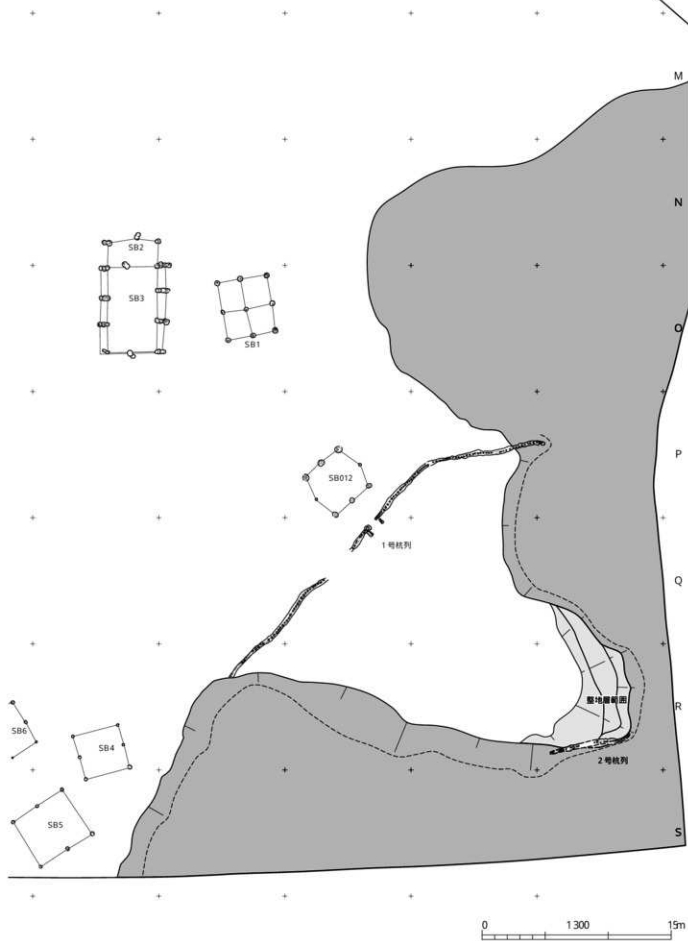
29

30

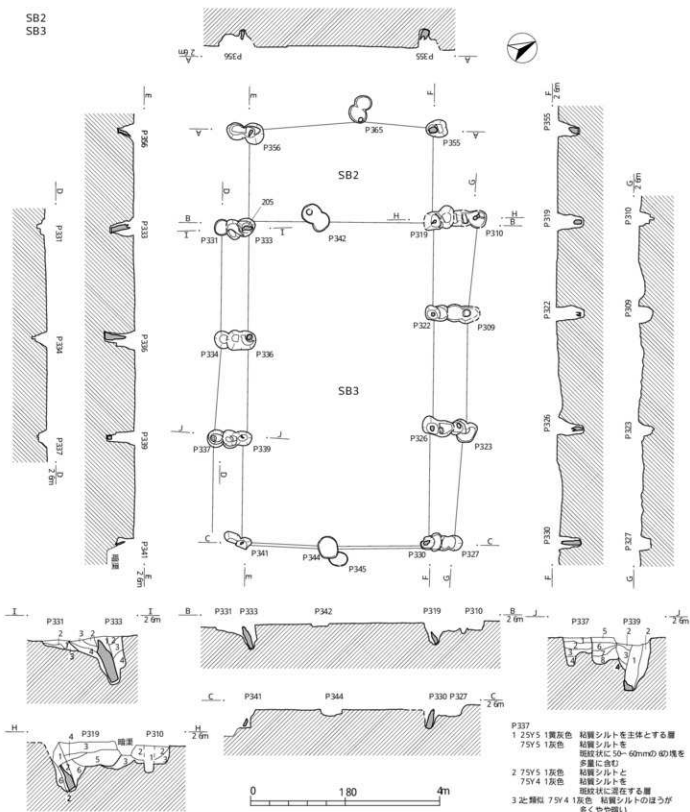
31

32

L



SB2
SB3



P337
1 25V5 1黄灰色 粘質シルトを主体とする層
75V5 1灰色 粘質シルトを
縦紋状に50-60mmの塊を
多量に含む
2 75V5 1灰色 粘質シルトと
75V4 1灰色 粘質シルトを
縦紋状に混在する層
3 北類似 75V4 1灰色 粘質シルトのほうが
多くやや暗い
4 5V5 1灰色 粘質シルト柱層

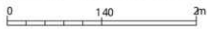
P310
1 75V4 1灰色 粘質シルト 柱層
2 25V5 1黄灰色 粘質シルト 層を少量含む
3 25V5 1黄灰色 粘質シルトを主体とする層
75V5 1灰色 粘質シルト

P319
1 5V4 1灰色 粘質シルト
2 25V5 1黄灰色 粘質シルトを縦紋状に多量含む柱層
2 10V R3 2黄褐色 シルト腐植土柱層
3 25V5 1黄灰色 粘質シルトを主体とする層
75V5 1灰色 粘質シルトを縦紋状に多量
含む50-60mmの塊を多量含む
4 25V5 1黄灰色 粘質シルトを主体とする層
75V5 1灰色 粘質シルトを縦紋状に多量
含む30-50mmの塊を多量含む
5 25V5 1黄灰色 粘質シルトを主体とする層
75V5 1灰色 粘質シルトを縦紋状に多量
含む20-30mmの塊の粒を多量含む
6 5V5 1灰色 粘質シルト

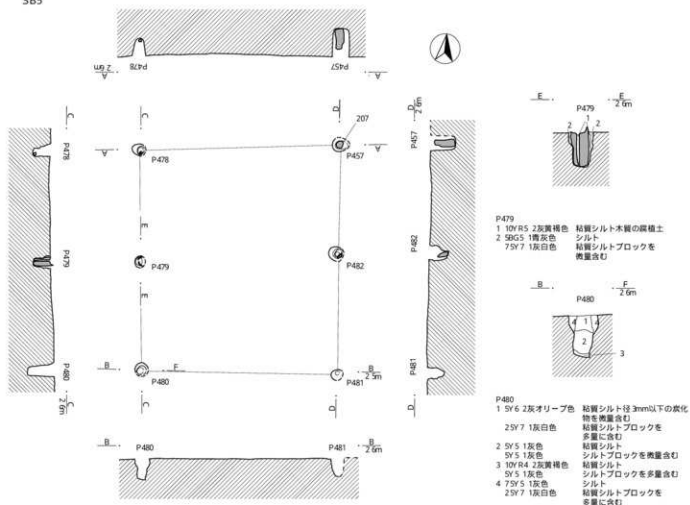
P331
1 25V5 1黄灰色 粘質シルトを主体とする層
75V5 1灰色 粘質シルトを縦紋状に
径20-30mmの塊の粒を
多量に含む
2 25V5 1灰色 粘質シルトを縦紋状に
径1-2mmの炭化物を
少量含む
3 北類似 径1-2mmの 層を多量含む

P333
1 10V R3 2黄褐色 シルトの腐植土 柱層
2 25V5 1黄灰色 粘質シルトを主体とする層
75V5 1灰色 粘質シルトを縦紋状に
径20-30mmの塊の粒を
多量に含む
3 25V5 1黄灰色 粘質シルトを主体とする層
75V5 1灰色 粘質シルトを縦紋状に
径20-50mmの塊を
多量含む
4 北類似 径1-2mmの 層を多量含む

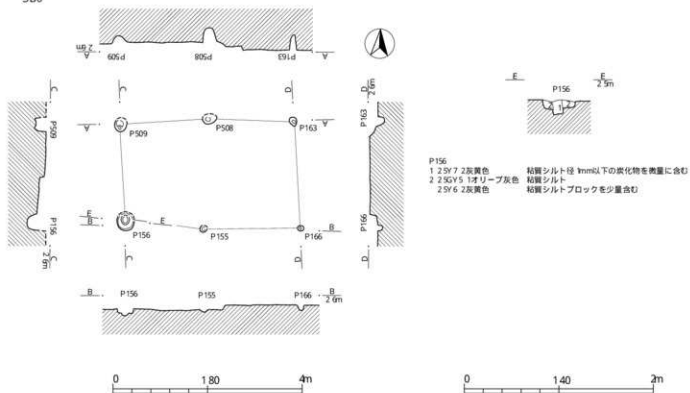
P339
1 1層と 10V R3 2黄褐色 シルト腐植土が縦紋状に
混在する層
2 25V5 1黄灰色 粘質シルトを主体とする層
75V5 1灰色 粘質シルトを縦紋状に
径30-50mmの塊を多量含む
3 25V5 1黄灰色 粘質シルトを主体とする層
75V5 1灰色 粘質シルトを縦紋状に
径20-30mmの塊の粒を多量含む
4 北類似 10V少量含む
5 25V5 1黄灰色 粘質シルトを主体とする層
75V5 1灰色 粘質シルトを縦紋状に50-60mmの
塊を多量含む
6 北類似 径1-2mmの炭化物を少量含む
7 75V5 1灰色 粘質シルトと
75V4 1灰色 粘質シルトを縦紋状に混在する層
8 北類似 75V4 1灰色 粘質シルトのほうが多くやや暗い



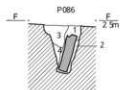
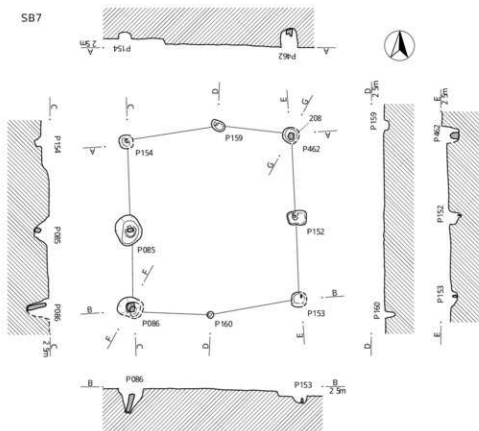
SB5



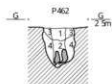
SB6



SB7

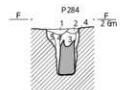
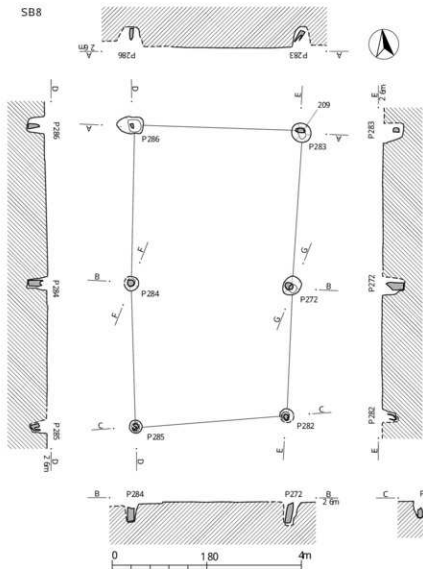


- P086
- 1 25Y 6 2灰黄色 粘質シルト径 1mm以下の炭化物を少量
 - 2 75Y 5 1灰色 砂質シルトブロック少量含む
 - 3 10Y R 5 2灰黄褐色 粘質シルト材の腐蝕したもの多量含む
 - 4 23Y 6 1黄灰色 粘質シルト径 1mm以下の炭化物を少量
 - 5 75Y 5 1灰色 砂質シルトブロック多量含む
 - 6 75Y 5 1灰色 シルト
 - 7 25Y 5 1黄灰色 粘質シルトブロックを少量含む

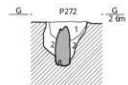


- P462
- 1 10Y R 7 1灰白色 粘質シルト
 - 2 10Y R 4 1暗灰色 径 1-2mmの炭化物を少量含む
 - 3 10Y R 7 1灰白色 粘質シルト植物体多数
 - 4 10Y R 7 1灰白色 粘質シルト径 1mm以下の炭化物を少量含む
 - 5 75Y 7 1灰白色 粘質シルト
 - 6 75Y 7 1灰白色 粘土ブロックを少量含む

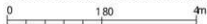
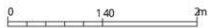
SB8



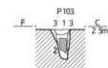
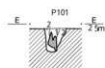
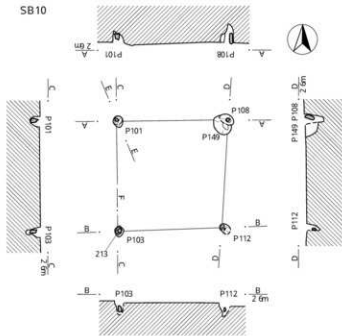
- P284
- 1 N 6 1灰色 粘土
 - 2 25Y 7 2灰黄色 粘土径 1-3mmを少量含む
 - 3 10Y R 6 2灰黄色 粘土
 - 4 10Y 5 1灰色 粘土ブロック径 1-3mmを多く含む
 - 5 05-3mmの腐蝕木片を多く含む
 - 6 N 6 灰色 粘土と
 - 7 25Y 7 2灰黄色 粘土が混在する層 灰黄色粘土は 0.2-1mmの粒状となっている
 - 8 N 5 灰色 粘質シルト
 - 9 25Y 7 2 10Y R 6 2径 0.5-2mmの粘土粒ブロックを少量含む



- P272
- 1 25Y 6 1黄灰色 粘質シルト径 1-8mmの炭化物を少量含む
 - 2 5Y 7 1灰白色 径 0.5-1mmの粘土多量含む
 - 3 25Y 7 1灰白色 粘土
 - 4 10B G 4 1暗青灰色 粘土ブロック径 1-3mmを少量含む



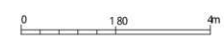
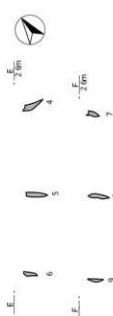
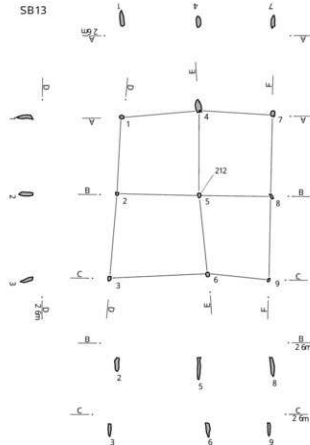
SB10



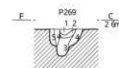
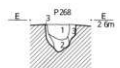
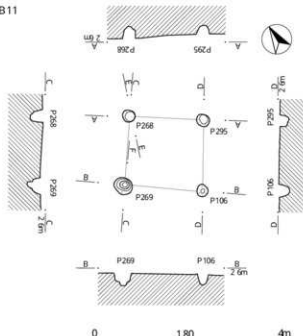
- P101**
 1 10YR6 1褐色色 粘土径1-2mmの炭化物を微量含む
 7.5YR4 1褐色色 粘土ブロック径1-3cmを少量含む
 2 2.5Y 6 1黄灰色 粘土径1mm程度の炭化物を微量含む
 7.5YR4 1褐色色 粘土径1-2mmを微量含む

- P103**
 1 10YR6 1褐色色 粘質シルト径0.5-1mmの炭化物を微量含む径0.5-1mmの厚板木片を少量含む 粘土面炭木片を極めて多く含む 柱眼
 粘土
 灰白色粘土径1-2mmの粒を少量含む
 7.5Y 7 1
SB5 1黄灰色 径1-3mmの粘質シルトブロックを微量含む

SB13



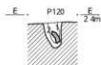
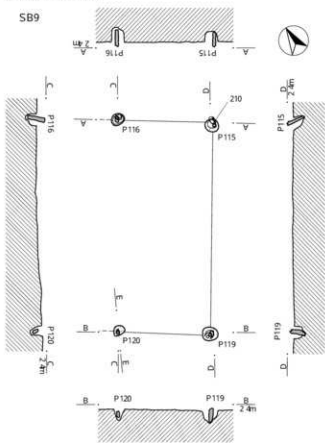
SB11



- P268**
 1 2.5Y 6 1黄灰色 粘質シルト径2-3mmの炭化物を少量含む
 径1-2mmの 2.5Y 8 2
 灰白色粘土粒を少量含む
 粒子の細かい砂礫を少量含む
 2 5B6 1青灰色 粘土径1-3mm炭化物を微量含む
 粘土径1-2mmを少量含む
 3 7.5Y 7 1灰白色 粘質シルト
 5Y 7 1灰白色 粘土ブロック
 5B6 1青灰色 径0.5-1cmを少量含む

- P269**
 1 10YR6 1褐色色 粘土径1-3mmの炭化物を少量含む
 粘土ブロック径0.5-1cmを少量含む
 2 10B6G 1青灰色 粘土径1-2mm炭化物を微量含む
 7.5Y 7 1灰白色 粘土径1-2mmを少量含む
 3 7.5Y 5 1黄灰色 粘土径1-3mmの炭化物を少量含む 粘土に若干ボソボソとした土
 4 N6 1灰色 粘土
 5 4から混入物が無くなった層

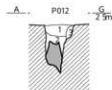
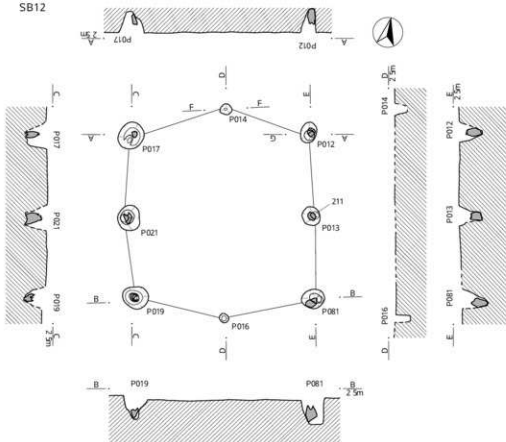
SB9



P120

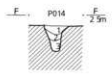
- 1 SB6 1青灰色 粘質シルト径2-4mmの赤褐色腐植物を多量に含む
- 2 SB6 1青灰色 粘質シルト径2-3mmの灰白色粘土ブロックを多量に含む

SB12



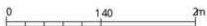
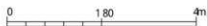
P012

- 1 2SY6 2灰黄色 粘質シルト径10mm以下の炭化物を少量
- 7SY6 1灰色 粘質シルトブロックを多量に含む
- 2 2SY5 2灰オリブ色 粘質シルト径3mm以下の炭化物を少量含む
- 2SY6 2灰黄色 粘質シルトブロックを少量含む
- 3 7SY6 1灰色 粘質シルト
- 2SY6 2灰黄色 粘質シルトを少量
- 7SY6 2灰黄色 径3mm以下の炭化物を少量含む
- 2SY6 2灰黄色 粘質シルトブロックを少量含む

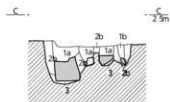
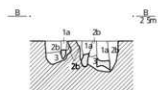
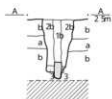


P014

- 1 2SY6 2灰黄色 径15mm以下の炭化物を多量
- 7SY6 1灰色 粘質シルトブロックを多量含む
- 2SY6 2灰オリブ色 径2mm以下の炭化物を少量含む
- 7SY6 1灰色 粘質シルトブロックを少量含む
- 3 7SY6 2灰黄色 径10mm以下の炭化物を少量含む
- 7SY7 2灰白色 粘質シルトブロックを少量含む

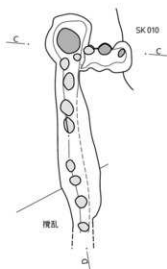
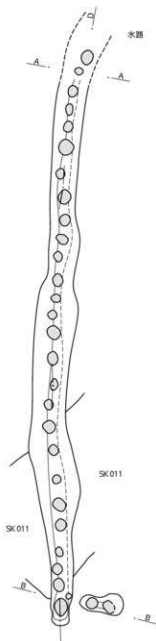


1号杭列

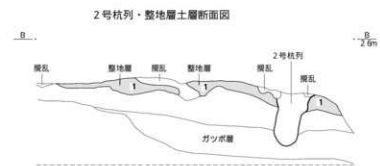


1号杭列

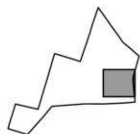
- | | | |
|----|--------------|------------------|
| 1a | 10V R6 1編灰色 | 粘質シルト |
| | 25Y6 2灰黄色 | 粘質シルトブロックを少量含む |
| 1b | 10V R5 2灰黄褐色 | 粘質シルト本質の腐植土 |
| 2a | 75Y6 2灰オリーブ色 | 粘質シルト |
| | 25Y5 1黄灰色 | 径 5mm以下の炭化物を少量含む |
| 2b | 75Y6 2灰オリーブ色 | 粘質シルトブロックを少量含む |
| | 5BG5 1青灰色 | 粘質シルト |
| 3 | 75Y5 1灰色 | シルトブロックを多量に含む |
| | 25Y7 1灰白色 | 粘質シルトブロックを少量含む |



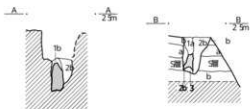
0 140 2m



- 整地層
- 1 25/6 2 灰黄色、粘質シルト
 - 35/5 1 シルトブロックを少量含む
 - 25/8 2 それ以外は場所によって
 - 35/5 1 粘質シルトブロックを多量に含む



1号杭列



1号杭列

1a 10V R6 1褐灰色
25V 6 2灰黄色

粘質シルト
粘質シルトブロックを
少量含む

1b 10V R5 2灰黄褐色
2a 75V 6 2灰オリーブ色

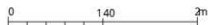
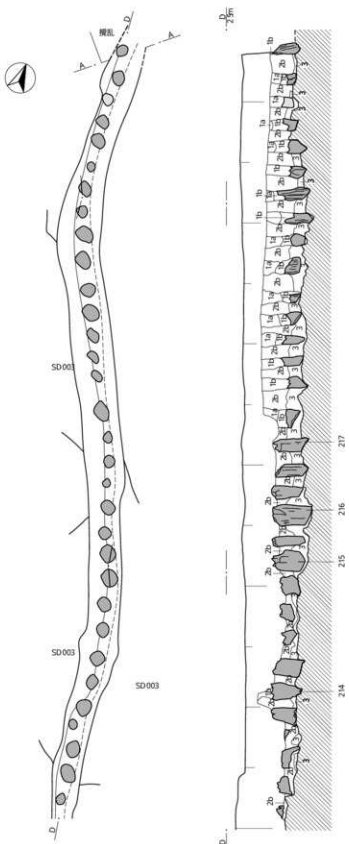
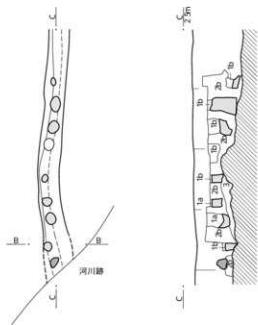
粘質シルト
粘質シルト木屑の腐植土
径5mm以下の炭化物を微量に含む

25V 5 1黄灰色
2b 75V 6 2灰オリーブ色

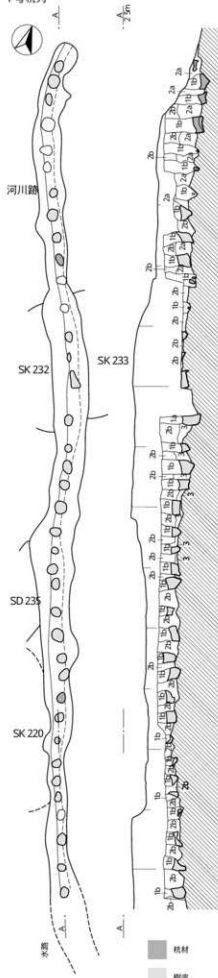
粘質シルト
粘質シルトブロックを少量含む

3 58G5 1黄灰色
75V 5 1灰色
25V 7 1灰白色

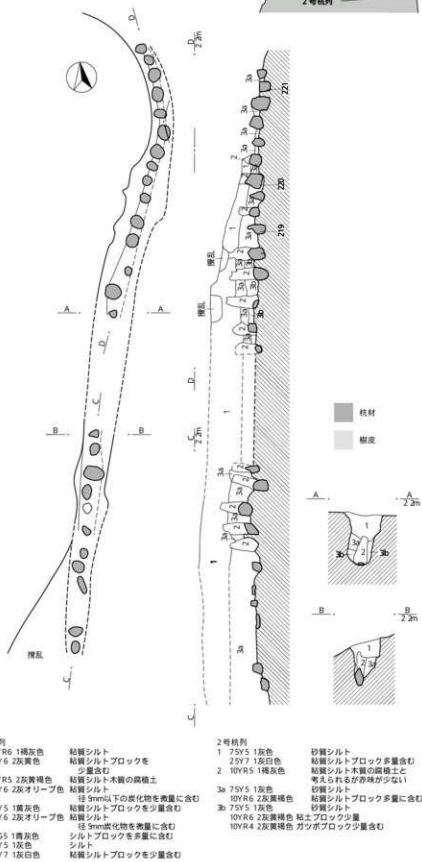
粘質シルト
シルトブロックを少量に含む
シルト
粘質シルトブロックを少量含む



1号杭列



2号杭列



1号杭列

1a 10YR5 1褐色
25Y6 2灰黄色

粘質シルト
粘質シルトブロックを
少量含む

1b 10YR5 2灰黄褐色

粘質シルト木質の腐植土

2a 75Y6 2灰オリーブ色

粘質シルト
径 5mm以下の炭化物を微量に含む

25Y5 1黄灰色

粘質シルトブロックを少量含む

2b 75Y6 2灰オリーブ色

粘質シルト
径 5mm炭化物を微量に含む

50G5 1青灰色

シルトブロックを少量に含む

3 75Y5 1灰色

シルト

25Y7 1灰白色

粘質シルトブロックを少量含む

2号杭列

1 75Y5 1灰色
25Y7 1灰白色

砂質シルト
粘質シルトブロックを少量含む

2 10YR5 1褐灰色

粘質シルト木質の腐植土と
考えられるが意味が少ない

3a 75Y5 1灰色

砂質シルト

10YR6 2灰黄褐色

粘質シルトブロックを少量含む

3b 75Y5 1灰色

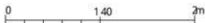
砂質シルト

10YR6 2灰黄褐色

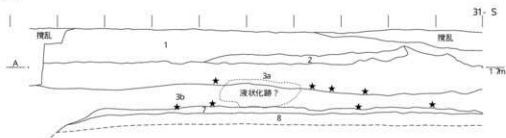
粘土ブロック少量

10YR4 2灰黄褐色

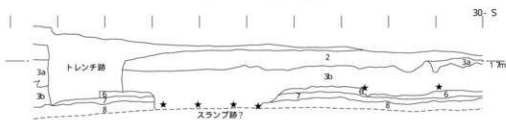
ガツボブロック少量含む



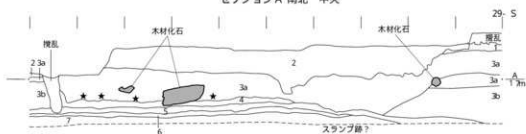
河川跡



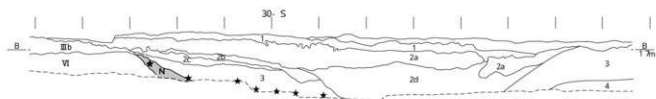
セクションA 南北 北側



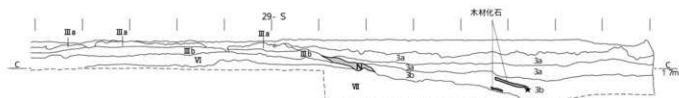
セクションA 南北 中央



セクションA 南北 南側

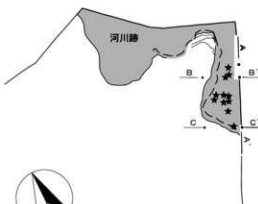


セクションB 東西



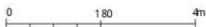
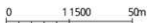
セクションC 東西

★ 遺物出土地点



河川跡セクション

- | | | |
|----|-------------|--------------------------|
| 1 | SB 1青灰色 | 粘質シルト 旧耕作土、ガツボを少量含む |
| 2 | SB4 1緑青灰色 | 粘質シルト 旧耕作土、ガツボを少量含む |
| 2a | SB4 1緑青灰色 | 粘質シルト 旧耕作土 |
| 2b | SB4 1緑青灰色 | 粘質シルト 旧耕作土、炭化物を多く含む |
| 2c | SB4 1緑青灰色 | 粘質シルト 旧耕作土、ガツボを少量含む |
| 2d | SB4 1緑青灰色 | 粘質シルト 旧耕作土、粘土ブロックを疎らに含む |
| 3 | 25YR3 3暗赤褐色 | 砂質シルト ガツボを多量に含む |
| 3a | 25YR3 3暗赤褐色 | 砂質シルト ガツボを多量に含む、細砂を主体とする |
| 3b | 25YR3 3暗赤褐色 | 砂質シルト ガツボを多量に含む、粗砂を主体とする |
| 4 | SBG6 1青灰色 | 砂質シルト |
| N | SBG6 1青灰色 | 粘質シルト 粘土ブロックを多量に含む |
| 5 | 75YR5 1黄灰色 | 粘質シルト 径1-2mmの炭化物を少量含む |
| 6 | 75YR8 1灰白色 | 粘質シルト |
| 7 | 75YR5 1黄灰色 | 粘質シルト 径1-2mmの炭化物を少量含む |
| 8 | 75YR8 1灰白色 | 粘質シルト |



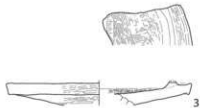
SI



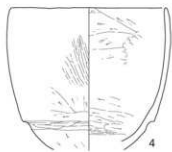
1



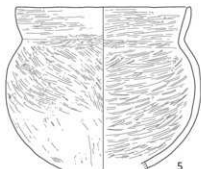
2



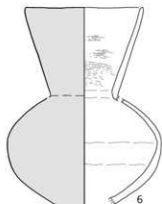
3



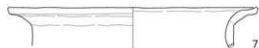
4



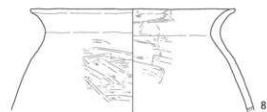
5



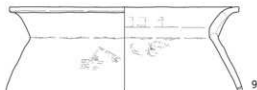
6



7



8

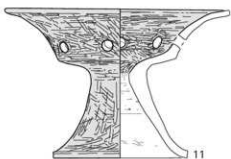


9



10

SB



11



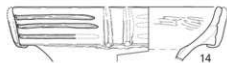
12



13



15



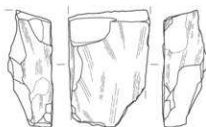
14



17



18



20



16

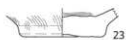
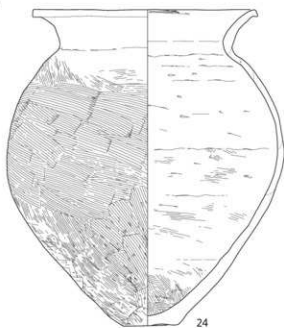


19

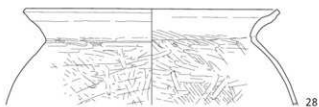
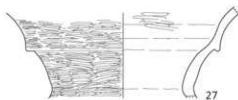
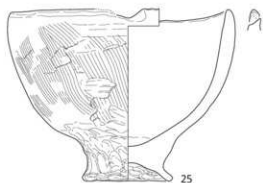


0 15cm 13

S5 1



S5 2

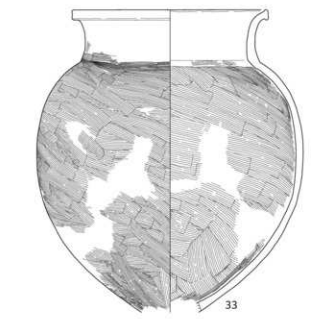


S5



S5



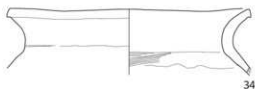


33

SD031
罍形周溝状遺構



35

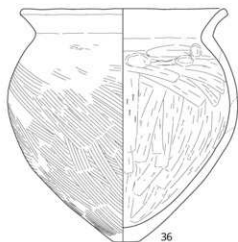


34

SD049
罍形周溝状遺構



37

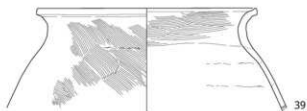


36

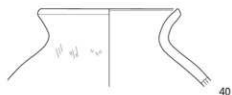
SD053
罍形周溝状遺構



38



39

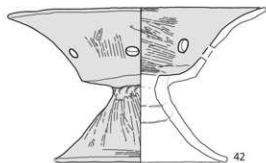


40

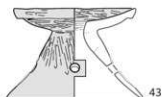
SD003
罍形周溝状遺構



41



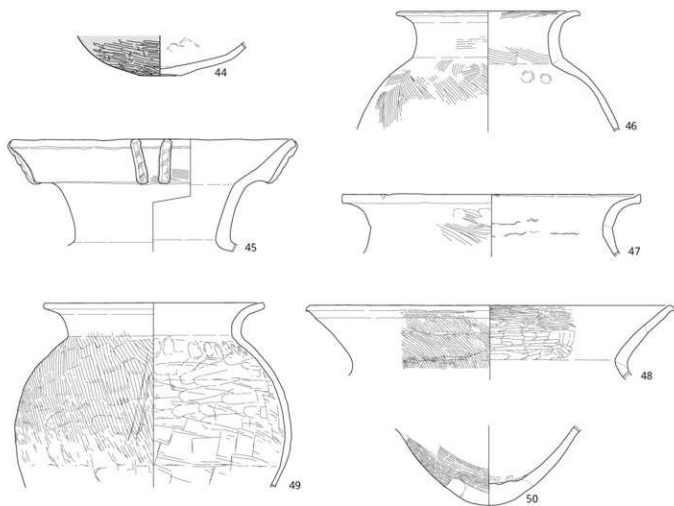
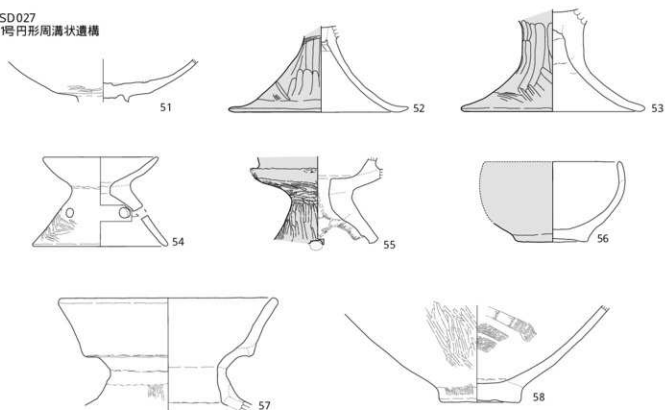
42



43



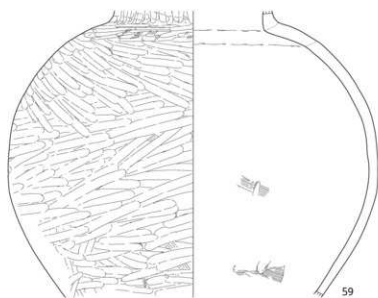
SD003

SD027
埴形陶溝状遺構

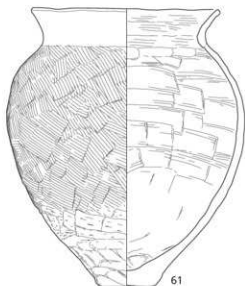
0 15cm 13

SD027

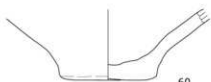
罍形周溝状遺構



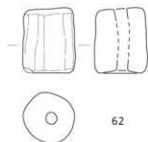
59



61



60



62

SD056

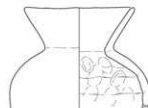
罍形周溝状遺構



63



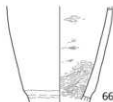
64



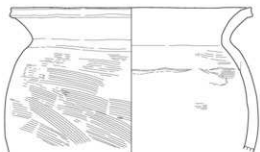
67



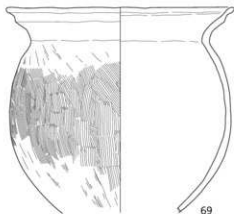
65



66



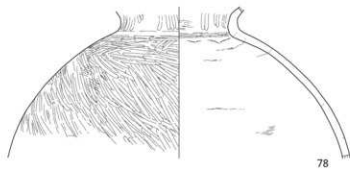
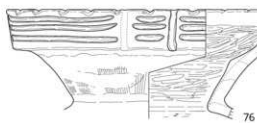
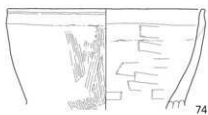
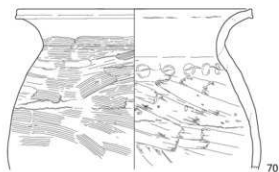
68



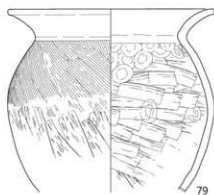
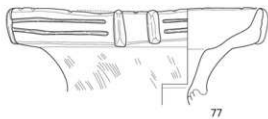
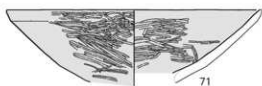
69



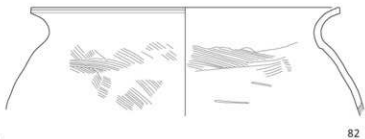
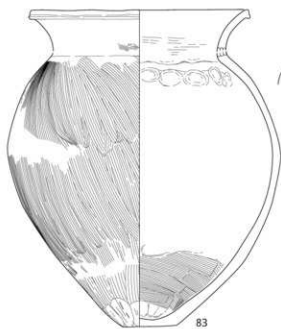
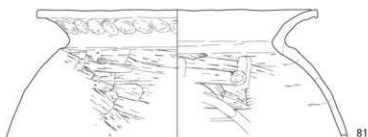
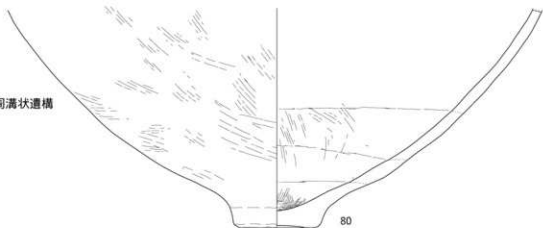
SD056 1号円形周溝状遺構



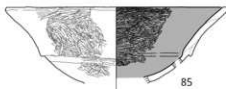
SK001
1号円形周溝状遺構



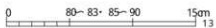
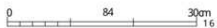
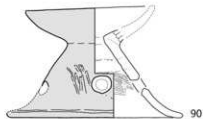
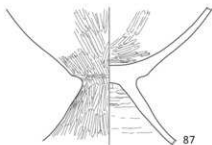
SK001
1号円形周溝状遺構



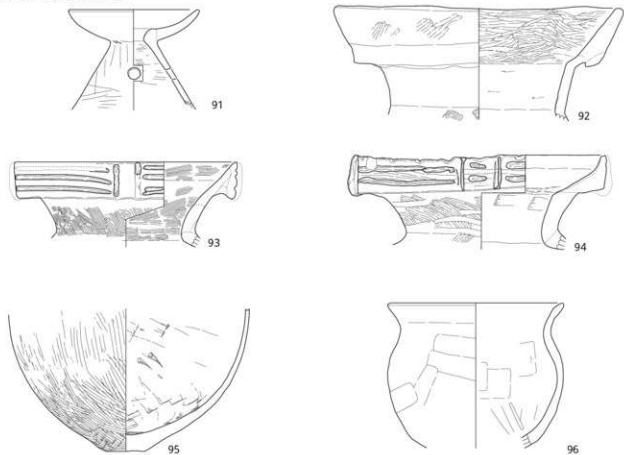
SK054
1号円形周溝状遺構



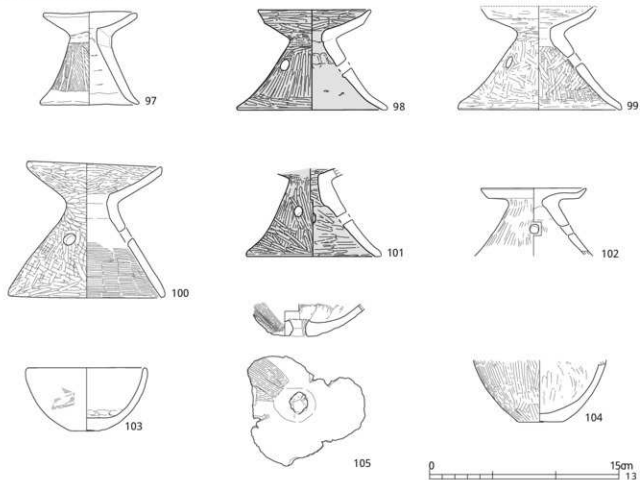
SD255 2号円形周溝状遺構



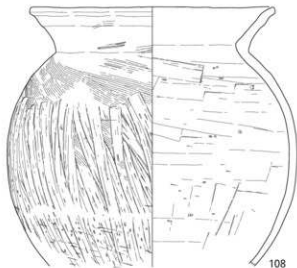
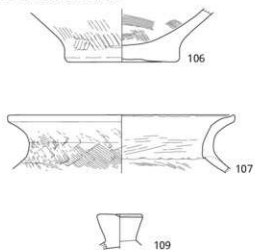
SD255 2号円形周溝状遺構



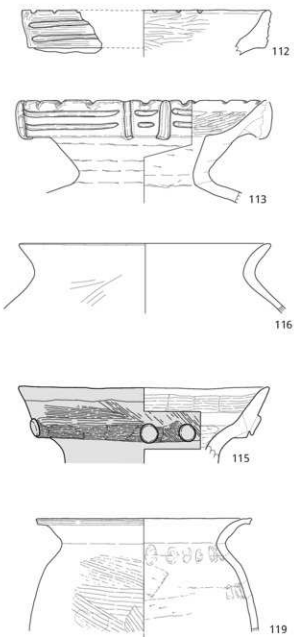
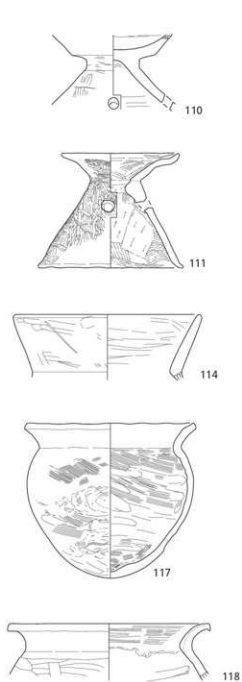
SD266 2号円形周溝状遺構



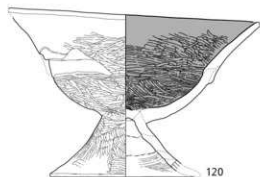
SD266 2号円形周溝状遺構



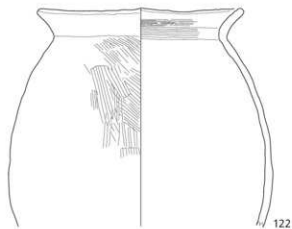
SK034 1号円形周溝状遺構



SK038 円形周溝状遺構



120

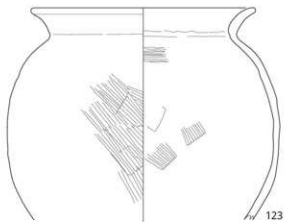


122



121

SK041

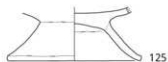


123



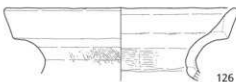
124

SK059



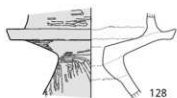
125

SK068

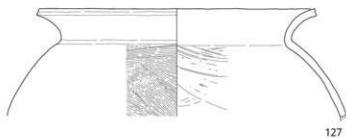


126

SK212



128



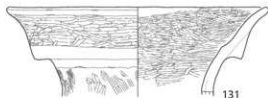
127

SK225

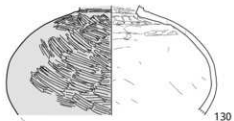


129

SK232



131



130



15cm

13

SK246



132

SD70



134

SK250



133

SD222



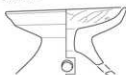
135

SX261



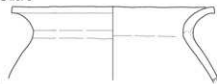
136

SX402

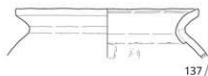


138

1号杭列



140



137

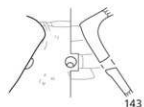


139

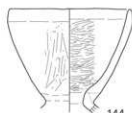


141

整地層



143



144

2号杭列



142



145

河川跡



146



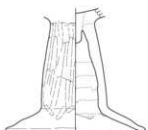
147



148



149



150



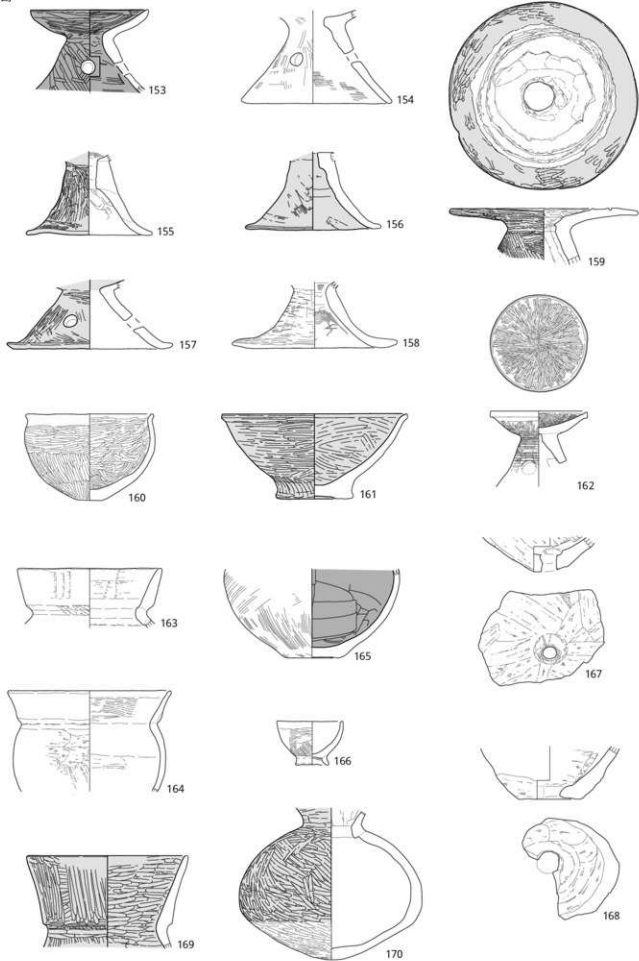
152



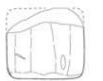
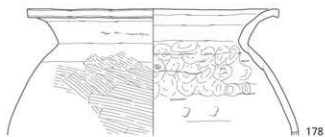
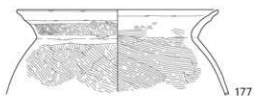
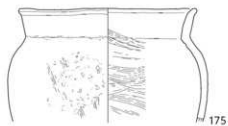
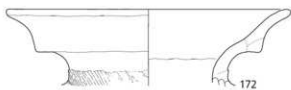
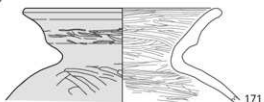
151



河川跡

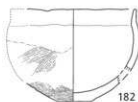


河川跡



180

包含層



181

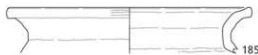
182



183



184



185

耕作土



186



188



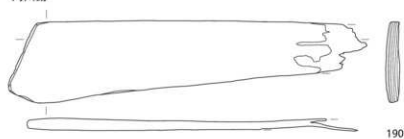
187



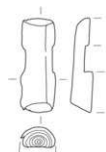
189



河川跡

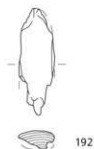


190



191

2号円形周溝状遺構



192



193



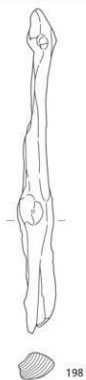
194



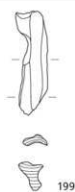
195



196



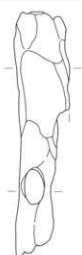
197



199



200



201



202



203



204

1号円形周溝状遺構

0 195・198 30cm 16

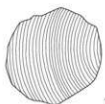
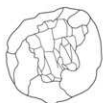
0 190・194・196・197・199・204 20cm 14

SB2



205

SB4



206

SB5



207

SB7



208

SB8



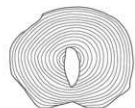
209

SB9



210

SB12



211

SB13



212

SB10



213



30cm

16

1号杭列



214



215



216



217

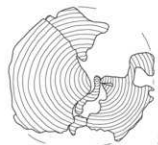
2号杭列



219



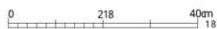
221



218



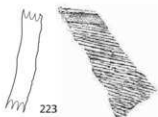
220



耕作土



222

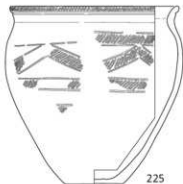


223



224

包含層



225

河川跡



226

耕作土



227



228

包含層



229

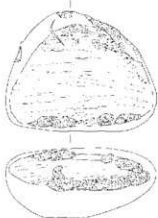


231

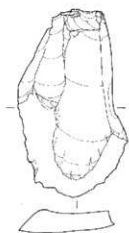
耕作土



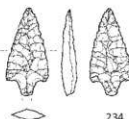
230



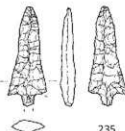
232



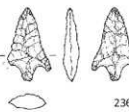
233



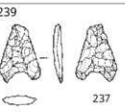
234



235



236



237

SK239

0 222-226 229-233 15m 13

0 227 228 234-237 6m 23



調査区近景（南東から）



1号杭列とSB12(南西から)



調査区北側 1号円形周溝状遺構周辺(北が上)



調査区中央 2号円形周溝状遺構周辺(北が上)



1号円形周溝状遺構 完掘（南西から）



2号円形周溝状遺構 完掘（南から）



古墳時代前期の土器と土器



1号杭列出入口部 瓦圖(北東から)



1・2号杭列全圖(北東から)



SK034 遺物出土状況（西から）



SK038 遺物出土状況（南から）



1号円形周溝状遺構 遺物出土状況(北西から)



2号円形周溝状遺構 遺物出土状況(南から)



上層 調査区全景 (上方 村上方面)



上層 調査区近景 (北から)



上層 調査区近景 (南から)



下層 調査区全景 (上方 村上方面)



下層 調査区近景 (南から)



下層 調査区近景 (西から)



下層 調査区近景 (北から)



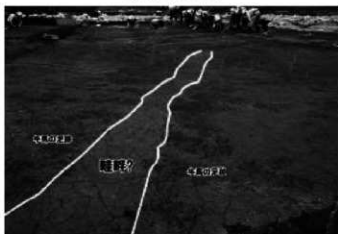
下層 調査区近景 (南東から)



調査前状況 (西から)



調査前状況 (南東から)



畦畔状遺構 検出状況 (南西から)



牛馬経路 検出状況 (北から)



グリーンタフ 出土状況 (東から)



遺構精査状況 (南西から)



18Kグリッド東壁 基本土層 (西から)



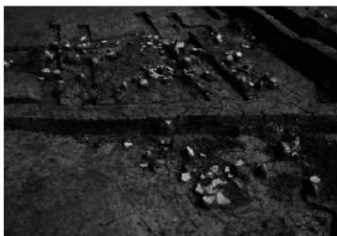
1号杭列 セクション (東から)



SⅡ 遺物出土状況(北東から)



SⅡ 遺物出土状況(南から)



SⅡ セクション(南から)



SⅡ 完備(東から)



SⅡ P2 セクション(東から)



SⅡ 床面検出状況 SK362 瓦堀(北東から)



SⅡ 瓦堀(南西から)



SⅡ 瓦堀(南西から)



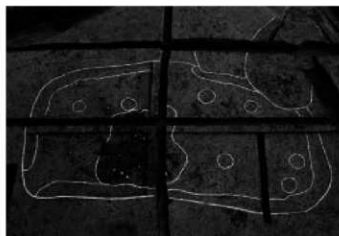
SⅡ 南北セクション(東から)



SⅡ 東西セクション(南から)



SB 瓦窯(南から)



SB 遺物出土状況(南から)



SB 遺物出土状況(南から)



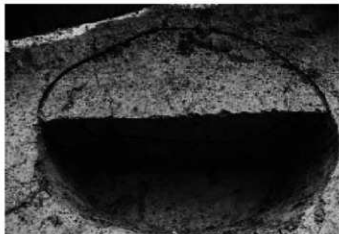
SB 器台出土状況(西から)



SB 南北セクション(東から)



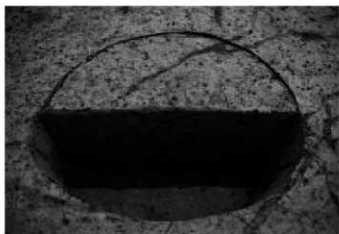
P1 セクション(北から)



P2 セクション(北から)



P4 セクション(北から)



P5 セクション(南から)



P6 セクション(南から)



P8・P7 セクション(南西から)



P3 完掘(北から)



SB 完掘(南から)



SX301, S扉, S扉 1・2 発掘(西から)



S扉 遺物出土状況(西から)



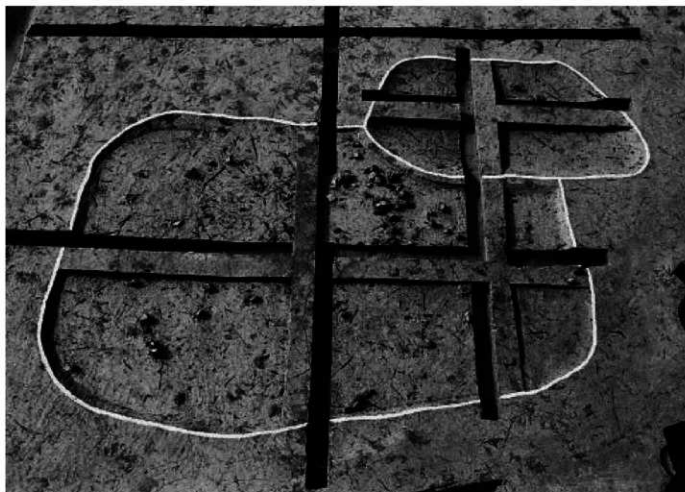
S扉 床面検出状況(西から)



S扉 南北セクション(東から)



S扉 東西セクション(北から)



SⅤ, SK361 遺物出土状況(北から)



SⅤ 南北セクション(東から)



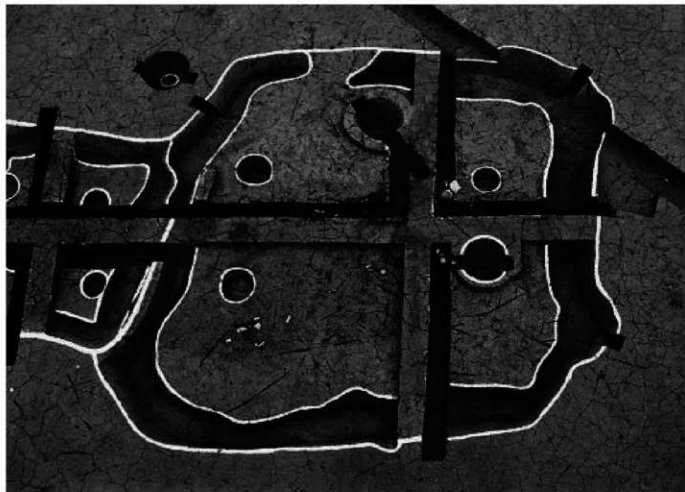
SⅤ 東西セクション(南から)



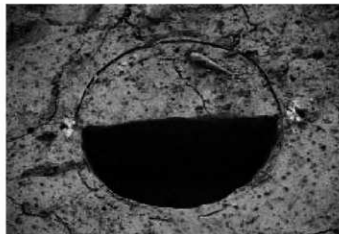
SⅤ 南北セクション(西から)



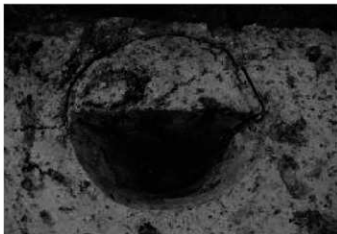
SⅤ, SK361 完掘(北から)



S5 1 瓦器 (西から)



P2 セクション(西から)



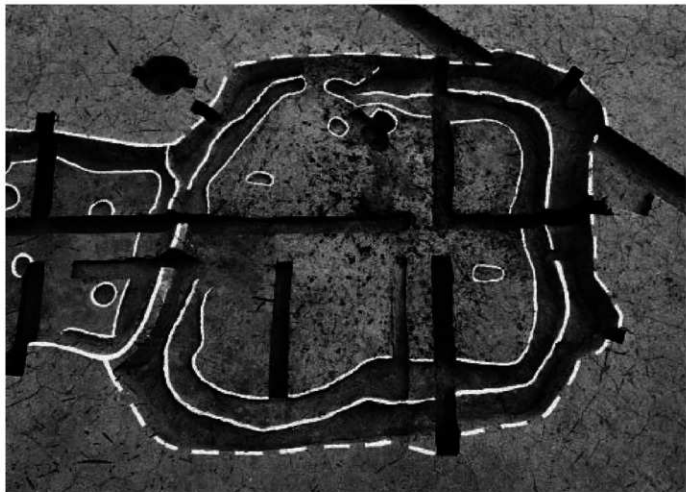
P5 セクション(東から)



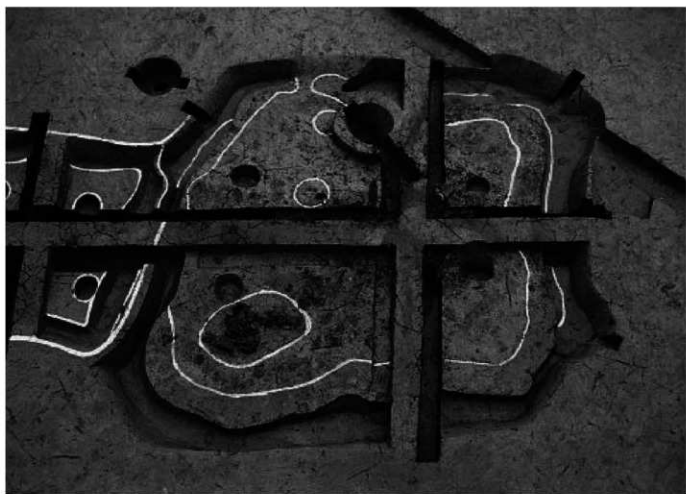
P6 セクション(西から)



P7 セクション(西から)



S5 2 発掘(西から)



S5 遺物出土状況(西から)



1号円形 SD003 検出状況(西から)



1号円形 SD003 遺物出土状況(西から)



1号円形 SD003 遺物出土状況(北から)



1号円形 SD003 完掘(北から)



1号円形 SD027 遺物出土状況(東から)



1号円形 SD027 完掘(東から)



1号円形 SD027 遺物出土状況(南から)



1号円形 SD027 遺物出土状況(北から)



1号円形 SD053・056 遺物出土状況 (東から)



1号円形 SD031 遺物出土状況 (北から)



1号円形 SK001 遺物出土状況 (東から)



1号円形 SK001 発掘 (東から)



1号円形 SX002 発掘 (西から)



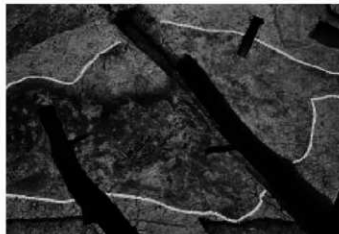
1号円形 SX094 発掘 (北から)



1号円形 SK055 発掘 (東から)



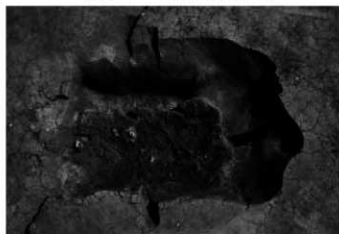
1号円形周溝状遺構 全景 (北が上)



1号円形 SD027 遺物出土状況(東から)



1号円形 SD027 遺物出土状況(東から)



1号円形 SK034 遺物出土状況(西から)



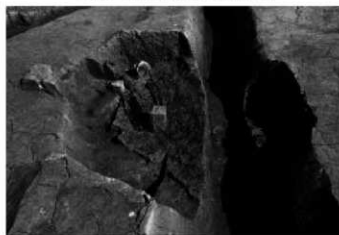
1号円形 SK034 瓦甕(西から)



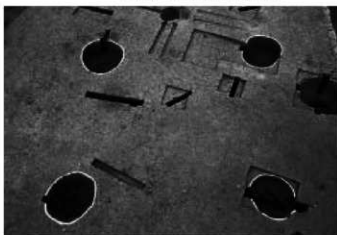
1号円形 SK038 遺物出土状況(南から)



1号円形 SK038 瓦甕(南から)



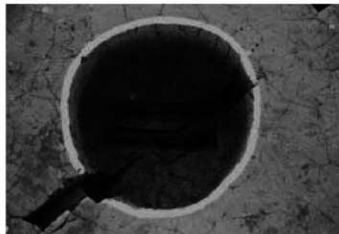
1号円形 SK038 遺物出土状況(西から)



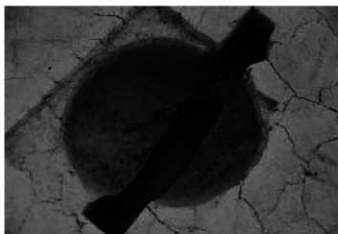
1号円形 P029, 048, 072, 073 瓦甕(西から)



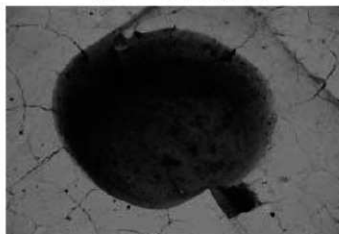
1号円形 P029 根太出土状況 (南東から)



1号円形 P048 根太出土状況 (東から)



1号円形 P073 根太出土状況 (北から)



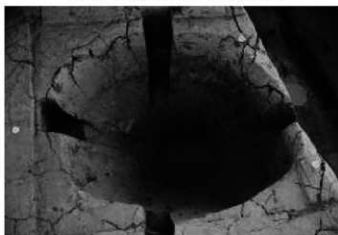
1号円形 P072 完掘 (東から)



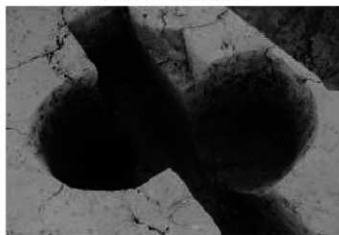
1号円形 SK032 上部セクション (北西から)



1号円形 SK032 完掘 (西から)



1号円形 SK074 完掘 (西から)



1号円形 P051・050 完掘 (北東から)



2号円形 完掘(南から)



2号円形 完掘(南から)



2号円形 SD255 遺物出土状況(北から)



2号円形 SD255 遺物出土状況(南から)



2号円形 SD255 セクション(南から)



2号円形 SD255 セクション(南から)



2号円形 SD266 遺物出土状況(西から)



2号円形 SD266 遺物出土状況(北から)



2号円形 SD266 遺物出土状況(西から)



2号円形 SD266 遺物出土状況(南から)



2号円形 SD266 遺物出土状況(東から)



2号円形 SD266 セクション(北から)



2号円形 P263 セクション(西から)



2号円形 P263 根がらみ出土状況(西から)



2号円形 P293 セクション(北西から)



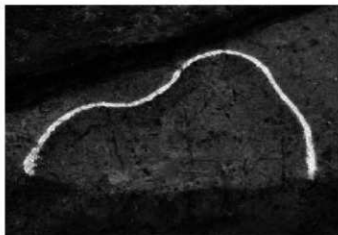
2号円形 P293 根がらみ出土状況(北西から)



SK004 セクション(北から)



SK004 遺物出土状況(北から)



SK004 発掘(北から)



SK009 東西セクション(南西から)



SK009 南北セクション(南東から)



SK009 発掘(西から)



SK011 セクション(西から)



SK011 遺物出土状況(北西から)



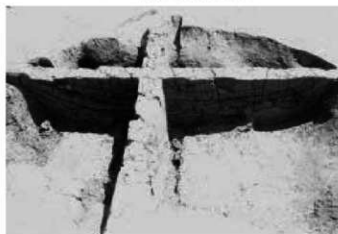
SK034 東西セクション (南から)



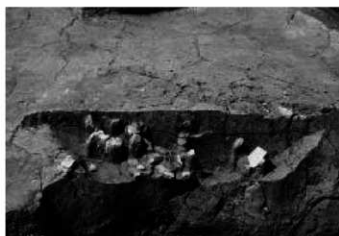
SK034 遺物出土状況 (西から)



SK034 樹皮出土状況 (東から)



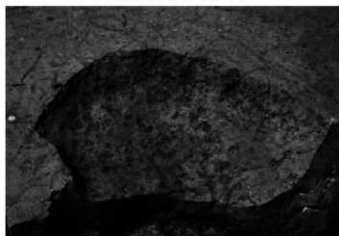
SK034 南北セクション (西から)



SK035 セクション (北から)



SK035 遺物出土状況 (北から)



SK035 壳 (北から)



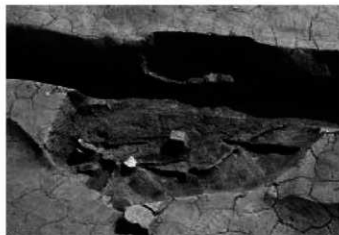
SK038 南北セクション (西から)



SK038 東西セクション (南から)



SK038 樹皮出土状況 (西から)



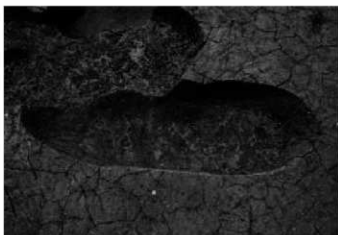
SK038 樹皮出土状況 (北から)



SK038 No 120 遺物出土状況 (南から)



SK039 南北セクション (北東から)



SK039 完器 (北東から)



SK039, 041, 042 遺物出土状況 (北東から)



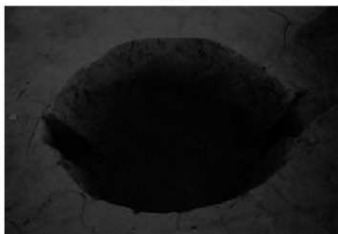
SK041 完器 (北東から)



SK057 甕 (西から)



SK059 セクション (西から)



SK059 甕 (西から)



SK068 甕 (北東から)



SK069 セクション (北から)



SK069 甕 (東から)



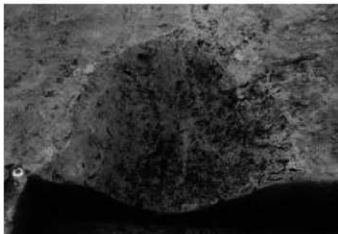
SK089 南北セクション (東から)



SK089 東西セクション (北から)



SK157 セクション(北から)



SK157 完掘(北から)



SK203 南北セクション(東から)



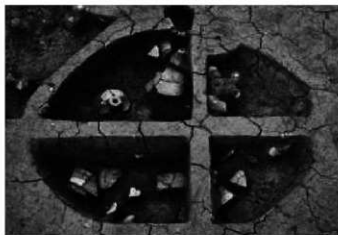
SK203 東西セクション(北から)



SK203 遺物出土状況(西から)



SK203 完掘(東から)



SK212 遺物出土状況(北から)



SK212 東西セクション(南から)



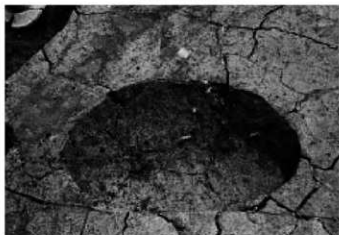
SK212, 215, 246, 247, 248, 249, 250 完掘 (西から)



SK213 遺物出土状況 (西から)



SK213 完掘 (東から)



SK215 完掘 (南西から)



SK219, 226 完掘 (東から)



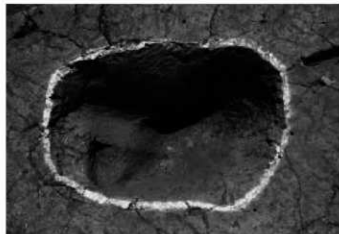
SK230, 220, SK235 完掘 (南から)



SK232, 233 遺物出土状況 (南から)



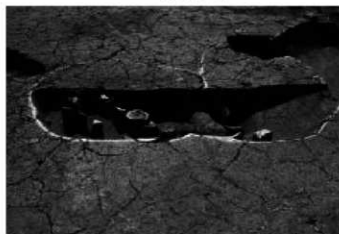
SK242 遺物出土状況 (北西から)



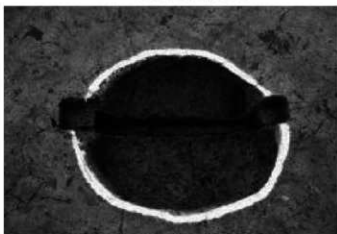
SK243 完掘(西から)



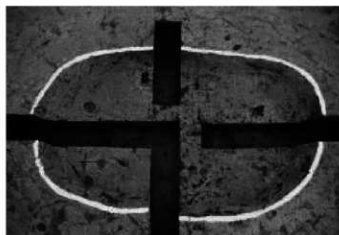
SK246 遺物出土状況(南から)



SK249, 250 セクション(西から)



SK279 完掘(東から)



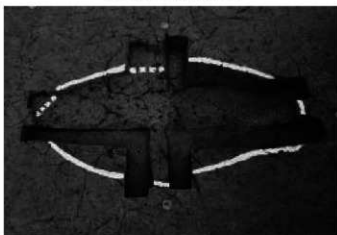
SK353 完掘(南西から)



SK360, 363 完掘(南から)



SK404 遺物出土状況(北から)



SK404 完掘(北から)



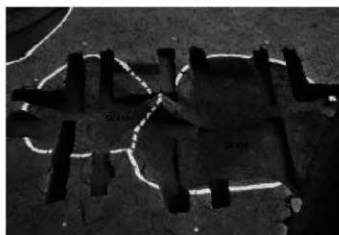
SK409 遺物出土状況 (北東から)



SK409 瓦器 (北東から)



SK410, 414 遺物出土状況 (東から)



SK410, 414 瓦器 (東から)



SK410, 414 セクション (北から)



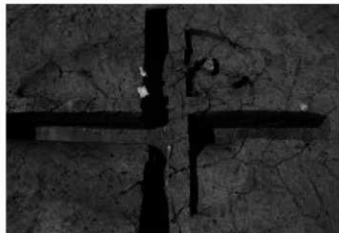
SK410, 414 セクション (西から)



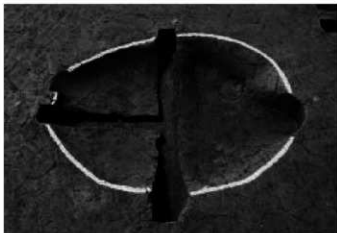
SK411 セクション (南から)



SK411 瓦器 (南から)



SK412 遺物出土状況 (北から)



SK412 完掘 (北から)



SD070 南北セクション北側 (西から)



SD070 南北セクション南側 (西から)



SD070 完掘 (東から)



SD150 完掘 (北西から)



SD201, 204 完掘 (南から)



SD234 完掘 (東から)



SD407 セクション北側 (西から)



SD407 セクション南側 (西から)



SD407 セクションA (北から)



SD407 調査風景 (南東から)



SD407 発掘 (西から)



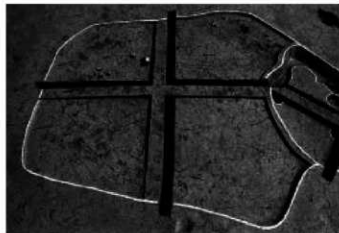
SD413 遺物出土状況 (東から)



SD413 セクション (北から)



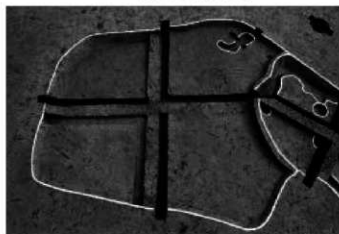
SD413 発掘 (西から)



SX301 遺物出土状況(南から)



SX301 セクション(北から)



SX301 完撮(南から)



SX401, 402, 403, SB4 完撮(南から)



SX401, 402 遺物出土状況(北西から)



SX401, 402, 403 遺物出土状況(西から)



SX401, 402, 403 遺物出土状況(南から)



SX401, 402, 403 完撮(南から)



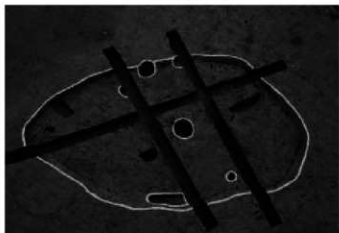
SX261 遺物出土状況 (南から)



SX261 完掘 (北から)



SX505 遺物出土状況 (西から)



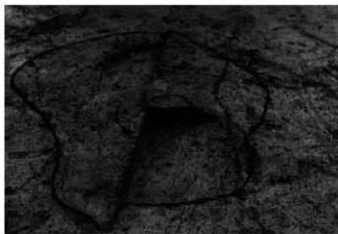
SX505 完掘 (西から)



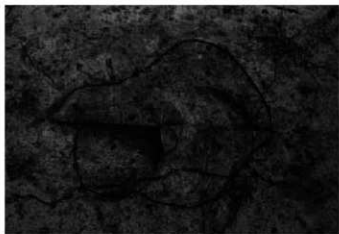
SX505 南北セクション (東から)



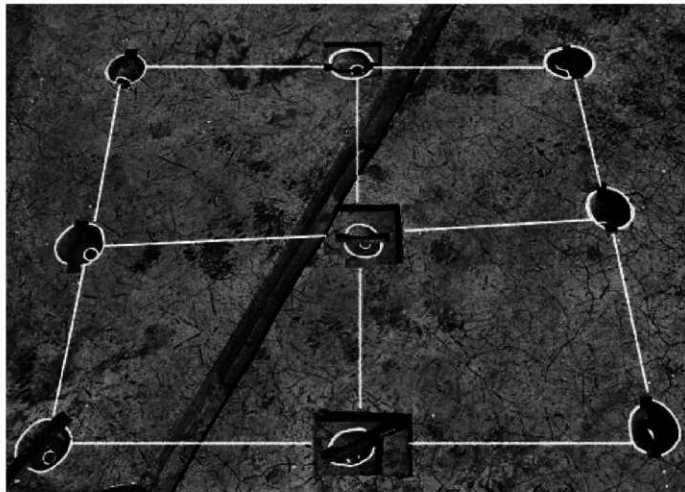
SX505 東西セクション (北から)



地床炉 セクション (南東から)



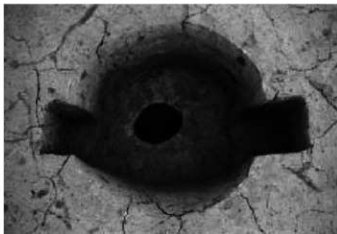
地床炉 セクション (北東から)



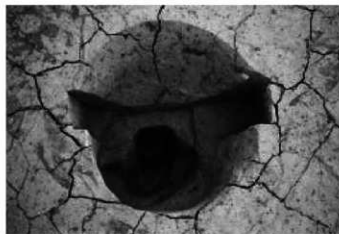
SB1 穴罫 (南から)



P303 穴罫 (東から)



P304 穴罫 (西から)



P306 穴罫 (西から)



P307 穴罫 (西から)



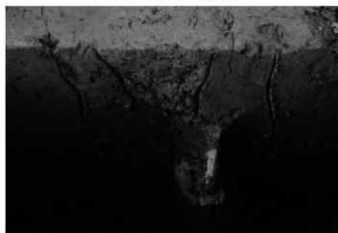
S85 発掘 (東から)



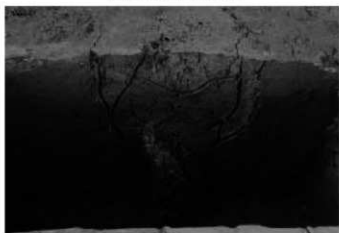
P457 セクション (北から)



P479 セクション (東から)



P481 セクション (東から)



P482 セクション (東から)



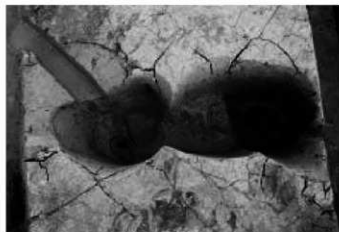
S82 完掘 (南から)



P310, 319 完掘 (西から)



P309, 322 完掘 (東から)



P323, 326 完掘 (西から)



P327, 330 完掘 (東から)



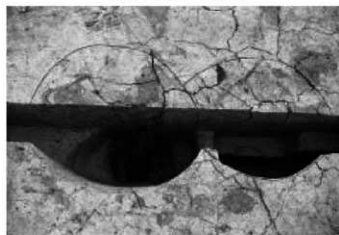
S83 完掘 (北から)



P334, 336 完掘 (西から)



P337, 339 セクション (東から)



P356 セクション (西から)



P365 完掘 (南から)



SB4 瓦葺 (南から)



P 450 セクション (西から)



P460 柱根出土状況 (西から)



P468 セクション (西から)



P471 セクション (東から)



S86 瓦堀 (東から)



P156 セクション (北から)



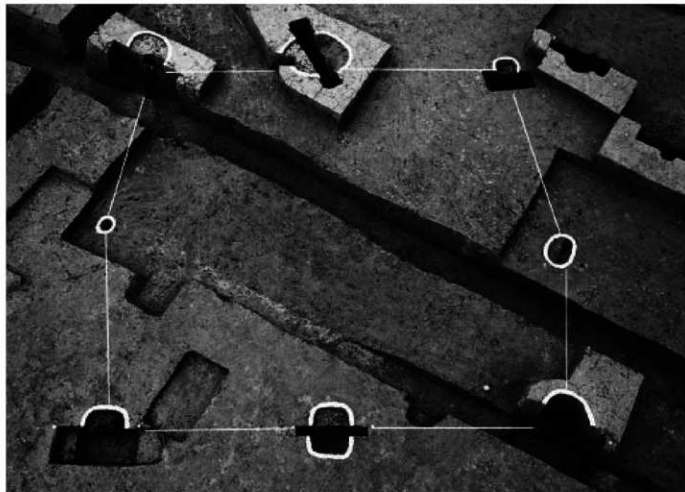
P164 瓦堀 (北から)



P163 瓦堀 (北から)



P165 瓦堀 (北から)



S87 完麗 (北東から)



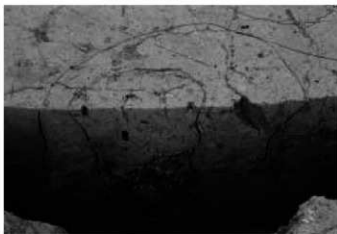
P462 柱根出土状況 (東から)



P086 セクション (東から)



P153 セクション (東から)



P085 セクション (北西から)



S88 完掘 (東から)



P272 セクション (西から)



P282 柱根出土状況 (南から)



P283 セクション (北から)



P284 柱根出土状況 (西から)



S89 瓦葺(西から)



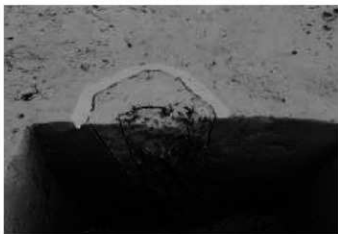
P115 セクション(西から)



P119 セクション(西から)



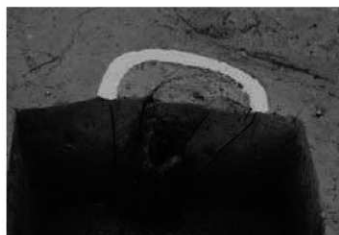
P116 柱根出土状況(西から)



P120 セクション(西から)



SB10, 11 瓦堀 (西から)



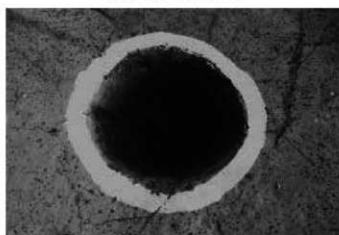
P101 セクション (南から)



P103 セクション (東から)



P106 瓦堀 (西から)



P269 瓦堀 (西から)



SB13 瓦葺 (南から)



柱1 セクション (南から)



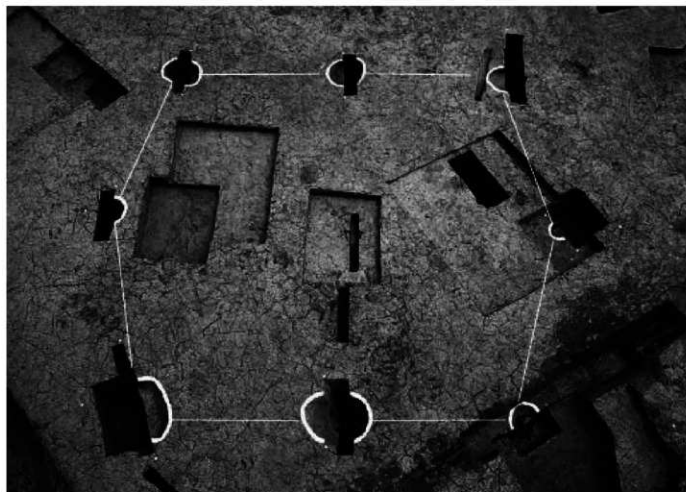
柱4 セクション (南から)



柱8 セクション (南から)



柱6 セクション (南から)



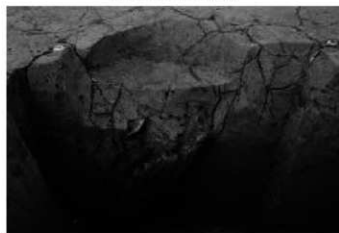
SB12 瓦葺 (南から)



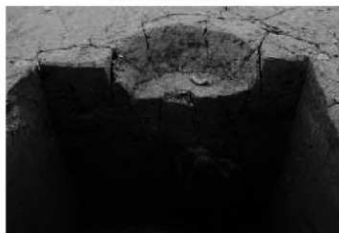
P012 セクション (西から)



P013 セクション (西から)



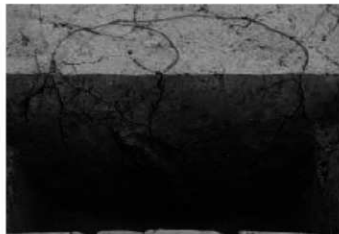
P014 セクション (東から)



P016 セクション (東から)



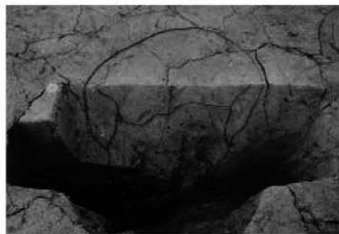
1号杭列とSB12 全景(北東から)



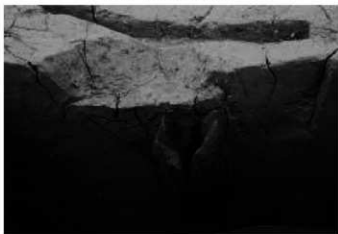
P017 セクション(西から)



P019 セクション(南から)



P021 セクション(東から)



P081 セクション(東から)



1号杭列 検出状況(南東から)



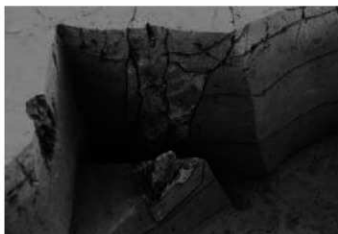
1号杭列 検出状況(南東から)



1号杭列 検出状況(西から)



1号杭列 セクション(西から)



1号杭列 セクション(東から)



1号杭列 セクション(北から)



1号杭列 セクション(西から)



1号杭列 セクション(北東から)



1号杭列 出土状況(東から)



1号杭列 出土状況(北から)



1号杭列 出土状況(東から)



1号杭列 出土状況(北東から)



1号杭列 出土状況(東から)



1号杭列 出土状況(北から)



1号杭列 出土状況(東から)



1号杭列 出入口部 出土状況(北東から)



1号杭列 出入口部 出土状況 (北から)



1号杭列 出入口部 完掘 (北から)



1号杭列 出入口部 SB12 完掘全景 (北東から)



1号杭列 出入口部 完掘 (北東から)



1号杭列 完掘 (東から)



1号杭列 完掘 (北から)



2号杭列 整地層 セクション (北から)



2号杭列 整地層 セクション (北から)



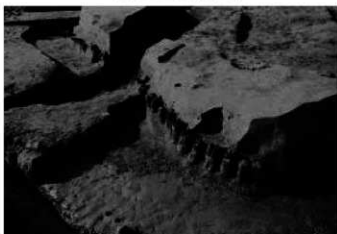
2号杭列 出土状況(東から)



2号杭列 出土状況(東から)



2号杭列 出土状況(東から)



2号杭列 出土状況(東から)



2号杭列 出土状況(東から)



2号杭列 出土状況(東から)



2号杭列 整地層 完露(東から)



2号杭列 整地層 完露(北東から)



河川跡 全景 (右側が北)



河岸 検出状況 (南から)



河岸 検出作業 (北から)



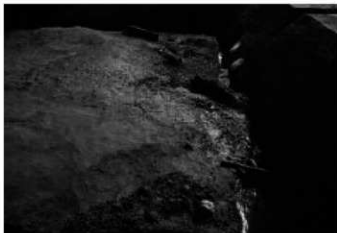
河岸 遺物出土状況 (南から)



河岸 遺物出土状況 (南西から)



河川跡 29Sグリッド 3a層 遺物出土状況(南から)



河川跡 29Sグリッド 3a層 遺物出土状況(北から)



河川跡 29Sグリッド 3a層 No 159遺物出土状況(西から)



河川跡 29Sグリッド 3a層 遺物出土状況(西から)



河川跡 セクションB 西側 遺物出土状況(南から)



河川跡 セクションB 西側 遺物出土状況(東から)



南側調査区 ガツボ罫 検出状況(南から)



南側調査区 ガツボ罫 セクション(南から)



河川跡 セクションB 西側(南から)



河川跡 セクションB (南東から)



河川跡 セクションB (西から)



河川跡 セクションC (南西から)



河川跡 セクションC No.150遺物出土状況(南から)



河川跡 セクションA 北側 (北西から)



河川跡 セクションA 中央 (西から)



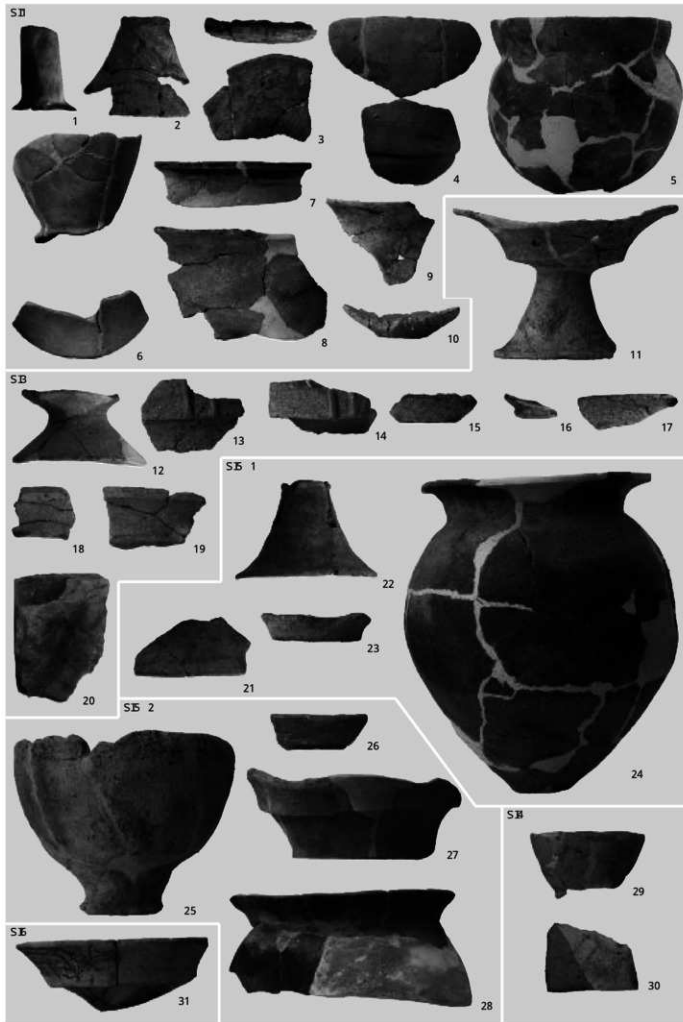
河川跡 セクションA 南側 (西から)

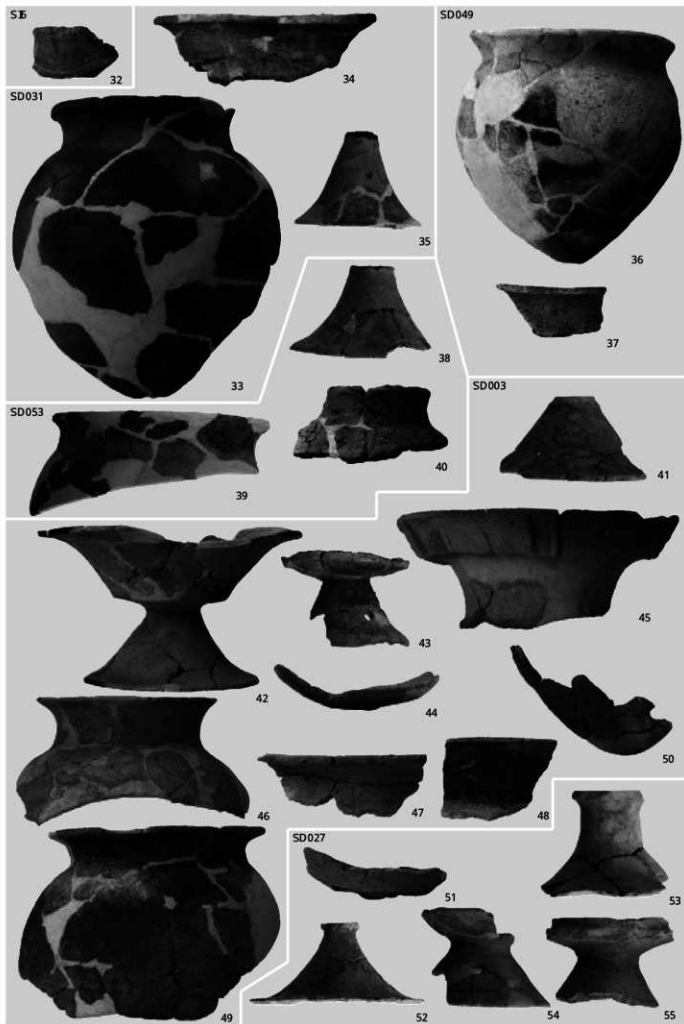


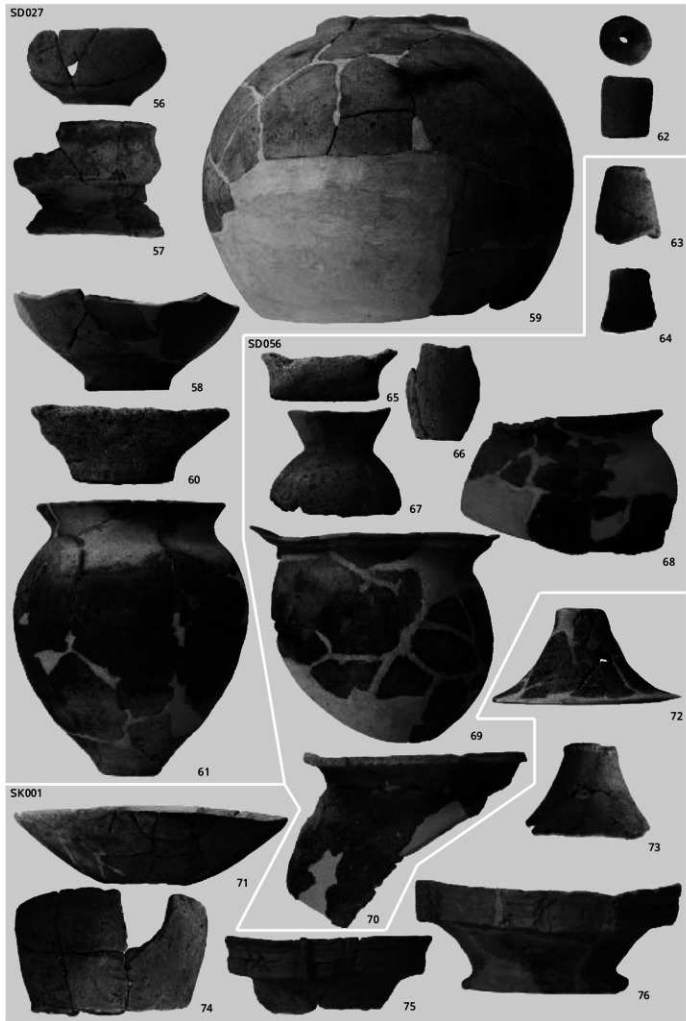
河川跡 セクションA 南側 (南西から)

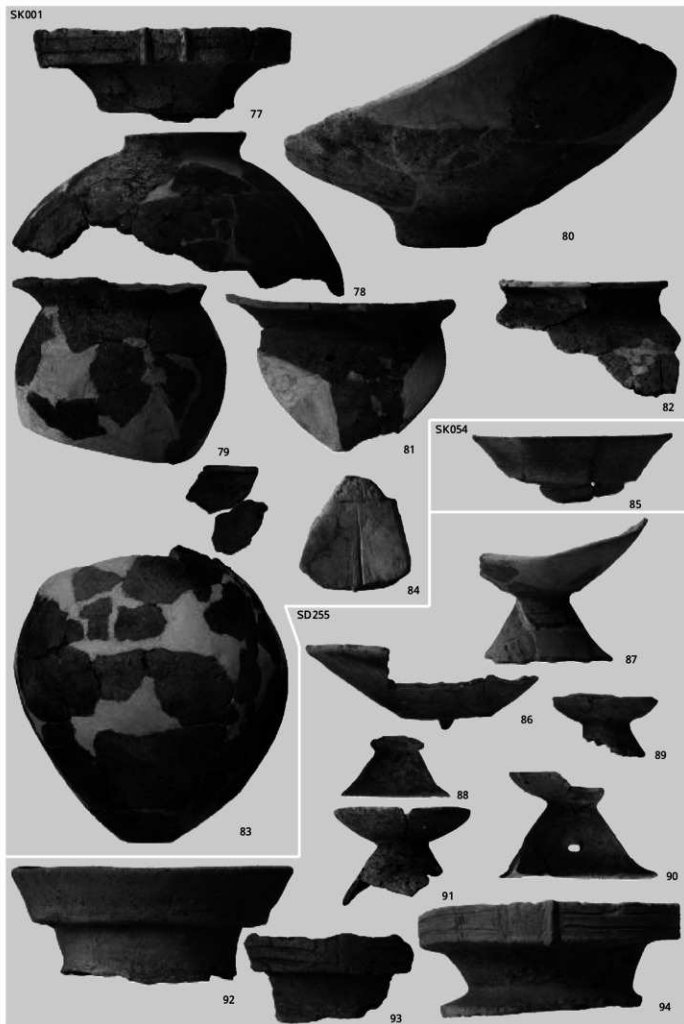


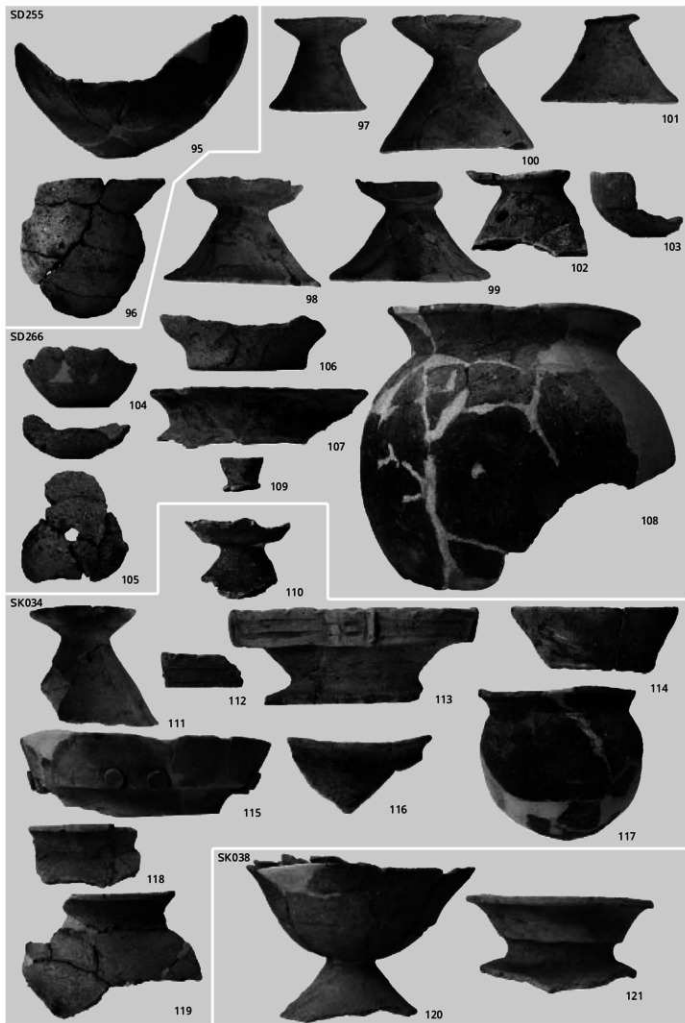
河川跡 全景 (南から)

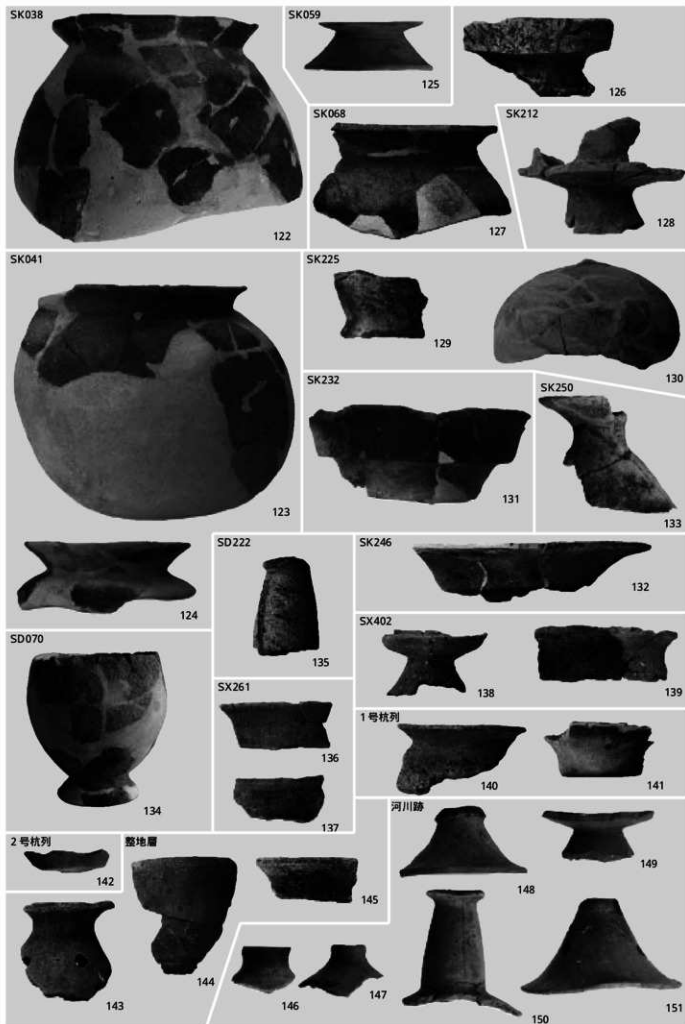


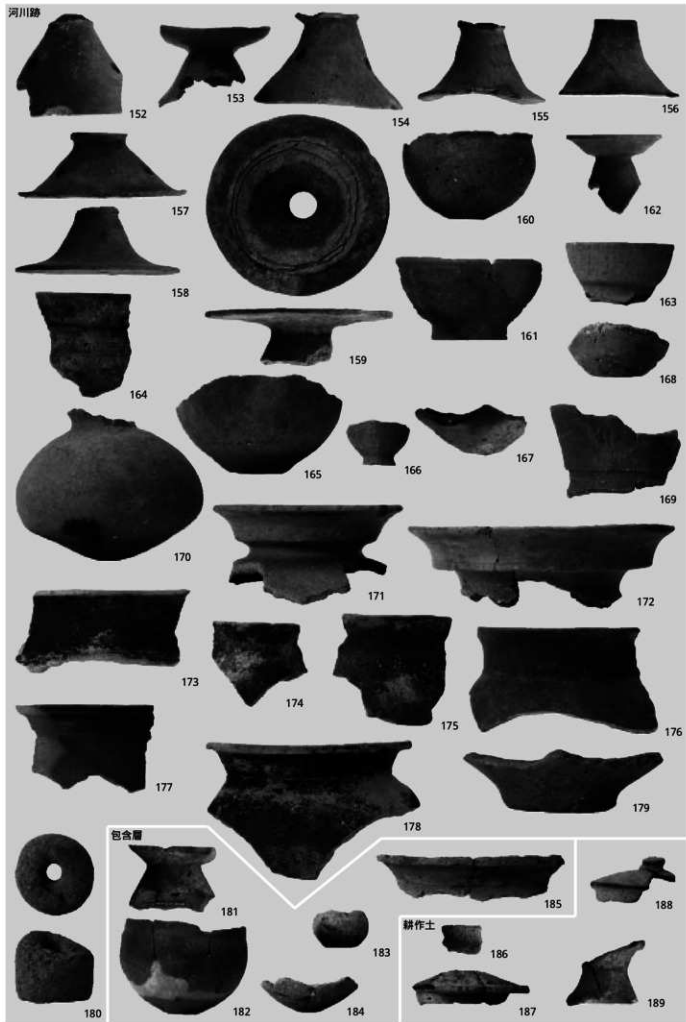


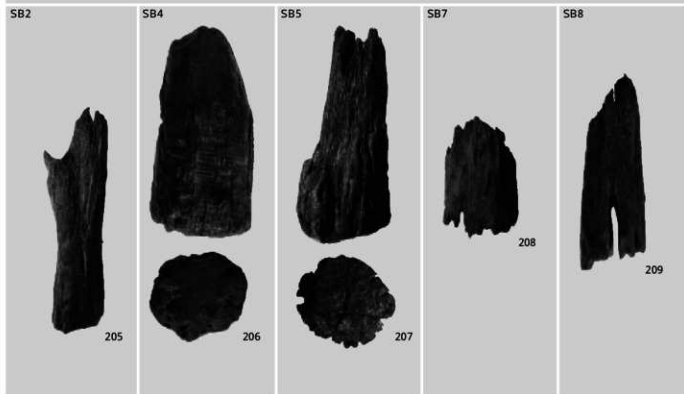
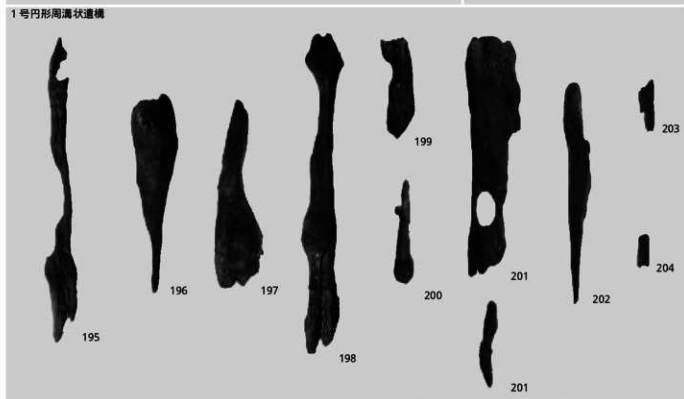
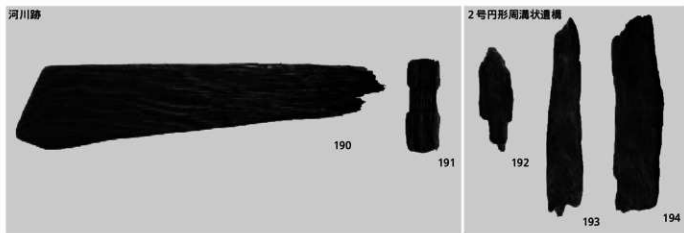


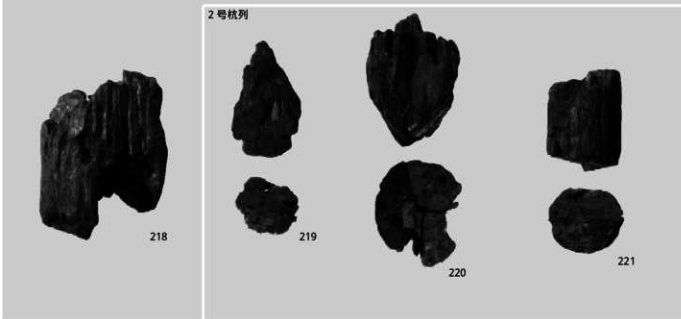
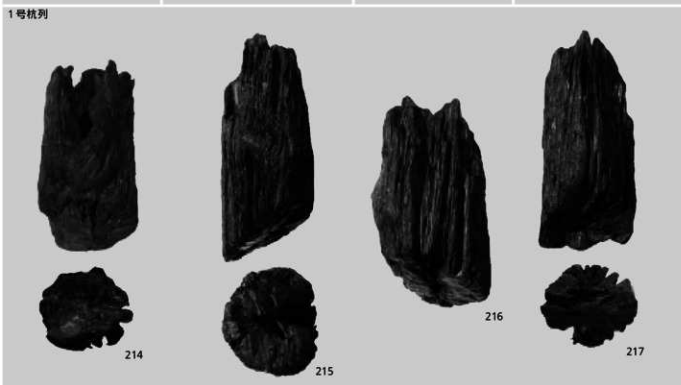
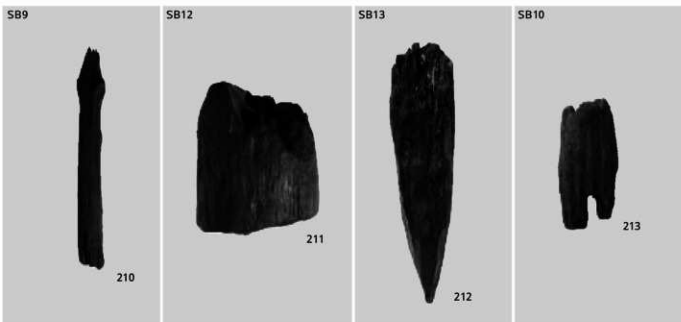


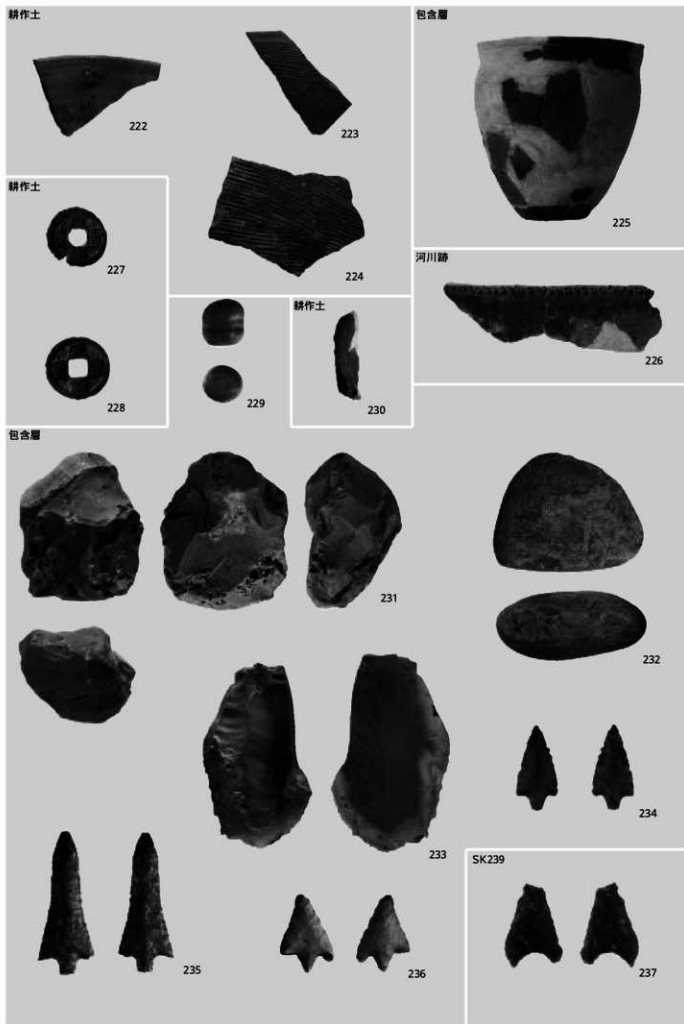












報告書抄録

ふりがな	みちばたいせき さん						
書名	道端遺跡						
副書名	日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書						
巻次							
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第14巻						
編著者名	前川雅夫(国際航業株式会社文化財事業部 主任研究員) 田村典雄(同 研究員) 船本博康(同 研究員) 辻本 彩(同 研究員) 片山博道(同 研究員) 寺崎裕治(埋文事業団調査課 日東道担当課長代理) 山田秀樹(埋文事業団調査課 日東道担当主任調査員)						
編集機関	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団・国際航業株式会社						
所在地	〒956 0845新潟県新潟市金津9番地1 TEL0250(25) 3981 〒956 0087新潟県新潟市東大通2-3-26 TEL025(247) 0318						
発行年月日	西暦 2005(平成17)年 3月 3日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 *	東経 *	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
道端遺跡	新潟県岩船郡荒川町大字南新保字道端9番地ほか	15 582 75	38度 07分 00秒	139度 24分 59秒	20040412 ～20041130	22 900㎡ (上層 11 450㎡ 下層 11 450㎡)	日本海沿岸東北自動車道建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
道端遺跡	散布地	縄文時代 弥生時代 中世			石器(石鏃) 弥生土器 珠洲焼		
	集落	古墳時代(前期)	竪穴建物(6軒) 円形周溝状遺構(2基) 土坑(4基) 溝(10条) 竪立柱建物(1棟) 性格不明遺構(6基) 地床炉(1基) 整地層(1か所) 杭列(2列)		土師器 建築材(柱材、杭材、 根太、根がらみ)石製 品(砥石、石核)	4世紀前半から後 葉にかけて河川に 沿って営まれた集 点の集落	

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第14巻	
日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書	
道端遺跡	
平成17年3月30日印刷 平成17年3月3日発行	発行 新潟県教育委員会 〒950 8570 新潟市新光町4番地1 電話 025(285) 5511 財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団 〒956 0845 新潟市金津9番地1 電話 0250(25) 3981 FAX 0250(25) 3986
印刷・製本	平電子印刷所 福島県いわき市平北白土字西ノ内1番地 電話 0246(23) 9051 FAX 0246(22) 5222

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第142集『道端遺跡Ⅲ』正誤表

頁	位置	誤	正
抄録	北緯	38度07分00秒	38度07分13秒
抄録	東経	139度24分59秒	139度24分50秒